

平成5年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1996年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



西靱負小路に面した宅地（平安京右京八条二坊）



木簡（平安京右京八条二坊出土）



人形（平安京右京八条二坊出土）



石組溝（特別史跡特別名勝慈照寺庭園 Aトレンチ2区）



上：木炭木槨墓 左下：乾漆製品出土状況 右下：蟠龍文鏡（安祥寺下寺跡1）

序

歴史都市である京都は、平安京跡を始めとして、長岡京跡、六勝寺跡、鳥羽離宮跡など著名な数多くの遺跡があります。本年も市民の方々の協力を得て、当研究所では京都の歴史を明らかにしていくことを目的に、京都市内の遺跡調査・研究を進めてまいりました。

本書は、平成5年度に実施しました発掘調査32件、試掘・立会調査10件の調査の概要を報告しております。例年通り、平安京跡の調査が最も多く、数多くの成果を得ることができました。平安京右京八条二坊の発掘調査では、西鞆負小路やこれまで知られていなかった各戸主単位でわかる建物跡、溝内からは穀物や銭、紀年銘を記す木簡などを検出しております。平安京左京域では、江戸時代、水戸藩邸の井戸、石室、建物跡などの施設を検出し、注目されました。

平成5年度は、その他の遺跡の項で報告しております平安京域外の地域で、重要な発見が相次いだのも特徴でした。慈照寺（銀閣寺）境内からは足利義政創建の東山殿の施設を検出しております。また、山科の安祥寺下寺跡からは、平安時代前期の蟠龍文鏡の破片が出土した木炭木槨墓が発見されました。その他にも相国寺旧境内では戦国時代の堀、室町時代の建物や井戸などを検出した南春日町遺跡などがあります。化野の立会調査で発見された蔵骨器は、梵字を記した金銅製蓋を伴うもので、中国南方で作られた褐釉壺が使用されていました。これらの調査成果は、京都の歴史に直接つながる貴重な史料として学術研究、普及・啓発活動に活用していくことが重要であると考えております。

おわりにあたって、埋蔵文化財調査を依頼された市民の方々、京都市を始め関係諸機関の方々に日頃の御協力にお礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の日頃の活動をご理解いただけますようお願い申し上げます。

平成8年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成5年度に実施した、事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表4・5に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系Ⅵによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）、都市計画図（縮尺1/10,000）、市街図（縮尺1/30,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 8 図版1・2の調査地点番号のⅠは発掘調査、Ⅱは試掘・立会調査を表す。表4・5の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成5年度発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、平成5年（1993）4月から12月実施分は平成5年度の各発掘調査概報に、平成6年（1994）1月から3月実施分は平成6年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。第3章4については、宮内庁正倉院事務所・成瀬正和氏に成分分析の報告をお願いした。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目次

第1章 発掘調査

I	平成5年度の発掘調査概要	1
II	平安宮・京跡	
1	平安宮朝堂院宣政門跡	3
2	平安京左京一条三坊	4
3	平安京左京二条四坊	9
4	平安京左京三条一坊・ 史跡旧二条離宮	18
5	平安京左京三条二坊・堀河院跡	21
6	平安京左京四条四坊	24
7	平安京左京六条一坊	29
8	平安京左京八条三坊	30
9	平安京左京九条二坊	32
10	平安京右京三条一坊1	34
11	平安京右京三条一坊2	36
12	平安京右京三条一坊3	38
13	平安京右京三条一坊4	40
14	平安京右京五条四坊	42
15	平安京右京六条一坊	46
16	平安京右京八条二坊	49
III	鳥羽離宮跡	
17	鳥羽離宮跡 139次調査	56
IV	中臣遺跡	
18	中臣遺跡 71・72次調査	57
V	長岡京跡	
19	長岡京左京一条三坊・ 東土川遺跡	58
20	長岡京左京五条四坊	59

21	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	61
VI	その他の遺跡	
22	植物園北遺跡1	65
23	植物園北遺跡2	68
24	相国寺旧境内	69
25	特別史跡特別名勝慈照寺庭園	72
26	広隆寺旧境内	77
27	南春日町遺跡 28次調査	79
28	上久世遺跡	81
29	六波羅政庁跡	84
30	安祥寺下寺跡1	87
31	安祥寺下寺跡2	91
32	史跡醍醐寺境内	94

第2章 試掘・立会調査

I	平成5年度の試掘・ 立会調査概要	96
II	平安京跡	
1	平安京左京北辺二坊	97
2	平安京左京三条四坊	98
3	平安京右京三条一坊5	101
4	平安京右京三条一坊6	103
5	平安京右京三条一坊7	105
III	その他の遺跡	
6	長岡京左京四・五条四坊	107
7	北野遺跡・北野廢寺	108
8	京都大学構内遺跡	110
9	嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡	112
10	史跡名勝嵐山	114

第3章 資料整理

1 遺跡測量	116
2 コンピュータ	116
3 復原彩色	117
4 安祥寺下寺跡出土蟠龍文鏡の 蛍光X線分析	118

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および 技術者養成事業	120
2 京都市考古資料館状況	122
3 役職員名簿	127

図版目次

図版1 調査位置図1	平安京・白河街区・鳥羽離宮・長岡京地区調査位置図
図版2 調査位置図2	1 嵯峨・桂地区調査位置図 2 洛北地区調査位置図 3 大原野地区調査位置図 4 山科・醍醐地区調査位置図
図版3 平安宮朝堂院宣政門跡	1 基壇検出面全景 2 基壇東縁検出状況
図版4 平安京左京一条三坊	1 A区第1面全景 2 A区井戸53 3 A区第3面全景 4 A区土壌88
図版5 平安京左京一条三坊	1 B区全景 2 D区第2面全景 3 C区第4面全景 4 C区石敷遺構
図版6 平安京左京二条四坊	1 1区江戸時代中期全景 2 1区大炊御門大路路面と南側溝 3 1区室町時代東西溝S D 654
図版7 平安京左京二条四坊	1 2区最終面全景 2 2区室町時代南北溝1033 3 2区江戸時代土蔵地業
図版8 平安京左京二条四坊	1 3区江戸時代全景 2 3区江戸時代中期以降石垣と側溝 3 3区江戸時代前期布掘柱列

図版 9	平安京左京二条四坊	1	1 区埧塙組井戸 12
		2	1 区石組 277
		3	3 区鑄造関連土壙 1151
		4	3 区平安時代前期土器溜 1647
図版 10	平安京左京三条二坊・堀河院跡	1	北グリット全景
		2	南グリット全景
図版 11	平安京左京四条四坊	1	第 1 面全景
		2	第 2 面全景
図版 12	平安京左京四条四坊	1	第 4 面全景
		2	第 5 面全景
図版 13	平安京左京四条四坊	1	路地
		2	井戸 612
		3	礫敷遺構 600
図版 14	平安京左京四条四坊	1	乾山銘色絵角皿
		2	出土遺物
図版 15	平安京左京六条一坊	1	全景
		2	朱雀大路東側溝
図版 16	平安京左京八条三坊	1	鎌倉時代から室町時代全景
		2	S E 67
		3	S E 72
図版 17	平安京左京九条二坊	1	全景
		2	S E 70
		3	S E 110
図版 18	平安京右京三条一坊 1・2	1	平安京右京三条一坊 1 全景
		2	平安京右京三条一坊 2 平安時代全景
図版 19	平安京右京三条一坊 2	1	建物 1
		2	池状遺構
図版 20	平安京右京三条一坊 3	1	2～4 区全景
		2	5 区全景
図版 21	平安京右京三条一坊 4	1	全景
		2	4 トレンチ P 70・71
図版 22	平安京右京五条四坊	1	奈良時代全景
		2	古墳時代末期全景
図版 23	平安京右京五条四坊	1	プラン 3 - 1 全景
		2	プラン 3 - 2 全景

図版 24	平安京右京五条四坊	1 S B 227
		2 S X 246
図版 25	平安京右京六条一坊	1 1区全景
		2 2区全景
		3 3区全景
図版 26	平安京右京六条一坊	1 4区南半 S G 235
		2 5区全景
図版 27	平安京右京八条二坊	1 全景
		2 東西棟建物
図版 28	平安京右京八条二坊	1 南北棟建物
		2 暗渠排水施設
図版 29	平安京右京八条二坊	1 西側溝護岸施設
		2 東側溝南端の護岸施設
		3 護岸施設
図版 30	平安京右京八条二坊	出土木製品
図版 31	平安京右京八条二坊	出土木製品
図版 32	中臣遺跡 71・72 次調査	1 71 - 1 区全景
		2 71 - 3 区全景
図版 33	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1 D区全景
		2 D区中央台地全景
図版 34	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	1 A区长岡京期全景
		2 A区弥生時代全景
図版 35	植物園北遺跡 1	1 全景
		2 S B 3
図版 36	植物園北遺跡 1	1 S K 610
		2 S E 106
		3 S D 664
		4 住居 2
図版 37	相国寺旧境内	1 室町時代全景
		2 平安時代全景
図版 38	特別史跡特別名勝慈照寺庭園	1 1トレンチ B区全景
		2 3トレンチ全景
		3 2トレンチ C区全景
図版 39	特別史跡特別名勝慈照寺庭園	1 4トレンチ全景
		2 5トレンチ全景

	3	6トレンチ全景
図版 40 広隆寺旧境内	1	全景
	2	S B 29
図版 41 上久世遺跡	1	全景
	2	S X 110
図版 42 六波羅政庁跡	1	北区鎌倉時代から室町時代全景
	2	南区鎌倉時代から室町時代全景
図版 43 安祥寺下寺跡 1	1	A区全景
	2	C区全景
図版 44 安祥寺下寺跡 1	1	B区全景
	2	木炭木槨墓
図版 45 安祥寺下寺跡 1	1	遺物出土状況
	2	釘出土状況
	3	木炭木槨墓出土遺物
図版 46 安祥寺下寺跡 2	1	全景
	2	石組 106
	3	溝 111 南壁断面
	4	墓 112 土器出土状況
図版 47 史跡醍醐寺境内	1	全景
	2	建物 1
図版 48 平安京左京北辺二坊	1	No. 24 地点全景
	2	No. 24 地点断面
図版 49 平安京右京三条一坊 6	1	2区全景
	2	5区全景
図版 50 平安京右京三条一坊 7	1	1トレンチ全景
	2	2トレンチ全景
	3	4トレンチ全景
図版 51 京都大学構内遺跡	1	No. 16 地点全景
	2	No. 16 地点土壌
図版 52 史跡名勝嵐山	1	S K 9 出土蔵骨器
	2	金銅製蓋
	3	S K 9 遺物出土状況

目 次

図1	平安宮朝堂院宣政門跡	調査位置図	3
2	平安京左京一条三坊	調査位置図	4
3	〃	井戸 53 実測図	4
4	〃	A区第1面遺構平面図	5
5	〃	調査区配置図	6
6	〃	A区第4層出土緑釉陰刻花文椀	6
7	〃	土壙 138 出土土器実測図	7
8	〃	出土瓦実測図	8
9	平安京左京二条四坊	調査位置図	9
10	〃	遺構配置図	10
11	〃	遺構配置図	12
12	〃	3区土壙 1151 出土鏡鑄型実測図	16
13	〃	2区出土伊万里鼓形花器	17
14	〃	1区竈 118 出土染付皿	17
15	平安京左京三条一坊・史跡旧二条離宮	調査位置図	18
16	〃	遺構平面図	18
17	〃	平安時代から桃山時代全景	20
18	平安京左京三条二坊・堀河院跡	調査位置図	21
19	〃	遺構平面図	22
20	〃	溝 1 断面	23
21	平安京左京四条四坊	調査位置図	24
22	〃	第1・2面遺構平面図	25
23	〃	第4・5面遺構平面図	27
24	〃	土壙 892 出土磁州窯壺	28
25	平安京左京六条一坊	調査位置図	29
26	〃	遺構平面図	29
27	平安京左京八条三坊	調査位置図	30
28	〃	遺構平面図	31
29	平安京左京九条二坊	調査位置図	32
30	〃	内行花文鏡実測図	32
31	〃	遺構平面図	33
32	平安京右京三条一坊 1	遺構平面図	34
33	〃	P 4	34

34	平安京右京三条一坊 1～7	調査位置図	35
35	平安京右京三条一坊 2	遺構平面図	37
36	平安京右京三条一坊 3	遺構平面図	38
37	平安京右京三条一坊 4	遺構平面図	41
38	平安京右京五条四坊	調査位置図	42
39	〃	プラン 3-1 平面図	42
40	〃	プラン 3-2 平面図	43
41	〃	溝 S D 175 A 上面出土土三輪玉	45
42	平安京右京六条一坊	調査位置図	46
43	〃	主要遺構配置図	46
44	〃	S E 80 下層出土土器実測図	47
45	〃	S E 80	48
46	〃	S G 235 土器出土状況	48
47	平安京右京八条二坊	調査位置図	49
48	〃	二町遺構配置図	49
49	〃	遺構平面図	50
50	〃	出土土器実測図	52
51	〃	墨書土器	55
52	鳥羽離宮跡 139 次調査	調査位置図	56
53	〃	調査区断面	56
54	中臣遺跡 71・72 次調査	調査位置図	57
55	長岡京左京一条三坊・東土川遺跡	調査位置図	58
56	〃	全景	58
57	長岡京左京五条四坊	調査位置図	59
58	〃	土壇 1 出土土師器小型壺	59
59	〃	遺構平面図	60
60	〃	全景	60
61	長岡京左京六条三坊・水垂遺跡	調査位置図	61
62	〃	遺構配置図	62
63	植物園北遺跡 1	調査位置図	65
64	〃	遺構平面図	66
65	〃	S D 34 出土金銅仏	67
66	植物園北遺跡 2	調査位置図	68
67	相国寺旧境内	調査位置図	69
68	〃	遺構平面図	70

図 69	相国寺旧境内	遺構平面図	70
70	〃	溝 14 - 1 出土陶器	71
71	特別史跡特別名勝慈照寺庭園	調査位置図	72
72	〃	1 トレンチ実測図	73
73	〃	2 トレンチ A 区実測図	73
74	〃	S D 20 実測図	74
75	〃	2 トレンチ C 区・3 トレンチ実測図	74
76	〃	導水施設模式図	74
77	〃	5 トレンチ実測図	75
78	〃	6 トレンチ実測図	75
79	〃	出土土器実測図	76
80	〃	出土瓦実測図	76
81	広隆寺旧境内	調査位置図	77
82	〃	遺構平面図	77
83	南春日町遺跡 28 次調査	調査位置図	79
84	〃	遺構平面図	79
85	〃	全景	80
86	上久世遺跡	調査位置図	81
87	〃	遺構実測図	82
88	〃	S B 40	83
89	六波羅政庁跡	調査位置図	84
90	〃	北区第 1 面遺構平面図	85
91	〃	南区第 1 面遺構平面図	86
92	安祥寺下寺跡 1	調査位置図	87
93	〃	遺構平面図	88
94	〃	木炭木槨墓実測図	89
95	〃	木炭木槨墓出土遺物実測図	90
96	安祥寺下寺跡 2	調査位置図	91
97	〃	遺構実測図	92
98	〃	石組 106 実測図	93
99	〃	墓 112 出土土器実測図	93
100	史跡醍醐寺境内	調査位置図	94
101	〃	遺構平面図	95
102	平安京左京北辺二坊	調査位置図	97
103	〃	茶道具	97

図 104	平安京左京北辺二坊	伊万里鉢	97
105	平安京左京三条四坊	調査位置図	98
106	〃	T-No.8 トレンチ全景	100
107	〃	F-No.5 トレンチ全景	100
108	平安京右京三条一坊 5	遺構平面図	101
109	〃	5区全景	102
110	平安京右京三条一坊 6	遺構平面図	103
111	平安京右京三条一坊 7	遺構平面図	105
112	長岡京左京四・五条四坊	調査位置図	107
113	北野遺跡・北野廃寺	調査位置図	108
114	〃	A地点遺構平面図	108
115	〃	B地点遺構平面図	109
116	京都大学構内遺跡	調査位置図	110
117	〃	B A 2 出土縄文土器実測図	111
118	嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡	調査位置図	112
119	〃	S K 149 出土縄文土器実測図	112
120	史跡名勝嵐山	調査位置図	114
121	〃	S K 9 出土遺物実測図	115
122	〃	S K 2 出土甕	115
123	復原彩色	人面墨描土器	117
124	〃	人面墨描土器	117
125	安祥寺下寺跡出土蟠龍文鏡の 蛍光X線分析	蟠龍文鏡の蛍光X線スペクトル図	118

表 目 次

表 1	江戸時代主要遺構産地別破片数計測表（平安京左京二条四坊）	15
2	平成5年度の遺物復原彩色件数一覧表（復原彩色）	117
3	平成5年度月別観覧者一覧表（京都市考古資料館状況）	126
4	発掘調査一覧表	129
5	試掘・立会調査一覧表	132
6	その他契約一覧表	134

第1章 発掘調査

I 平成5年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査の件数は45件で、昨年度より13件増加している。平安宮跡3件、平安京跡24件（左京域17件、右京域7件）、鳥羽離宮跡1件、中臣遺跡2件、長岡京跡3件、その他の遺跡では、植物園北遺跡と安祥寺下寺跡が2件、松ヶ崎廃寺、相国寺旧境内、特別史跡特別名勝慈照寺庭園、広隆寺旧境内、南春日町遺跡、上久世遺跡、六波羅政庁跡、史跡醍醐寺境内、各1件である。平安宮左馬寮跡の2件、平安京跡左京四条一坊、松ヶ崎廃寺の各1件は、すでに昨年度の『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』で報告している。また、中臣遺跡1件、平安京左京八条三坊（下京区烏丸通塩小路下る東塩小路町）の7件は、次年度の調査概要でまとめて報告する。したがって、本概要で報告する発掘調査の件数は、33件である。ただし、平安京跡左京二条四坊の調査は、2件を1項として項をたてている。

平安宮跡 朝堂院宣政門跡（1）は国庫補助事業として、朝堂院の東中門にあたる宣政門の北半部を調査した。基壇東縁を示す凝灰岩列石、基壇本体の整地層を検出している。この凝灰岩列石は階段の一部と推定された。また、基壇西縁の凝石岩採取跡も検出した。東縁と西縁の検出により、宣政門の東西幅が明らかとなった。

平安京跡 本年度、平安京跡の調査件数が増加したのは、左京域の調査事例が多かったことに起因している。左京域だけで17件を数える。京都市立小学校の統廃合に伴う発掘調査が2件あり、新京都駅建設に伴う発掘調査も始まり、今年度は左京域の大規模な発掘が多かったのも特徴である。地下鉄東西線の発掘調査は、最終段階の付帯工事に伴うもので、昨年度に引き続き小規模な発掘調査を2箇所で行った。

左京域の発掘調査では、まず左京一条三坊の調査（2）をあげることができる。4箇所を調査区を設定し、江戸時代の遺構としては水戸藩邸の石組みの井戸、石室、建物などを検出した。また、中世末期から近世初頭にかけての上京の地割りに関係する堀が、同様に地割りに関係する平安時代前期の溝が検出されている。その他にも、平安時代後期の瓦溜も検出した。左京二条四坊の発掘調査（3）は、御所南小学校の新築工事に先立って実施したものである。調査面積は2調査合わせて3,100㎡余りであり、左京域の発掘調査としては大規模である。平安時代から江戸時代後期にいたる各時代の遺構、遺物の検出があり、街路や宅地割りの変遷を理解する上で重要な資料を得ている。左京三条一坊・史跡旧二条離宮（4）と左京三条二坊・堀河院跡（5）の発掘調査は、地下鉄東西線に関連する調査である。平安時代の遺構は検出されなかった。左京四条四坊の発掘調査（6）も高倉小学校新築工事に先立ち調査したものである。平安時代中期をさかのぼるような遺構は検出していないが、平安時代後期から江戸時代まで、各時代の遺構、遺物を検出している。左京二条四坊の発掘調査と同様に平安京の変遷を知る上で貴重である。その他、朱雀大路の

東側溝を検出した左京六条一坊の発掘調査（7）、中世八条院町の井戸や鋳型が検出された左京八条三坊の発掘調査（8）、針小路の側溝を検出した左京九条二坊の発掘調査（9）などがあり、本年度の平安京左京域の発掘調査は、件数も多く、多彩な成果をあげることができた。

平安京右京域の調査で注目されたのは、右京八条二坊の発掘調査（16）である。西鞆負小路や門界の区画を示す高まりと各戸主単位での建物などを検出した。また、運河の跡を埋立て、西鞆負小路が造られたことがわかり、紀年名木簡や木製品など多くの出土遺物と相まって興味ある調査となった。右京三条一坊1～4の4箇所発掘調査（10～13）は、いずれも山陰本線二条駅の再開発に伴う発掘調査である。穀倉院に関連する建物、竈殿と関連する可能性がある池、建物などが検出されている。右京六条一坊の発掘調査（15）でも平安時代前期の建物や井戸を検出している。右京五条四坊の発掘調査（14）では、平安時代の遺構は検出していないが、弥生時代の方形周溝墓や竪穴住居、奈良時代や古墳時代末期の掘立柱建物が検出され、西京極遺跡の一端が明らかとなった。

鳥羽離宮跡 鳥羽離宮跡の調査（17）は、139次を数えることになったが、本年度は1件の国庫補助事業の発掘調査に限られた。池の南岸の一部と洲浜の一角を確認している。

中臣遺跡 中臣遺跡（18）も調査件数が減っており、目立った遺構の検出はなかった。

長岡京跡 長岡京跡の発掘調査は3件である。左京六条三坊・水垂遺跡の発掘調査（21）は、数年来、継続して1万㎡を越える調査面積を確保して実施している大規模な発掘調査である。本年度も昨年に引き続き、弥生時代から古墳時代の集落跡を調査しており、河川や竪穴住居などを検出している。長岡京関連の遺構では、六条第一小路と東三坊第一小路の交差点を検出したが、六条第一小路は交差点の東側で消滅していた。その他、2例の発掘調査（19～20）では、中世の流路や堀を検出するにとどまった。

その他の遺跡 上記以外の遺跡をその他の遺跡として取り上げたが、本年度はこの6節、その他の遺跡にみるべきものが多い。特別史跡特別名勝慈照寺庭園（銀閣寺）の発掘調査（25）では、足利義政創建の東山殿に関連する建物、池、導水施設、暗渠などが検出されている。また、山科の安祥寺下寺跡1の発掘調査（30）では、蟠龍文鏡の破片が出土した平安時代前期の木炭木槨墓が発見されている。相国寺旧境内の発掘調査（24）では、15世紀後半から16世紀中頃の複数の堀を検出している。その他にも、平安時代後期の建物、中世の井戸などを検出した植物園北遺跡1（22）、平安時代中期の溝を検出した広隆寺旧境内（26）、室町時代の建物や井戸などを検出した南春日町遺跡28次調査（27）、弥生時代から古墳時代の竪穴住居を検出した上久世遺跡（28）、平安時代後期の井戸、溝、柱穴、鎌倉時代から室町時代の溝、土壇、柱穴などを検出した六波羅政庁跡（29）、平安時代末期から鎌倉時代の柱穴、土壇を検出した史跡醍醐寺境内（32）などがある。以上、本年度の発掘調査の概略を示したが、各時代の特徴ある遺構・遺物を検出しており、歴史都市京都を証明する資料として価値が高いと理解している。

（永田信一）

II 平安宮・京跡

1 平安宮朝堂院宣政門跡（図版1・3）

経過 上京区竹屋町通千本東入主税町で住宅の新築工事が計画された。この地点は千本丸太町交差点から南東方向へ約150mに位置し、平安宮朝堂院の東中門である宣政門の北半部に推定される。そのため平成6年（1994）2月1日から3月18日まで発掘調査を実施した。

遺構 検出した主な層・遺構は、推定宣政門の基壇整地層および基壇西縁・東縁の遺構である。基壇整地層は基壇の下部層とみられる粘土質の極暗褐色泥砂層で、基壇面および整地層の

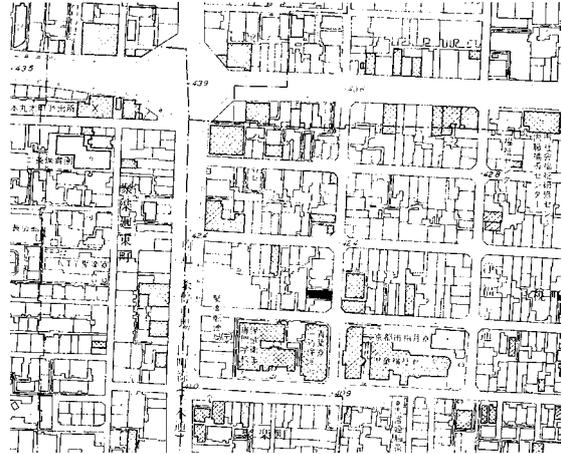


図1 調査位置図（1：5,000）

上部層は未確認である。検出面は標高約41.5mを測る。基壇西縁では凝灰岩切石の抜取跡1を検出した。基壇東縁では凝灰岩切石の抜取跡2・3、凝灰岩列石1を検出した。抜取跡2は東西約0.4mの幅で凝灰岩片が密集して詰まった状態であった。抜取跡3は抜取跡2より基壇外側の一段低い位置にあり、凝灰岩片および薄い膜状の凝灰岩碎片を東西幅約0.4mの規模で検出した。凝灰岩列石1は方形の凝灰岩切石が南北に敷き並べられた状態であり、破損したものを合わせて計5個を数えた。検出規模は南北約1.7mを測る。列石上面の西辺には平坦な加工面が残っており、別の石が積み重ねられた痕跡（石の当り面）と考えられた。切石はほぼ正方形に近く、長辺が44～46cm、短辺が40～43cmを測る。厚さは残りの良い西辺部分では約11cmであった。基壇東縁のこれらの遺構は各々関連したものと考えられ、階段の一部であると推定された。凝灰岩列石1については8世紀初頭の遺構であるが、奈良県当麻町の加守寺六角堂跡の基壇遺構の階段部地覆石に類似の検出例がみられる。

遺物 整理箱にして53箱分出土した。平安時代の軒瓦は小片のものを含み24点が出土した。平安時代の土器は凝灰岩列石1を覆う暗褐色砂泥層で10世紀初頭から中頃の土師器皿・高杯、白色土器皿などが少量出土した。

小結 基壇東縁を示す凝灰岩列石の遺構を検出したこと、同時に基壇西縁の凝灰岩抜取跡の遺構を検出したことによって、朝堂院宣政門の東西規模の一端を明らかにした。

（長戸満男）

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 1995年報告

註 近江俊秀「加守寺跡の発掘調査」『シンポジウム古代寺院の移建と再建を考える』

帝塚山考古学研究所 1995

亀田 博・近江俊秀「奈良県北葛城郡当麻町加守寺跡の発掘調査」

日本考古学協会第61回総会研究発表要旨 1995

2 平安京左京一条三坊 (図版1・4・5)

経過 調査地は京都御所蛤御門の烏丸通を挟んだ西側に位置し、私立学校教職員共済組合第二京都宿泊所の建設工事に伴って実施した。この地域は、平安時代においては平安京左京一条三坊九町にあたり、里内裏である土御門烏丸内裏が営まれている。鎌倉時代から室町時代にかけては清浄華院という浄土宗の寺院、江戸時代には水戸藩邸にあたる。当敷地内では昭和61年(1986)に西半部で発掘調査が実施され、平安時代から江戸時代までの遺構が検出されている。

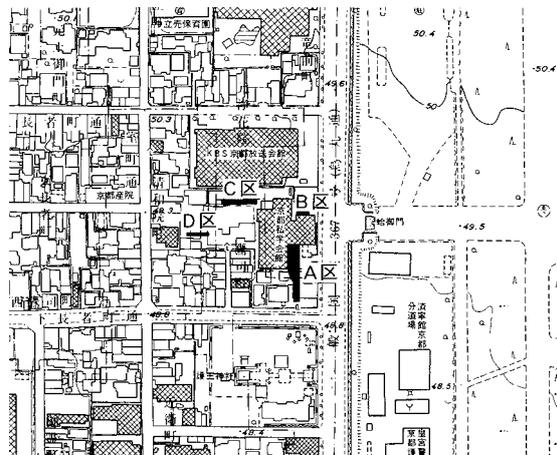


図2 調査位置図 (1:5,000)

既存建物は地下室を備えていたため、その範囲は地下深くまで攪乱されていることが判明し、攪乱の及んでいない部分に調査区を設定した。調査区はA～D区の4箇所からなり、C区・A区・D区・B区の順に調査を進めた。

遺構 A区 遺構面は計3面が検出され、第1面が江戸時代前期から中期、第2面が平安時代後期から室町時代、第3面が平安時代前期から中期である。現地表下約1.6mの現代層および江戸時代後期の堆積層を取り除くと、江戸時代前期から中期の遺構面となる。

第3面で平安時代前期の土壌と溝を検出した。土壌138は南北約4.0mを測る。溝107は調査区北部で検出した東西溝、溝133は調査区西隅で検出した南北溝である。第2面では土壌・溝・柵列・地鎮土壌などを検出した。土壌88と89は、平安時代後期の瓦を包含する直径1.4～1.7mの瓦溜である。土壌108は直径が0.3mを測る円形の土壌で、ほぼ完形の瓦質の壺が据付けられた状態で出土しており、地鎮土壌である可能性が高い。第1面では土壌・井戸・石室などを良好な状態で検出した。調査区北部において検出した土壌46は、南北約3.5～4.0m、東西約8.0m以上、深さ約1.0m以上の大型土壌で、多量の炭化物層と砂泥層とが交互に堆積している。炭化物層は土壌内で植物などを燃やした結果堆積したものと推定される。調査区中央部で検出した井戸53は、人頭大の花崗岩によって石組みされたもので、東西1.7m、南北1.3m、深さは2.6mの方形井戸である。花崗岩は風化が進み脆い。底部には胴木が残存する。また、井戸53の東

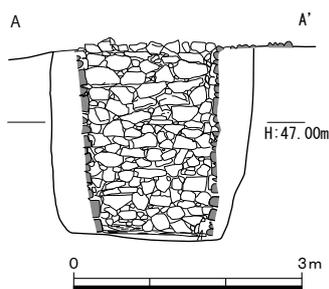


図3 井戸53実測図 (1:100)

側と南側には拳大の川原石が幅約1.0mの幅で敷き詰められ、さらに一部が西側にも延びる。井戸53をとりまくように東側4箇所礎石らしき石が認められ、井戸の覆屋が存在していたと思われる。井戸53の南側では比較的安定した遺構面に、ピットや東石と考えられる石がいくつか検出され、建物があったことが予想される。また、調査区の各所において、円形や方形の石室を検出した。これらの石室はおおむね幅0.8～1.2m、深さ0.5

～0.9 mの大きさで、拳大から人頭大の川原石によって構築されている。

B区 最も狭い面積の調査区で、室町時代の幅1.8 mを測る南北方向の溝と江戸時代後期の石組井戸を検出したにとどまった。

C区 地表下0.2～0.4 mの近現代盛土層を取り除くと遺構面となる。遺構面は5面検出し、第1面が江戸時代、第2面が桃山時代、第3～5面が平安時代である。

第5面で、平安時代前期の拳大の川原石を敷き詰めた遺構を検出した。地業の跡ともみられるが、調査区外に展開するため遺構の性格は不明である。平安時代中期の遺構としては、第3～4面において溝・土壇・掘立柱建物などを検出した。建物15は推定東西3間、南北は不明である。建物の主軸はほぼ真北方向に一致する。溝13は二次的な焼成を受けた瓦および焼土を包含する南北溝である。桃山時代の遺構には、第2面で検出した堀8がある。堀8は推定幅約4.5 mで深さ2.3 m程を測り、南北方向である。遺物の年代から、桃山時代に掘削され、江戸時代前期頃に埋まったと考えられる。第1面では溝・土壇・井戸などが検出されている。

D区 地表下0.4～0.7 mの近現代盛土層を取り除くと遺構面となる。遺構面は2面検出し、第1面が江戸時代、第2面が室町時代に相当する。平安時代の遺構面は削平されたと思われ、検出できなかった。室町時代の遺構には溝があり、溝153は南北方向で、幅約2.0 m、深さ0.8 mを測る。江戸時代の遺構には石組井戸・石室・土壇などがある。

遺物 出土遺物は整理箱に368箱を数える。平安時代前期の遺物には、土壇138出土の土器(図7)があり、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器がみられる。土師器杯(1～3)と皿(5・6)

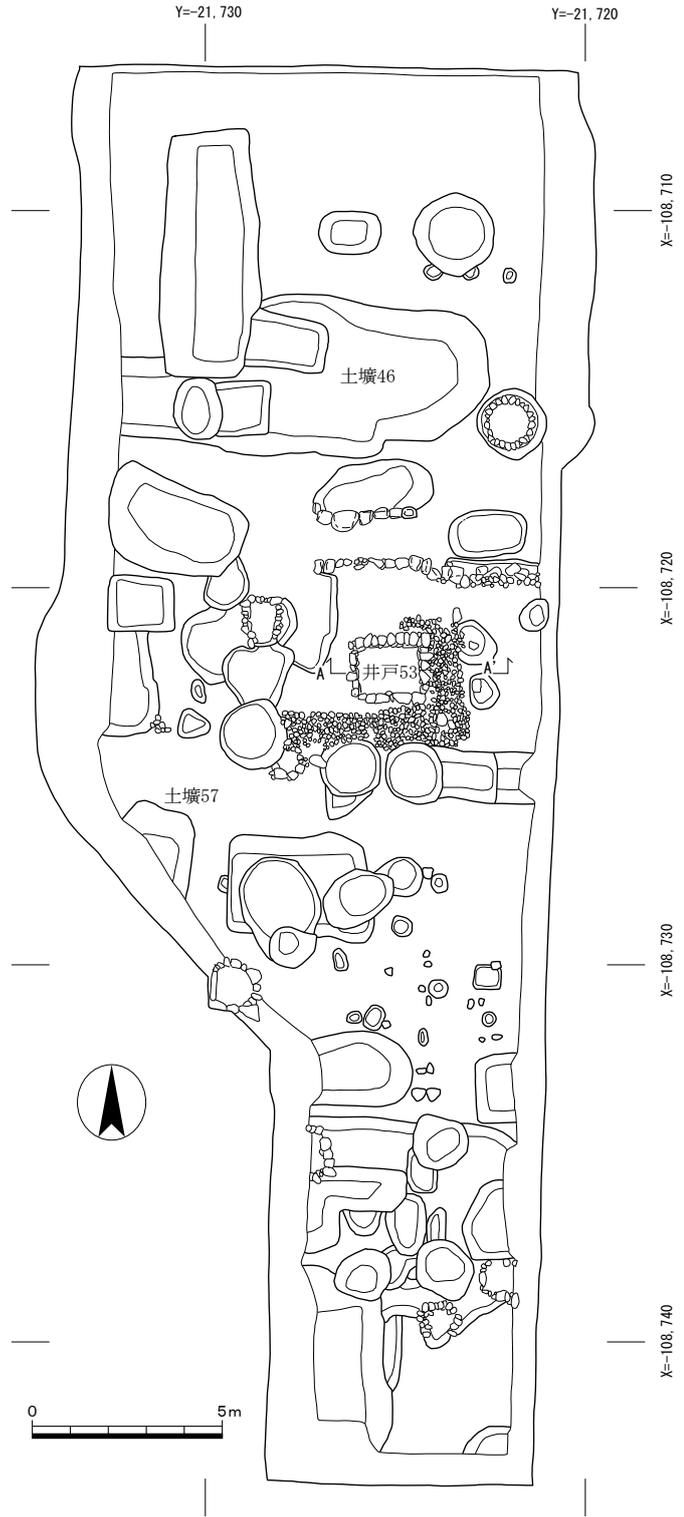


図4 A区第1面遺構平面図(1:200)

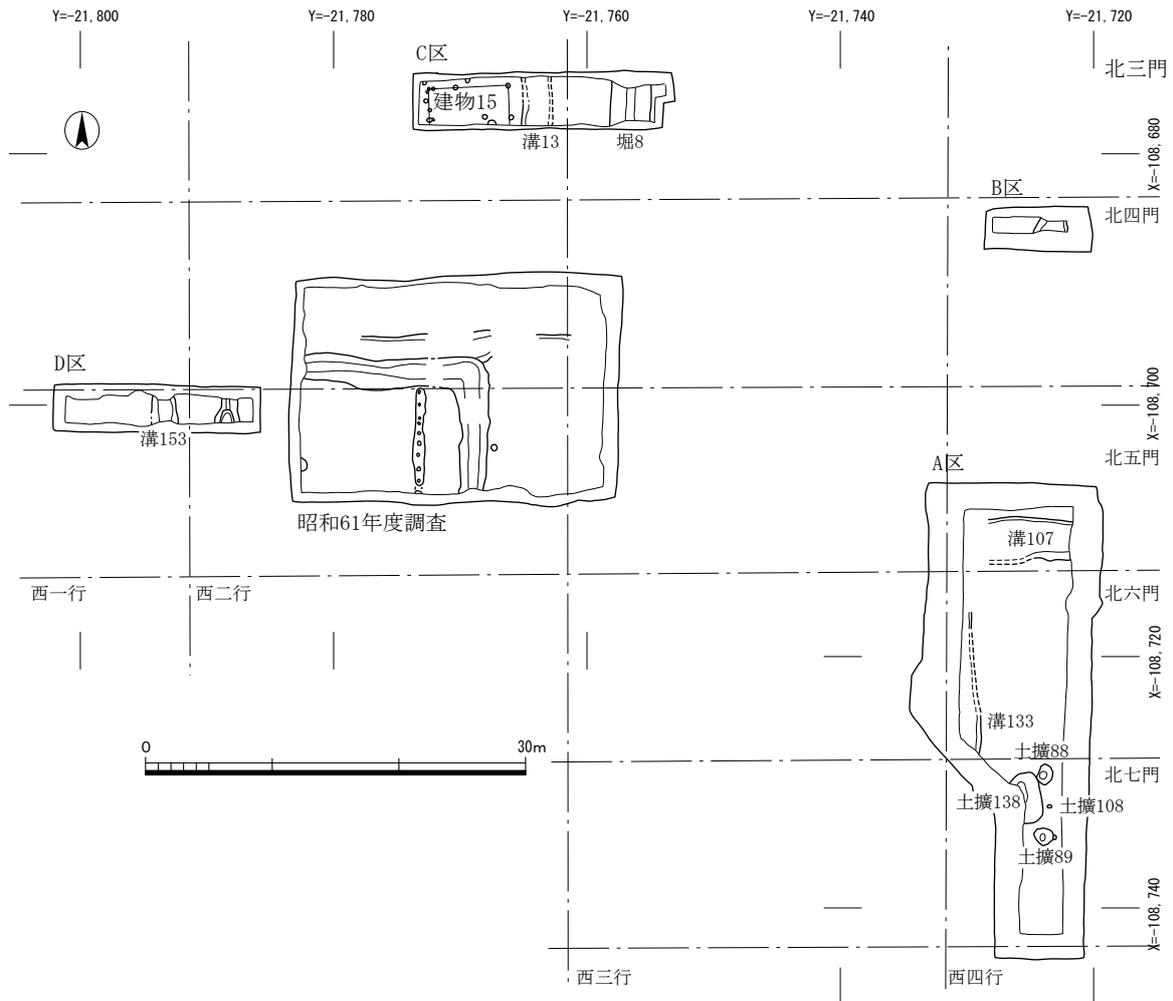


図5 調査区配置図 (1:600)

は外面ヘラケズリ手法で、杯（4）はナデ手法である。黒色土器椀（9）は内面のみ炭化し、底部に小さな高台を付ける。緑釉陶器椀は（13・15）が全面に緑釉を施し、（14）は高台が露胎である。興味深い土器としてA区第4層出土で、底部のみの破片であるが、内面に魚、高台の底部に蓮弁を篋書きで表した緑釉陶器の皿（図6）がある。体部が欠損し全容はうかがえないが体部外面にも文様を描く。

平安時代中期の瓦には、単弁八弁蓮華文軒丸瓦（図8-1）と均整唐草文軒平瓦（図8-11）などがある。軒丸瓦（1）は裏面に布目痕跡のある接合式の瓦当で、中房に簡略化した「河」銘

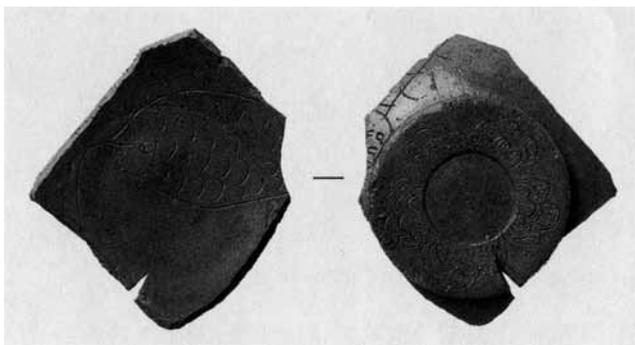


図6 A区第4層出土緑釉陰刻花文椀

を配する。軒平瓦（11）は『平安京古瓦図録』^註397（西賀茂神光院付近で出土）と同範と思われる。（1）と（11）は河上瓦窯産と考えられる。平安時代後期の遺物は土壇88・89から瓦がまとまって出土している。軒丸瓦は蓮華文・巴文、軒平瓦は唐草文・宝相華文で瓦当の成形はすべて折曲式である。そのほとんどが

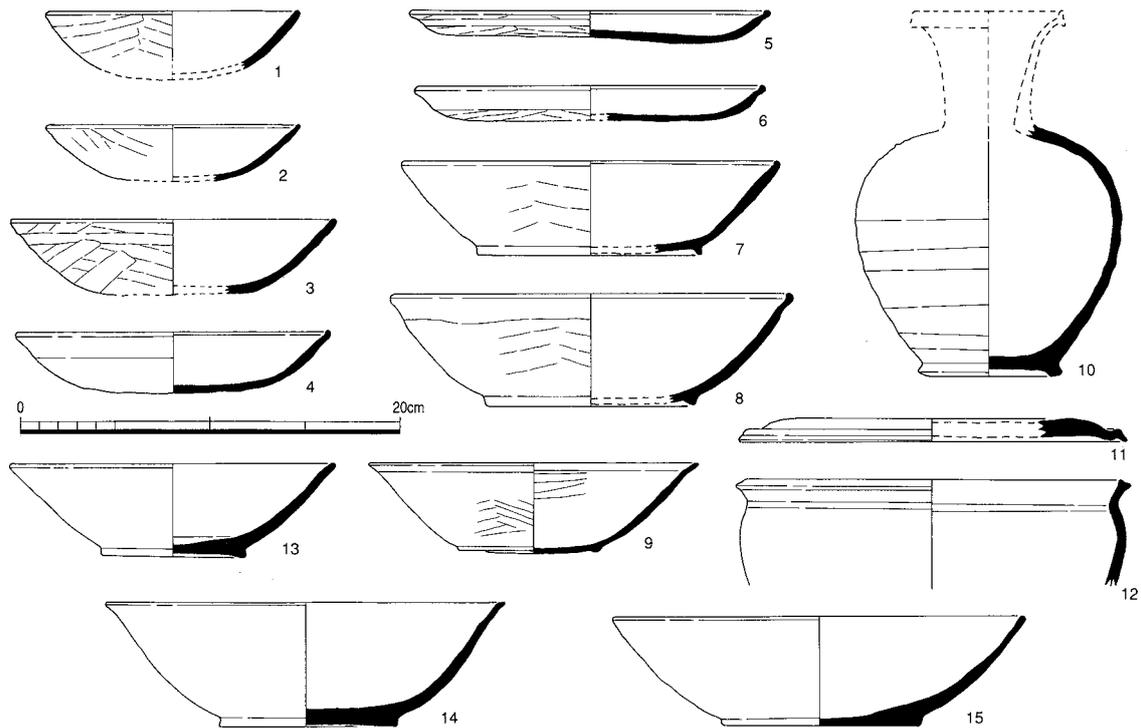


図7 土壙138出土土器実測図(1～8:土師器 9:黒色土器 10～12:須恵器 13～15:緑釉陶器)
(1:4)

京都産である。室町時代の遺物は量的に少なく、土師器皿などが少量ある。

桃山時代から江戸時代前期の遺物には、土師器皿、唐津・志野・織部・京焼などの国産陶磁器、輸入陶磁器の染付皿、金箔瓦がみられる。江戸時代中期以降の遺物には、くらわんか茶椀などの国産陶磁器や焼き塩壺などが多く出土している。

小結 平安時代前期の遺構はA区で溝と土壙が検出されている。溝は東西方向と南北方向がつながる可能性があり、地割りに関係するものであろうか。平安時代後期には当地に土御門烏丸内裏が営まれているが、この時期の遺構としては、A区で検出された2基の瓦溜(土壙88・89)がある。土壙出土の瓦をみると、丸瓦・平瓦と比較して軒瓦の占める割合が高く、また小ぶりの瓦であるため瓦葺きの建物ではなく、檜皮葺きや柿葺きの大棟に使用されたと考えられる。しかし、建物は後世に削平されてしまったものか、検出できなかった。

中世末期から近世初頭にかけては、C区で南北方向の堀8が検出されたが、周辺の調査でも確認され、上京の地割りを解明する上で重要な成果である。清浄華院が当地あたりにあったとされるが、その遺構は明確ではない。中世の遺物包含層は認められるが、下京などと比べ遺構が少なく、当該地は耕作地として利用されていた可能性がある。

江戸時代の遺構としては水戸藩邸の遺構が比較的良好に遺存していることが判明した。A区では、石組井戸・石室・建物・土壙を検出した。石組井戸は覆屋と周囲に敷石を伴い、また南側には建物が展開する。しかし建物は礎石が抜き取られたり攪乱を受け、明確ではない。

(前田義明・会下和宏)

註 平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣 1977

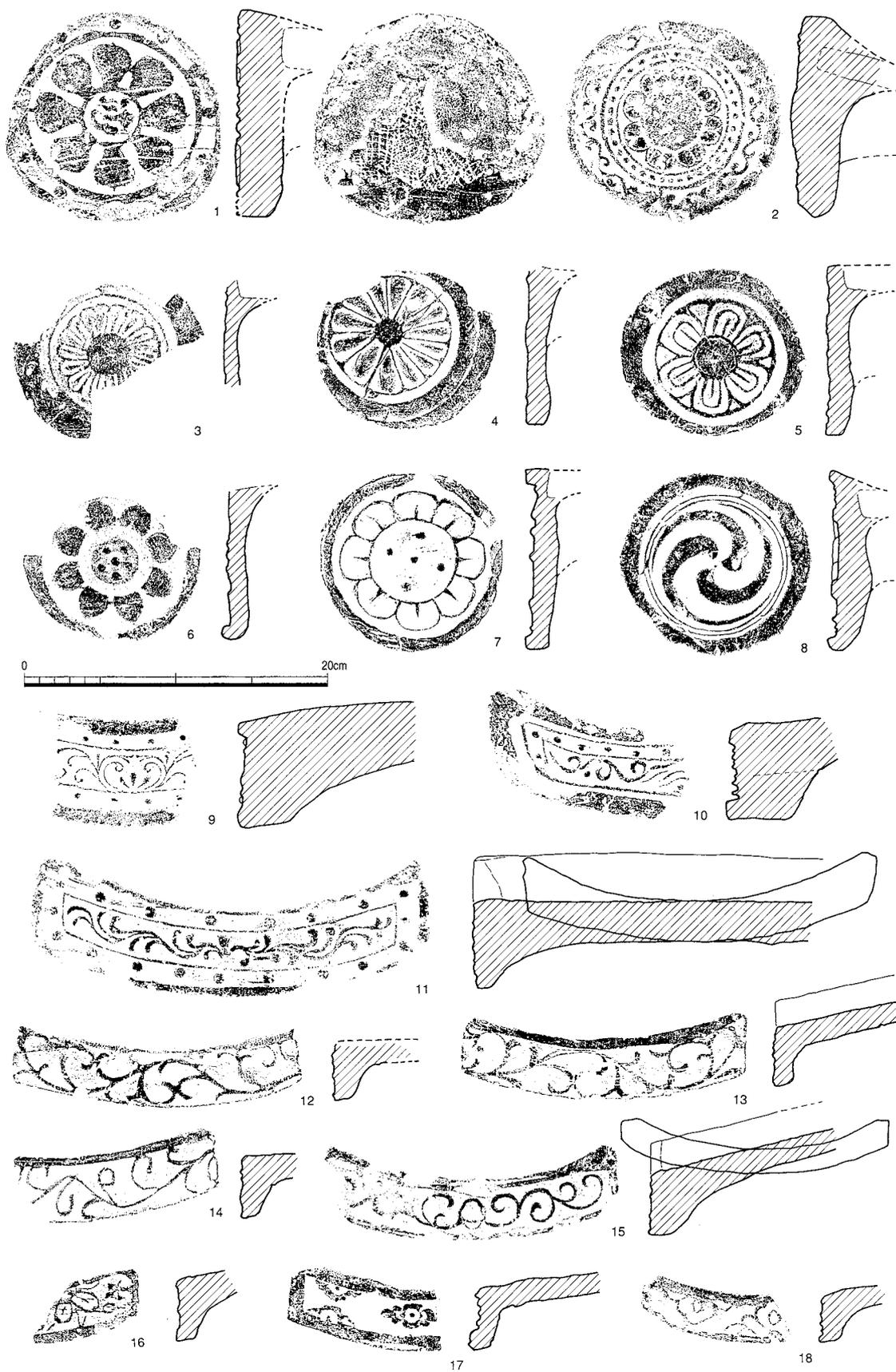


图8 出土瓦实测图 (1: C区第4层 2: C区第2层 3~6·15~18: A区土墙 88
7·8·12~14: A区土墙 89 9: A区沟 107 10: A区第1层 11: C区沟 13) (1: 4)

3 平安京左京二条四坊（図版1・6～9）

経過 この調査は、京都市立御所南小学校校舎の新築工事に先立って実施したものである。調査地は、平安京左京二条四坊十一町に想定され、北は大炊御門大路、南は冷泉小路、東は富小路、西は万里小路に囲まれた宅地の北半にあたる。当該地の周辺は、白河天皇の大炊御門殿、後鳥羽・土御門・順徳三上皇の大炊御門京極殿、後嵯峨天皇が後深草天皇に譲位した冷泉万里小路殿など、天皇の仮御所や貴族の邸宅などが立ち並ぶ邸宅街であった。当地は、文献史料から

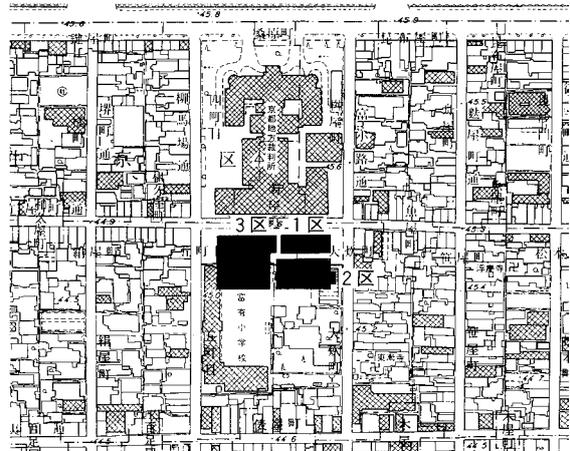


図9 調査位置図（1：5,000）

11世紀後半には源高房、12世紀後半には藤原経房の邸宅があったことが知られる。室町時代初期には、南の十二町に後醍醐天皇の御所である二条富小路内裏が造営され、当地はその北に隣接しており何らかの関連施設が予想された。その後、豊臣秀吉による天正十八年（1590）洛中地割りの実施による大改造の結果、当地一帯は諸大名の京屋敷や町屋が分布し、新たな都市が形成される。宮内庁所蔵の『洛中絵図』寛永十四年（1637）によると当地は飛騨高山藩主金森出雲守の屋敷地となっており、それが貞享元年（1684）以降には豊前小倉藩主小笠原遠江守の屋敷に変更されている。このような歴史的な背景からこれらに関連する遺構・遺物の検出が予想された。

まず対象範囲に試掘坑を6箇所設定し調査を行ったところ、大炊御門大路の南側溝、江戸時代の石積遺構や窯体片、鑄造関係の遺物など平安時代から近現代にいたる遺跡が良好に残存していることが判明した^註。本調査は既存施設の解体工事の関係から3調査区に分割して行い、総調査面積は約3,100㎡にのぼる。

遺構 基本層序は、現地表から約50～60cmまでが旧法務省や小学校建設時の盛土層で、次いで幕末の火災に伴う焼土の整地層が15cm、江戸時代後期の整地層が20cm程ある。これより下の層は、天明八年（1788）の大火に伴うと考えられる焼土層、その下には洪水層、次いで宝永五年（1708）の大火に伴うと考えられる焼土層、さらに2度の洪水層、江戸前期の整地層、桃山時代の整地層が各々5～15cm程度認められる。それから中世の整地層と平安時代の整地層が15～20cmあり、その下は古墳時代の流路による堆積層となる。

検出した遺構群は、総数4,695基を数える。これらは、弥生時代から飛鳥時代、平安時代前・中期、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代、桃山時代から江戸時代初期、江戸時代前期から後期の大きく5時期に分けることができる。これらの遺構群は、弥生時代から平安時代前・中期のものを除いて各々層位的に確認されたものである。

弥生時代から飛鳥時代のものは、1・3区で北西から南東にかけて流れる弥生時代後期から庄内式併行期と古墳時代後期から飛鳥時代の2時期の流路を確認した。この内流路2240は、検出

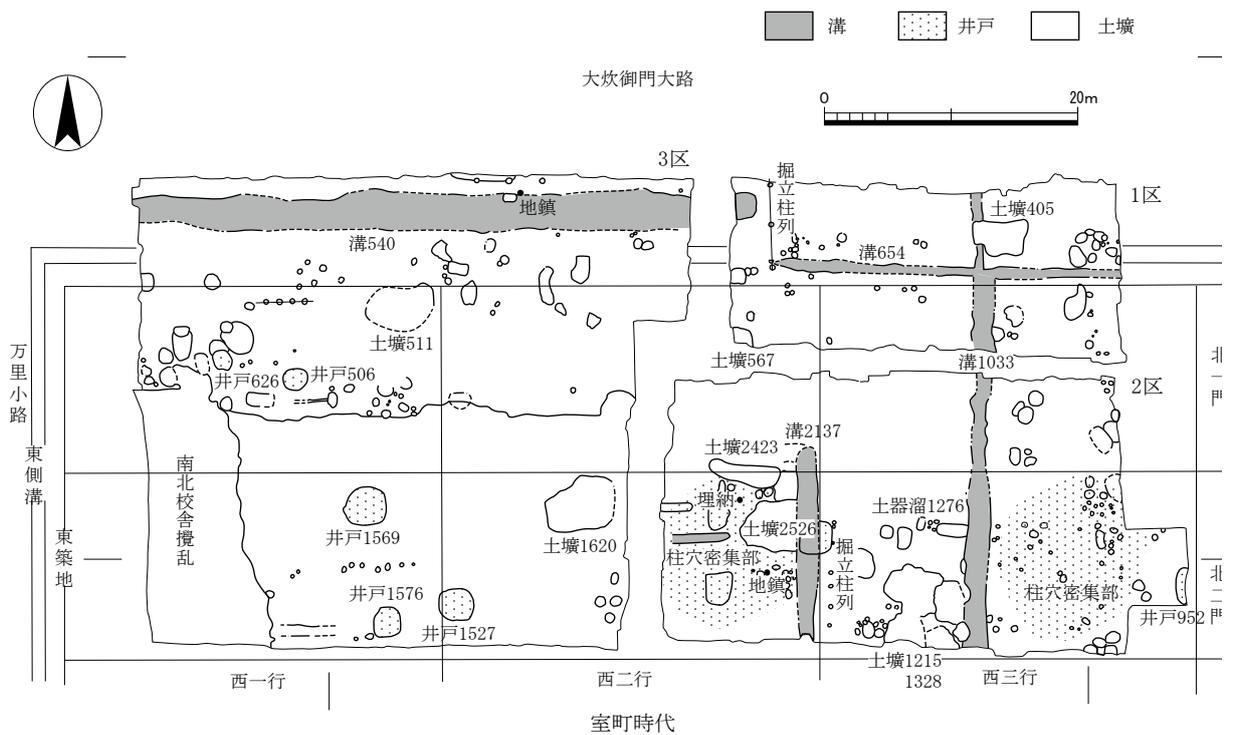
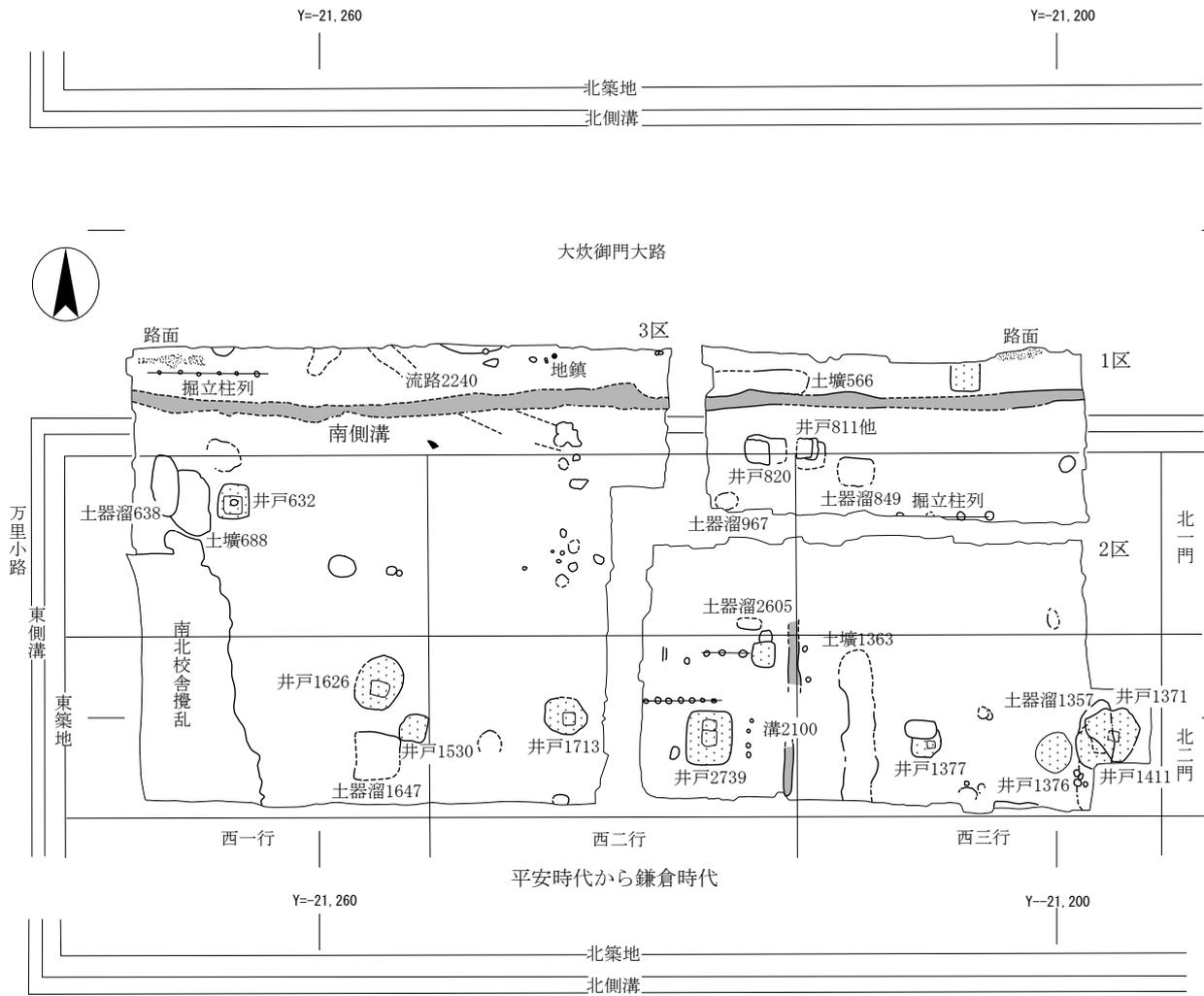


図10 遺構配置図 (平安時代から室町時代) (1:600)

した長さ約 20 m、幅 2 m 前後、深さは検出面から 0.5 m を測る。庄内式併行期の流路の堆積状況は大部分が砂と礫の互層からなり、その堆積層や肩部からわずかに遺物が出土した。

平安時代前・中期のものは、大炊御門大路路面、南側溝、掘立柱列、井戸、土器溜、土壙などがある。大炊御門大路路面は、1 区北端では路面の整地層が 2 面あり、その直上には、土師器の小片が敷き詰められているのを確認した。3 区北西端でも小礫敷の路面を 1 面確認した。大炊御門大路南側溝は、中近世の遺構群と重複し残存状況は悪い。1 区では残存幅 1.5 m、深さ 0.5 m を測り、重複関係から 10 世紀まで存続したことが判明した。しかし 3 区では 9 世紀にさかのぼる堆積層は確認できなかった。1 区では、溝の南に一部分築地状の高まりがみられた。掘立柱列は、1 区南端中央で東西方向に 3 間分確認し、柱穴掘形内には二次的に火を受けた凝灰岩片が出土した。その北西に径 2.4 m の不定形な土壙 1 基（土器溜 849）と、南西隅にも小規模な土壙 1 基（土器溜 967）を確認した。2 区では十一町を東西に二等分する境界上に南北溝が存在することから、宅地を東西に二分していたと考えられる。そして東西の宅地の北二門の各一行ごとには方形木枠組みの井戸が 1 ないし 2 基認められ、3 区の南半では平安時代初期の土器溜 1647 があり、平安京造営直後から宅地利用されていたと考えられる。また 3 区の北東寄りでは大炊御門大路路面内に小穴が 1 基あり、その中から黒色土器甕と猿面硯が出土したことから、なんらかの地鎮に関連した遺構と考えられる。

平安時代後期から鎌倉時代のものは、大炊御門大路路面、南側溝、溝、井戸、掘立柱列、土器溜、土壙などがある。南側溝は、1 区で北東隅において検出し、平安時代前・中期の溝位置より路面寄りに掘られ、残存幅 1.5 m、深さ 0.3 m 前後を測る。3 区では後期まで位置の変化はないが、この時期にいたると東西全域に存在していた溝が、少し位置をずらすなどして部分的な開削にとどまるようになった。しかも 1 区大炊御門大路路面内と溝寄りには、東西方向の掘立柱列や井戸がみられたり、宅地内で平安時代前・中期の東西の掘立柱列のすぐ北側で同様な柱列が認められるが、規模・性格などは不明である。そのすぐ西側で 3 基の重複した井戸 811 他が認められた。井戸枠は痕跡から方形板組みと考えられ、底に曲物を据えているものも確認できる。土器溜は、調査区の南東と南西にて各々 1 基ずつ確認した。3 区でも大路の路面内で掘立柱列を検出し路面内に何らかの施設があったことが予想される。2・3 区の宅地内の状況は南側溝に近い北一門の北端で井戸や土壙が認められるようになる。また十一町を東西に二等分する境界付近に前・中期同様南北溝が認められ、東西に二分された宅地割りが踏襲されていたことを示す。また北二門内にある井戸は前代からその位置をほぼ踏襲すると共に、それ以外にも新たに井戸が認められるようになる。特に西二行北二門で遺構密度が高い。

室町時代のものは、南北方向の掘立柱列、東西溝、南北溝、井戸、土壙などがある。1 区では平安時代の大炊御門大路南側溝の南に東西溝 654 があり、残存幅は 0.8 m、深さは 1.2 m を測り、断面 V 字形を呈する。溝は調査区を東西に貫通せず、1 町を東西に二分する境界のやや西で立ち上がる。一方、3 区では大炊御門大路南側溝のやや北側で幅 3.0 m、深さ 0.7 m、断面凹形を呈する東西溝 540 がある。これも十一町を東西に二等分する境界付近で立ち上がる。このことから

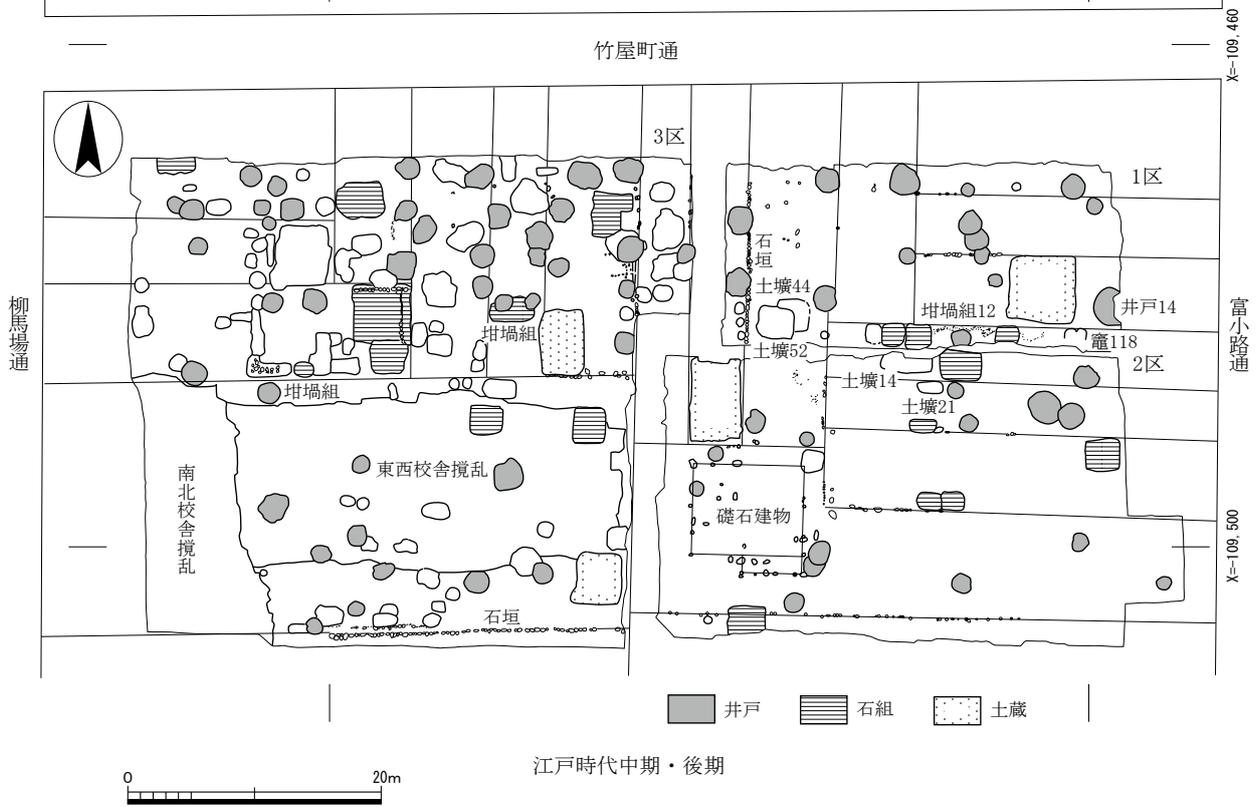
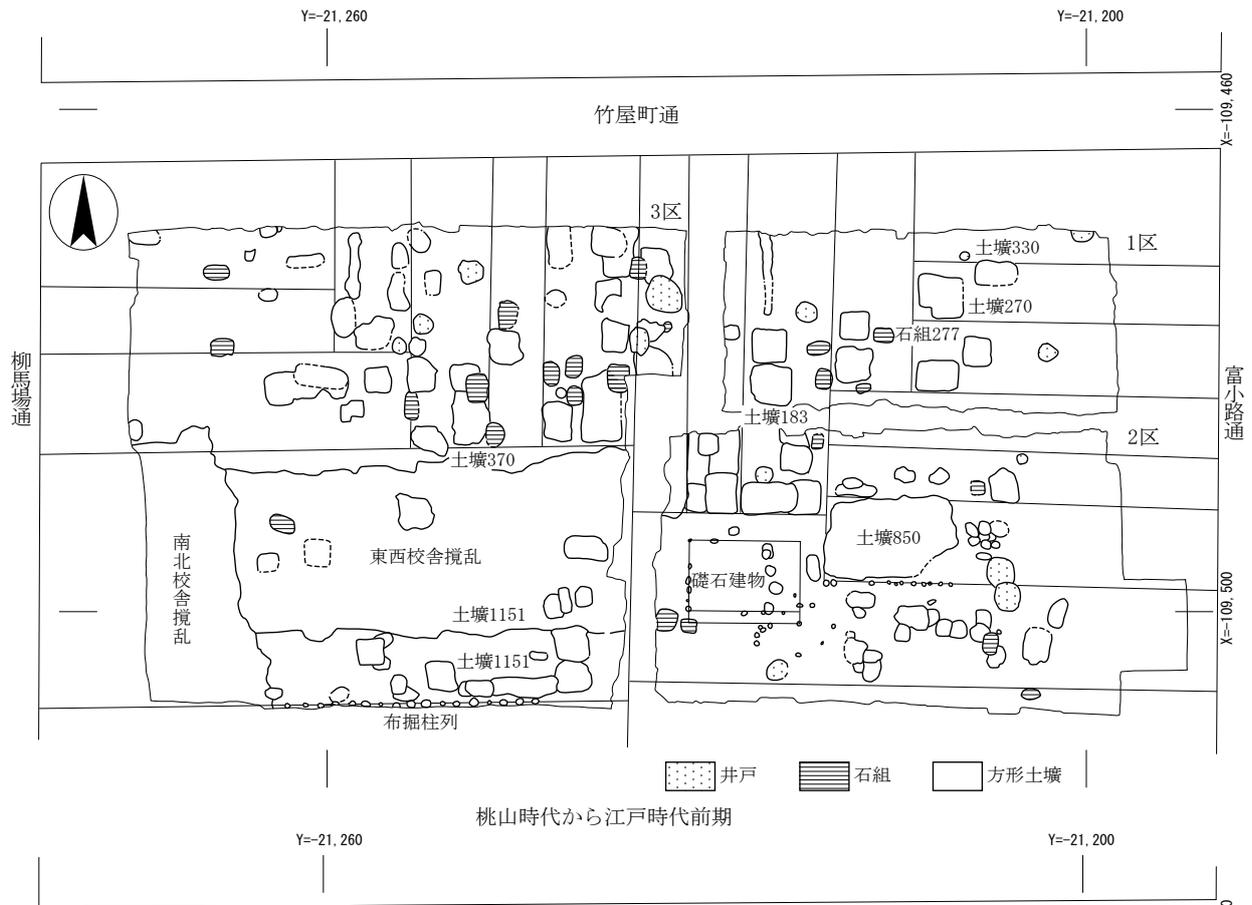


図11 遺構配置図(桃山時代から江戸時代) (1:600)

この時期大炊御門大路南側溝は、十一町の中央で規模や形状が異なる溝が連続せずに食い違って各々東西に存在していたことになる。しかも1・2区の西三行の中央やや西の位置で、溝654とほぼ同規模で同じ断面形を有する南北溝1033を確認した。両者は重複関係はなく、層の堆積状況や出土遺物から同時に存在したと考えられる。溝の東側には柱穴や土壙が密集して分布し、しかも小規模な掘立柱建物もあり、数回の建て替え痕跡がみられる。なお東西溝654が立ち上がる地点のすぐ西で、南北方向に2間以上の掘立柱列が1条ある。また十一町を東西に等分する境界に同様な形状の南北溝2137があり、その北端は北一・二門境界で止まり少し西に折れ曲がる。溝の東には塀が1条沿う。西側にも柱穴や土壙が密集して分布しているのが確認できた。この中には小穴内に土師器皿2個を身と蓋にして合わせたものや、瓦器壺に土師器小皿を蓋代わりに使用したものが各々1基ずつあり、後者と同様のものは3区大炊御門大路南側溝の北肩部でも確認している。いずれも地鎮などの祭祀に関連した遺構と考えられる。土壙には、1区南西隅で不定形の土壙567があり、15世紀前半の遺物がまとまって出土する。また東西・南北溝が交差する北東で、南北溝と重複関係のある方形土壙405を1基確認した。これは東西4.5m、南北3.0m、深さ1.2mを測る長方形の深いもので、底は平坦である。このような方形土壙がこの時期から認められる。

桃山時代から江戸時代前期のものは、町屋に関連した遺構群が主となり、宅地内の利用が一変する。竹屋町通に面する町屋を8軒、富小路に面したものを8軒、柳馬場通に面したものを3軒以上確認した。各町屋内には、掘立柱列、井戸、方形土壙、土壙、石組土壙などがある。町屋間の境界は、当初掘立柱列であったが、江戸時代に入ると礎石間を繋いだ川原石列となる。各町屋の通り庭や宅地奥には井戸や小規模な長方形の川原石組土壙が1基ないし2基ある。また2区南端の町屋を除いて、裏庭の隣地境界およびその周囲に収納用施設と考えられる大規模な方形土壙群が1基ないし2基あり、中期にいたるまで2、3回の造り替えを経ている。竹屋町通に面する町屋の遺構群内から少量の鏡鋳型、刀装具の鋳型、埴塼、鞆羽口などが出土する。3区南端では、東西方向の布掘立柱列を1条確認した。掘形内には柱穴が1.1～1.3m間隔にあり、柱穴内には礎石を検出した。検出状況から、造り替えがあったものと思われる。遺構の位置は四行八門制の北二・三門境界にほぼ該当すると共に、宮内庁所蔵の『洛中絵図』寛永十四年（1637）の金森出雲守屋敷地の北限に一致し、屋敷境の施設と考えられる。なお、このすぐ北側3mの地点で検出した長方形の土壙1151から、鋳造に関連する遺物が多量に出土した。

江戸時代中期以降のものは、前期と同様の町屋の構成が確認され、竹屋町通には大名屋敷に通じる石垣のある路地なども新たにみられる。これらは少なくとも2度の火災を経て4時期の建て替えにより変遷していることが判明した。ただ前代と異なる点として町屋間の境界が、礎石列となり、居室部と通り庭の整地が確認できるようになる。そして通り庭には、竈や石組井戸、裏庭には、石組井戸、石組土壙、便所が認められる。裏庭の方形土壙は減少し、かわって簡易な礎石建物や土蔵が造られる。町屋の中で最大規模のものは2区南端で確認したもので、宅地奥には5間×4間の奥座敷と考えられる礎石建物を有する。また3区南端で確認した大名屋敷を画する布

掘柱列は三段以上の石垣にかわる。

遺物 出土した遺物は整理箱で1,909箱を数え、縄文時代から江戸時代までのものを含む。内訳は江戸時代中・後期のものが過半数を占め、次いで桃山時代から江戸時代前期のものが約2割強、室町時代が1割強、平安時代が1割前後で、それ以前のは1箱あるにすぎない。器種別にみると土器・陶磁器・土製品が大部分で、瓦類は3%にも満たない。

縄文時代の遺物は1区の流路内と平安時代の遺構から2個体出土した。いずれも小片で中末から後期前半に属する。弥生時代のもは、平安時代の遺構面を形成する砂礫層や泥土層から出土した。弥生時代後期から庄内式併行期のものがやや目立って認められ、近辺に集落の存在が予想される。古墳時代のもは1区砂礫層、3区の流路2240から出土し、6世紀後半から7世紀に属する。土師器には精良な胎土の破片がみられ、須恵器にはかえりのある蓋、高台付の杯や東海系の長頸壺も出土している。

平安時代のもでは、3区南部の土器溜1647から9世紀初頭のもが、1区南部中央の土器溜849から9世紀前半のもが出土した。10世紀後半代に属するものが、1区の大炊御門大路南側溝や2区の土器溜2605、3区の井戸1626・1713からまとまって出土した。後期のもは2区の井戸1377、土器溜1357、3区の土器溜638などからまとまって出土した。1区の土壙566から灰釉陶器の底部外面に「紀幸」と墨書されたものが出土している。

鎌倉時代から室町時代のもは、土師器、瓦器、東播系須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。1区南西隅の土壙567から、元代から明代初期の青磁碗と共に多量の土師器が出土した。その中に「かわらけ」と墨書されたものが1点含まれる。2区の土壙2526から土器類と共に多量の焼土や花崗岩の破砕片が出土し、火災を受けた遺物の廃棄土壙と考えられる。室町時代の遺物の中では、2区の土壙1215・1328から多量の土師器と共にロクロ成形の土師器鉢が数点出土し、銭貨は宋銭が主体に出土した。

桃山時代から江戸時代前期のもは調査区全域で確認される。特に1区の土壙183第4層・土壙270、2区の土壙850、3区土壙370からは美濃、唐津などの陶器を始め土器・陶磁器類がまとまって出土している。このうち土壙370から白化粧の瑠璃釉陶器片が出土した。

江戸時代前期以降の遺物は調査区全域で認められるようになり、このうち3区南東隅の土壙1151から18世紀前後の多量の鏡鑄型、埴塙、鞆羽口、焼台などが出土した。1区でも鏡鑄型や刀装具の鑄型、埴塙、鞆羽口など少量出土したが、土壙1151に比べ鑄返しの材料と考えられる銅製品や銭貨の出土が目立ち、同じ細工師関連の遺物でもその構成が異なっているのが注目される。また調査区内全域で土師器李形小壺が平均してみられる特徴があり、これは18世紀後半以降増加する傾向にある。

1・2区において遺物が比較的良好な状態で出土した遺構について産地別・器種別に分類し、破片数の集計を試みた(表1)。その結果肥前磁器出現前後では、唐津の方が美濃に比べやや多い傾向であるのに対し、肥前磁器が盛行するに従い両者とも減少していく。焼締陶器は宝永五年(1708)の火災による焼土層と考えられる焼土152の時期までは、土壙183・330に丹波が多いの

表1 江戸時代主要遺構産地別破片数計測表

遺構名	美濃陶器	瀬戸陶器	瀬戸・美濃磁器	備前磁器	唐津陶器	北九州陶器	関西磁器	京都陶器	京都・信楽陶器	丹波陶器	信楽陶器	備前陶器	堺・明石陶器	中国陶器	中国磁器	朝鮮陶・磁器	不明陶器	不明磁器	土器・瓦器・土製品	瓦	合計	合計	備考	
土壙 270-4 層	20			1	45					2	13	3		14					79	12	189	177	大窯 4～連房 1-1	
土壙 270-3 層	47			5	51					4	24	4		9					461	10	615	605	大窯 4～連房 1-2	
土壙 270-2 層	21			48	25					6	11	2		6			5		235	3	362	359	大窯 4～連房 1-3	
土壙 270-1 層	16			69	12	7			2	13	31	8		4					310	7	479	472	1650 年代	
土壙 183-4 層	89			8	31			1		23	4	3		2	8	1			167	8	345	337	大窯 4～連房 1-2	
土壙 330	75			175	74	5		4		100	9	25		1	6		5		872	90	1441	1351	連房 1-4 まで	
焼土 152-2 層	6			59		9			10	5	6	6	1				10		16	26	154	128	宝永大火焼土層	
焼土 152-3 層	5			28	9			6		16	19			1			1		96	7	188	181	宝永大火焼土層	
土壙 44B	1			99	1				41		5	19		2			1		34	9	212	203	宝永大火～天明大火	
土壙 52A	2			195	4				30		119	14		4					35	9	412	403	宝永大火～天明大火	
土壙 52B	2	2		271	6				79		114	71					4		82	7	638	631	宝永大火～天明大火	
竈 118	2			596					66						48				5	717	717		宝永大火～天明大火	
2区土壙 14	4	5		153	20		3		204	5	17	2	9		5		2		198	14	641	627	天明大火直後か?	
2区土壙 21	1			49	4				52	1		2			2						112	112	天明大火直後か?	
井戸 14	5	26	8	148	14		21		321	3	64		12		7		5	11	171	40	856	816	元治大火直前	
土壙 63	1	3	18	47	2			2	74			1	6						19	2	175	173	元治大火直前	
土壙 4	3	4	4	79				3	51	2	14		7						15	9	15	206	191	元治大火直後
土壙 44A	2	4	55	210	10		33		535		6		45				5	1	163	26	1095	1069	元治大火後	
合計	302	44	85	2240	317	21	57	16	1465	180	456	160	80	3	116	1	39	27	2952	285	8827	8552		

※ 連房とは瀬戸陶器編年による。破片数の計測に際しては、(財)瀬戸市埋蔵文化財センター藤沢良裕・金子健一両氏の協力を得た。

宝永大火：宝永元年（1708）天明大火：天明八年（1788）元治大火：元治元年（1864）

に対し、他の遺構では信楽が主要で、土師器・瓦器についても出土数の過半数を占めている。しかし宝永の火災層以降肥前磁器がより盛行する中で、京都・信楽陶器、備前、堺・明石が増加する反面、丹波、土師器・瓦器が減少する。天明八年（1788）の大火を挟んで京都・信楽の土瓶・行平などの煮炊き具など日常容器が多様になると共に数量も増加し、磁器も肥前だけではなく関西、瀬戸などの製品も目立つようになる。それが元治元年（1864）前後にはより顕著なものとしてみられるようになる。

3区南端に近い土壙 1151 から、鞆羽口・焼台・鏡鑄型といった鑄造に関連する遺物がまとまって出土した。伴出した土師器片・陶器片の特徴から、これらの年代は18世紀前後と考えられる。鞆羽口は外部先端に銅滓が厚く付着しており、かなり使い込んだようである。大きさは、他の遺構から出土したものを参考にすると、径 8.1（内径 4.5）cm 前後、長さ 16.5cm 程度と思われる。屏風と考えられる破片もある。焼台は三角柱の形状を示しており、一辺 7.0cm、長さ 22.5cm を測る。高熱を受けて胎土も非常に固く、その色調は灰色を呈している。鏡鑄型はおよそ 20 個体以上ある。復原可能なものは 8 点である。いずれも楕型の形状を示しており、いわゆる柄鏡を製造するための鑄型である。復原できた鑄型の大きさは、長軸 31.0～53.5cm、短軸 20.8～42.0cm、厚さ 23.3cm を測る。鑄型は粘土にスサを混入して成型し、それに籠状の道具で格子目を施し、さらに真土を貼り付けて仕上げる。熱を受けて変色した部分から、面径 15.0～33.6cm、総長 25.0～47.4cm の鏡であったと推定できる。最大のものは伝世品と比べても、最大級に属する。溶銅を流し込む湯口は、同じく熱を受けた痕跡から長軸に対して鏡面の横にあった形跡がある。各々の鑄型は両面が変色しているため、何枚かを重ね合わせて一度の鑄込みで数枚の鏡を製作していたようである。中には鑄損じたためか、銅が付着したのものも出土している。鏡ができ上がり、型から離す際、

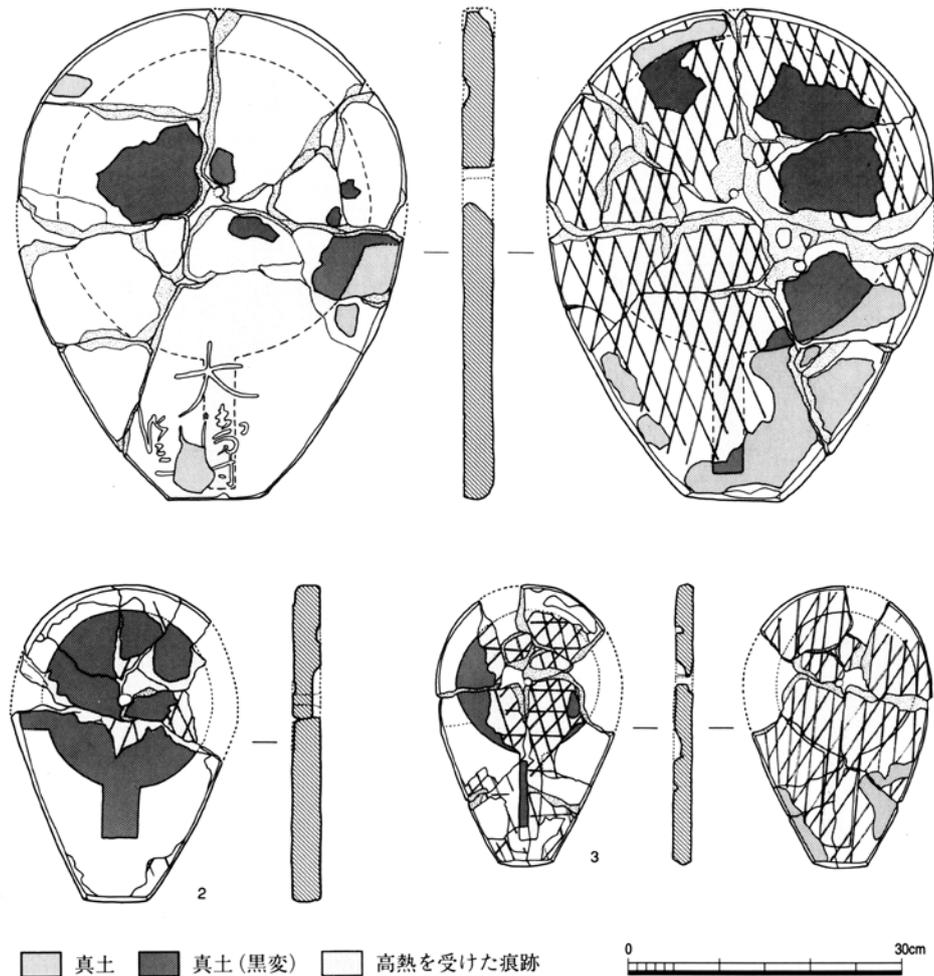


図12 3区土壙1151出土鏡鑄型実測図(1:4)

鏡背の文様鑄型は完全に壊れたようである。そのため同時に出土した文様鑄型の最も大きい破片は、一辺が1cm程度にとどまる。文様には、円・亀甲文・卍・植物の葉などがある。

また最も大きい鑄型の片面からは、窠書き文字が判明した。文字は2行にわたり「大衛カ□/□□」で、1行目最後の文字は真土に被われている。窠書きのある鑄型片は他に2点ある。

小結 左京二条四坊十一町北端の宅地状況および大炊御門大路とその南側溝の変遷を平安時代初頭から江戸時代後期にいたる各時代ごとにたどることができた。大炊御門大路南側溝は10世紀後半まで当初の位置を踏襲しているが、それ以降は部分的な開削と位置のズレが認められるようになる。路面部では2時期の整地があり、中期に地鎮などに関する祭祀を経て、後期には2箇所東西方向の柱列や井戸がみられ、生活空間が路面に拡大したことから巷所の現象と考えられる。宅地内では十一町を東西に二分する位置に南北溝が存続することから宅地割に変化がなかったことが予想される。ただ時期が下がるに従い北二門中央付近の各行ごとに1基ないし2基の井戸が東西に列状に並ぶことから、井戸の配置に何らかの規則性があったと考えられる。これ以外の遺構には掘立柱列や土器溜があるにすぎず、宅地内の利用状況は不明である。

室町時代になると大炊御門大路と宅地の状況が変化する。南側溝は十一町を東西に二分する位

置を境に規模・形状が異なり、両者は食い違った状況を呈する。東の東西溝 654 には規模・形状が共通する南北溝 1033 が交差するが、その位置は四行八門制と一致せず新たな宅地割りが形成される。ただこの南北溝と同様な溝 2137 が東西に二分する位置にあり、北端は北一・二門の境界で止まる。両溝の周囲には掘立柱建物や各種の遺構があり、全体として構えをもつ「館」が想定できる。

桃山時代以降では、町屋が 19 軒ほど復原でき、大名屋敷との境界施設も明らかにした。これらは江戸時代を通じて少なくとも 4 時期の変遷をたどることができる。町屋では内部から鏡や刀装具の鋳型が出土したことから鏡師を始めとする細工師が居住した可能性がある。しかも出土遺物の時期が後期まで存続することは、江戸期を通じて、町屋規模や性格がほとんど変化しなかったことも明らかになった。その町屋建設の際基本となったのは、豊臣秀吉による天正地割りであるが、それが平安京の四行八門制と符合する点が多いことを確認できたのも調査成果といえる。

(堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広)

註 吉崎 伸「平安京左京二条四坊」『平成 4 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995



図 13 2区出土伊万里鼓形花器



図 14 1区竈 118 出土染付皿

4 平安京左京三条一坊・史跡旧二条離宮（図版1）

経過 調査対象地は、中京区二条城町内で現二条城南辺を東西に走る押小路通の道路上にあり、押小路通と神泉苑通の交差点の北西隣接地に位置する。押小路通のうち現二条城南辺部分は史跡旧二条離宮の範囲内であり、通りの南側には史跡神泉苑が位置している。現在建設中の地下鉄東西線の上に埋設管共同溝が同時に建設されることになった。今回の発掘調査は共同溝の出入り口建設に伴う事前の調査である。

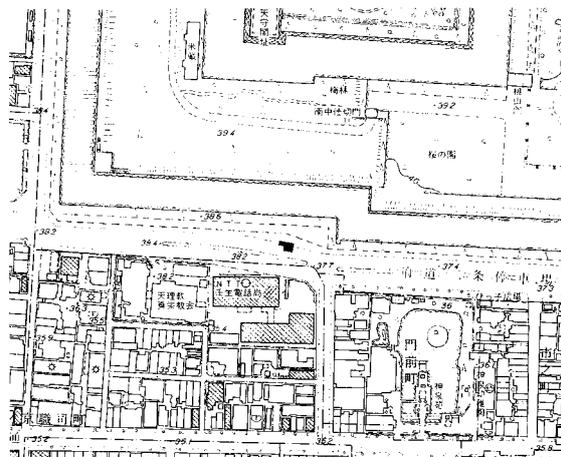


図15 調査位置図（1:5,000）

平安京においては、左京三条一坊九町内に位置するが、同町は東西2町、南北4町（計8町）の規模をもつ神泉苑の敷地内である。神泉苑に対する発掘調査は、平成2年度から地下鉄東西線建設に伴う発掘調査が3年間にわたり実施された。同調査は、路線工事幅に限定された東西方向に長い線状のトレンチ調査ではあったが、数多くの成果を上げている。園池の北岸や、池に流れ込む水路（遣水）、またその下層で池の前身とみられる縄文時代後期から晩期の自然の湿地、加えて神泉苑の東西の築地などを検出しており、園池の成立基盤や苑内の様相の一端を明らかにしている。

今回の発掘調査は、両史跡の遺構検出を主な課題とするものである。神泉苑関係については調査位置などから、池の汀に建つ西釣台あるいはそれにとり付く廊などの施設の検出が期待された。

遺構 地山（自然堆積層）上面は、調査区西張出し地区では比高差0.2～0.3mほど高くなる。自然地形の名残りともみられ、低い中央から東部地区では人為的な平坦面を形成している。周辺の調査結果から平安時代以降の神泉苑の遺構面ともみられよう。地山は砂礫層で、湧水が激しく、遺

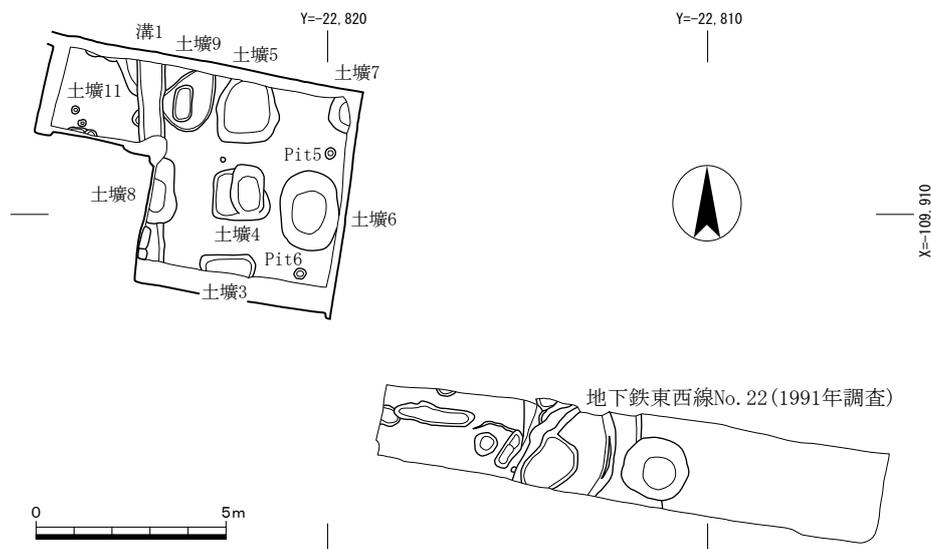


図16 遺構平面図（1:200）

物は出土していない。

溝1や土壙3～11、Pit 5・6など近世初頭およびそれ以前の遺構は地山直上の遺構面で検出している。南北方向の溝1は平安京の条坊ラインにのるが、出土遺物からみて神泉苑に直接関連する遺構ではない。

積土層とした土層は、桃山時代から江戸時代初頭の茶灰色泥砂層上面に厚く積み上げられた土層である。二条城の築造に伴う、周辺整備の土層と理解している。江戸時代の押小路通の路面2は、この積土層上面に直接形成されている。路面は小礫と泥砂、砂質土によって造られており全体が非常に固く締まっていた。上面には砂が薄く敷かれている。一部修復などが行われた部分があるが、初期に形成された路面が長期間にわたり使用されていたようである。路面1は路面2の上面に基礎土とみられる暗茶褐色泥砂層を入れて、その上面に新たに形成されている。成形方法や状態は路面2に共通する。幕末あるいは明治時代初頭の時期に再築された路面とみている。路面1の上面の土層は現代のアスファルト道路の基礎土である。当調査地内では側溝や柵列などは検出していない。

遺物 当調査地では、断割地区からも平安時代より古い時期の遺物は出土しなかった。平安時代以降も、左京域では例外的といえる限定された時期の遺物が出土している。

平安時代の遺物は緑釉瓦を含む瓦類が主であり、土器、陶磁器の食器類、煮沸容器、貯蔵容器などは少量が出土したにとどまる。特に平安時代前期から中期に比定できる土器、陶磁器類はほとんど出土していない。また平安時代の遺物は瓦類を含みほぼすべてが新しい時期の層、遺構への混入品としての出土である。

鎌倉時代から室町時代の中世の遺物は、混入品としてもほとんどみられず、室町時代末期のものが少量出土したにとどまる。このような平安時代から中世遺物の出土状況は、当調査地が神泉苑内でも池に近い庭園の中心地域に位置しており、苑が衰微した中世においても都市域へは転化しなかった結果、生活用具である土器、陶磁器の出土がほとんどみられないものと理解できる。

桃山時代以降の近世から近代の遺物は比較的多数出土しているが、二条城築造直前頃と江戸時代後期から明治時代初頭頃の2時期のものが中心である。前者は二条城築造に伴う厚い積土層下層の桃山時代の遺構からも出土している。聚楽第築造に関連した当地域の利用、あるいはそれに伴う当地の市街地化を示す遺物であると推測される。江戸時代前期から中期の遺物が少ない理由については、やはり管理のいきとどいた道路内となる結果と理解できるが、後期の遺物の出土量が多い点には別の解釈が必要である。後期の遺物は、路面1の基礎土である整地土層から出土しているものがほとんどである。二条城周辺をも含む江戸時代後期の大火などで出た多量の瓦礫を整地土層に混ぜて処理した可能性も考えられる。

以降、現在まで道路としての利用が継続しており、明治時代以後の遺物の出土量は少ない。

小結 今回実施した調査では当初期待した神泉苑関係の遺構は検出することができなかった。しかし、遺構面やその上層の様相は、神泉苑の遺構を検出している東西線関係の各調査地に連続する共通したものであった。二条城関連の道路遺構はほぼ全面で検出している。神泉苑の遺構面

の残存状況は決して悪いものではなく、西釣台あるいは廊は近接地に遺構が遺存している可能性が高い。しかしこの地域は押小路通でも現代の埋設管が錯綜するところであり、地下鉄東西線関係の調査でも、道路内での遺構の確認は難しかった。今後は調査方法も再考してより精密な調査が必要と考える。

(小森俊寛・上村憲章)

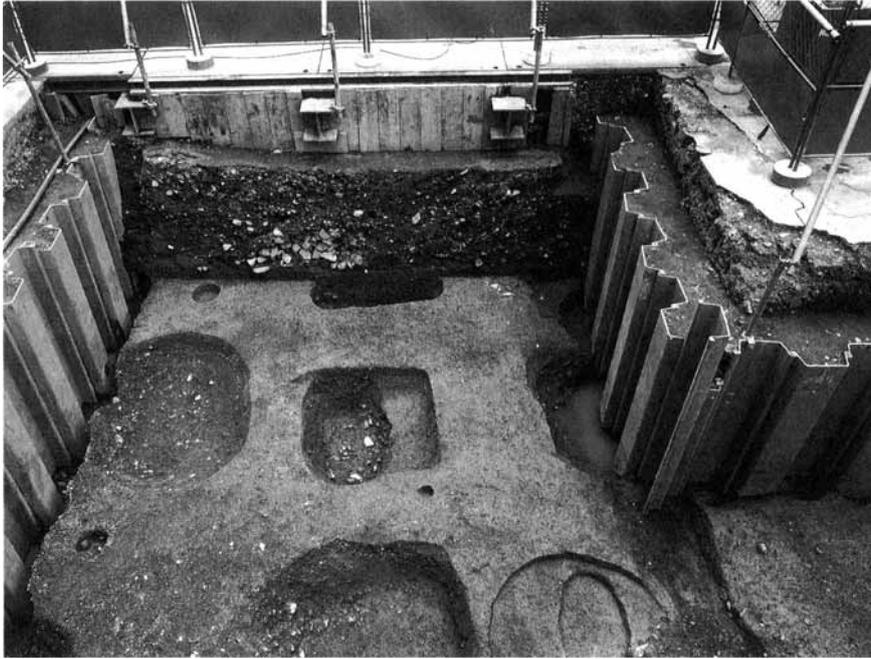


図 17 平安時代から桃山時代全景（北から）

5 平安京左京三条二坊・堀河院跡 (図版1・10)

経過 地下鉄東西線の堀川駅出入口建設に伴う発掘調査である。地下鉄東西線関係の京域内における発掘調査としては最終調査となる。調査対象地は御池、堀川通交差点の北東角から北へ約50m上る東側に位置する。東堀川通に西面し、東隣は京都市立城巽中学校であり、現住所は中京区押堀町地内である。敷地は370㎡の大きさで、北部が東へ張り出すかぎ形を呈する。ほぼ中央部に城巽中学校の東堀川通への細い避難用通路が東西に走るため、敷地が二分される

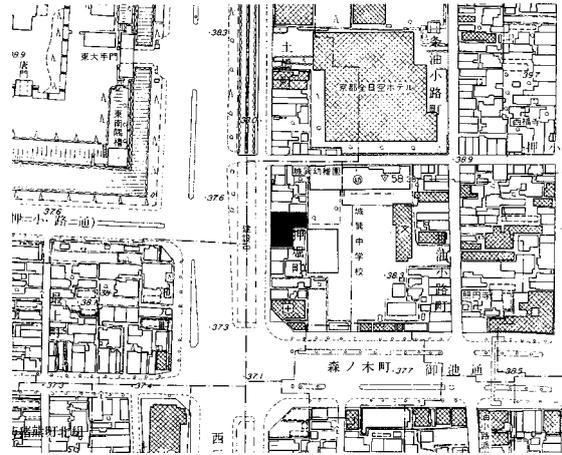


図18 調査位置図 (1:5,000)

結果となった。発掘調査に先立ち京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施している。試掘は敷地の北部と南部に東西方向のトレンチを設けて調査を行い、両トレンチの西辺部で平安時代の堀川河道と推定した南北方向の溝状の遺構などを確認している。この結果、発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、平安時代においては左京三条二坊十町の西辺北部で、敷地の中央付近には同町西築地ラインが走ると推定される。十町および北隣の九町は2町規模の大邸宅である堀河院の推定地であり、昭和58年度の九町・十町内の調査^{註1}では庭園跡などが検出されている。調査地は堀河院の西端に位置する。堀河院に関連する遺構の検出も期待される場所である。

発掘調査は前述した通路を挟み、北部と南部にそれぞれ調査区を設定し、北側を北グリッド(北G)、南側を南グリッド(南G)とした。

遺構 調査区のほぼ全域に江戸時代後期以後の規模の大きな遺構がみられ、地山にまで達し切りあって検出される。この時期の大型の遺構は土取りと瓦礫処理をかねたものが多く、焼けた瓦類、焼土が、埋土の主体となっている。西部には室町時代後期の大きな南北方向の溝があり、それより古い時代の遺構の残存状況は非常に悪い。しかし残存する遺構や混入して出土した遺物からみると、当地は平安時代前期から継続した土地利用が行われてきたことは明確である。残存する遺構から、平安時代後期に土地利用が大きくかわり、また室町時代後期にも大きな変化があったとみられる。近世に入って以降は、稠密な都市域の一角となったようである。今回の調査で注目される遺構は、溝1とした調査区の西部を南北に走る大きな規模の溝である。東肩部は北Gから南G全域で検出しており、それぞれ北と南の調査区外へ延びている。西肩は調査区内では検出できなかったため溝幅は明らかではないが、調査区西壁から東肩部まで4m以上を測り、深さは肩部から1.8m以上である。濠か川の規模をもつものである。溝1の東側壁は40°前後の傾斜面をなし平坦な底部へといたっている。肩部から0.7mほど下がったあたりに段が付きそこに石組みが構築されており、側壁上部から肩部は護岸されている。北Gの北端部では石組みは残存して

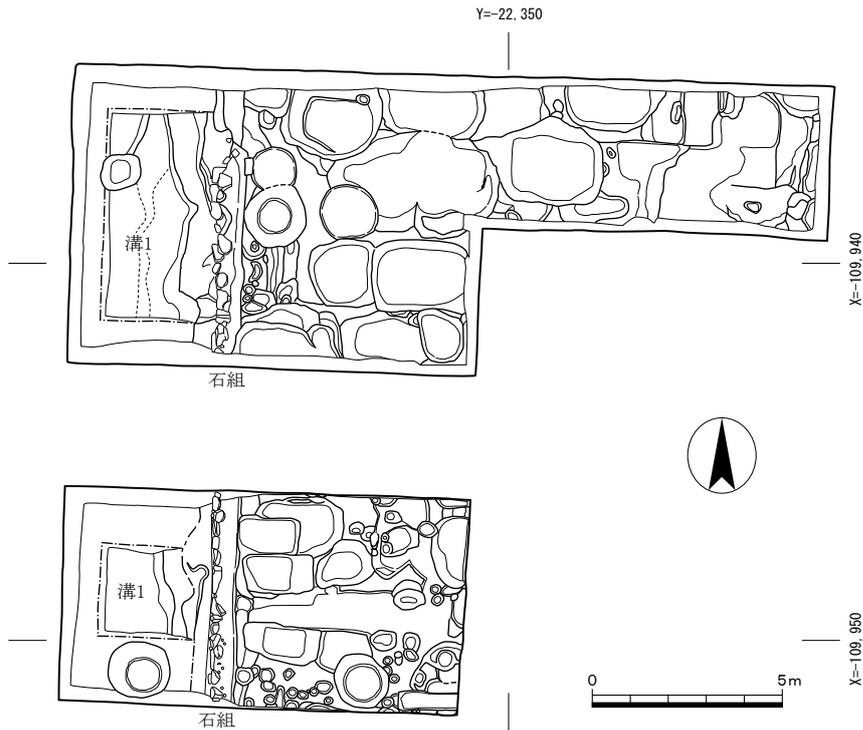


図19 遺構平面図 (1:200)

いなかった。石組みは一段しか残存しない部分が多いが、一部で二段残存しており、本来は二段程度の石組みであったとみられる。石材の使用方法は、石の長軸を縦方向に使っており不安定な印象が強い。石材不足対策と急造が原因とも推察される。類似した石材の使用方法は、平成4年度に発掘調査された松ヶ崎城^{註2}とも推定される遺構の石組みにみられ

る。溝1内の各堆積土層からは土器、陶磁器類などの遺物が出土しているが、最下層から最上層出土のものでも大きな型式差はみられない。16世紀前葉（平安京X期古）に比定できる型式幅に収まるものが中心である。中層以上では一時期新しい16世紀中葉（平安京X期中）に属するとみられるものを含んでおり、完全な埋没は16世紀半ば近くまでの時間幅をみておく必要はある。石組み掘形の出土遺物も平安京X期古に比定できるものが主体である。出土遺物の年代観からは、この溝1は室町時代後半の16世紀代前葉には開削され、護岸されている。その後短期間の使用後、16世紀半ばまでには完全に埋没し姿を消している。なお、東肩のラインは平安時代の堀川小路東側溝ラインにほぼ重なっている。

遺物 平安時代から室町時代前半代までは遺構の残存状況を反映し、まとまった出土遺物は比較的少ない。全体的に出土量も少ない。平安時代に比定できる遺物は、同期の遺構からの出土遺物よりも新しい時代の層、遺構への混入品として出土したものが多くようである。出土遺物の内容は、土器・陶磁器類では各時期を通じて都市域の遺跡から出土する一般的といえる生活什器が主体である。溝1から出土している少量の木製品も箸、漆器碗などがある。出土量は室町時代後半期には増加傾向が認められ、近世に入ると飛躍的に増加しており、土地利用密度の高まりを端的に反映しているものと理解される。

小結 平安時代から室町時代前半代までは、遺構の残存状況も悪く、各時代の遺跡の様相を明確に知ることは難しい。しかし、残存状況や混入して出土している遺物を見るかぎりでは、当地は平安時代前期から近代まで途切れることなく土地利用は継続している。最も稠密な土地利用が行われるようになるのは近世に入って以降である。

試掘調査で平安時代の堀川の河道と推測されていた溝1は、室町時代後半代の遺構であることが明らかとなった。この溝1の性格については、堀川の一部との推測が有力であるが、東肩の北延長ラインを含む既調査では同様の遺構は検出されていない。堀川の一部とすればこの調査区を含む一定区間が何らかの目的で本来の堀川から拡張されて築造されたものとみられよう。舟着き場などを想定するか、防御的性格を強化するための拡張とみるか、現状では判断が難しい。堀川の拡張部分か別遺構かの問題の解決を含め、今後の近隣地の調査が期待される。

(小森俊寛・上村憲章)

註1 菅田 薫・本 弥八郎・吉川義彦「左京三条二坊」『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985

註2 平尾政幸「松ヶ崎廃寺」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995



図20 溝1断面(北から)

6 平安京左京四条四坊 (図版1・11～14)

経過 今回の調査は京都市立高倉小学校新築工事に伴って実施した。調査地は、平安京左京四条四坊二町の中央部東寄りにあたる。平安時代はもとより、鎌倉時代から室町時代にかけても、調査地の周辺は「下京」を構成する市街地であったと推定されており、さらに江戸時代には織田信則、のちには伊予国松山藩の松平家の屋敷として幕末まで利用されたことがわかっている。明治5年(1872)以降は旧日彰小学校の運動場であった。

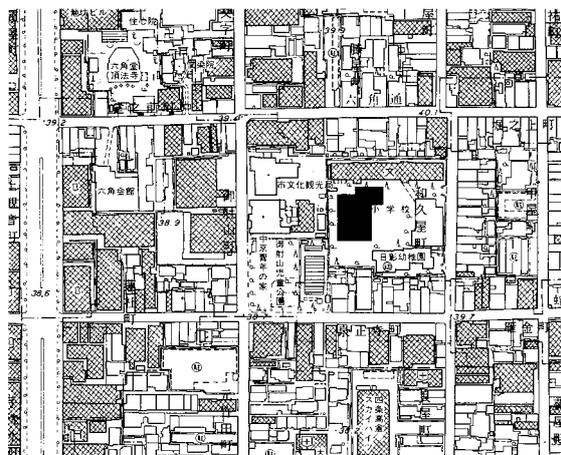


図21 調査位置図(1:5,000)

調査区は運動場西側に東西22m、南北32mで設定した。調査は、第1面は江戸時代中期から後期、第2面は桃山時代から江戸時代前期、第3面は室町時代後半、第4面は室町時代前半、第5面は平安時代から鎌倉時代として合計5面の記録をとった。途中、第3面の調査中に礎敷遺構を検出したため、北東部を東に8m、北に6m拡張している。また、高倉小路にかかわる遺構の検出を目的として、別に調査区を設定したが、敷地東端であったため面積が約9㎡と限られていたこと、また後世の攪乱が著しかったことから十分な成果をあげることはできなかった。

遺構 第1面の遺構には、柵・建物・溝・井戸・土壇・石室・柱穴がある。調査区の南部に東西方向に細長い大きな土壇が2基(土壇2・3)、中央部西側には南北方向の大きな土壇が1基(土壇1)ある。これらはそれぞれ京都を襲った二つの大火の後片づけをした穴で、前者は蛤御門の変(1864)の兵火、後者は天明の大火(1788)に対応する。土壇1を埋め立てて整地した部分では、1間×3間の建物や等間隔で並ぶ柱穴を確認した。いずれも掘立柱なので納屋のような建物があったと推定している。また、調査区西端では、南北方向に6間分の柵を検出している。井戸や石室も武家屋敷の生活を支えた施設だったのであろう。

第2面の遺構には柵・建物・溝・路地・土壇・柱穴がある。調査区の全域にわたって柱穴を検出した。柱穴には、礎石の上に柱を立てるもの、掘立柱で東西南北方向に並ぶもの、北が若干東に振れるものを3群確認した。これらは複雑に切りあっており、頻繁に建物の建て替えが行われたことがわかる。調査区北部では蔵の地業(土壇892)もみつまっている。また、調査区の中央部東側で、L字形をした路地の跡を発見した。東西方向の部分には両側に溝を造り、南北方向の部分には粘土を薄く貼りつけて路面を造り、西側に浅い溝と杭列で柵を設けている。柱穴の中にはこれに沿って並ぶものもあった。

第3面の遺構には建物・溝・土壇・柱穴・礎敷遺構がある。この遺構面でも調査区の全域に柱穴が分布する。すべてが掘立柱で、掘形の直径は約30～50cm、柱あたりの直径は約10～15cmであった。第2面に比べるとやや規模は小さい傾向にある。建物が密集して

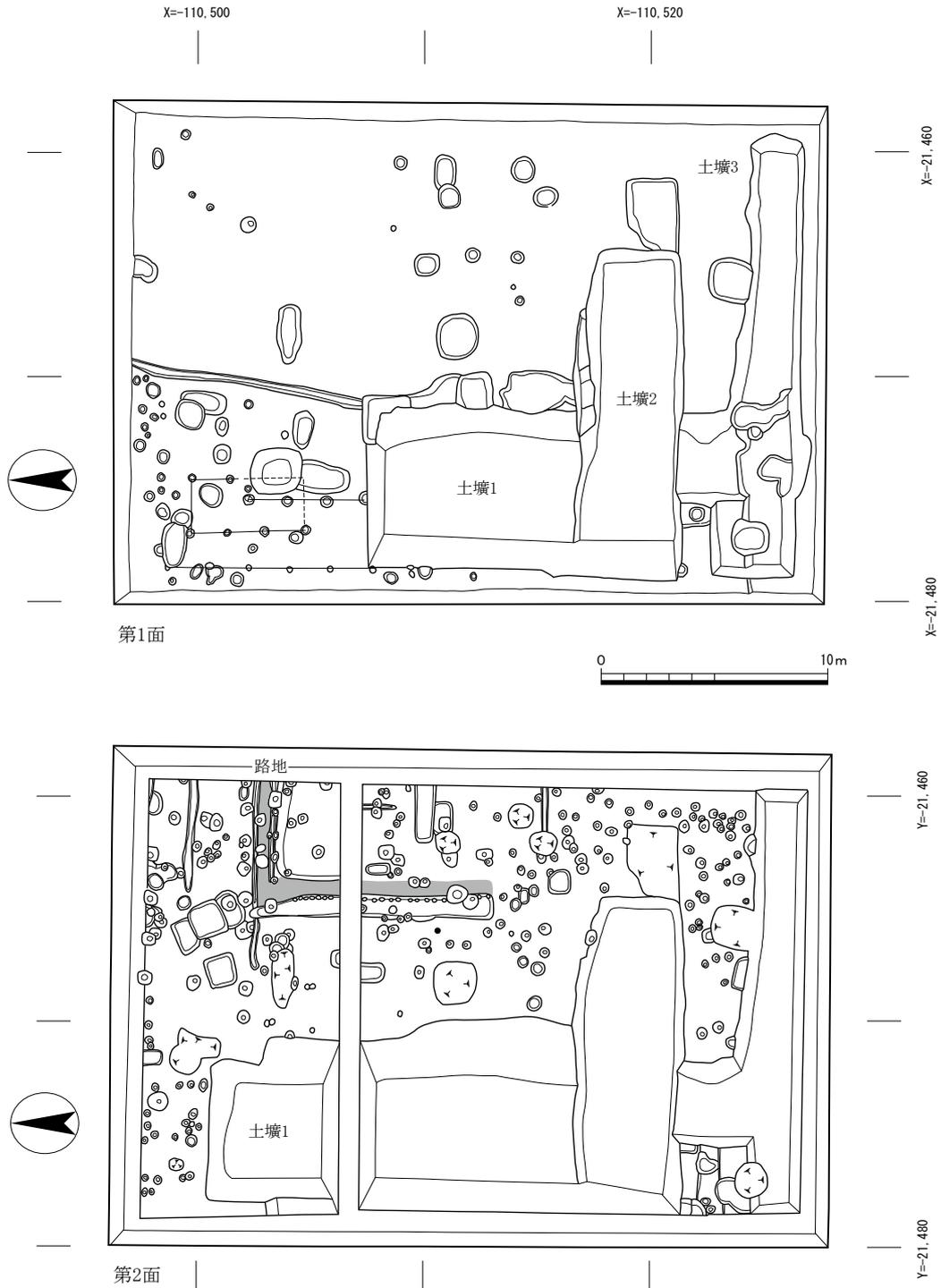


図22 第1・2面遺構平面図 (1:300)

建っていたことと頻繁に建て替えが行われていたことが推定できるが、建物の復原にはいたっていない。なお、この段階で、次に述べる礫敷遺構 600 の南西隅部分を検出したので、調査区北東部を拡張した。

第4面の遺構には建物・溝・井戸・土壇・柱穴・礫敷遺構がある。この時期は調査区の北部と中央部・南部で様相が異なる。まず、北部には全体に粗密はあるものの、拳大程度の大きさを中心とした川原石を敷き並べた礫敷遺構 600 が広がる。中央部が土壇状に盛り上がり、周囲には浅

く掘り下げた溝がめぐる。これがどのような施設であったのか断定できないが、建物の地業もしくは庭園の一部を候補として想定している。また、礫敷遺構の南側には土塁状の高まりも残っていることから、大きな敷地の屋敷の一郭が現れていると考えている。一方、調査区の中央部・南部では、第3面にも増して、たくさんの掘立柱の柱穴を検出した。柱穴の規模は第3面と同様である。この時期も建物の密集地であったことがわかる。これに加えて石組みの井戸 612・1000 やゴミを捨てたと考えられる大規模な土壙群も認めている。

第5面の遺構には溝・井戸・土壙・柱穴がある。調査区北部では東西溝 1127・南北溝 1115 を検出したが、大部分は礫敷遺構 600 により地山近くまで掘削されており、ほとんど遺構は残っていなかった。また、調査区中央部・南部は地山に達する大規模な土壙が複雑に切りあっている。埋土からは土師器の皿類が多く出土しており、ゴミを捨てるためだったのか大きな土壙が何度も掘り返されたことがわかった。その他の遺構には板組みの井戸が3基ある。柱穴はあまり検出できていない。これは攪乱が多かったことが原因として考えることができるが、あるいは建物自体の密度が希薄だったためかも知れない。

なお、平安時代をさかのぼる時代の遺構は、検出することができなかった。

遺物 出土遺物は整理箱で900箱にのぼる。江戸時代中期から後期の出土遺物には土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・甗・伏見人形・泥面子・埴埴・焼壁・漆塗椀・ガラス・日本刀・鉄釘・銅銭・丁銀・キセル・石灯籠・硯・碁石・骨・貝殻などがある。火災の後片付けをした土壙1～3の出土遺物が大部分を占める。陶磁器類では伊万里産の磁器、瀬戸・美濃産の陶器、京都産の陶器が多い。土壙1からは尾形乾山の作品と推定できる角皿が3点出土した。火災のためかなり損傷を受けているが、一部には緑色や茶色の色絵付けが残り、裏面には乾山の銘も読み取ることができる。また、多量に出土した屋根瓦には棟瓦も多く、かなり立派な瓦葺の建物があったと推定できる。他に日本刀や石灯籠の破片もあり、この地に営まれた武家屋敷の生活の一端をうかがうことができる。

桃山時代から江戸時代前期の出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・甗・銅銭などがある。この時期の遺物は、遺構がしっかりしているにもかかわらず、他の時期と比較するとかなり量が少ない。多くを土師器の皿類と焼締陶器の甕類が占めている。

室町時代後半の出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・甗・滑石製鍋・銅銭などがある。この時期より古くなると土師器の皿類が遺物の大部分を占める。焼締陶器の甕、瓦器の鍋がそれに次ぐ。遺物は調査区北部の礫敷遺構 600 の周辺を中心に出土した。柱穴からの出土遺物はほとんどが細片である。

室町時代前半の出土遺物には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器・瓦・銅銭がある。それぞれの遺物の割合は室町時代後半に近い。礫敷遺構 600 の周辺に加えて、調査区中央部の土壙群からも土師器の皿を中心に出土した。井戸からの遺物も多い。

平安時代から鎌倉時代の出土遺物には土師器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・焼締陶器・磁器・瓦・銅銭などがある。溝 1115・1127 および調査区中央部の土壙から多くの遺物が出土した。

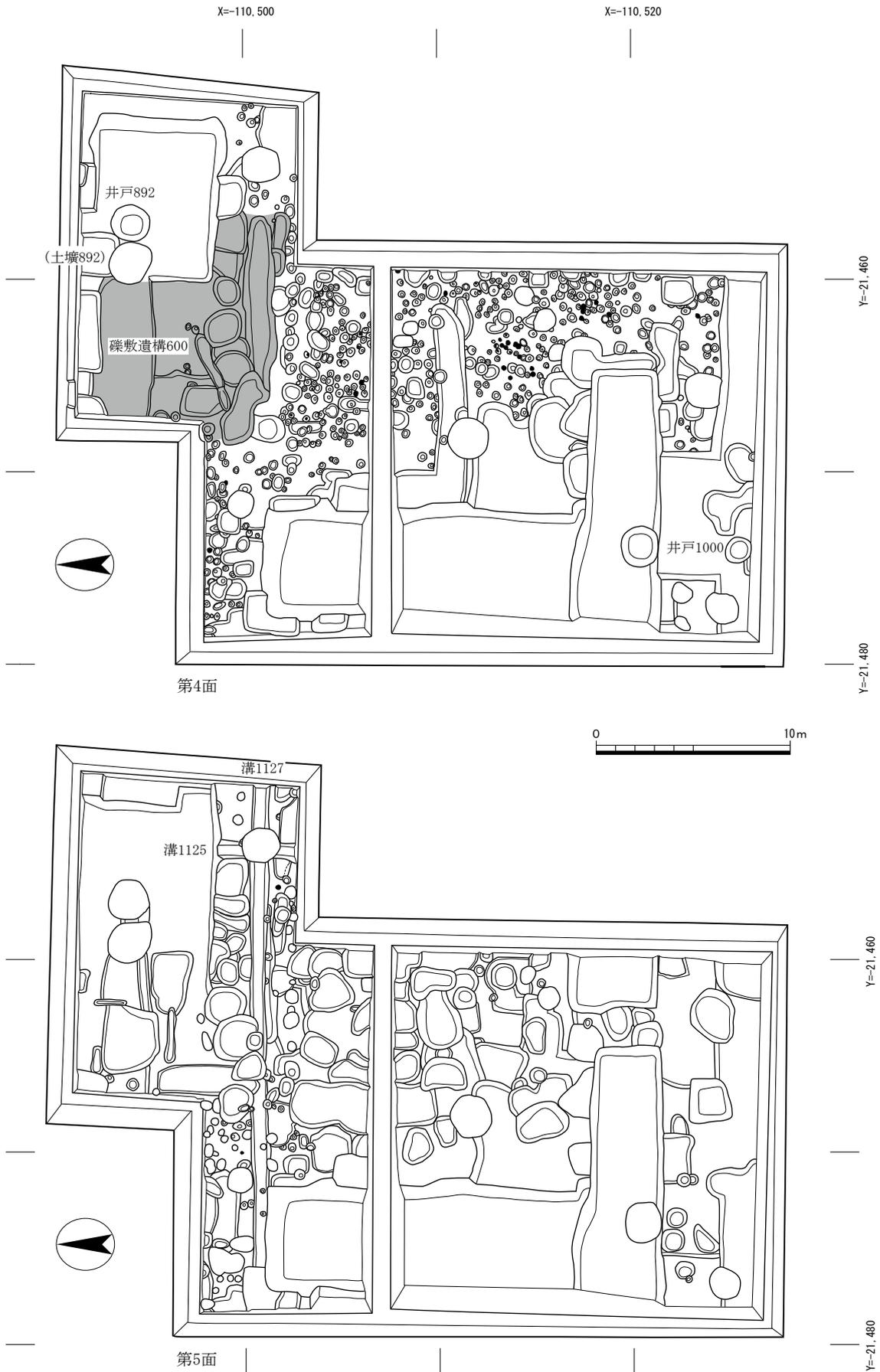


図23 第4・5面遺構平面図 (1:300)



図 24 土壙 892 出土磁州窯壺

井戸からの出土は少ない。他に中国から輸入した青磁や白磁の椀・壺、磁州窯産の掻き落とし手法で製作した大型の壺の破片もある。

平安時代中期をさかのぼる遺物も若干出土しているが、多くは後世の遺構に混入していたものである。下層の砂礫層には弥生土器の細片や古墳時代から飛鳥時代にかけての土師器・須恵器の破片が含まれているので、西側隣接地での調査成果と同様に近隣に当該期の集落があったことを示唆している。

小結 調査地は、平安京左京四条四坊二町にあたるが、平安時代中期をさかのぼるような遺構は確認できなかった。後世の遺構により破壊されたためか、あるいは遺構そのものが少なかったと考えられる。

この地が活況を呈するようになるのは、平安時代後期になってからである。以後、鎌倉時代にかけて、区画の溝 1115・1127 がとおり、近くにはゴミ捨て穴もみられる。さらに内側には井戸も掘られた。通りに面した宅地の裏側の空地に井戸やゴミ捨て穴が設けられたことがわかる。

室町時代になると、前代のゴミ捨て穴を埋めたてた整地層の上にも多数の柱を立てられた。表通りから 50 m も奥まったところにまで建物が建ち並ぶようになったと考えられる。調査区南部に建物が密集するのに対して、調査区北部に礫敷遺構 600 をともなった大きな区画が併存していることも、この時期の町並みを特徴づけている。

桃山時代になると、この地には大規模な整地が行われ、町並みが再編される。礫敷遺構 600 が埋没した上には、路地が設けられ、これに沿って 1 町の内部の建物も建て直されたと考えられる。

さらに、江戸時代には織田家のちに松平家の屋敷が建設された。屋敷は火災の被害を受けるたびに建て直されたようだが、最後は幕末の蛤御門の変にあたって焼け落ちてしまった。土壙 1～3 から出土した多量の遺物は、火災の激しさを示している。そして、屋敷の跡をそのまま利用して明治 5 年（1872）に小学校が開校するにいたった。

今回の調査では、遺跡の残り具合が劣悪な京都市内にあつては、例外的に数百年にわたる市街地の状況と人々の生活の痕跡をたどることができた。これはひとえに調査地が江戸時代は武家屋敷の裏の空地、明治以降は小学校の運動場として利用されたため、地下の遺構が破壊されずに済んだからである。今回の調査成果は平安京から中世都市・近世都市として変化していく京都の歴史を復原する作業の中で、重要な資料を得ることができた調査として評価できる。

なお、地山から旧日彰小学校運動場の土までの堆積状況を残すため、調査区の壁面を剥ぎ取った。その一部は調査終了後完成した高倉小学校の玄関に展示している。

（山本雅和・鈴木廣司）

7 平安京左京六条一坊 (図版1・15)

経過 本調査はJR丹波口周辺の再開発に伴うもので、対象地の日本タバコ産業跡地南部は平安京左京六条一坊二町に該当する。周辺の既往の調査では北側で、朱雀大路東側溝、樋口小路北側溝、坊条小路西側溝など、条坊関係の遺構を検出している。今回の対象地においても朱雀大路東側溝の存在が予想されたため、事前に敷地3箇所を試掘調査を行った。その結果、敷地東部の2箇所のトレンチでは後世の攪乱によって遺構面が破壊されていたが、最西部のト

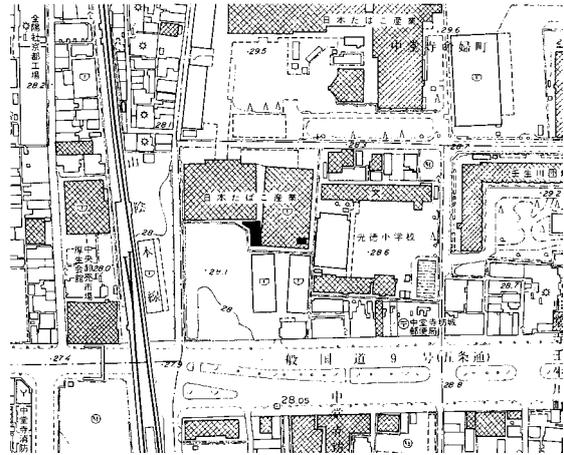


図25 調査位置図 (1:5,000)

レンチでは朱雀大路東側溝とみられる溝跡を検出した。そのため、このトレンチを拡張する形で調査区を設定して発掘調査を行い、2時期にわたる朱雀大路東側溝や井戸などを検出した。

遺構・遺物 朱雀大路東側溝は平安時代後期 (SD1) と鎌倉時代初頭 (SD2) の2時期のものを検出した。後者は西に移動している。調査範囲の制約から大部分が平安時代後期のものの東肩部を検出したにとどまった。井戸 (SE3) は堆積土中から部材の一部とみられる少量の木片が出土したが、構造は不明である。全体に出土遺物は少なく、朱雀大路東側溝から土器類や瓦が出土した以外は少量にとどまった。

小結 調査の結果、当初の予想通り朱雀大路東側溝を検出することができた。同側溝は今回調査した地区の北側にあたる一町南端部でも検出しているが、平安時代後期と鎌倉時代の2時期あり、後者が西に移動している点も一致している。しかし、鎌倉時代以降の朱雀大路に関する遺構は今回の調査でも検出できず、大路のその後の変遷は不明である。

(平尾政幸)

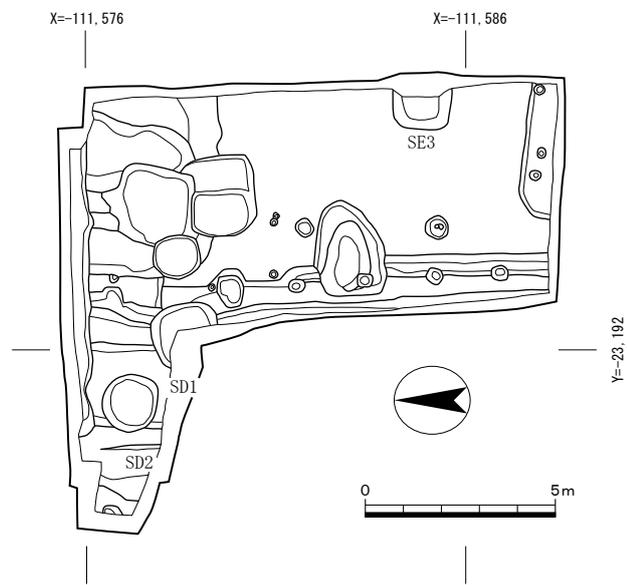


図26 遺構平面図 (1:200)

8 平安京左京八条三坊 (図版1・16)

経過 当調査地の周辺には、八条院御所が形成され、院の近臣や平氏一門の邸宅の存在が知られており、平安時代末期から中世の平安京を研究する上で重要な地域といえる。今回、JR京都駅建て替えに先立って試掘調査が行われた結果、遺構面が良好な形で残存していることが判明したため、建物計画地における発掘調査を継続的に行うこととなった。遺構が遺存していると推定される地域を選んで調査区を設定し、本年度は対象面積が約255㎡である1次調査を行った。

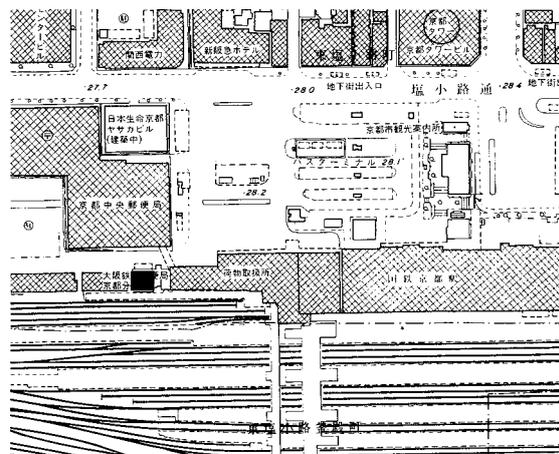


図27 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査区の基本的な層序は、現代地表から約1.0～1.5mまでが現代盛土層で、この下層現地表下2.1mまでが京都駅造成時の黄褐色山土層である。この山土層は、北側から順次運ばれているのが断面観察から知れる。山土層の下に薄い近世耕作土層がみられ、この耕作土層を取り除いて中世の遺構面となる。遺構は鎌倉時代末期から室町時代の遺構が中心である。

14世紀の遺構として、まず井戸群があげられる。上部構造が判明したものは、円形縦板組井戸が2基 (S E 31・67)、方形縦板組井戸が1基 (S E 69)、大甕井戸 (S E 72) がある。特に、S E 72は常滑の大甕を天地逆に据えて底部を抜いた構造の井戸で、井戸底には方形枡を組んでいた。また、底部曲物のみが残存する井戸を4基 (S E 68・73・74・160) 確認している。この他の遺構として東西溝S D 153がある。S E 31の東に連なる溝で、S E 69はこの溝に切られているようである。

15世紀の遺構としては、屋敷地を区画すると考えられる溝が検出できた。下層から「へそ皿」片が出土しており、遺構の時期を推定することができる。S D 65・66は調査区西半で検出したL字状に曲がる一連の溝で、幅約1.5m、深さ0.4m程である。S D 70・71はS D 65・66の東で対称的に検出した溝であるが、S D 65が調査区よりさらに北側に延びるのに対し、S D 71は途中で途切れている。S D 65とS D 71の間隔は約3.5mで、その間に鋳型などの鋳造関係遺物を包含した土壙 (S K 76) がある。なお、S D 70とS D 66は幅0.5m程の小溝 (S D 75) で結ばれており、S D 70でオーバーフローした水がS D 65に流れ込む構造になっていたものと考えられる。恐らく、S D 75は暗渠構造になっていたのであろう。

遺物 遺物は、整理箱にして64箱分が出土している。ほとんどが土器類で、瓦類は少数である。中世の遺物は、14世紀の井戸群から多数出土している。ほとんどが土師器皿で、S E 67では大小の皿が重なるように出土している。また、羽釜類も多く、日常生活で使用した雑器類と考えられよう。この他、常滑産と考えられる大甕の破片が多く出土しており、これらの甕の破片には漆が付着しているものが多数

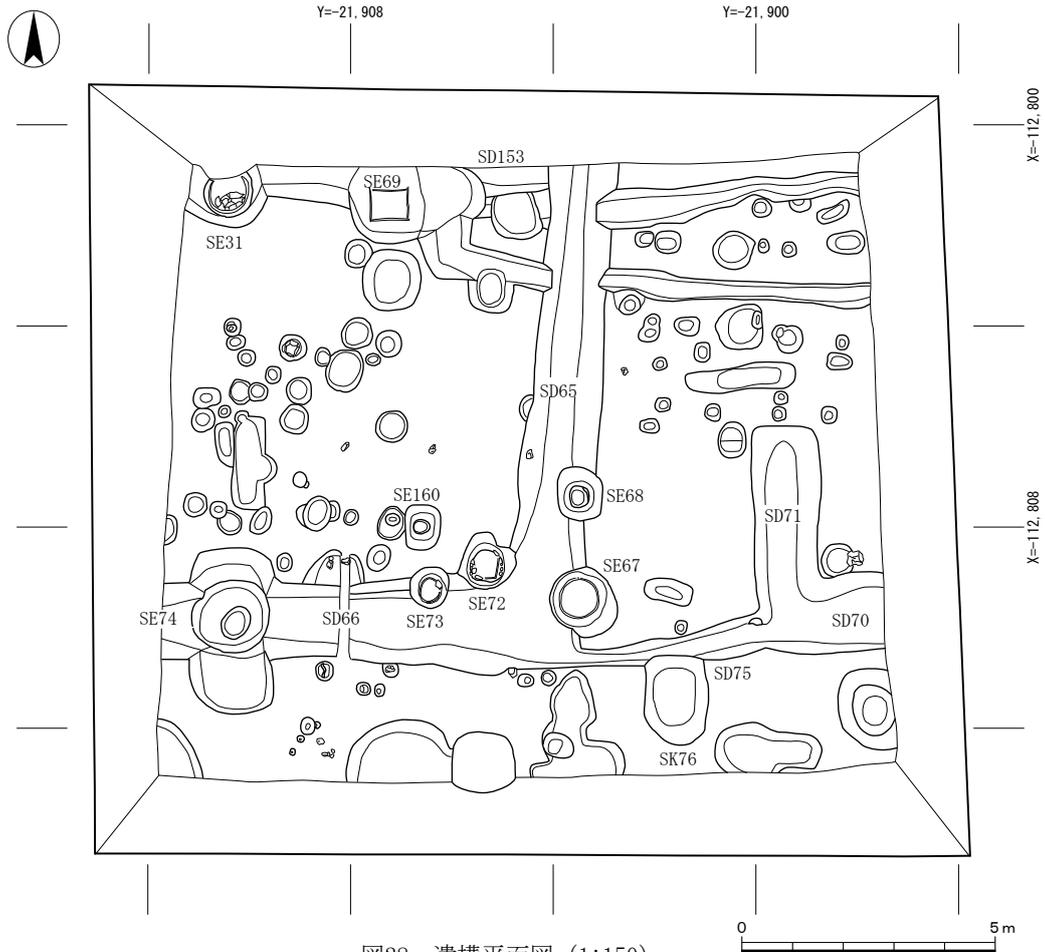


図28 遺構平面図 (1:150)

あった。また、SD 153からは漆が付着した骨製品の筍が出土している。この他、SK 76から仏器と考えられる六器や華瓶などの鋳型片や埴塼片が数多く出土している。鋳造関係の遺構は検出できなかったが、調査地周辺で金物の製作が行われていたことは間違いなく、中世における八条院町との関係を検討する必要がある。

小結 八条院町の成立は、平安時代末期に八条女院御所の家政機関が周辺に形成されたのに端を発する。これらの所領は、正和二年(1313)12月に東寺に「院町十三箇所」として施入されるが、その6年後の元応元年(1319)6月の『八条院町年貢帳』では、室町小路に西面する六町七戸主地に27人もの請人が登録されており、この中には番匠・箔屋・椀屋・塗師・金屋などの手工業者がみられる。古代的な貴族宅地が解体していく過程において、御倉などに所属していた手工業者などが中世的「町」の町人として変質発展していったことが知れよう。今回の調査で検出できた多数の井戸群や溝は、中世八条院町の町人の生活の痕跡として充分理解できる。特に、鋳型片が多数出土していることや漆が付着した常滑大甕の出土は、院町における金屋あるいは塗師の存在を裏付けるものであり、中世京都の町の発展を考古学的に検証する重要な資料となるものである。これから当調査地の東側で継続的に調査が予定されているが、これらの調査予定地はまさに八条女院の院庁跡あるいは御倉などに比定できる地域である。中世八条院町の実態を明らかにする上で、これからの調査成果が期待できる。(網 伸也)

9 平安京左京九条二坊 (図版1・17)

経過 調査地は東隣が西洞院通、西隣が前年度に調査した6次調査区と接する旧テニスコートである。本次調査は、6次調査同様に調査区南半で針小路、東側には西洞院大路西築地が想定できる平安京左京九条二坊十六町にあたる。

遺構 調査区の基本層序は、上から盛土層が1.4～1.5 m、黒褐色泥土層 (10YR3/2) 旧耕作土層、黒褐色泥土層 (10YR3/1)、黒褐色泥土層 (2.5Y3/2) の順で堆積し、それぞれ10～15cmの厚さをもつ。これらの層は近世の堆積層と考えられる。遺構のベースとなるのは砂礫層であり、西から東に向けて緩やかに傾斜する。

近世から近代にかけての主な遺構は、多数の暗渠および溝群がある。これらは座標軸に対してほぼ平行あるいは直角に走り、多量の茶椀類を含む。

中世の遺構は、2条の東西方向の溝、井戸、柱穴、土壇などがある。

溝 S D 60 は検出面での幅約 1.9 m、深さ約 0.2 m を測る。溝 S D 174 は検出面での幅約 0.5 m、深さ約 0.2 m を測る東西溝である。これらの溝は針小路北築地推定ラインから北約 1.2 m に平行して検出した。井戸は計 19 基検出している。石組井戸 1 基、方形縦板組井戸 10 基、曲物のみ残すもの 3 基、その他部材は腐食するが方形縦板組井戸と推定できるものが 5 基ある。また、方形縦板組井戸のうち、曲物を底に置く井戸が 4 基ある。そのほか、埋没時の状況では、多量の拳大の礫を投棄するもの、多量の土器類を投棄するものなどがある。

多数の柱穴・土壇を検出したが、建物としての並びを確認することはできなかった。

遺物 出土遺物の多くは、土師器・陶器などの土器類で、瓦およびその他の遺物は少ない。平安時代後期から鎌倉時代の遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、銭貨、滑石製品などがある。また、ベース砂礫層中より磨滅した古墳時代の須恵器、埴輪片が出土している。

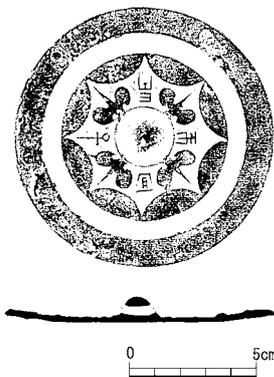


図 30 内行花文鏡実測図 (1:3)

近世から現代の攪乱および遺構処理中に、銅鏡 1 面が発見された。近世末から近代の土壇 S K 52 底面から出土したもので、土壇底部の砂礫層上に文様面を上にした状態であった。鏡は「^{ちょうせいぎし}長生宜子蝙蝠座内行花文鏡」で、直径 10.7cm、わずかに面に反りをもつ鏡面から内傾して背面へと続く。外縁は素圏で厚さ約 0.2cm、幅約 1.1cm あり内側にかかるく傾斜する。素文の約 0.7cm の溝を経て内区となる。鈕座は約 0.8cm の高さがあり、径 2.4cm の素平頂・素圏の円座から四方に四葉座をもつ。この座はいわゆる『蝙蝠座』で、花文は八花文である。四葉間に右回

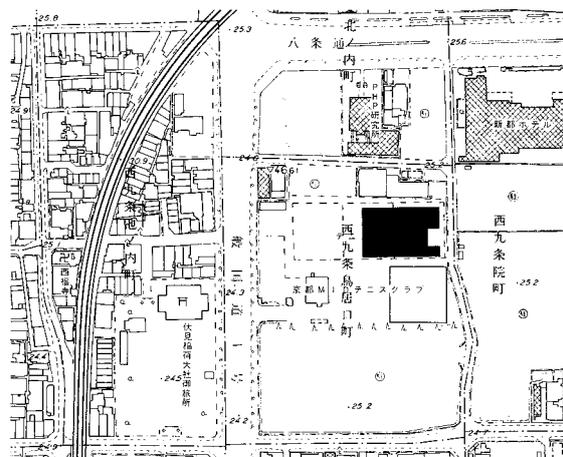


図 29 調査位置図 (1:5,000)

10 平安京右京三条一坊 1 (図版1・18-1)

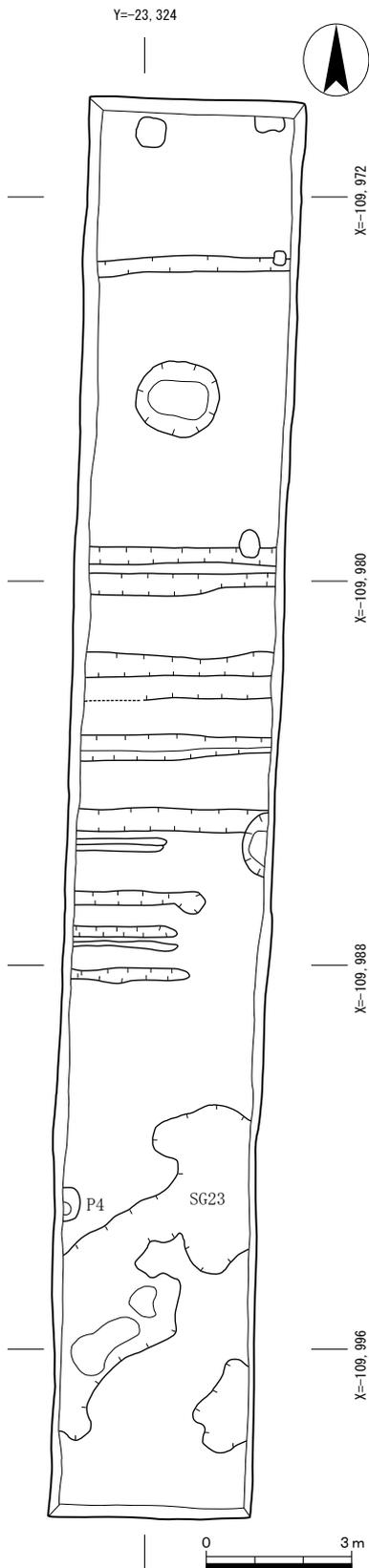


図32 遺構平面図 (1:150)

経過 調査地は、二条駅再開発工事に関連しJR線と地下鉄線の交差する地区の南西側にあたる。その内の高架部から北向きに地下鉄に入る地下歩道予定地(約60m南北方向)の南半部の28m、幅4mを調査した。(図34 調査位置図)

遺構 最も古い時代の遺構は、鎌倉時代のSG23とP4であった。他はすべて江戸時代以降に属している。SG23は、南へ向かうほど深くなる湿地堆積で、上層(灰白色泥土層)、下層(灰色泥土層)に分かれており、この中間に2cmの灰層が挟まっていた。下層には主に瓦器片、布目瓦片が含まれていた。P4は柱穴で、径74cm、深さ45cm、柱あたりは約40cmを測る。検出できたのは、SG23の下であったため、鎌倉時代以前の時期に属している。これに対応する柱穴は調査範囲内にはなかった。東西方向に平行して走る溝は、いずれも布目瓦片を含むが、江戸時代から近代に掘られた湿気抜き溝と考えている。

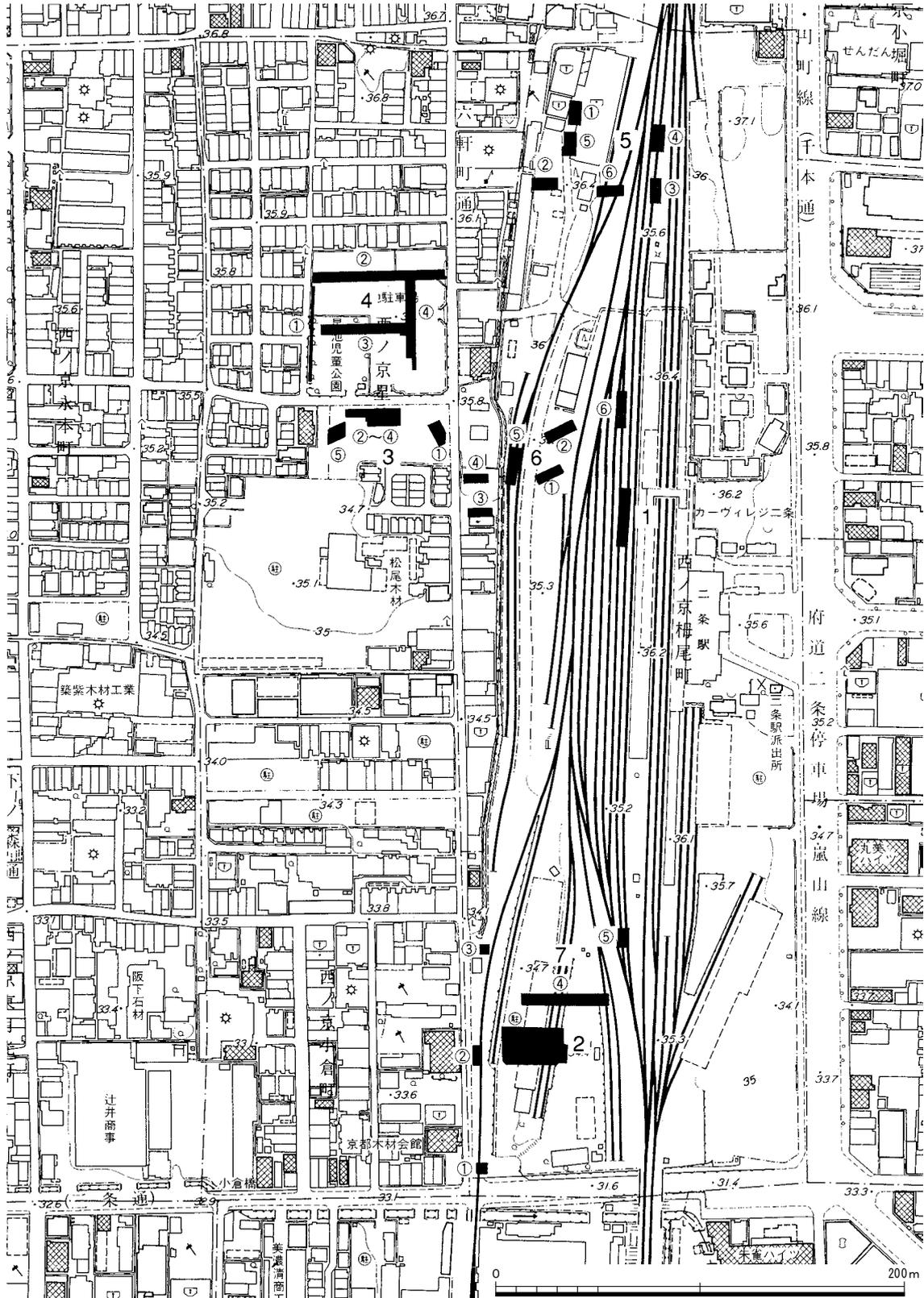
遺物 弥生土器(中期)の破片は、試掘調査で出土した以外では広く点在していた。平安時代は、瓦類が多く出土したが、軒瓦は蓮華文軒丸瓦(前期)、唐草文軒平瓦(中期)の2点のみであった。鎌倉時代のものは、瓦器碗片、土師皿片、青白磁小壺などである。

小結 立会調査の成果を受け、弥生時代の遺構や平安時代の遺構を追究したが、江戸期のものがほとんどで、わずかに鎌倉時代以前の柱穴を確認したにすぎない。しかし遺構の遺存状態は南側地区で良好であることが判明した。

(吉村正親)



図33 P4 (東から)



- | | | | | | |
|---|---------|------------|---|--------|------------|
| 1 | 第1章Ⅱ-10 | 平安京右京三条一坊1 | 5 | 第2章Ⅱ-3 | 平安京右京三条一坊5 |
| 2 | 〃 | 11 | 〃 | 2 | 6 |
| 3 | 〃 | 12 | 〃 | 3 | 7 |
| 4 | 〃 | 13 | 〃 | 4 | |
- (○数字は調査区番号)

図34 調査位置図(1:3,000)

11 平安京右京三条一坊2 (図版1・18 - 2・19)

経過 調査地は平安京右京三条一坊四町にあたり、資料によれば貴族官人の邸宅である竈殿に比定される。

ここに二条駅地区土地区画整理事業により集合住宅が建設されることになり、平成5年(1993)7月19日から10日間遺構の有無を確認する試掘調査を実施し、平安時代の遺物を多量に包含する池状遺構を検出した。この試掘調査をふまえて発掘調査を実施することとなった。調査地のうち東半は地下5m以上まですでに既存建物の地下構造物があったため、西半部に東西27.5m、南北20mの調査区を設定し、平成5年(1993)8月24日より調査を実施した。(図34 調査位置図)

遺構 調査区の基本層序は、現地地表下100～150cmまで旧国鉄時代の石炭ガラの盛土層であり、以下20～40cmまで近世以降の旧耕作土層、5～10cmの灰黄褐色泥砂層(床土)、浅黄橙色砂泥層もしくは灰色砂泥層の地山となる。なお、西壁沿には明黄褐色砂礫の遺物包含層が5～10cm程堆積している。

中・近世の遺構としては土壌・耕作に関連する小溝や土取穴などがある。

平安時代の遺構は掘立柱建物・柱穴・池状遺構・土壌などがある。掘立柱建物は柱穴の一部が重複しており2時期ある。柱穴は調査区南東部の浅黄橙色砂泥面で30基ほど検出したが、1町の南北中心線付近に集中する。しかし近世の土壌や土取穴による攪乱が多数あり、柱穴の並びなど対になるものは不明である。

池状遺構(S G 76)は調査区北半で検出したが、北側へ延びており全容は不明である。池内の埋土は黒褐色泥土層と暗灰黄色砂礫層に分かれるが時期差は認められない。

遺物 遺物はその半分以上が平安時代中期の池状遺構(S G 76)から出土している。

中・近世の遺物には、土師器・陶器・染付などがあり、土壌・溝などから出土している。S K 27からは漆器椀が出土した。

平安時代の遺物には、瓦類は軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦があり、軒瓦類は奈良時代後期から平安時代中期の特徴を有している。土器類は土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器・黒色土器などがあるが、須恵器・白色土器・黒色土器は少量しか出土していない。灰釉陶器や緑釉陶器の底部外面に「舎」、「廳」などの墨書が認められる。木製品は下駄・刀子・篋状木製品・木剣・板などがあるが木簡類は出土していない。木剣は身の部分は焼失しており、柄の部分のみであるが、丁寧に作られている。金属器類は鉄鏃・容器脚部がある。

平安時代以前の遺物としては、旧流路より弥生土器および5世紀後半代の須恵器が少量出土したにすぎない。

小結 調査地は『拾芥抄』の西京図によれば竈殿の推定地に比定されているが、竈殿の実態など詳細は何もわかっていない。

今回確認した平安時代の池状遺構(S G 76)は、旧流路が埋まり、湿地になった場所を利用して造られている。池内からは10世紀中頃の遺物が多量に出土した。池の南側は黄灰色砂泥層

を10cm程の厚さで整地している。整地層上の掘立柱建物は、柱穴が一部重複しており2時期に分かれる。古い建物（建物2）は10世紀初頭に属し、東西2間、南北2間の総柱建物である。

この調査によって、今まで未解明であった平安京右京三条一坊四町の地に一部分ではあるが平安時代中期の池とそれに伴う建物を確認したことの意義は大きい。今後の周辺部の調査に期待がもたれる。
(伊藤 潔)

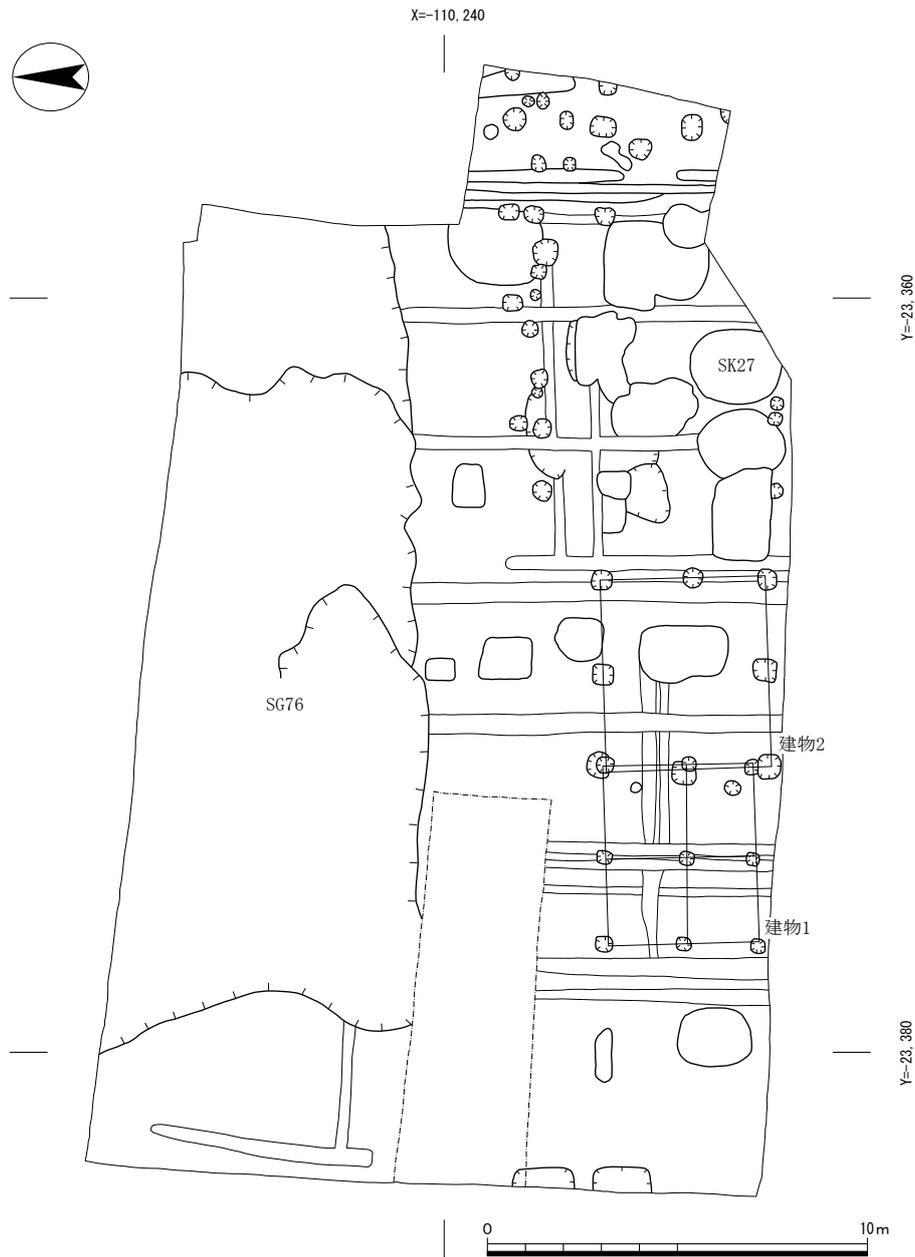


図35 遺構平面図 (1:200)

12 平安京右京三条一坊3 (図版1・20)

経過 調査地は中京区西ノ京星池町地内で、平安京右京三条一坊七町・穀倉院・壬生遺跡に比定されている。調査は八町地の調査(本概要第1章Ⅱ-13)の南側にあたっている。調査対象地に1~5区の調査区を設定し、平成5年(1993)9月21日から11月16日にかけて調査を実施した。(図34 調査位置図)

遺構 検出した遺構には平安時代前期・中期・後期、江戸時代に属するものがある。

平安時代前期の遺構には柱穴があり、5区南端に検出した。一辺約60cmの方形を呈し、茶褐色系の埋土をもつ。南西1mのところと同規模の柱穴を検出したが両者共に調査区外に延びる。

平安時代中期から後期にかけての遺構には建物8棟、土塋3基、井戸1基、溝2条、柱穴多数がある。建物は3~5区で検出している。各区で3ないし4棟の重複が認められ、同空間での長期にわたる建て替えが想定できる。土塋(SK3・5)は5区で検出した。溝(SD15)が接続する土塋(SK2)は一辺1.0m、深さ0.5mを測る。方形で播鉢状を呈し井戸の可能性もある。井戸(SE4)は一辺1.0m、深さ1.5mを測り、平面形は方形を呈する。2区で検出した溝は幅0.2m、深さ0.1mを測り、南北方向であるが、南側では削平される。

江戸時代の池・土塋は2区で検出している。

その他1区で検出した流路は、成立時期を特定できないが、埋没時期は近代に属する。1区南方に想定される池に流入した流路でその北西の肩口と考えられる。

遺物 出土した遺物には平安時代前期から後期、江戸時代に属したものがある。平安時代前期

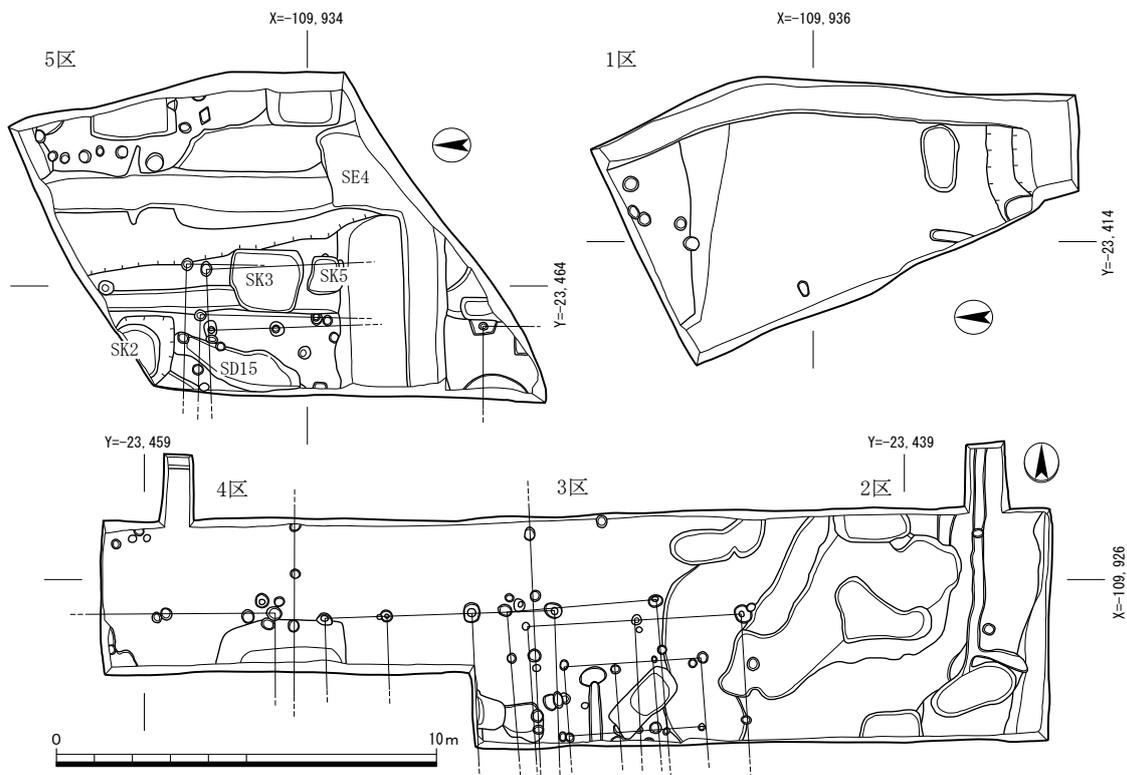


図36 遺構平面図 (1:200)

の遺物には土師器皿、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀があり、5区南端柱穴を中心に出土したが少量である。平安時代中期から後期にかけての遺物には、土師器皿、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、瓦などがある。3～5区の各柱穴、5区の土壌を中心に出土した。柱穴からは土器類、土壌からは瓦類の出土が多い。江戸時代の土器・瓦類は、2・3区の土壌を中心にして出土したが、平安時代に属する瓦類と供伴して出土するのが特徴である。

小結 調査地は平安京右京三条一坊七町の北東地区にあたる。穀倉院が一・二・七・八町の4町を占めるとすれば、調査地は穀倉院の中央、やや南西寄りに位置する。調査では平安時代を通じた建物群、土壌、井戸などを検出している。特に5区では、平安時代前期にさかのぼる柱穴が検出されることや、建物群が西および南方向へ展開する状況を明らかにできた。また1区では流路の北西肩口を検出したが、これは1区南方に広がる池へ流入したものと考えられる。池の広がりや範囲については、現地図上等高線を追うことによってもおよそその線引きが可能である。これによれば、七町中央東側に東西50m、南北60mの規模で、やや南北に長い楕円状を呈する池に復原できる。

穀倉院を構成した七町地南西角地には、東西20丈、南北30丈の地に内蔵寮の染屋が置かれたとある^{註1}。さらにこの付近には長さ20丈、広さ12丈を限って穀倉院預人などが住むことを許されている^{註2}。いずれも9世紀の前半代であり、穀倉院創設から約20年を経た時期である^{註3}。

この七町地に関しては、東側に広大な池があり、西側に内蔵寮の染屋や預人などの居住した雑舎群が、八町地に接した北側以北一帯に穀倉院庁屋群の存在した景観が想定できよう。

(平田 泰)

註1 『続日本後紀』承和元年（834）七月九日条

註2 『続日本後紀』天長十年（833）八月三日条

註3 『西宮記』卷八（裏書）或抄云。大同年中（806～809）始置此院

13 平安京右京三条一坊4 (図版1・21)

経過 調査地は平安京右京三条一坊八町にあたり、平安京穀倉院に比定され、西坊城小路西側溝、押小路北側溝の推定位置も含んでいる。

ここに二条駅地区土地区画整理事業により道路が築造されることになり、試掘調査を実施して平安時代の溝・柱穴などが検出された。この成果をふまえて発掘調査を実施することになった。調査は、道路予定地内に幅5mのトレンチ3本(長さ42m、44m、65m)、幅1.5mのトレンチ1本(長さ47m)を設定し、実施した。(図34 調査位置図)

遺構 調査区の基本層序は上層から現代盛土層、近世の耕作土層、黄褐色砂泥層の地山面となる。1・3・4トレンチの一部には褐色砂泥(10YR4/4)の遺物包含層が黄褐色砂泥層の上に4～10cmほど堆積している。

江戸時代の遺構は3トレンチで土壇1基、井戸1基を検出した。S E 66は径1.8m前後の素掘りの井戸である。染付・塩壺などが出土した。

中世の遺構としては土壇・柱穴などがあり、2・4トレンチで検出した。柱穴は20基検出したが、対になるものは不明である。

平安時代の遺構としては、溝・掘立柱建物・土壇などがあり、溝は1・2トレンチで検出した南北の溝S D 16と、3・4トレンチで検出した東西の溝S D 21がある。溝内からは多量の瓦類とともに平安時代後期(12世紀)の土師器皿が少量出土した。3・4トレンチで、柱穴P 67・68・70・71・75・A(公園内工事立会調査で確認)などで形成されている平安時代中期(10世紀)の掘立柱建物1棟を検出した。調査範囲が限定されているため全体を検出するにはいたらなかったが、柱穴の一边は80cm前後の隅丸方形を呈し、建物は公園敷地内および宅地部に延びていると考えられる。柱間はP 67 - 68、P 68 - 75、P A - 70、P 70 - 71間は2.3mを測り、P 67 - A、P 68 - 70、P 71 - 75間は4.6mを測る。掘立柱建物は1間2.3mと考えると2間×3間以上で、大型の掘形をもつことから、大規模な建物が想定されるため、穀倉院に伴う建物の可能性がある。

遺物 遺物は大半が瓦類で、軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦があるが、そのほとんどはS D 16・21から出土した。瓦当類は平安時代中期から後期の文様の特徴をもつものが多く、また平安時代前期の文様をもつ軒丸瓦がP 71から出土した。土器類は少量しか出土していない。平安時代の土器類には土師器・須恵器・緑釉陶器などがあり、S D 16・21から古新混入して出土した。また、掘立柱建物を形成するP 70・71から平安時代中期(10世紀)の特徴をもつ土師器皿が出土した。

小結 今回の調査で検出した平安時代中期の掘立柱建物(P 67・68・70・71・75・A)は、調査区外へ延びており、全体を明らかにするまでにはいたらなかった。しかしながら、柱穴の規模などから大規模な建物が想定でき、穀倉院を構成した建物の一部と考えられる。穀倉院に関連する諸施設の発見は今回の調査が最初であり、その意味では多大な成果を得たことになるが、考

古学的には穀倉院の範囲、建物の配置、規模など解明すべき事柄が多く残されている。

(伊藤 潔)

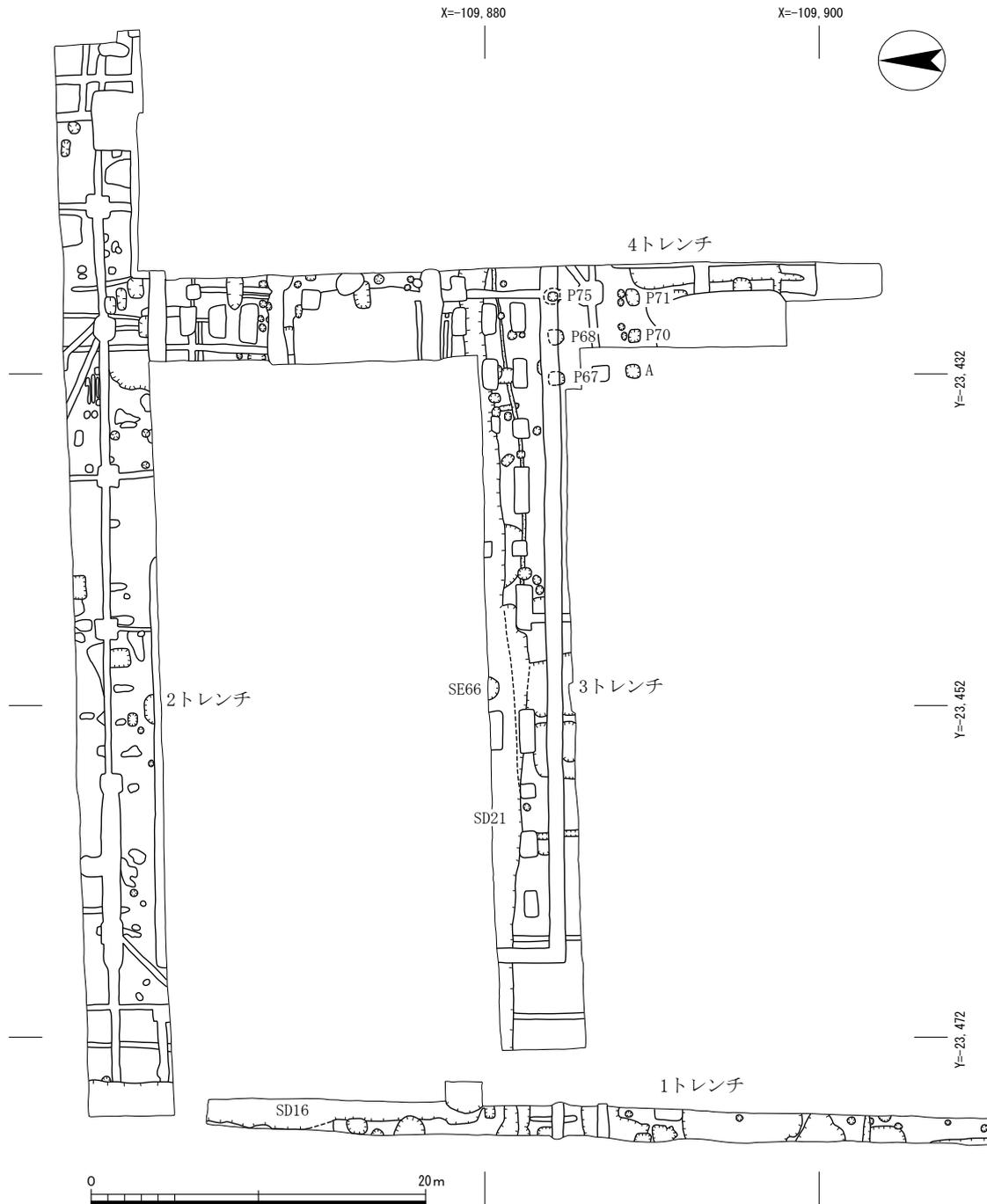


図37 遺構平面図 (1:400)

14 平安京右京五条四坊 (図版1・22～24)

経過 調査対象地は平安京右京五条四坊十二町に位置し「拾芥抄」西京図によれば小泉荘に比定されている。また、弥生時代から古墳時代の集落跡として知られる「西京極遺跡」の北西部にあたっている。当該地周辺部の発掘調査例は現在までほとんどないが、南へ約120mほど下がった右京六条四坊九町の調査(社会保険診療報酬支払基金事務所棟)では、弥生時代・古墳時代の竪穴住居や、平安時代の五条大路南側溝・路面などが検出されている。また周辺の試掘・立会調査でも弥生時代から古墳時代の竪穴住居状遺構や溝・土壇などが確認されている。

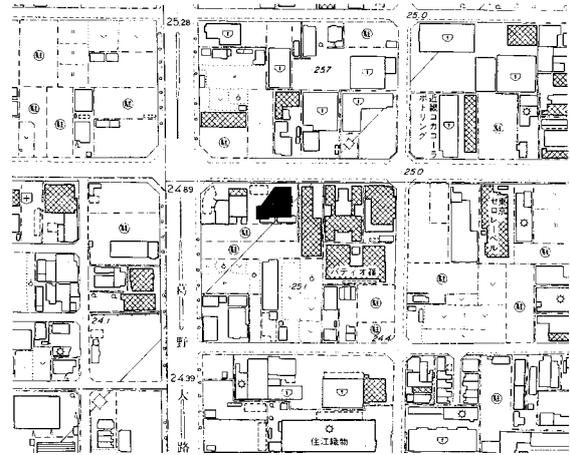


図38 調査位置図(1:5,000)

遺構 調査区の基本層序は、地表下0.75～0.8mまで現代盛土層であり、以下1.1mまで旧耕作土層、1.3mまで床土層、以下黄褐色砂泥層の地山となる。なお北半部は北西に向かって落ち込む。

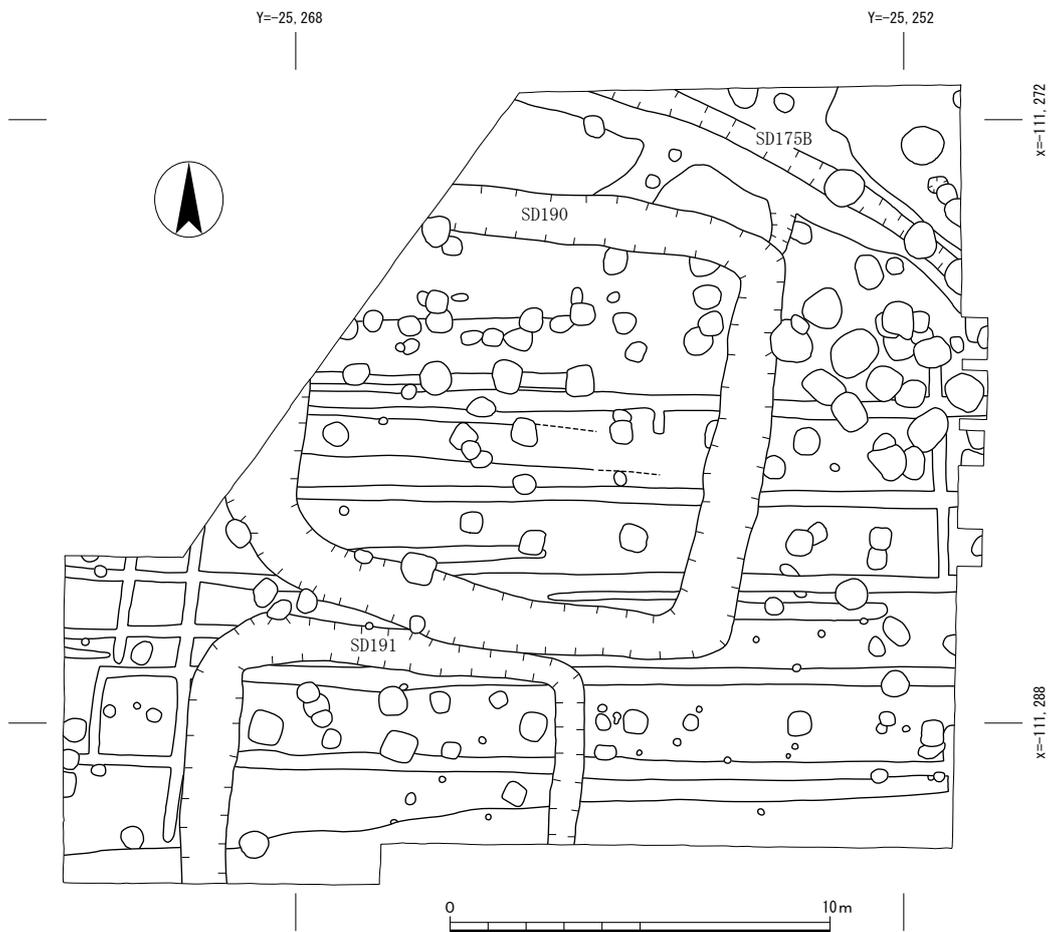


図39 プラン3-1平面図(1:200)

今回の調査では、中世から弥生時代後期までの各時期の遺構を重複して検出した。

中世 調査区全域で幅40cm前後、深さ10～20cmの東西方向の溝18条、南北方向の溝3条を検出した。耕作に関連した小溝群と考えられる。

平安時代 調査区北半部に堆積する第1層を排土した面で東西方向の小溝6条、南北方向の小溝3条を検出した。埋土より平安時代前期の椀・皿類が出土した。

奈良時代 調査区全域で多数の柱穴を検出した。これらの柱穴群から、掘立柱建物を3棟確認した。建物1は、柱間が東西3.5m、南北4.8mの各1間の建物であり、東に振れている。建物2・3は、前後に整然と並んで建てられており、建物3は母家、建物2は細殿にあたると思われる。

古墳時代後期・末期 この時期の遺構は、調査区北東半部で第2層を排土した面で検出した。

古墳時代末期（飛鳥時代）の遺構としては、調査区北東部で検出した総柱建物（建物4）がある。柱穴は円形から楕円形を呈し、径0.8～1.1m、深さは0.7m前後である。3間×3間規模の倉庫になると考えられる。

古墳時代後期の遺構は、北辺部で検出した溝（SD175A・184）がある。SD175Aは南東方向から北西へ流れる。

弥生時代後期 この時期の遺構は、方形周溝墓が造られる時期（プラン3-1）と、竪穴住居

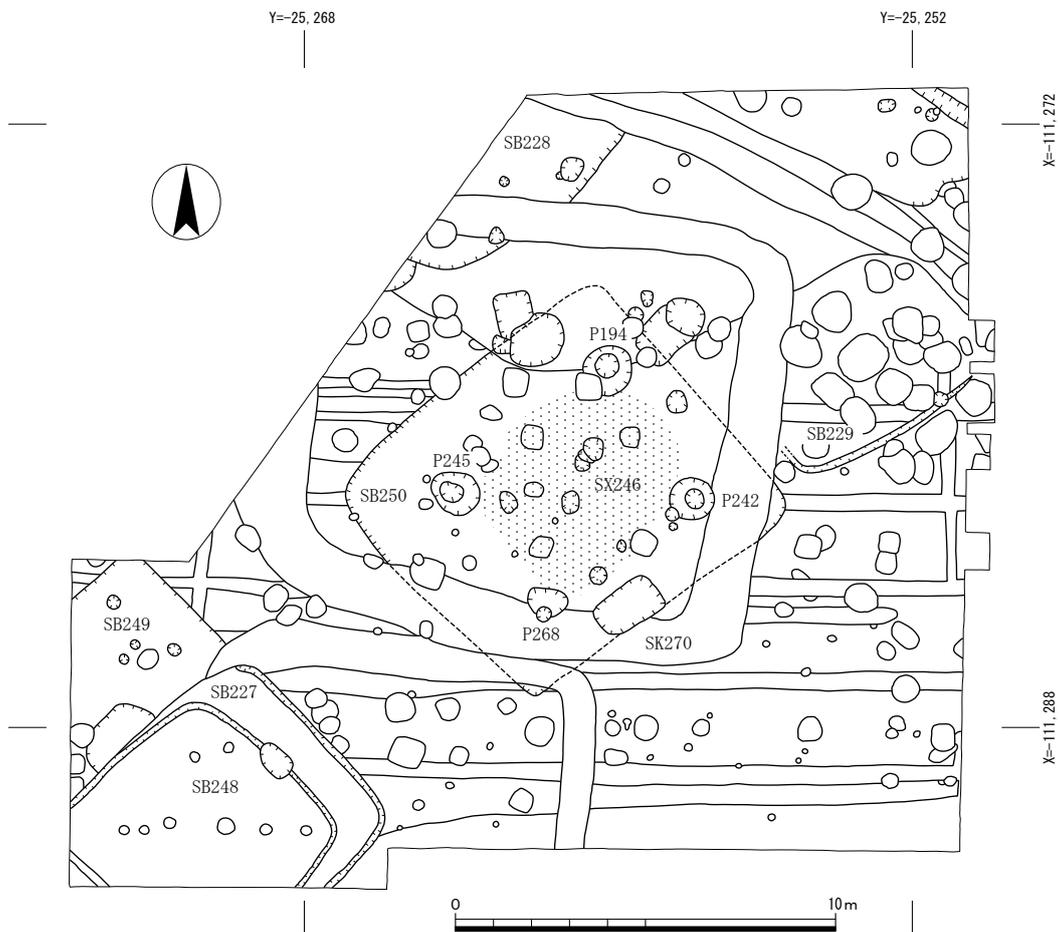


図40 プラン3-2平面図 (1:200)

が造られる時期（プラン3-2）の2時期に分かれる。

方形周溝墓は2基（S D 190・191）検出した。S D 190は、東西13.8 m、南北12.2 mの規模をもつが主体部は失われている。溝内からの出土遺物は、整理箱にして4箱ほど出土しているが、いずれも破片であり、全形を知りうるものはない。東溝から多く出土している。S D 191は、東西10.5 m、南北7.2 m以上の規模をもち、北溝はS D 190の南溝と一部接している。主体部は失われていると思われる。遺物は小片が少量出土したにすぎない。

竪穴住居は6基（S B 227～229・248～250）検出した。S B 227は、短軸6.5 m、長軸7.1 mの規模の方形プランをもつ焼失住居である。壁溝は、全周しない。覆土は、暗褐色土を基調としており、検出面から床面まで約45cm程で、床面に灰・炭を多量に含む灰褐色土の薄い堆積がみられ、その上部に炭化材と焼土層（一部は焼土塊）が、厚く堆積している。炭化材は、屋根材がそのまま落ちた状況ではないが、多量の焼土の共伴は、屋根材として土が使用されていたことを物語る。遺物は、南東コーナー付近で、高杯、甕、鉢などがつぶれた状態で出土したが、遺存状態はきわめて悪い。S B 248は、S B 227の床面で、周溝・柱穴のみを検出した、5.6×5.8 mの規模をもつ方形プランの住居である。

S B 250は、調査区中央で検出した、短軸8.2 m、長軸8.4 m以上の規模をもつ大型の住居である。検出面から床面間は15cm程あり、壁溝は認められない。床面には、南壁中央部付近で1.7×1.0 m、深さ0.4 m規模の貯蔵穴と考えられる土壙（S K 270）を検出した。支柱穴は4基（P 194・242・245・268）認められたが、いずれも1.5～1.7 m前後の抜取穴が認められた。この抜取穴（特にP 245）から多量の土器が出土した。4本の柱穴に囲まれた内側からも、木炭を含む多量の土器（S X 246）が出土した。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして85箱あり、中世から縄文時代晩期までの多岐にわたっている。その内、弥生時代後期の土器類が多数を占めている。

中世の遺物は、土師器皿、陶器甕、白磁碗、青磁碗などがあり、いずれも小溝群より出土した。

平安時代の遺物は、土器類では、土師器碗・皿、須恵器杯・蓋、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗などがあり、他に平瓦がある。これらの遺物は、溝、遺物包含層（第1層）から出土しているが、量は少ない。

奈良時代の遺物は、土師器碗・皿・高杯・甕、須恵器杯・蓋・鉢・甕・壺などがあるが、いずれも小片である。柱穴より出土した。

古墳時代末期の遺物は、建物4の柱穴より、土師器碗・高杯・甕、須恵器杯・蓋・甕などが出土した。

古墳時代後期の遺物には、土師器碗・甕・把手・竈、須恵器杯・蓋・高杯・甕・壺・甕などがある。石製品は、三輪玉が1点出土した。これらの遺物は、溝S D 175 A・184および第2層から出土した。

古墳時代中期の遺物は、古墳時代後期の遺構などから、布留式土器小片が混在して出土しているが、量はきわめて少ない。

弥生時代の遺物には、弥生土器壺・甕・鉢・高杯・手焙土器・器台・ミニチュア土器の各器形

があり、石製品は、打製石鏃・磨製石鏃・砥石、土製品としては、土錘が出土している。これらの遺物は、竪穴住居跡や方形周溝墓など、弥生時代の遺構の他、新しい時代の遺構からも混在して多く出土している。

縄文時代の遺物は、調査区北西隅の湿地状堆積土から、縄文時代晩期の甕形土器片が出土した。

小結 今回の調査では、平安時代に属する主要な遺構は検出されなかったが、奈良時代の掘立柱建物、古墳時代末期の倉庫と考えられる掘立柱建物、弥生時代後期の竪穴住居や方形周溝墓などを検出し、西京極遺跡の一端を明らかにすることができた。

西京極遺跡は、京都盆地の中央西寄りにあり、桂川までは直線ではほぼ1 kmである。遺跡は、旧桂川の氾濫によって形成された自然堤防上に位置し、その発掘調査例は、現在までのところ、当調査を含めて3例しかなく、他の2例では弥生時代から古墳時代の竪穴住居が発見されている。

当調査地では、古墳時代末期から奈良時代の掘立柱建物4棟を検出したが、調査面積が狭小なため、その広がりや性格など不明な点が多い。しかしこれらの遺構の発見は、調査地周辺の歴史の空白を埋めるものとなった。弥生時代の遺構としては方形周溝墓2基、竪穴住居6基を検出した。これらの遺構のうち、竪穴住居S B 250は同時代の住居の中でも特別に規模の大きな住居の一つである。S B 250では、柱穴抜取穴や、4本の柱穴に囲まれた内側で、多量の土器が木炭と共に出土（S X 246）し、小範囲ながら焦土面を数箇所を確認した。また、ほとんどの土器は、口縁部を下にした状態で出土しており、このことから、住居廃絶時（後）に何らかの祭祀が行われたと考えられる。

出土遺物では、三輪玉が古墳時代後期の溝S D 175 A上面から出土した。三輪玉は、管見によれば全国で30数箇所から出土しているが、ほとんどが古墳からの出土品である。このような特殊な遺物が出土した意義は大きい。なお、1977年に行われた西部幹線公共下水道工事に伴う立会調査において、当調査地から西へ約60 m程の地点で、子持勾玉が出土している。三輪玉や子持勾玉の発見は、古墳時代における当遺跡の性格などを考える上で、重要な意味をもっており、今後の課題となろう。周辺地域の発掘調査に期待がもたれる。

（伊藤 潔）

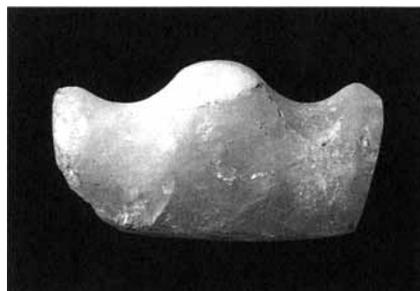


図41 溝S D 175 A上面出土三輪玉

15 平安京右京六条一坊 (図版1・25・26)

経過 この調査はJR丹波口周辺の再開発に伴うもので、京都リサーチパーク周辺の調査としては8次目にあたる。今回の対象になった京都リサーチパーク北辺部は、平安京右京六条一坊六町の南端部から約30m北に位置し、六町の両端を含む、東西長さ約120m、幅20mの帯条の部分で、現況は京都リサーチパークおよび地下駐車場への通路とその北側の緑地として利用されている地帯である。当地付近は平安時代前期の遺構の遺存状況が良好な地域で、これ

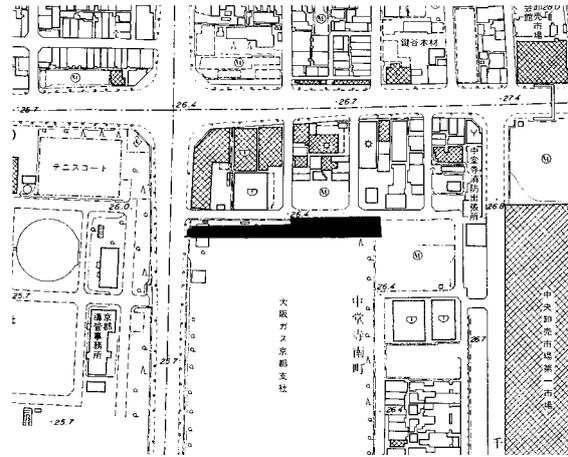


図42 調査位置図 (1:5,000)

までの調査では六町南辺部および楊梅小路側溝、さらに南側の五町に該当するリサーチパーク敷地内で、五町全域を占有する大規模な邸宅跡、また西側の皇嘉門大路を隔てた十一～十四町の調査では建物、井戸、溝など多数の遺構が検出されている。今回の調査では、リサーチパークおよび駐車場への通行の確保、ケーブル、ガス、水道、下水など既設の埋設物あるいはそれらの移設工事との関連上、全体を1～5の調査区に分割した。1区と2・4区については南北に分けて順次調査したが、使用中のガス本管の埋設位置以外は結果として一連の調査区となっている。調査の結果、縄文時代から古墳時代の遺物を含む湿地(旧流路)、平安時代の建物、井戸、平安時代後期から鎌倉時代の建物、井戸、溝、池など多数の遺構を検出した。

遺構 今回検出した遺構は平安時代前期および平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものが多。主要な遺構について概略を述べる。SD240・250は西坊城小路の西側溝で、東側のSD250が平安時代前期、SD240は平安時代後期から鎌倉時代のものであるが、後者は堆積状況や重なりから、さらにいくつかの小期に分けることができる。杭跡が集中している部分があり、小規模な橋あるいはこの部分が暗渠状になっていたようである。建物SB1・3、柵SA2・7は平安時代前期、建物SB4～6、柵SA8・9は平安時代後期から鎌倉時代のものである。建物のうち全体の平面形状が判明したのはSB1だけで、南北2間、東西3間、柱間は南北が2.4m、東西が2.1mである。建物SB5は1次調査で検出している建物53あるいは57に関連する可能

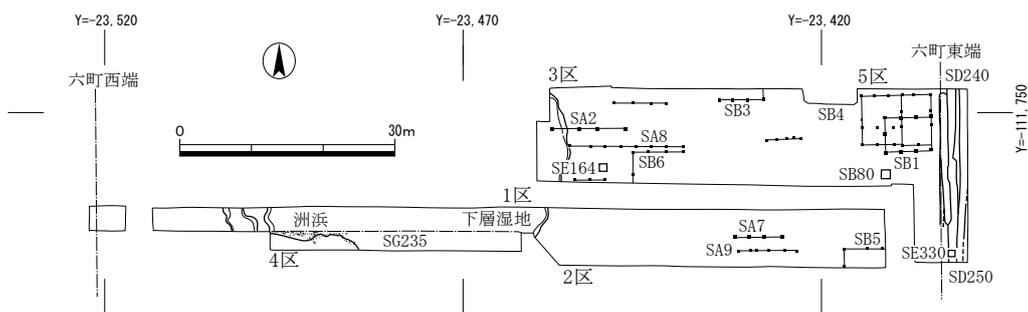


図43 主要遺構配置図 (1:1,000)

性がある。井戸はS E 80が平安時代前期のもので、一辺約1.2 mの方形の縦板組みである。堆積は大きく上下の2層に分かれ、各層から土器類が出土しているが下層の土器類は保存状態がよく、完形あるいはそれに近い大きな破片が多い。S E 164は部材の痕跡をほとんどとどめず、構造は不明だが、最下段の横棧がわずかに残存しており、方形を呈するものと考えられる。遺物も少量だが、S D 240同様平安時代末期から鎌倉時代のものであると思われる。S E 330はS D 240を切っ成りしており、それ以後のものであるが、遺物には時期差はほとんどみられない。池S G 235は旧流路に形成された湿地状の地形を利用して造られており、南岸の一部で拳大の礫を用いた洲浜を確認した。またこの湿地は平安時代前期にはすでにかなり縮小しており、東肩部の埋土には土器類が多く含まれていた。

遺物 遺物は整理箱にして115箱出土した。大半は土器類で、その他に少量の瓦、木製品などがある。平安時代以前の遺物としては、旧流路や湿地下層から弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器がある。平安時代前期の遺物は主にS E 80、湿地東肩部の埋土から出土しており、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦などがある。S E 80の土器類は下層が平安京I期中（8世紀末～9世紀初）、上層が平安京I期新（9世紀前半）、このうち下層の土器類を図示する。湿地東肩部は平安京I期中から新のものを含む。平安時代末期から鎌倉時代の遺物は井戸S E 330、池S G 235などから土師器、瓦器、須恵器、白磁、青磁、瓦が出土しているが、特にS G 235の土師器は量が多く、型的なまとまりをもつ。これらの遺物は現在整理中である。

小結 この調査で検出した平安時代前期の遺構としては建物および井戸があるが、今回の調査範囲ではこの邸宅の規模は不明である。ただ当地南側の五町では町全域を占有する平安時代前期の大規模な邸宅跡を検出し、町の北西部に湿地があるため、建物配置の中心が東に寄っていることを確認している。今回の調査地ではその湿地がさらに東側に広がっており、平安時代前期の遺構が存在する可能性のある範囲はより東に片寄った地域に限られるため、五町ほどの規模をもつ

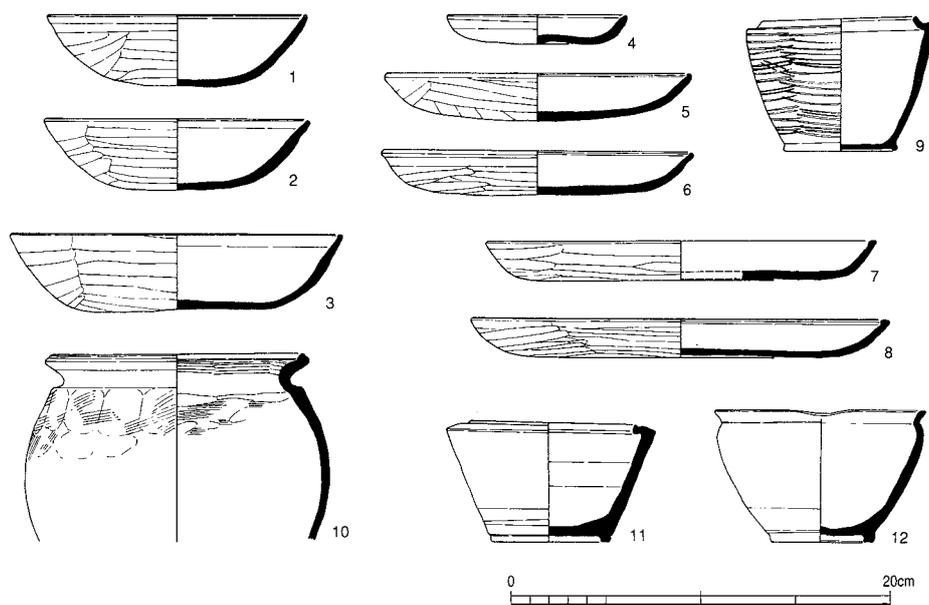


図44 S E 80下層遺構出土土器実測図（1～10：土師器 11・12：須恵器（1：4））

邸宅の存在は考えにくい。平安時代後期から鎌倉時代の遺構については、1次調査で楊梅小路に沿って同期の建物などが多数検出されているが、今回の調査でも同様の傾向がみられ、西坊城小路寄りの遺構密度が高い。これらの建物群がどのようなまとまりをもつものかはいまのところ不明であるが、六町西半部で検出したS G 235は汀の一部で洲浜を確認しており、庭園に伴う池とみられる。この時期少なくとも西半部に園池を備えた邸宅があった可能性もある。この時期の平安京内の庭園遺構としてはこれまでのところ最南部に位置している。

(平尾政幸)



図45 S E 80 (南から)



図46 S G 235 土器出土状況 (南東から)

16 平安京右京八条二坊 (図版1・27～31)

経過 京都市立七条小学校敷地内南西部のプール改築工事に先立ち発掘調査を実施した。

平安京右京八条二坊二町跡は、京内の官設市の一つである西市外町に南接する遺跡である。今回の調査区に東・北接してこれまでに同校敷地内では2例の発掘調査を実施し、主として平安時代前期に属する遺構を検出しており、木簡を含む木製品の遺存状態の良好な地域として重要な遺跡であることが判明している。これまでの調査で検出された遺構には条坊遺構や宅地割を示す遺構などがあり、それぞれ密接にかかわるので各調査の概要について示す。

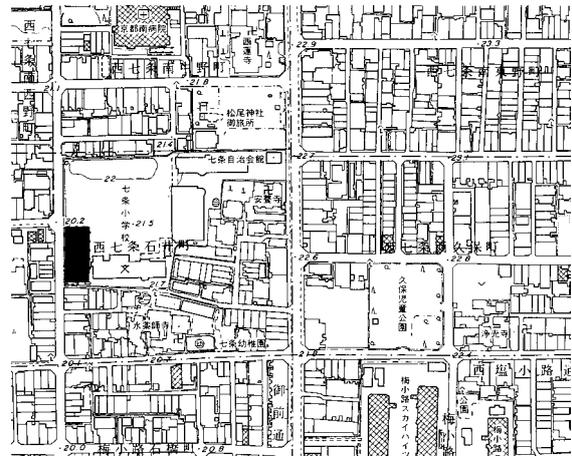


図47 調査位置図 (1:5,000)

1次調査は現南校舎建設に伴って昭和58年(1983)に実施した調査である。二町跡の東三・四行、北五・六門の4戸主分に該当し、平安時代前期に属する池状遺構や平安時代中期に属する建物跡などを検出している。池状遺構の中には南北方向の土堤があり、東三・四行界に相当する。

遺物では池状遺構から出土した「十六年」紀年木簡など付札を主体とする多数の木簡・削屑、^{註1} および共伴する土器類がある。また、土馬や小型模造土器など祭祀にかかわる遺物が多数ある。

2次調査は現給食室建設に伴って昭和60年(1985)に実施した調査である。二町の東四行、北二・三門の2戸主分と西靱負小路に該当する。北三・四門界では区画施設を検出している。西靱負小路下層には流路がある。西靱負小路は東西両側溝と道路敷を検出、東側溝内には護岸が1箇所ある。

遺物では、木簡・削屑をあわせて97点あり、「皇太子」などの習書木簡、「大同二年」紀年木簡、^{註2} および物忌札などがあり、1次調査とは木簡の内容が異なる。木製品は豊富で内容は多種多岐にわたり、服飾具や容器など生活にかかわるもの、および祭祀具など注目すべきものが多数ある。

今回の調査区は二町の東四行、北三～六門の4戸主分と西靱負小路に該当する。調査の結果、西靱負小路

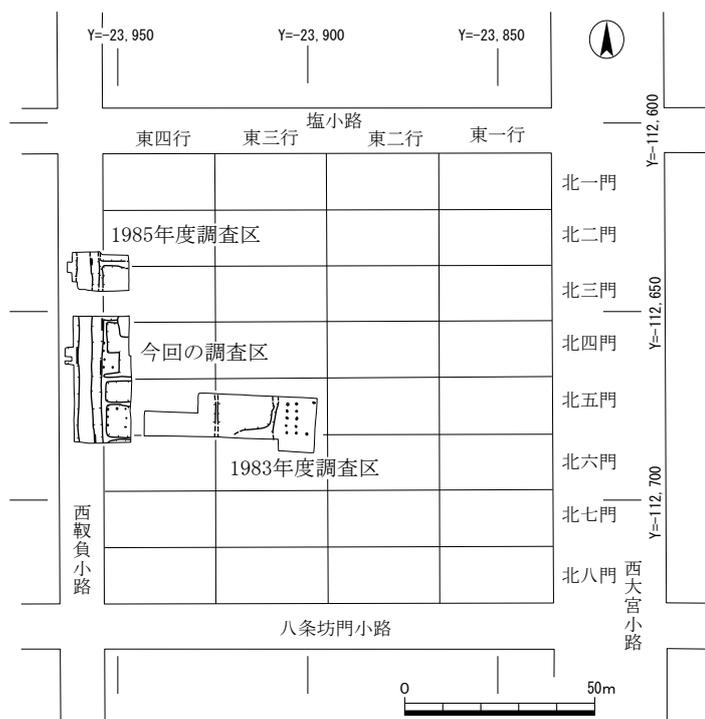


図48 二町遺構配置図 (1:2,000)

および小路下では流路を、各門界では区画を示す高まり、および各戸主単位で建物などを検出した。

遺構 調査区内の基本層序は、現地表から積土層（厚さ 1.2～1.3 m）、近世・中世の耕作土層（同 0.3～0.4 m）、平安時代の遺物包含層（同 0.1～0.2 m）などが堆積し、遺物包含層下は西半では西靱負小路、東半では二町の積土層となる。小路の道路敷き下層には南北方向を示す流路の堆積土層（同約 0.5 m）が堆積する。これらの土層下には当該地点における平安京造営時の基盤土層である腐植土層（同 0.02～0.08 m）が堆積する。腐植土層は小路の道路敷下では水平堆積

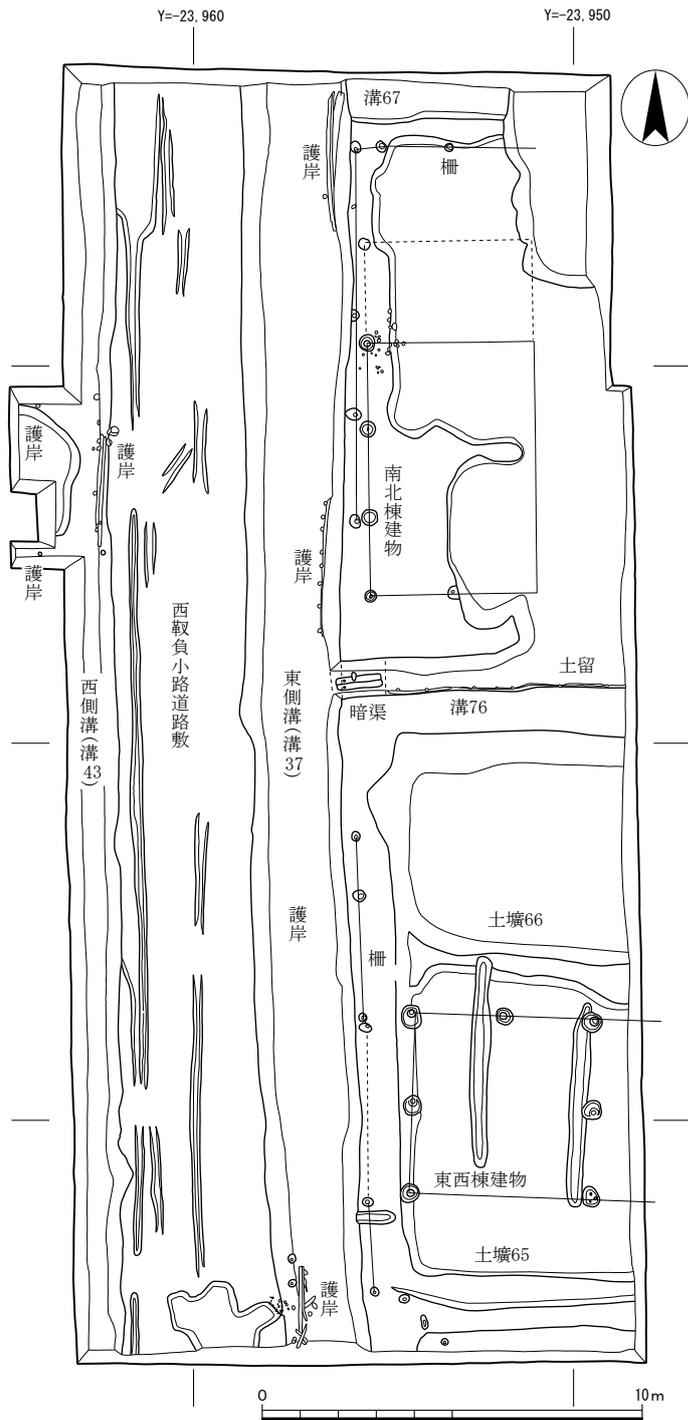


図49 遺構平面図 (1:200)

を示すのに対し、二町積土下面では大きく湾曲し途切れる箇所もある。腐植土層下は古墳時代の遺物を包含する湿地状の堆積土層となる。二町の積土による造成箇所は、主に西面築地（西靱負小路東築地）想定箇所や二町内の四行八門制に従った各門界想定位置を対象としており、各戸主内は窪む。

築地や門界を示す積土上半部は同一の土層を用いた整地がなされており、当該地の造成開発が戸主単位の私的な契機によるものではないことを示す。各門界の積土により区画された空間は、東四行西半の北三・六門の一部と北四・五門である。

各門界の高まりは、後述するように、北四門北端柵列が高まりを避けていること、北四門南端土留め施設の存在、門界の高まり位置に橋を伴うことなどから小径的な役割が想定できる。

北四門内では、柵・土留・暗渠・積土・建物を検出した。

柵は北三・四門高まり南端から西靱負小路東築地想定線にかけて鉤形に延長する。柵と建物西桁行

柱列はほぼ同位置で併存し、建物の西桁行南西1間分までで柵は途切れる。柵の柱穴内には柱根が遺存し、中には半截材や転用材を含む。径12～16cm、柱間は東から1.8・0.7m、南折して1.5・2.9・2.7・2.8mある。

北四門南端の門界の高まりに沿って土留がある。東へはさらに延長し、西は暗渠で止まる。幅約12cmの長い薄板を横材とし、杭を密に配する。暗渠は土留西端から築地高まり西端の範囲で検出した。底面西端（開口箇所）に斎串14枚・和銅開珎1枚を埋置し、細かい砂礫で覆って蓋板を被せ、築地上端まで埋め戻す。蓋板は長さ120cm、幅33cmある。蓋板上面は西に向かって5cm傾斜している。

北四門南西部には宅地底面から約0.3m程積土を施した高まりがあり、上面で南北棟掘立柱建物を1棟検出した。東半部は削平を受けるが、建物は2間×3間に復原でき、さらに北へ2.7mの地点で柱穴を検出している。柱間は桁行が南から2.1m・2.35m・2.25m、梁間が2.2mある。柱根が遺存する柱穴があり、径11～13cmある。この建物は柵が建物南西1間分までで途切れ、当該箇所を橋を検出していることから、南西1間分は出入口が想定でき、路に面して開口する建物と理解できる。

北五門内では、区画の高まり・建物などを検出した。

区画の高まりは北四・五門界から南へ約7mにあり、北五門内をさらに二分する。北五門は平安時代前期前半にはあまり活発な利用状況はみられない。高まりを境に南半には腐植土と混在した状態で土器・木製品（延暦木簡含む）などが多量に出土したが、北半にはそれほどの状況はうかがえない。平安時代前期後半には、高まりに規制を受けるような状態で南半に積土を施し、東西棟掘立柱建物を1棟建てる。柱間は桁行2.4m、梁間2.4mある。

西靱負小路は調査区西半で南北約34mにわたり検出した。道路敷・東側溝・西側溝および側溝内には橋に想定できる護岸がある。道路敷は砂・小礫で造作され、乾燥時にはきわめて堅固である。検出幅は約4.0mある。道路敷上面では轍跡を数条検出した。轍はほぼ一定の位置で複数検出しており、対を確定することは困難であるが、轍間の幅は1.3～1.5mある。東西両側溝は幅が2.0～3.0mある。底面は早い流水によって基盤層である腐植土層が窪み状に抉られ、凹凸がある。埋土から多量の木製品と共に牛馬犬などの骨が出土した。橋の下部施設と考えられる護岸施設は東西両側溝内の4箇所検出した。

西靱負小路下面で南北方向を示す流路を検出した。築地の高まりを東肩口としている。西肩口は検出していないものの、西側の七町も二町と同時期に造成されたと想定しており、流路は小路幅分を有していたと考えている。流路からは多量の木製品・土器類が出土している。なお、流路上層は最終的に幅約1.0m・の南北方向の溝状を呈し、砂層が堆積する。層中からは、多量の獣骨（牛馬など）ならびに軛と考えられる木製品が出土した。

遺物 遺物は土器・瓦類100箱、木製品・木片類170箱、骨16箱、土サンプル8箱がある。

これまでに判明した遺物内容について下記に示す。出土遺物の大半は平安時代前期（平安京Ⅰ期からⅡ期）に属する。主要遺構から出土した土器類については図50に掲載した。

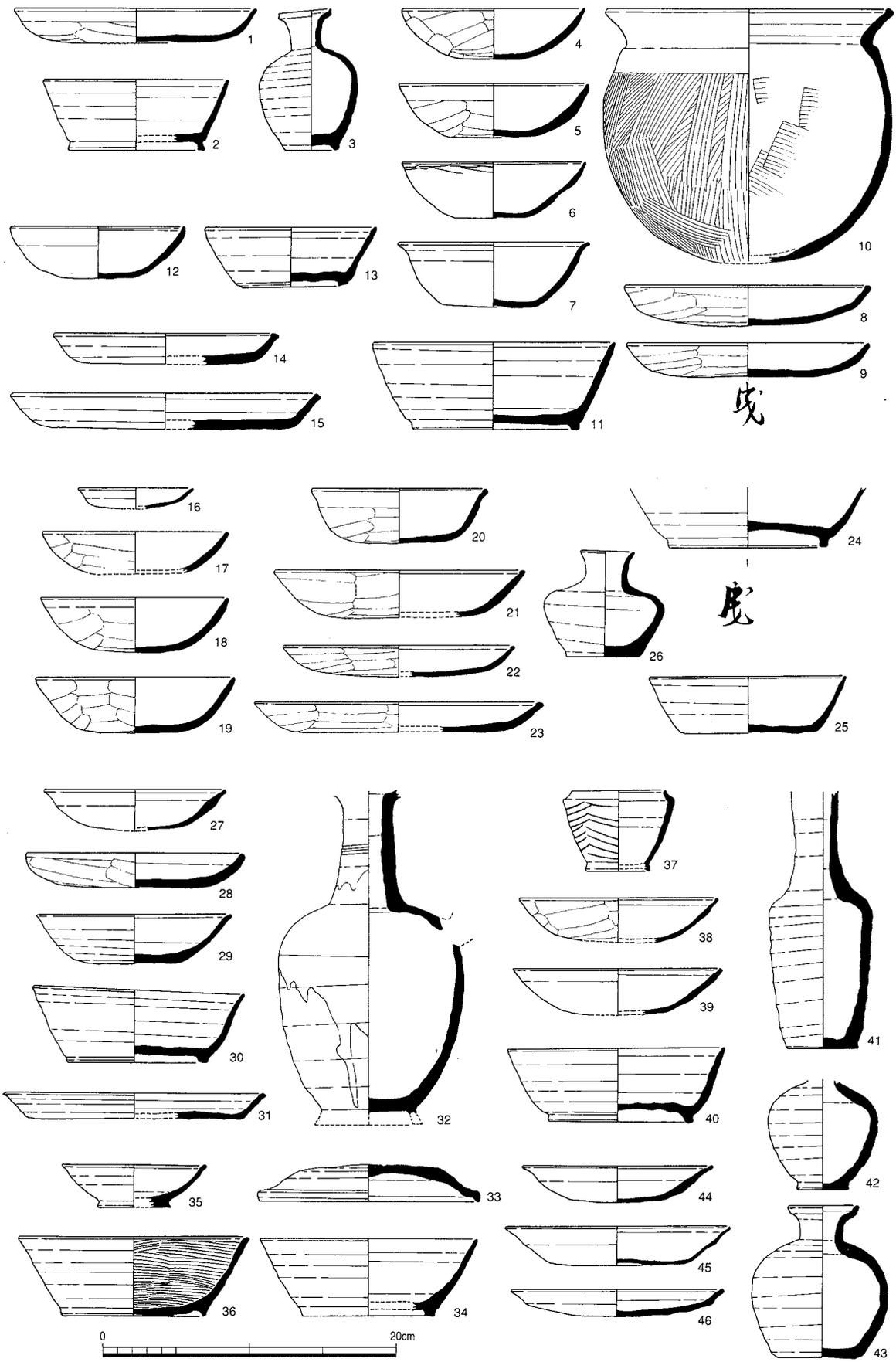


图50 出土土器实测图 (1~3: 積土 4~16: 流路第3層 12~15: 土壙 66 16~26: 土壙 66
27~32: 溝 37 B 33~36: 溝 37 A 37~43: 溝 43 B 44~46: 溝 43 A) (1:4)

土師器では皿・杯・椀・蓋・高杯・壺・盤・甕・竈、須恵器では皿・杯・蓋・高杯・平瓶・浄瓶・壺・鉢・甕・円面硯など、黒色土器では皿・椀・甕・鍋、緑釉陶器では皿・椀・水注・壺・火舎、灰釉陶器では皿・椀・蓋・壺、輸入陶磁器では長沙窯白釉緑彩水注・越洲窯青磁椀などがある。墨書土器は40点以上あり、文字資料では「成」、「大」、「奉」が判読できる。絵画資料では土師器皿底部外面全面に施した墨書絵が1点ある。中央に4弁花を表し、その周辺に写実的な水鳥、蝶、草花などを配する。土製品では土錘・土馬・人面土器・布巻き土製品などがある。布巻き土製品は土を芯に周囲を麻布状の粗織り布を被せ、さらにその外面を土で覆うものである。破片は数点ある。瓦類には、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦などがある。銭貨には、和銅開闢・神功開寶・隆平永寶・萬年通寶・富寿神寶・承和昌寶・長年大寶・饒益神寶および寛永通寶がある。

木製品には、工具では樺皮巻柄、刷毛、漆塗用刷毛、漆篋、刀子柄、木釘、漆付着板、漆付着棒・赤色顔料付着棒など、紡織具では糸巻、紡輪など、運搬具では輓状木製品、漁猟具では浮子など、服飾具では櫛・留針・檜扇・木沓・下駄など、容器では黒漆皿・黒漆椀・外面黒漆内面赤漆椀・黒漆蓋・黒漆盤・木皿・高台付木皿・木椀・円形曲物・黒漆塗円形曲物・楕円形曲物・長方形曲物・籠編物・柄杓柄など、食事具では箸・匙形木製品・杓子形木製品など、文具では黒漆塗巻物軸・題箋、計量具では物指、遊戯具では独楽・板絵・模様陽刻板・琴柱状木製品など、祭祀具では正面人形・大型正面人形・立体人形・刀形・刀子形・斎串など、雑具では黒漆塗調度片・漆板・角板・雲形状板・中空円筒・籌木など、部材では脚台・把手、建築部材では護岸杭・護岸板・柱・柱根など、不明木製品では立体・円盤・尖頭棒状の木製品などがある。

特徴的なものを示すと、漆の付いた工具や部材、赤色顔料の付した曲物や棒など加工生産にかかわる製品がある。輓とした木製品は割材の中央を山形に削り上げたものであるが、むながい棒を挿入する孔はない。扇では前代的な特徴を示す幅広の檜扇がある。下駄では鼻緒の遺存する例がある。容器では精製の漆器が多く、高台付木皿・木椀など漆を塗らない白木の食器が含まれ、曲物の出土量が非常に多い。箸は長さが20～24cm程度で先端をやや細くする傾向がうかがわれる。物指は3個体あり、1寸はおおよそ3cmに収まる。板絵は螺旋状や雲形状を呈する墨痕が比較的鮮明に遺存する。模様陽刻板は両面に花などを陽刻する。祭祀具では、大型正面人形には仏の顔形を描いたとみられるものがある。立体人形は数点ある。斎串は種類・量とも豊富である。この他、枝の表皮を剥いだ程度の加工を施した柄ないし把手などに想定できるものが比較的多数ある。また、薪がきわめて多いこと、木材加工に伴う加工屑が多いことなどがあげられる。

木簡は削り屑を含め40点以上ある。判読可能なものに、積土層では「秦秦秦」・「乃□□□□□」、
「千小麦五斗」、「□白米五斗」・「□日」、「銭銭銭銭」、「六十六 六□□□□」、「二□十二 □□」
、「六卅□□六廿廿」。土壙 65 では「納物貳種 紙廿三帖
庸布一端 裏料」・「延暦廿四年五月十九日 記秋穂」。土壙 66 では「□大車 小車小□小□」など。流路では「買進上米壹斛伍斗直銭壹貫肆佰伍拾文」・「□濱私買附上鷄一隻直銭京上報□七月」、「猪山上」、「阿知魚腊」、「朝□堅魚一」、「□□□五斗」、「敦賀皆万呂白五十」・「二月十□□□□」、「間上間平間中」、「大大大大大大大大」・「
大大 大大大大大大」、「□合銭」・「□□又□□」、「正月二日白米四□

五升]、「□五斗」。第7層では「謹解 申請借錢事」、溝37では「□百済公□□」などがある。

これらのうち、「延暦」木簡は納物として紙と庸布の二種を示す。庸布は紙二十三束を包む料にあてられたのであろう。記された紀年は土器型式に実年代の一つを付加すると共に、条坊敷設や二町西半の宅地造成が延暦二十四年（805）以前に敷設されたことを示す。「進上」木簡は一面に米と代価、一面には鶏一羽と代価の支払い方法の記述がある。「借錢」木簡は借錢を請う内容が記された木簡である。なお、両面に墨書のある場合は「・」で示した。

植物種実はモモが多数を占め、他にクリ・ウメ・オニグルミ・ヒメグルミ・シイ・ウリ・スモモ・クチナシ・ヒョウタンなどに比定できるものがある。骨には牛・馬などの大型の獣骨と犬など小型獣骨がある。なお、これ以外の種実・骨の詳細については今後の分析を待ちたい。

古墳時代前期の土器には庄内式併行期の壺・甕・高杯などがある。二重口縁壺の口縁内面に黒漆を塗るものもある。鎌倉時代から室町時代に属する遺物には土師器・陶器などがある。

小結 今回検出した土盛りは条坊路＝町境界の表示、周辺との比高差を最小限解消する高さの確保、小路下層にある流路の水位確保に伴う宅地側の嵩上げなどに主眼を置いたものと考えられる。当該地には造都に伴ってまず運河の役割が想定できる流路が、西堀川小路と共に新都への物資搬入を目的とした造都計画の一環で敷設されたことが考えられる。しかし、元来西市にいたる主要道路の一つ西軒負小路が敷設される箇所であり、早い段階で埋没の進んだ運河を維持することなく、上面に小路が敷設されたのであろう。水運から陸運への転換がうかがわれる。

北四門は南北端を溝ならびに門界の高まりによって画されることや南西隅の暗渠の位置から、班給を受けた所有者がこの北四門を越えて他の戸主にまで影響を及ぼしたとは想定しがたく、一戸主分のみを占有したと考えている。ただし、1次調査では東三・四行界で門界の高まりが検出されており、これが今回検出した各門界同様、通路としての機能を有していたとすれば、一戸主をさらに二分した可能性も残されている。また、二町内でも面路以外の地区には一戸主を遙かに越えた土地利用が行われており、面路地区とそれ以外の地区の土地利用には明らかな差異がうかがえる。

橋の下部施設と考えられる護岸施設は北四門の西と七町東一行北四門の東に面对する護岸の造作は丁寧で、崩壊箇所がないのに対し、北三・四門界、北五・六門界に位置する護岸造作は雑で崩壊も顕著である。七町に面する位置には東西両肩口とも護岸を施す。造作の相違は上部構造としての橋の構造にも反映されていると考えられ、各護岸の施工主体は異なることが想定できる。

以上のように、二町西半は平安京造営直前まで草木の繁茂する環境にあったが、西市外町としての条坊の施工が明らかになったことにより、周辺の条坊路や宅地開発様相の解明が進むものとみられる。市町周辺に展開したとされる諸国の調や諸官司などの物資収納施設や、市外町や外郭町の開発時期にもかかわるきわめて重要な情報も得られた。

一方、遺物からも特筆すべき成果を多数得ることができた。一つには紀年木簡および共伴する土器群があげられる。また、木製品は生産具・生活具とも多種多岐にわたり、当該地における平安時代前期の環境を復原する上で欠くことのできない資料である。なお、祭祀具についても多種

多岐にわたるが、この出土傾向は市（外町）とその外郭町である二町での祭祀を想定できる可能性があろう。

なお、木簡の釈読については井上満郎、西山良平、橋本義則の各氏および木簡学会の諸氏から御教示を受けた。^{註3}また、遺構・遺物については上記各氏ならびに金子裕之、神吉和夫、高橋昌明、高橋康夫、中村修也、村井康彦の各氏から御教示を受けた。記して感謝致します。

（辻 裕司・近藤知子）

註1 菅田 薫「京都・平安京右京八条二坊跡」『木簡研究』第六号 木簡学会 1984

註2 辻 裕司「京都・平安京右京八条二坊二町」『木簡研究』第八号 木簡学会 1985

註3 辻 裕司「京都・平安京跡右京八条二坊二町」『木簡研究』第一七号 木簡学会 1995

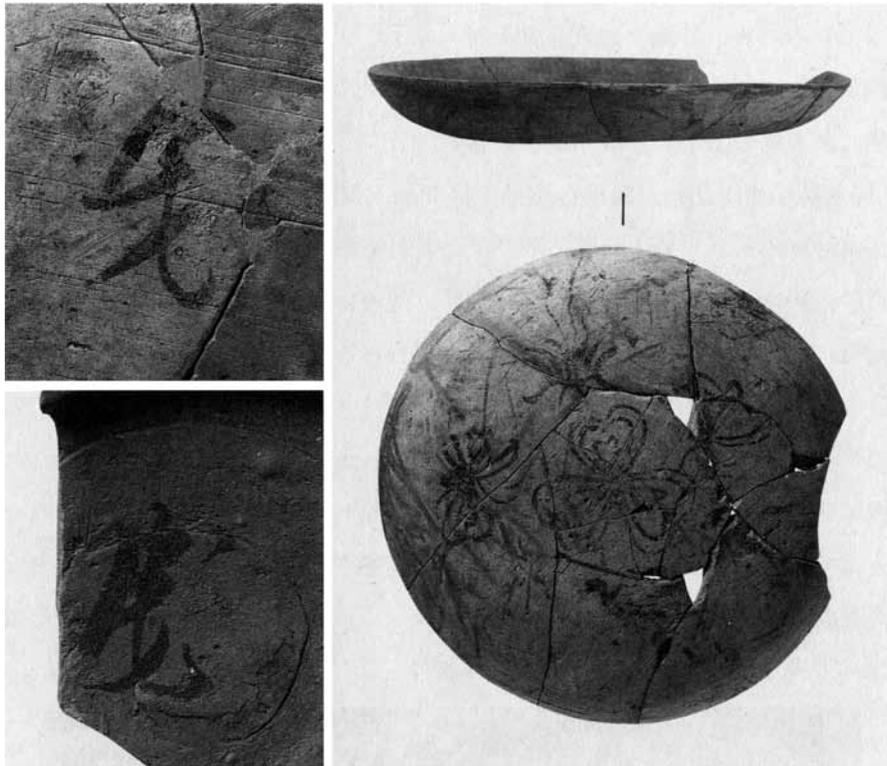


図 51 墨書土器

Ⅲ 鳥羽離宮跡

17 鳥羽離宮跡 139 次調査 (図版 1)

経過 今調査は民家の新築工事に先立って実施した。調査地は東殿の南半部に位置している。数次にわたる発掘調査によって、この付近一帯は東殿に造営された園池であったことが明らかになっている。調査地の周辺では、11 次調査や 86 次調査が実施され、玉石を撒いた洲浜を発見している。調査地は水田から宅地にする際に盛土を行っているため、重機を導入し盛土層および旧耕作土層の一部を掘り下げた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、上から盛土層 170cm、褐色腐植土層 20cm、暗褐色腐植土層 30cm、黄灰色粘土層 25cm、灰色細砂層の順であった。旧耕作土層はみられず盛土の際に取り除かれたものと考えられる。調査の結果、池の南岸の一部と洲浜の一角を明らかにすることができた。池底には洲浜に用いられる手頃な玉石が散乱しており、南側に近接して洲浜が展開するものと思われる。また 11 次調査区の一部を確認した。

出土遺物は土師器・瓦・木製品であるが、その点数はきわめて少ない。土師器は 12 世紀中頃に比定される皿の小片である。木製品の中には彫刻を施し金箔を押した仏像の一部がみられる。

小結 東殿に造営された園池の規模は 11 次調査以降徐々に進み、西岸の一部を除いてほぼ明らかにすることができた。今回の調査によって、11 次調査と 86 次調査の成果を座標で結ぶことができ、既往の調査成果をまとめることができた。

(鈴木久男)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』平成 5 年度 1994 年報告

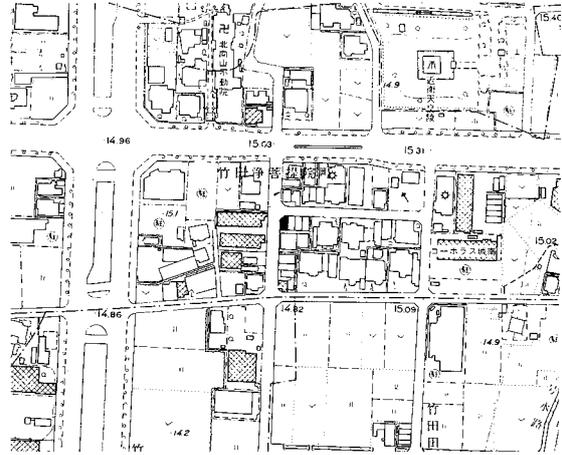


図 52 調査位置図 (1:5,000)



図 53 調査区断面 (北東から)

IV 中臣遺跡

18 中臣遺跡 71・72次調査 (図版2-4・32)

経過 都市計画街路西野山大宅線道路改良工事に伴う発掘・試掘調査である。71次調査は東から1～3区を設け、71-1・3区は発掘調査を、71-2区については立会調査を行った。また72次調査は、71-1区の東で行った試掘調査である。地形は71-3区が最も高く、71-2・1区と東へ緩やかに傾斜しており、71-1区の東端には約150cmの段差があって72次調査地が一段低くなっている。

遺構・遺物 遺物は整理箱に6箱出土した。

71-1区は竹や雑木の伐採作業を必要とした。その後、重機により表土層・盛土層を排除し、現地表下約20～60cmで遺構面に達した。遺構の残存状況は悪く、小規模なピットを確認した。遺物は石鏃1点と土師器が少量盛土層から出土した。

71-2区は栗栖野共同墓地の南半にあたり、当墓地の改葬終了後調査を行う予定であったが、ほぼ対象地全面に現地表下100～150cm程度の遺骨收拾のための掘削がなされることから、立会調査に変更して調査を行うことになった。調査は、墓改葬業者が重機で掘削した壁面の観察と遺物採集という形で進めた。その結果、現地表下約10～20cmで遺構面(地山)に達し、古墳時代後期を中心とする遺構が分布することが判明した。中には竪穴住居と考えられる遺構も確認した。土師器・須恵器などを採集した。

71-3区は重機掘削の結果、竹藪であったと考えられ、調査区全面がすでに地山が深く掘削され、現地表下120cm前後まで客土が認められた。遺構は全く遺存していなかった。

72次調査地は、71-1区とは段差をもって低くなっており、遺構の有無を確認する試掘調査を実施した。盛土層・旧耕作土層を排除した現地表下約40cmで、幅20～30cmの東西方向の溝状遺構を3条確認した。深さはいずれも3cm未満と浅いが、3条とも平行していることから、削平された畝状遺構の残欠と考えられる。遺物は古墳時代の土師器小片が少量出土した。このことから、遺構面が削平されているが、71-1区との段差は後世に行われた人為的なものではなく、古墳時代以前には形成されていたと考えられる。

小結 本報告の71・72次調査では、良好な成果をあげることができなかった。71次調査地は中臣遺跡の中で最も標高の高い地区に含まれ、71-2区では古墳時代後期の遺構が分布していることが判明した。今後周辺の調査に期待したい。

(高橋 潔)

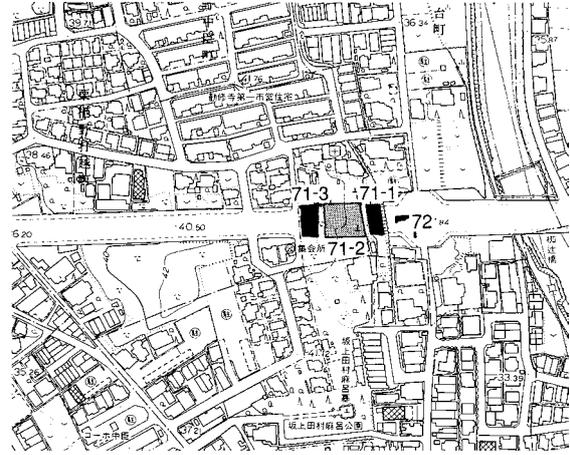


図54 調査位置図(1:5,000)

V 長岡京跡

19 長岡京左京一条三坊・東土川遺跡 (図版1)

経過 調査地は長岡京左京一条三坊十二町に該当している。また縄文時代から古墳時代の遺跡である東土川遺跡にもあたっている。近辺での既往の調査については、平成元年(1989)に実施された京都市下水道局ポンプ場建設に伴う発掘調査があり、調査では長岡京時代の建物と大規模な流路を検出し、流路内から多量の木簡が出土した。また同年に当調査地から南東約100mの西羽東師川東接地で同事業に伴う発掘調査を実施している。調査では弥生時代から古墳時代の河川を検出しており、それに伴う古墳時代後期のしがらみも検出している。

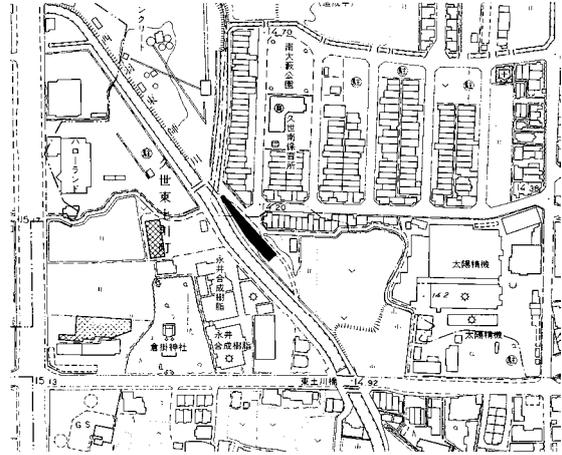


図55 調査位置図(1:5,000)

以上のことから本調査地は両者の調査地間に位置していることもあり、関連する遺構の検出が予想された。

遺構・遺物 調査の結果、近世の暗渠8条、土塋4基、弥生時代から中世の流路1条を検出した。暗渠は幅が0.3～0.4m、深さは0.5～0.6mで、暗渠間では切あいがみられ新旧がある。また暗渠の方向については、ほぼ真北のもの、現西羽東師川と同一のもの、それ以外のものとに3別できる。切あい関係から真北のものが古い。土塋については検出状況から暗渠に伴う施設と考えられ、平面形態は円形と方形がみられる。流路は調査区全体が流路堆積であり、規模は幅10m以上、深さは5m以上である。



図56 全景(南東から)

出土遺物は整理箱に1箱であった。遺物は、弥生時代から近世のものでほとんどが土器類である。土器類には弥生土器、須恵器、瓦器、陶器、陶磁器がある。土器類以外に石包丁、漆器碗がある。出土遺物の大半が流路内からで、磨滅が著しい。

小結 調査の結果、近世遺構と弥生時代から中世の流路を検出した。調査区全体が流路の中であることも判明した。近辺の調査から陸部が予想されたが、陸部は当調査地よりも東側に想定できる。流路は中世以降埋め戻され、当地一帯は耕作地となり、新たにそのための用水路として西羽東師川が開削されたと考えられる。

(加納敬二・永田宗秀)

20 長岡京左京五条四坊 (図版1)

経過 発掘調査に先行して、平成5年(1993)4月に同事業に伴う試掘調査(本概要第2章Ⅲ-6)で中世の堀、平安時代から鎌倉時代の遺物包含層を検出した。そのため当地には当該期の遺構が残存していることが判明、発掘調査により遺構の性格、広がり把握することになった。

調査にあたっては試掘トレンチを中心に調査区を設定した。なお、試掘調査の結果、現地表から遺構面までが2.8mあることから、調査では1.5m下で幅1.0mの水平な段を設け、勾配にも配慮した。

遺構 検出した遺構の総数は108基である。遺構の時期は鎌倉時代から室町時代である。遺構には柱穴、土壇、溝、井戸、堀がある。以下主要な遺構について述べる。

堀1 調査区の東半部の大半をしめる。幅4m以上、深さ1.5m以上で南北方向の流れをもつが、北半部で調査区外東に折れ曲がる。

堀2 調査区北端で検出した。幅2m以上、深さ1.5m以上で、東西方向の流れをもつ。

井戸1 堀1に切られた状態で検出した。上部は削平を受け、下部が残存していた。径0.8mの円形の井戸で、深さは2.0m以上ある。

土壇1 調査区北半部の西端で検出した。そのため遺構全体の半分以上は、調査区西外に延びる。径2.0mの円形で、深さは0.5m以上ある。

遺物 出土遺物は整理箱で18箱あった。長岡京時代から室町時代の遺物が出土した。ほとんどが土器類である。土器類には土師器、須恵器、瓦器、陶器、輸入陶磁器があり、土師器、瓦器が大半をしめる。土器類以外には瓦、木製品、石製品が少量ではあるが認められる。



図58 土壇1出土土師器小型壺

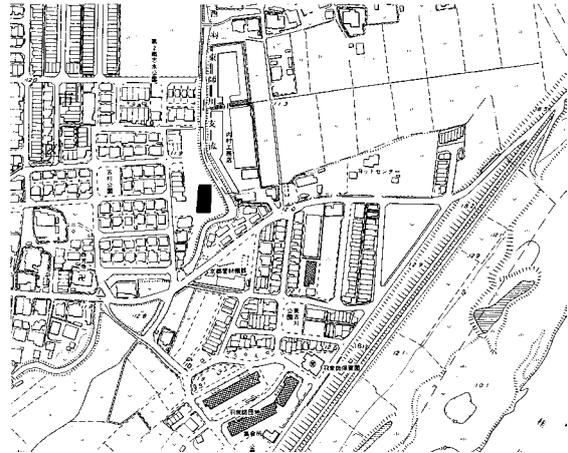


図57 調査位置図(1:7,500)

出土遺物はほとんどが堀1からで、土師器皿、瓦器碗の完形も認められる。また土壇1から完形の土師器小型壺が2個体出土した。

小結 検出した堀1は規模、位置関係から集落、あるいはなんらかの施設を区画する機能をもったものであり、また堀の西で検出した鎌倉時代の柱穴群を切っていることから、鎌倉時代以降の堀であると考えられる。

調査地一帯は平安時代末期の荘園・古川荘の一部にあっている。鎌倉時代には廃絶し、14

世紀以降には当地内に古川館の存在が古文献に認められる。そのことから今回の調査で検出した堀は古川館に関連する遺構とみられる。 (加納敬二・永田宗秀)

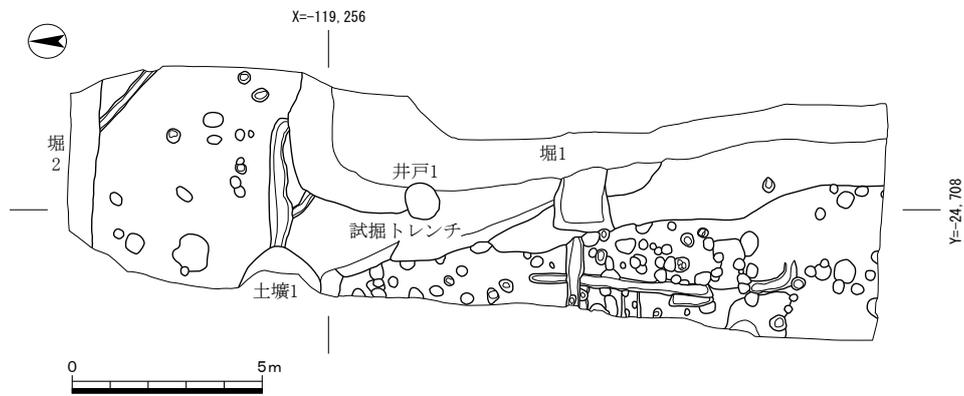


図59 遺構平面図 (1:200)



図60 全景 (北から)

21 長岡京左京六条三坊・水垂遺跡 (図版1・33・34)

経過 今年度の調査は、調査地の北端部で、D区の弥生時代・古墳時代、A区の長岡京期・古墳時代・弥生時代の遺構調査を実施した。調査区は、長岡京左京六条三坊一・二・七・八町に該当すると共に、弥生時代から古墳時代の遺跡（水垂遺跡）の範囲に含まれる。

調査では、弥生時代・古墳時代の遺構の確認および、長岡京期の遺構の確認を主な目的とした。

遺構 調査地の地形は、北西から南東へ緩やかに傾斜する。基本層序は上から、第1層現代耕作土層・床土層（厚さ0.4 m）、第2層灰黄色泥砂層（中世以降の堆積土、厚さ0.5 m）、第3層黄色泥砂層（平安時代以降の堆積土、厚さ0.2 m）、第4層黄褐色泥砂層（平安時代の堆積土、厚さ0.2 m）、第5層灰オリーブ泥砂層（古墳時代堆積土、厚さ0.1 m）、第6層暗褐色砂泥層（厚さ0.1 m）、第7層暗褐色泥砂層（無遺物層、厚さ1.0 m）、第8層暗青灰色粘土層（無遺物層、厚さ0.4 m）、第9層緑灰色粘土層（無遺物層）である。

第5層上面で長岡京期、第6層上面で古墳時代、第7層上面で弥生時代の遺構面を検出した。

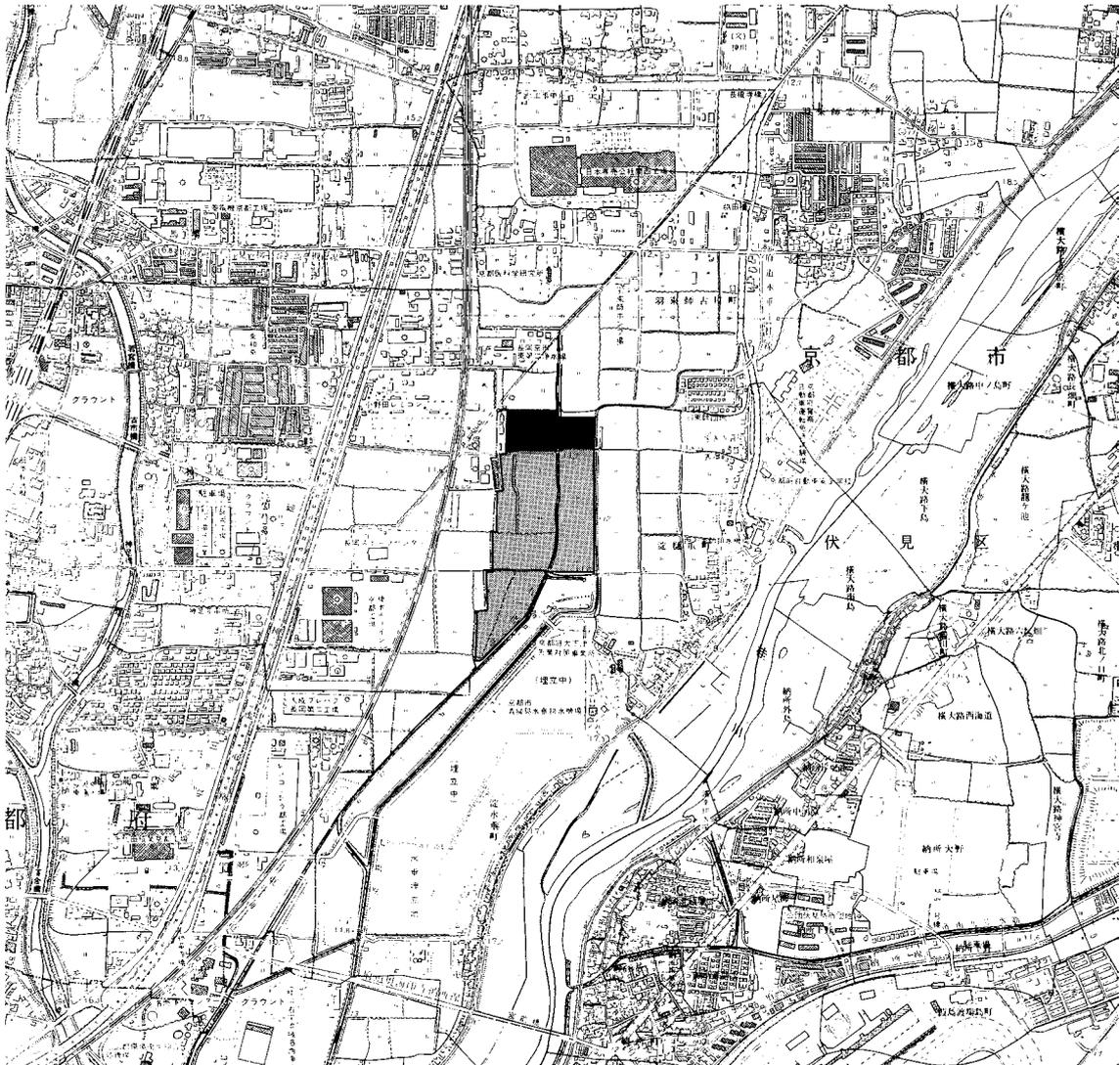


図61 調査位置図 (1:20,000)

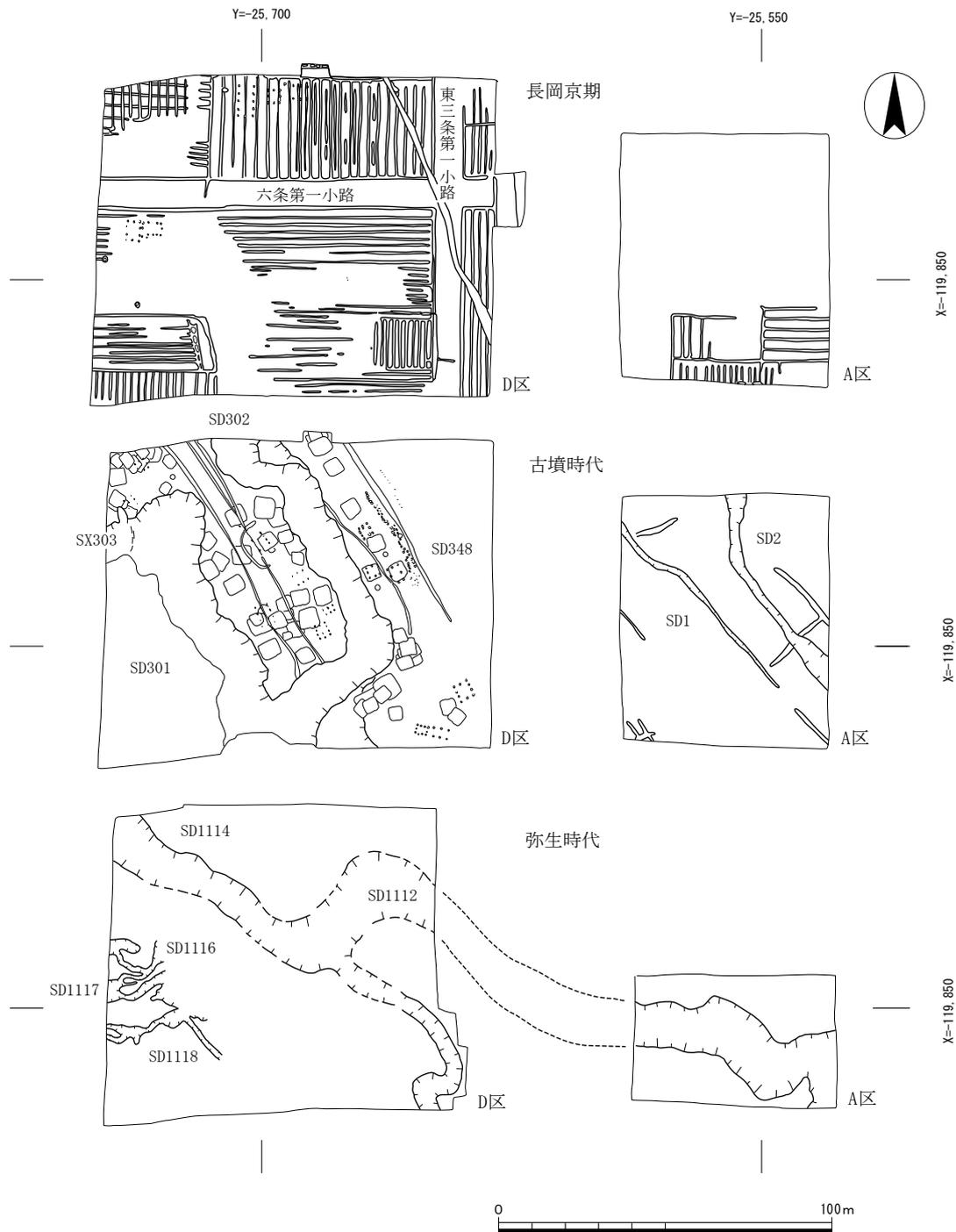


図62 遺構配置図 (1:2,000)

D区古墳時代遺構面は、北から南へ約0.5m下がり、中央部の標高は9.3mである。検出した遺構は、弥生時代・古墳時代・古墳時代以降・長岡京期に分かれ、以下時代ごとに概要を述べる。

弥生時代 弥生時代の遺構はD・A区で検出した。遺構は河川のみで、他の遺構は検出していない。河川は、基本的には地形に沿い北西から南東に流れるが、かなり蛇行する。規模は一定していないが、幅約10m・深さ約2.5mである。埋土は灰褐色砂泥層・灰色砂層の互層である。底部に凹凸があり、凹部に弥生土器が堆積する。

古墳時代 古墳時代の遺構は、D・A区の全域において検出した。D区では、北西方向から流

れ、南側で合流する2条の河川（S D 301・302）に沿って、住居地区を検出した。A区では斜方向の溝（S D 1）と、西部で水田畦畔痕跡を検出した。

住居地区は、D区北西部と、河川に挟まれた地区、河川左岸に展開する。竪穴住居67棟、掘立柱建物14棟を検出した。集落の時期は、古墳時代前期（庄内式から布留式併行期）と、古墳時代後期（6世紀後半）である。

前期の住居群は、調査地北西部・中央部・北東部・南東部の4グループに大きく分かれ、その中がさらに数単位に分かれる。各グループは建て替えがみられ、各々変遷する。中央部グループは中央に東西溝S D 801（幅3m、深さ1m）があり、住居群を区画するものと推定できる。竪穴住居は方形の他、円形もしくは多角形のものがある。大きさは一辺3mの小型のものから、一辺7mを越える大型のものまでである。内部施設は、支柱4本、中央に地床炉、南辺中央に貯蔵穴をもつのが一般的である。大型の住居では、4辺にベッド状遺構をもつものもある。住居は拡張したものも多く、4～5回の拡張がみられるものもある。

後期の住居群は、前期と同様な場所に5グループに分かれる。各グループはさらに竪穴住居・掘立柱建物で構成されるグループ（北西部・中央北部・北東部）と、掘立柱建物だけで構成されるグループ（中央南部・南東部）に分かれる。竪穴住居はすべて方形で、大きさは一辺3mの小型のものから、一辺7mを越える大型のものまでである。内部施設は、支柱4本で、北辺中央に竈があり、南辺中央に貯蔵穴をもつ。掘立柱建物は1間×2間や2間×3間の小型のものも多く、最大で3間×4間である。中には束柱を備えた高床倉庫と考えられるものがある。

住居地区の東側では、小穴が点々と連なる遺構を検出した。これらの遺構は畑耕作に関連したものと考えられるが、性格は不明である。

河川は、いずれも幅10～15m、深さ1.5～3.0mの断面逆台形である。埋土は上層灰色粘土層、下層灰色砂泥層（中に砂の間層が入る）である。埋土中からは土師器・木製品などが出土した。河川内には、S D 301北部に1箇所（S X 303）と、合流部1箇所（S X 1123）に水量調節用の堰を設ける。堰は、溝に直行して杭列を斜めに打ち込み、その上に横方向の丸太材1～2本を組み合わせ構築する。残存状態は悪い。用材には自然木の他、加工した棒・板材なども含まれる。

古墳時代以降 D区中央で道路を検出した。北で西に振る斜方向で、幅約5m、両側溝（幅約0.5m、深さ約0.3m）をもつ。時期は、両側溝からの遺物が出土していないため確認できないが、古墳時代の遺構を切ることから、古墳時代以降と推定できる。

長岡京期 長岡京期の遺構は、D区・A区で調査を行った。D区東拡張区では、六条第一小路が東三坊第一小路交差点から12mの地点で消滅し、小路両側溝から南に継続する溝を検出した。南側溝との交点で人面土器を検出した。その東側で河川を検出したが、西肩だけの検出にとどまったため規模は不明である。A区では、六条三坊七・八町内については、掘立柱建物などの遺構は全く検出できなかった。南部では小溝群を検出した。小溝群の時期は不明であるが、四行八門の宅地割りにほぼ合致する。

遺物 遺物は整理箱にして、土器類21箱、木器類67箱、しがらみ用材53箱である。弥生時代・

古墳時代・長岡京期の各時期のものがあるが、大半は古墳時代のものである。

弥生時代の遺物は、主として河川から出土した。弥生土器は壺・甕・鉢・高杯などがあり、畿内第Ⅰ様式の土器を含んでいる。

古墳時代の遺物は、主として河川から大量に出土した。竪穴住居からは少ない。土師器には甕・壺・高杯・鉢・器台・小型丸底壺・小型器台・異形土器などがあり、残存状況はよい。時期は庄内式から布留式併行期で、主体は布留式である。須恵器には甕・甗・杯・高杯などがある。木製品には盤・槽・鋤・鍬・馬鍬・田下駄・縦杵・臼・柱・階段・扉・壺鐙などがある。土器の他土錘・石錘・鉄鏃が出土した。

長岡京期の遺物は側溝などから出土した。土器には土師器杯・皿・椀・人面土器、須恵器杯などがある。

平安時代以降の遺物は、包含層などから少量出土した。

小結 今年度の調査で明らかになった成果を、時代別にまとめる。

弥生時代 弥生時代前期（畿内第Ⅰ様式新段階）にさかのぼる河川を検出することができた。出土した土器は少量であるが、磨滅していない。このことから、当調査地は西接する雲ノ宮遺跡（前期から中期の集落跡）の範囲に含まれていると考えられる。

古墳時代 D区では、集落の住居地区を検出した。既存の調査で、水田や畑（E・F・G区）、墓（E-1区）を確認しており、今回の調査で集落の構造がより具体的に明らかとなった。集落住居地域の規模は確認できないが、調査地の北部約100mでの調査（左京第295次調査、長岡京市）では当該期の遺構を検出していないことから、当調査区を南東端として北西方向に広がると推定できる。

集落は、庄内式併行期に成立し、布留式併行期まで営まれ、その後、6世紀前半にも住居が営まれ、短期間で廃村となる。庄内式から布留式併行期には、住居が大きく4グループに分かれ、その中がさらに数単位に分かれて変遷する。6世紀代には、前期と同様な場所に5グループの竪穴住居・掘立柱建物が営まれる。河川内では堰を検出し、南側の水田に水を供給した状況が確認できた。

集落は、桂川右岸に位置する西から延びる扇状地状の微高地上に立地している。集落は、北約1kmの羽東師遺跡（前期から後期）、南西約500mの下八ノ坪遺跡（前期）などと共に乙訓南東部地域の集落群の一つを形成していたと考えられる。

長岡京期 条坊関係では、六条第一小路が東三坊第一小路交差点からすぐ東側で、消滅することが明らかとなった。六条第一小路ならびに東三坊々間小路については、A区の推定位置で側溝を検出できず、これらの道路は当初から施工されていないと推定できる。道路に面する各町内では遺構は全く検出できず、また道路側溝からも遺物がほとんど出土していないことから、町内は宅地として利用されていなかったものと考えられる。

六条第一小路東端部では人面土器が出土しており、当時の祭祀の実態を知る貴重な手がかりとなった。

（上村和直・木下保明・吉崎 伸）

VI その他の遺跡

22 植物園北遺跡1 (図版2-2・35・36)

経過 調査地は、上賀茂神社の南東方向へ約0.5kmのところに位置している。周辺における既往の調査は、本調査地の北に隣接する箇所です平成元年(1989)に行った。この調査では、弥生時代末期から古墳時代の竪穴住居や中世の社家町に関連すると思われる遺構が検出されており、本調査においても同様の遺構が検出されると予想された。

本調査は京都市立上賀茂小学校講堂建て替えに伴い、植物園北遺跡および上賀茂神社社家町

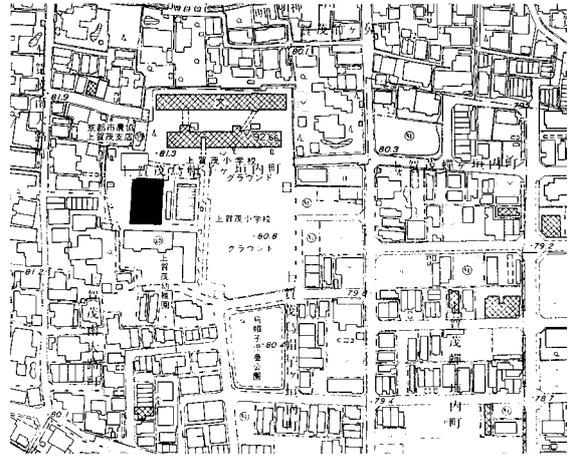


図63 調査位置図(1:5,000)

の遺構検出を主な目的として行った。調査に先立って試掘調査を実施した。その結果、弥生時代から江戸時代にかけての遺構が良好な状態で残存していることが判明したため、発掘調査を実施した。

調査に際しては、現代盛土層・旧耕作土層および旧建物の基礎を機械力によって掘り下げて調査を開始し、以後は手掘りによって遺構検出を行った。

遺構 調査地の基本層序は、現代盛土層、旧耕作土層・床土層、遺物包含層、無遺物層(地山)となっており、遺物包含層は黒褐色系泥土層、無遺物層(地山)は黒褐色系砂礫層・褐色系砂泥層である。地山までの深さは15～55cmで、その平均標高は80.7mである。

検出した遺構は弥生時代・古墳時代から江戸時代の各時期にわたる。以下、その概要について報告することとする。

古墳時代の遺構は、平成元年(1989)調査では竪穴住居を10棟検出しているが、今回の調査では3棟分検出した。いずれも後世の遺構などによる攪乱のため、全容を把握するまでにはいたらなかった。同時に調査地全体が削平を受けていたため遺構の残存状況もきわめて悪く、壁溝、柱穴などだけが残存しているものもあった。

流路SD664は調査区の北東で検出した。北西から南東にかけての方向に流れており、川幅は5m以上、深さは検出面から0.9mを測る。流路の埋土は大きく3層に分けられ、上から砂層、砂泥層、礫層となっている。礫層からは弥生時代から古墳時代初期、砂泥層からは古墳時代前期、砂層からは古墳時代の遺物が出土している。

平安時代の遺構には、後期に属する建物SB3がある。東西3間以上、南北3間の掘立柱建物である。建物の振れはN-9°19'-Eを示している。西・南面に庇があるような配置だが、中世的な構造になるかも知れない。

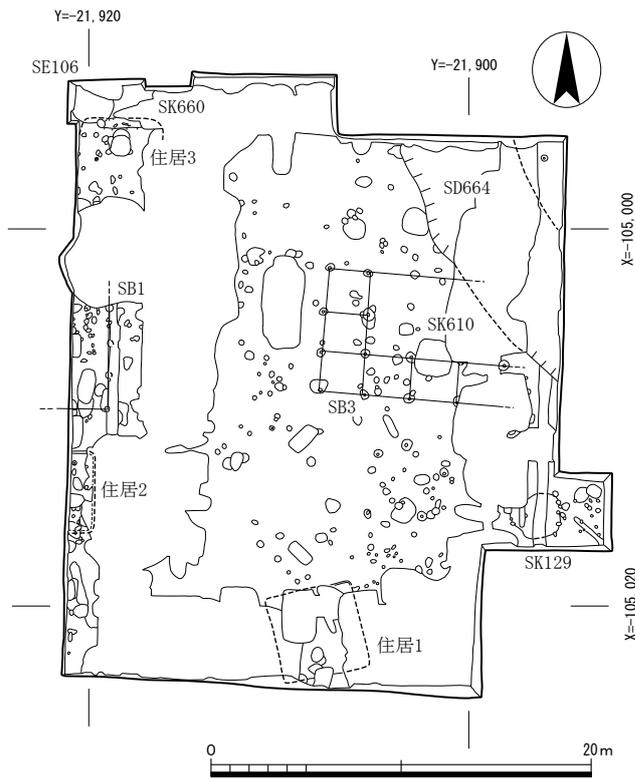


図64 遺構平面図 (1:400)

土壙 S K 129・610・660 はいずれからも平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土している。S K 610・660 は一辺 2 m 前後の隅丸方形の形状を示している。そして S K 129 は、遺構の四隅に杭を打ち込んだと思われる Pit を 4 基検出している。この 3 基は北西から南東にかけてほぼ一直線に並んでおり、何らかの意図があったように見える。

中世になると、平成元年 (1989) 調査に比べると遺構がかなり少ないといえる。本調査では、調査区の西端に小土壙、Pit などが集中している。しかし遺物がまとまって出土しているのは井戸 S E 106 だけである。S E 106 は石を組んで井筒としており、その径は 1 m 前後を測る。検出面より 1.3 m まで掘り下げたが、安全

性を考慮して中断した。井戸の中には人頭大の石がぎっしりと詰まっており、遺物の出土は少なかった。

近世以降では多くの遺構を検出することができたが、性格を把握するまでにはいたらなかった。このうち土壙の多くはいわゆる塵芥処理壙であった。

時期不明の遺構としては、S B 1・2・4 として扱っている遺構がある。このうち 1・2 はほぼ真南北の振れを示しており、4 は 3 と同程度の振れを示している。S A 1 も遺構内から少量の土器片が出土するだけで、時期の決定はできなかった。

遺物 出土した遺物は整理箱にして 55 箱であった。そのほとんどは土器であり、瓦類は少なかった。

古墳時代の遺物は主として、S D 664 からである。上層からは古墳時代後期を中心とする土師器、須恵器、中層からは古墳時代前期の土師器、下層からは土師器小片が出土している。いずれもあまり磨滅していないため、近くで捨てられていたという推測が得られる。住居内からの遺物は、住居 1 の貯蔵穴とみられる土壙から高杯がほぼ 1 個体分出土したが、他は量も少なく小片で器形などは特定できない。

平安時代の遺物は、S K 129・610・660 から多く出土している。出土遺物は通有のもので特に目立ったものはない。東西溝 S D 657 から平安時代中期から後期の遺物が出土している。

中世の遺物は、土壙、Pit などから少量の土器片が出土している。調査区北西部の井戸からも出土があるが、大きな石が投棄されていたため、遺物の量は少ない。井戸の掘形からは土器片が

数片出土しただけであった。

近世から近代の遺物は、S K 21・22・36 から多くの遺物が出土している。出土状況から、これらは塵芥処理壙とみられる。

S D 34 からは近・現代の遺物が出土しているが、このうち高さ5cm程度の化仏とみられる金銅仏が1点出土している。平安時代の遺物であろうか。

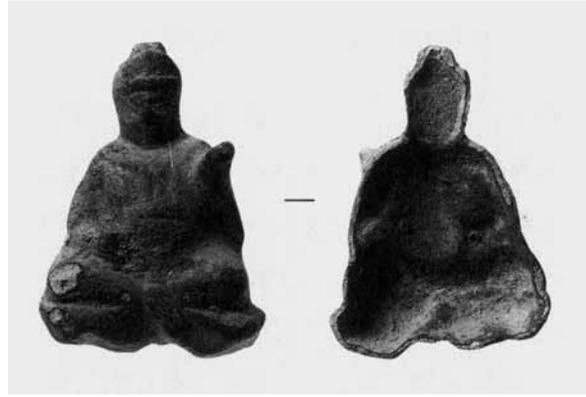


図65 S D 34 出土金銅仏

小結 今回の調査では、既存の建物の基礎による攪乱が激しいことと、調査地全体が削平を受けていたため、遺構の残存状況は悪かった。上賀茂神社社家町に関する遺構の検出は少なかった。しかし平安時代後期の建物・土壙などをまとも検出しており、この時期の遺構の広がり注目される場所である。古墳時代の遺構は、竪穴住居、自然流路があるが、遺構の密度は概して希薄であった。

こうした状況でも次のようにいくつかの成果が認められる。

① 中世の遺構が多数あると予想していたが、思ったより少なく、それ以前の平安時代の遺構を発見することができた。このことは上賀茂神社との関係が注目される。すなわち、「中世の社家町」に先行する形態であったかと思われる。

② 地質の分布を検討すると、東では拳大の礫、中央では砂・礫、西では粘質土層となっており、竪穴住居は粘質土層の条件の良いところでみつまっている。竪穴住居は調査地の西方にさらに広がっているものと考えられる。

③ 弥生時代から古墳時代にかけての自然流路を発見しており、土器の磨滅も少ないことから近くで投棄されていたものと推定できる。

(久世康博・津々池惣一)

23 植物園北遺跡2 (図版2-2)

経過 本調査は、住宅新築工事に伴う文化庁国庫補助事業による発掘調査である。調査地は植物園北遺跡のほぼ中央に位置し、平成2年(1990)調査地の北西約100mの地点にあたる。平成2年調査では、古墳時代前期の竪穴住居や平安時代後期の掘立柱建物を確認しており、本調査においても同様の成果が期待された。

遺構・遺物 調査区の大半は、現地地表下70～80cmまで現代盛土層・旧耕作土層が堆積しており、これを排除すると地山(黄褐色砂泥層)

となった。調査区の南西部のみ様相が異なっており、地表下20～40cmまでが旧耕作土層で、その下層に遺物を含む暗褐色から黒褐色の砂礫層を確認した。つまり、旧耕作土層までを排除した段階で、南西部が30～40cm段状に高く、その北東側は人為的に北西-南東方向に削平され、地山が露出したものと考えられる。なお、この段の北東面には石垣・溝などが設けられており、当地が宅地化される以前にはすでにこの段は形成されていたようである。

すでに地山まで削平されていた調査区北東側では、近代以降の攪乱を検出したのみで、遺構は検出することができなかった。

南西部段上で検出した暗褐色から黒褐色の砂礫層からは、弥生土器あるいは古墳時代土師器の小片や平安時代の土器類が出土したことから、当初遺物包含層と考えた。しかし、地山面まで掘り下げたところ、北西-南東方向に幅80cm前後、深さ約10cmの砂層からなる落込を検出した。地山面が緩やかに南東へ傾斜していること、また堆積状況を検討した結果から、流路状遺構の一部であることが判明した。出土遺物から平安時代前期頃には埋没したものと思われる。

遺物は整理箱に2箱分出土した。調査区南西部の流路状遺構からは、弥生土器もしくは古墳時代の土師器と考えられる土器小片の他、平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土した。緑釉陶器の中には火舎の一部が1点ある。遺物はこの他に、攪乱や旧耕作土層などから弥生土器、古墳時代の土器、平安時代の緑釉陶器、中世の青磁・土師器などが出土している。

小結 本調査では、調査区南西部で北西から南東方向の流路状遺構を検出したが、北東部はすでに深く削平を受けており、遺構は遺存していなかった。しかし出土した遺物から、本調査地周辺にそれらの時期の遺構が存在することは十分考えられる。特に、流路状遺構から緑釉陶器火舎片が出土したことは重要な成果であろう。(高橋 潔)

『京都市内遺跡発掘調査概報』平成6年度 京都市文化観光局 1995年報告

註 高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』

(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994



図66 調査位置図(1:5,000)

24 相国寺旧境内 (図版1・37)

経過 本調査は、京都市立烏丸中学校の屋内運動場増改築に伴い実施したものである。調査地点は、現在中学校の南東に位置する相国寺の旧境内北西部に該当する。学校敷地内では昭和56年(1981)、本調査対象地東側の校舎改築に伴う発掘調査が行われ、相国寺の塔頭の一部と考えられる建物基壇の他、多数の室町時代の遺構を検出している。これに隣接する本調査でも、相国寺に関連する遺構の検出が期待できた。

遺構 調査区の基本的な層序は、既存体育館建設時の整地層および校庭の盛土層が約0.2mあり、以下江戸時代、室町時代、平安時代の整地層がそれぞれ0.1～0.2m堆積し、現地表面から0.7～1.0mで地山の黄褐色砂礫層に達する。

平安時代から江戸時代にかけての遺構を合計151基検出したが、大半が室町時代後半のものである。

調査区西半および南端部で、5条の堀状遺構を検出した。西半部では溝14-1・2、溝19、溝50が重複する。これらの堀の上層部には、江戸時代から現代にいたる整地層が不定形の落込を埋めるように堆積していた。溝14-1と溝14-2は、当初一連のものと考えていたが、南側のやや幅が広く調査区外南東方向に延びるもの(溝14-1)と、これより北に延長し西方向に鍵形に曲がるもの(溝14-2)とは異なる遺構であろう。溝14-2の南北部は溝14-1との境界の部分で、南端の壁面が確認できた。ただし、両者の底部が一致することや東壁のつながりを考慮すると、それぞれ開削時期に差はあるものの、同時に機能し埋没した可能性もある。溝19は南北方向の堀で両端とも延長方向は不明である。溝14-2に切られる北端は、あるいは土壙23が堀の延長にあたり、この部分で西向きに方向を変えるのかもしれない。南端は逆に東方向へ曲がる部分を確認しているがその延長は不明である。溝50は調査区内で両端部を確認している。長さが約10mの短いものである。

堀の規模は、溝14-1が検出面での幅約3.5m、深さ約2mと最も大規模で、その他は幅1.8～3.0m、深さ1.2～1.8mとそれぞれ異なる。一方、調査区南端の東西の堀、溝140は南肩が調査区外であり、北肩のみを検出した。底部も調査区南壁が崩壊する危険があったため完掘できず、未確認である。推定規模は幅約3m、深さ約2mである。

これらの堀の埋土は礫を多く含んだ締まりの悪い土で、いずれも水流の痕跡が認められず、いわゆる空堀であったと推定できる。遺物は瓦類が大半で、この他土師器、陶磁器類などが出土している。すべて15世紀末から16世紀半ばのもので、各堀の時期差は遺物の比較のみではほとんど認められない。

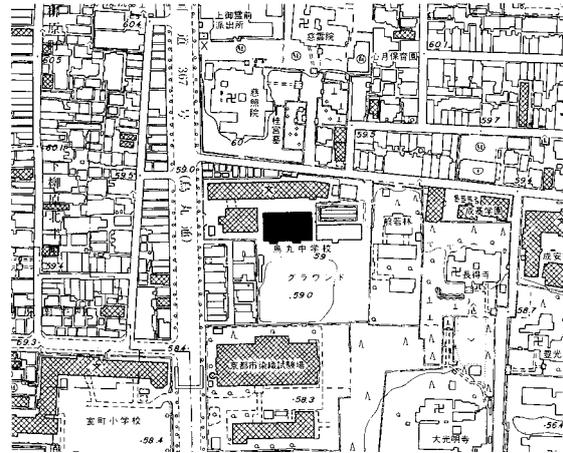


図67 調査位置図(1:5,000)

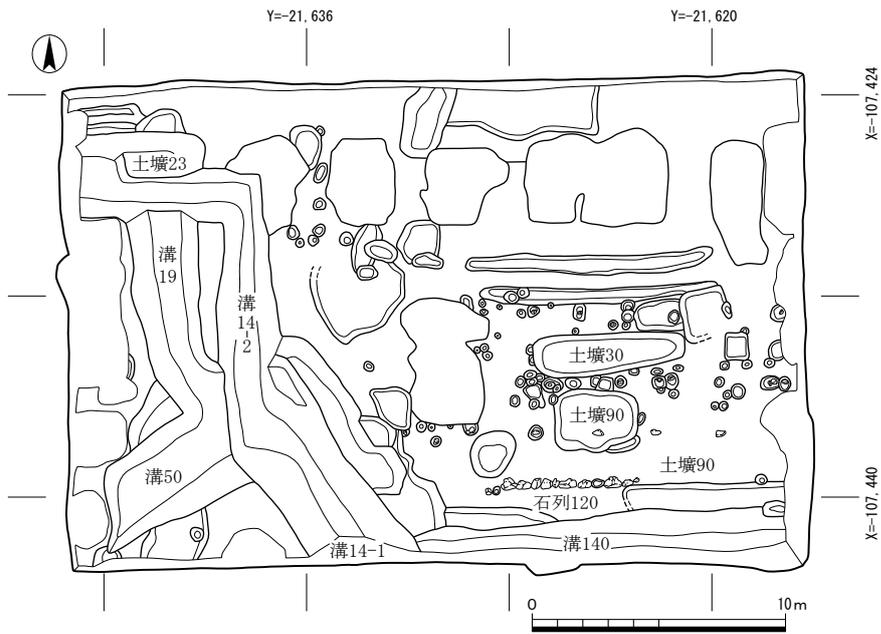


図68 遺構平面図（室町時代）（1:300）

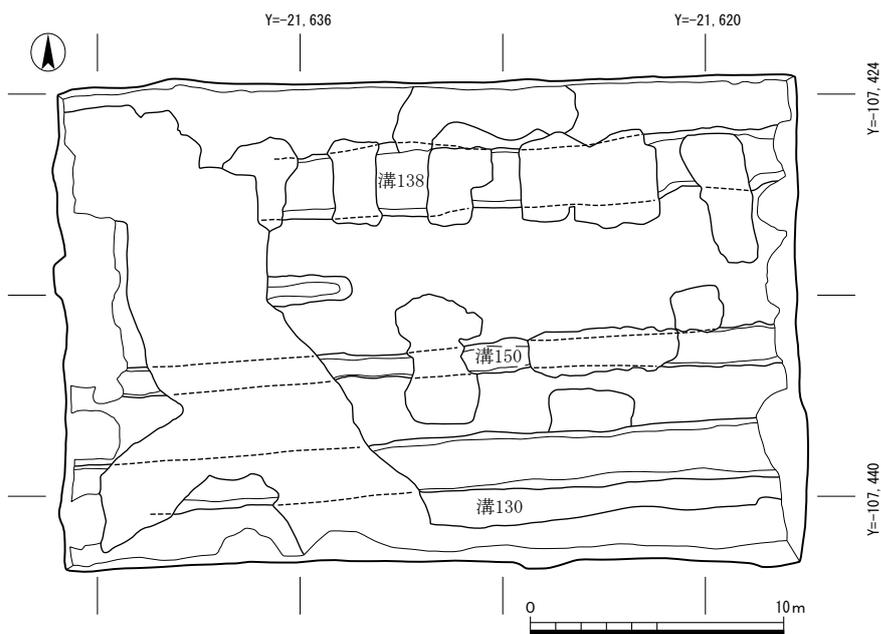


図69 遺構平面図（平安時代から鎌倉時代）（1:300）

この他の室町時代の遺構には、土壇、柱穴、石列などがある。土壇30は埋土に焼土、炭を多量に含んでおり、火災の処理跡と推定できる。出土遺物は、瓦類が大半で土師器、陶磁器類に加えて鉄釘も多く、大部分に火を受けた痕跡がある。土壇90からは、多量の土師器皿が出土している。土師器皿は小から中皿が量的に多く、いわゆる「ヘソ皿」が目立つ。石列120は、東西約6mに及ぶ石列である。川原石11個が南側に面を揃えて並び、2箇所での石の抜取痕も確認した。おそらくは寺内の地割りを示すもので、北側の柱穴群や平行する溝140と関係する

可能性がある。また、調査区の東半部では多数の柱穴を検出した。建物の復原にはいたらないが、石列120と平行に並ぶものもある。それぞれの柱穴から出土する遺物はごく少量だが、いずれも室町時代のもので、ほぼ他の遺構と同時期に収まる。

平安時代から鎌倉時代の遺構には、溝と土壇がある。このうち3条の溝はそれぞれ調査区外に延長する東西溝で、すべて座標の東西軸よりやや北に振れる。溝130は、検出面で幅約2.2m、深さ約0.8mで、両壁はほぼ垂直に落ちる。埋土は上・下層に分層でき、上層からは鎌倉時代前期（13世紀）、下層からは平安時代末期（12世紀）の土器類がまとまって出土した。溝138は攪

乱により断片的に破壊される。幅 2.5 ～ 3.0 m、深さ約 0.3 m で、平安時代末期の土器類の小片が、ごく少量出土した。溝 150 は幅 1.0 ～ 1.6 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m で断面形は逆台形を呈する。平安時代前期の土器類がごく少量出土した。なお、それぞれの溝の間隔は溝 130 と 150 の間が 2.2 ～ 2.5 m、溝 138 と 150 の間が 5.2 ～ 5.4 m である。

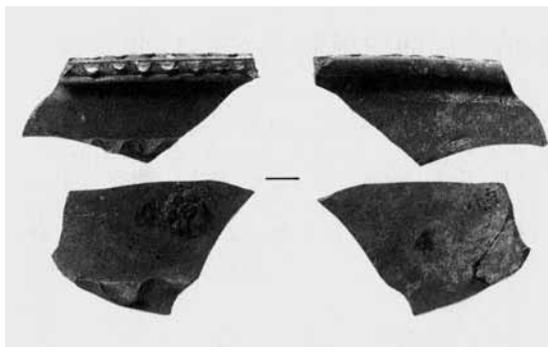


図 70 溝 14 - 1 出土陶器

遺物 遺物は整理箱にして 160 箱出土した。

瓦類が大半で、時代別にみると室町時代のものがその多くを占める。

室町時代の遺物には瓦類、土器類、石製品、鉄製品などがあり、火を受けた痕跡をもつものが多い。大半が瓦類であるが、これらの中には赤く焼けたものや火ぶくれをおこして膨張したものが多く、火力の大きさがうかがわれる。特徴的なのは甗の占める割合が非常に高いことで、溝 14-1 を例にあげれば瓦類の総数に対して甗が約 23% を占める。輸入陶磁器は、中国産青白磁の碗・皿類が多く、白磁の大型壺や青磁の大皿、香炉の破片も数点出土している。この他、粉青沙器壺や産地不明陶器（図 70）の破片数点が出土している。後者は、無釉で赤褐色の胎土と口縁および胴部の波型の装飾が特徴的で、花模様の押型を貼りつけたものもある。国産陶磁器類は鉢・甕が多く、碗・皿類は少ない。美濃、瀬戸の碗あるいは皿の底部に朱で「卍」、「如」などの文字や記号を印したものが十数点出土している。

平安時代の遺物には瓦類、土器類がある。平安時代末期（12 世紀）の遺物は溝 130 からまともに出土している。量的には土師器皿が最も多く、軒平瓦を含む瓦類、須恵器の杯・杯蓋・壺・瓶・甕・鉢、瓦器、輸入白磁、緑釉陶器などもある。また、室町時代の遺構からも平安時代の遺物が混入して出土している。

この他、遺構は確認していないものの、古墳時代の土師器片も数点出土した。

小結 本調査では、相国寺に直接関係する建物などの遺構や、創建時の遺構の検出はできなかった。しかしながら、室町時代後半の遺構密度や遺物の内容は、明らかに相国寺と関係するといえよう。調査地点は相国寺旧境内だが、現在の烏丸通付近は室町時代には寺域の西限にあたり、寺の中心からはずれた位置にある。相国寺には、応仁の乱の際に東軍細川方が、また天文の乱では細川晴元がそれぞれ陣を構えているが、本調査で検出した堀は、これらと同時期の 15 世紀後半から 16 世紀半ばのものである。複数の堀が同時に機能していたとは考えられず、ごく短期間のうちに掘られては埋められるということが繰り返されていたようである。

また、出土遺物の多くが火を受けた痕跡のあることは、相国寺が創建以来、室町時代だけでも失火で 2 回、兵火で 2 回、合計 4 回の全焼があり、これによるものであろう。平安時代の遺構の検出も大きな成果である。これまでの相国寺境内および周辺の調査では、遺物の出土はあるものの遺構は確認されていない。今回検出した東西溝 3 条の性格は不明であるが、平安京外の当域でこのような遺構を検出した結果は重要で、周辺調査の進展が期待される。 (近藤知子)

25 特別史跡特別名勝慈照寺庭園 (図版2-2・38・39)

経過 調査は防災工事を契機として行われた。発掘調査は、防災工事が国宝の東求堂と観音殿(銀閣)を中心としたものであり、調査も東求堂を中心とした慈照寺境内北部地域と、観音殿を中心とした南部地域に分かれた。消火栓の既存管入れ替え工事部分では、発掘調査の他に立会調査も行っている。

遺構 調査区は7箇所に分かれており、以下各調査区での主な遺構について概略する。

1 トレンチ A・B・Cの3区に分かれる。A・B区では、池、樹木の根幹、近世の流路などを検出している。池は東西規模が約24m、深さは約0.2m。東肩は20～40cmの石を幅1mで带状に組み護岸している。池の西岸と考えられる部分は、急な傾斜をもって遺構面が約1m高くなっており、後の時代に1m大の花崗岩がこの斜面に捨てられているため、護岸施設などを確認することはできなかった。



図71 調査位置図 (1:1,500)

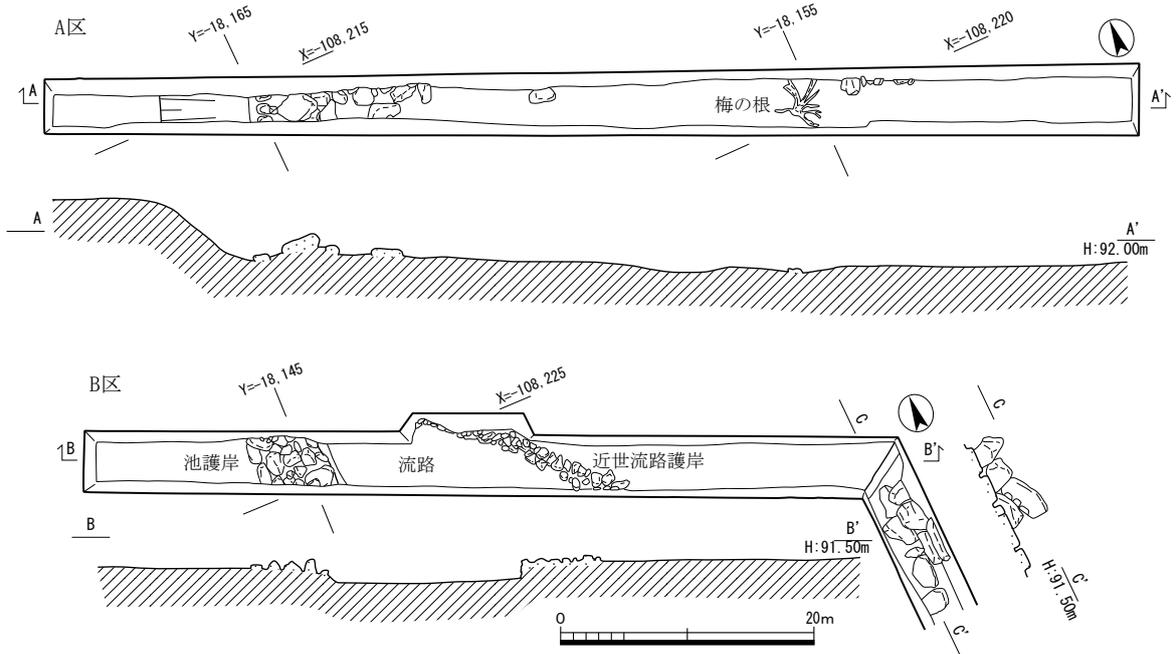


図72 1トレンチ実測図(1:600)

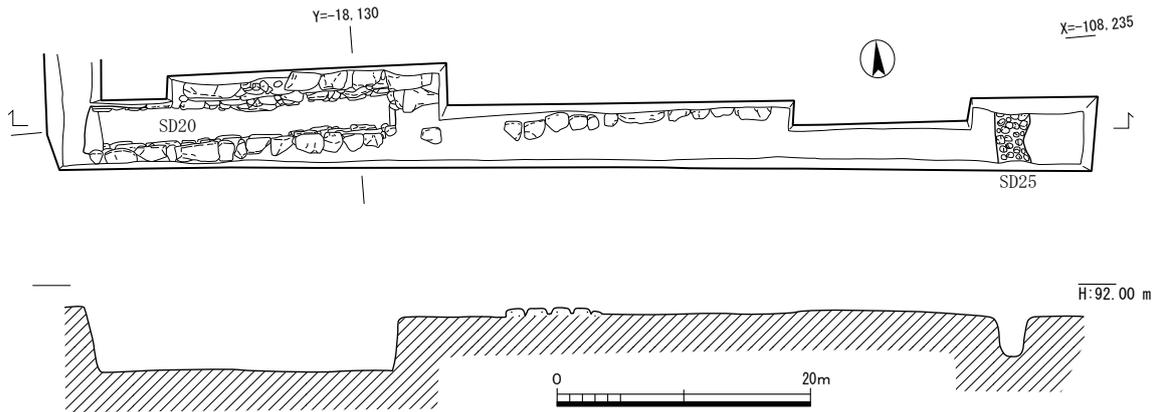


図73 2トレンチA区実測図(1:600)

2トレンチ A・B・C区に分かれる。A区では、石垣を伴う石組溝（SD20）、溝、花崗岩の切石の導水施設を検出している。SD20は、慈照寺境内の北端を画する尾根の南裾に位置する。溝は、幅0.8m、深さ1.2mを測り、花崗岩の割石を積み上げ造られている。石の大きさは、溝の南側が0.2～0.4m、溝の北側はやや大きく長辺0.6～1.2mを測る。さらに溝の北肩の石積みの上には、20cm前後の控えをとり、高さ1.2mの石垣を積み上げている。石垣は1トレンチC区へとL字形に続く。石材は花崗岩で、石の中には幅9～19cm、深さ10cm前後の石を割ったときの矢穴が残る。裏込めについては調査区の関係で確認できなかった。

A区の東側では拳大の石を詰めた暗渠（SD25）を検出している。SD20と直行関係にあるが、これに流し込むためのものかどうかは切り合い関係を含めて不明である。

C区では、花崗岩で造られた導水施設を東西方向に長さ4mにわたって検出した。導水施設は、花崗岩の切石を組み合わせて造られており、下石と蓋石からなる。上部は、薄く黄色の粘土

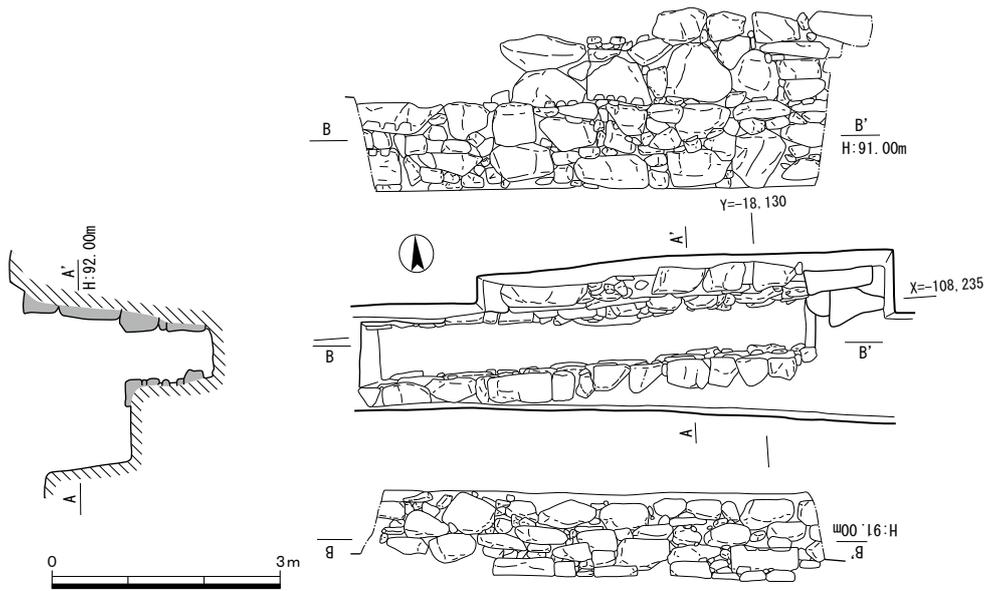


図74 SD20実測図(1:100)

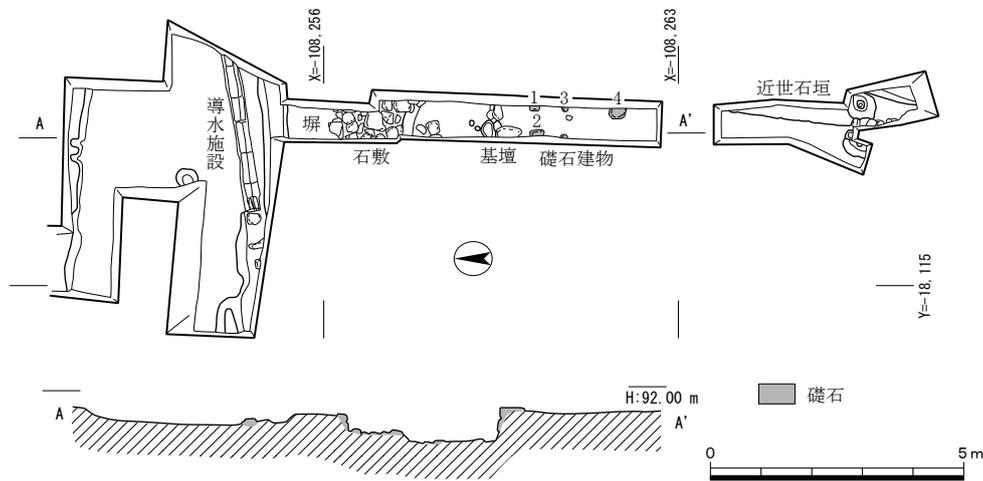


図75 2トレンチC区・3トレンチ実測図(1:150)

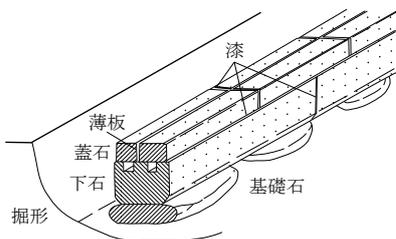


図76 導水施設模式図

で覆われていた。据え付け方法は、幅40cmの溝の中に90cm前後の礎石を30～50cm間隔に置いた上に下石を置いている。導水施設の構造は、下石には水が流れる2条の溝を掘っており、上石はそれぞれの溝に蓋をするように2枚ずつ置かれている。また、下石の小口にはくり込みがあり、下石同士を強固に組み合わせている。下石は長さ90cm前後、幅30cm、厚さ

20cmである。溝は幅、深さともに5cm。蓋石は長さ52～63cm、幅11～12cm。2枚の蓋石の間には厚さ5mmの板を挟み、接合部の上面に漆と布で目地をしている。下石と蓋石の間も同様に目地をしている。なお、この導水施設の西端は16世紀中頃の南北方向の溝によって壊されている。

3トレンチ 検出した遺構は、礎石建物、建物基壇、柱穴、石敷、石垣、溝などがある。礎石建物の柱間は、礎石1と3が0.6m、礎石3と4が1.1m、礎石1と2は0.55mである。この礎石建物の基壇は30～40cmの石を40cmの高さに積んでいる。基壇の北側は、幅1.5mの溝となっ

て多量の炭が堆積していた。しかし、溝の底には拳大の石と粘土が敷かれており、この北側にある石敷きの裏込めと同様であるため、本来は石敷きが基壇まで広がっていたものと考えられる。この石敷遺構の北側には高さ40cmの石垣があり、これに続いて北側に幅60cmの高まりが続くことから塀の基礎の石垣と考えられる。

4 トレンチ 東求堂の北東10mの調査区である。近世の溝、井戸、室町時代の遺構面を現地地表下0.8mで検出している。このことから東求堂周辺の土地は室町時代よりかなり高くなっていることがわかる。

5 トレンチ 現地地表下1mで室町時代の整地層と、これによって埋められていた谷状地形を確認している。谷状地形は現地地表下3.5mまで掘り下げたが、地山は確認されなかった。

6 トレンチ 室町時代の暗渠(SD30)、景石の根固め遺構を確認した。SD30は、幅0.8mで延長2.9mを確認した。暗渠は10cm前後の石を並べ、この上に厚さ5cm、直径30cmの扁平な石を並べ、さらにこの上に黄色の粘土を敷いている。南北方向でやや蛇行しながら池に向かう。なお、暗渠の検出面が現在の水面と同レベルとなる。

7 トレンチ 室町時代の整地層を現地地表下0.9mで確認した。

立会A区 現地地表下0.2mまで近世・近代の参道の路面が確認されたが、室町時代は包含層が確認されたのみである。

立会B区 江戸時代の石組溝、室町時代の集石遺構・土器溜が確認されている。

立会C区 腐植土が堆積する南から北へ下がる落込を確認する。1トレンチで検出した池の南岸と思われる。

遺物 遺物は瓦、土師器などが出土している。时期的には、東山殿造営以降の遺物が多いが、

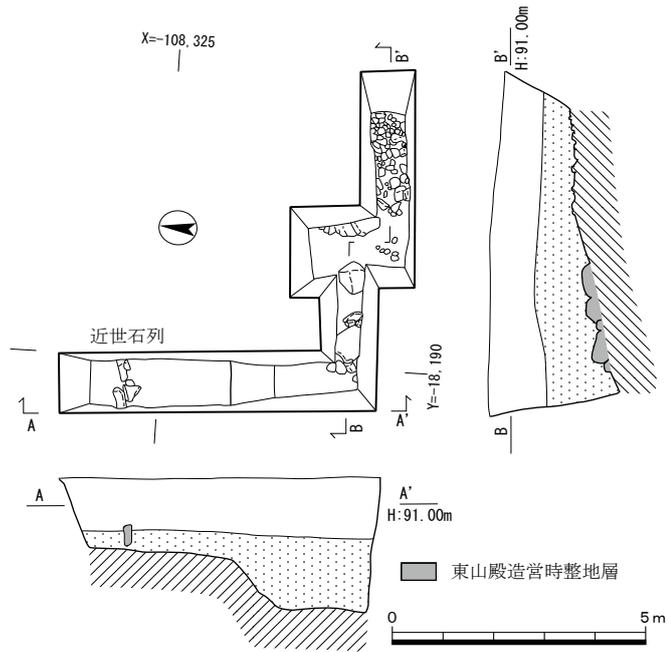


図77 5トレンチ実測図 (1:150)

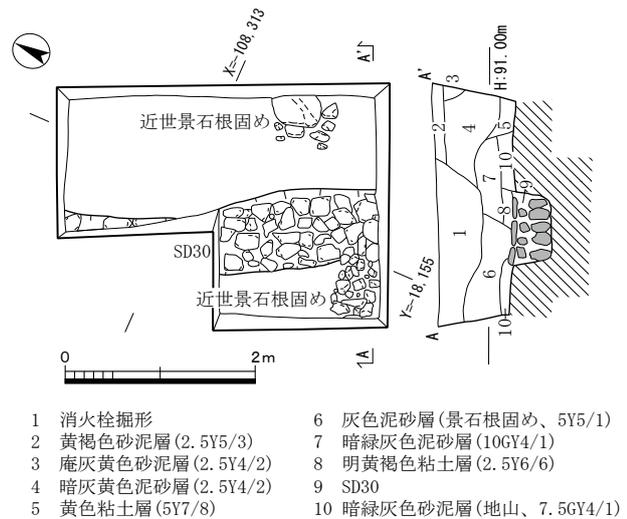


図78 6トレンチ実測図 (1:80)

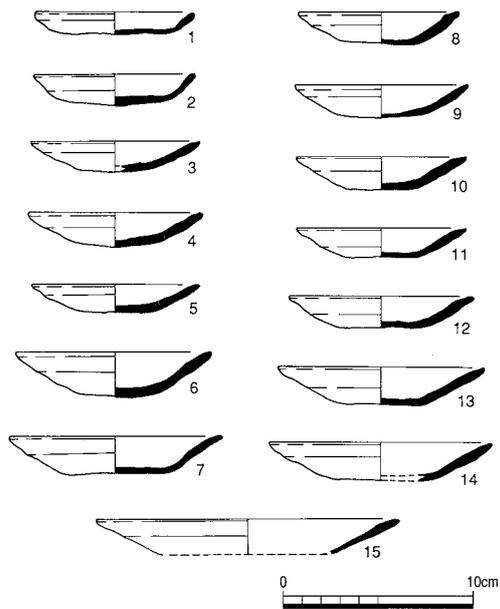


図 79 出土土器実測図 (1~2: 5トレンチ
整地層 3~15: 2トレンチSD20)
(1:4)

東山殿以前の浄土寺の時期のものも出土している。土器ではSD 20 から多量の土師器皿が出土している(3~15)。土師器皿の口径は8cm前後と10cm前後の物が大半を占め、口径15cmを越える大型のものはほとんど出土していない。瓦は平安時代後期から鎌倉時代と考えられる軒丸瓦1点、軒平瓦4点があり、室町時代の軒平瓦が2点ある。この他に李朝青磁椀底部が立会C区より出土している。

小結 調査の結果、室町時代の建物、池、導水施設、暗渠などが検出された。これらは足利義政創建の東山殿の遺構と考えられる。

東山殿は、足利義政が浄土寺の寺地に文明十四年(1482)からその死の延徳二年(1490)まで造営を続けた山荘である。義政の死後、東山殿は慈

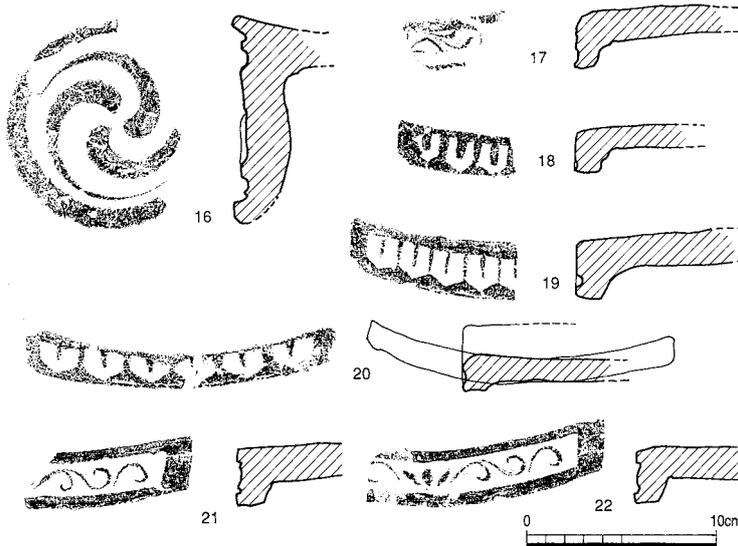


図 80 出土瓦実測図 (16・立会 A 区 17~20: 5トレンチ整地層
21~22: 3トレンチ包含層) (1:4)

照寺となり境内は徐々に荒廃していく。境内が現在の姿になったのは慶長以降のことである。慈照寺境内では、幾度かの発掘調査が行われているが、浄土寺および東山殿に関連する明確な遺構は確認されていなかった。

2トレンチの導水施設は、その始端と末端を検出していないため、これによって引かれた水がどのように使用されたかは不明であるが、水が汚れない石製導水管という構造から、飲料水

に使用された可能性が考えられる。3トレンチで検出された礎石建物は、文献に残る東山殿のどの建物にあたるのかは不明であるが、基壇を伴うこと、北側に石敷遺構を伴うことなどから主要な建物の一つと考えられる。これらの遺構は16世紀中頃の炭層によって覆われており、この頃には東山殿の様相は、造営時と比べて大きく変化したものとみられる。原因は慈照寺の経営基盤の衰退などの人為的なものや、裏山からの流入土による自然作用を考察することができる。

以上述べてきた調査の成果は、今まで考古学的に知ることの少なかった東山殿の一端を明らかにしたものであり、東山殿を復原する上で、重要な指標を与えるものと考えられる。

(南 孝雄・百瀬正恒・清藤玲子)

26 広隆寺旧境内 (図版1・40)

経過 調査地は、右京区太秦蜂岡町36-4右京消防署の敷地で、広隆寺旧境内に比定されている。昭和55年度、平成3年度の調査地に近接し、また昭和52年度の弁天島経塚調査地の東隣にあたる。調査は京都市埋蔵文化財調査センターの2次の試掘調査を経て、平成5年(1993)4月17日から5月31日の間に発掘調査を実施した。調査面積は東西14m、南北15m、約210㎡を測った。

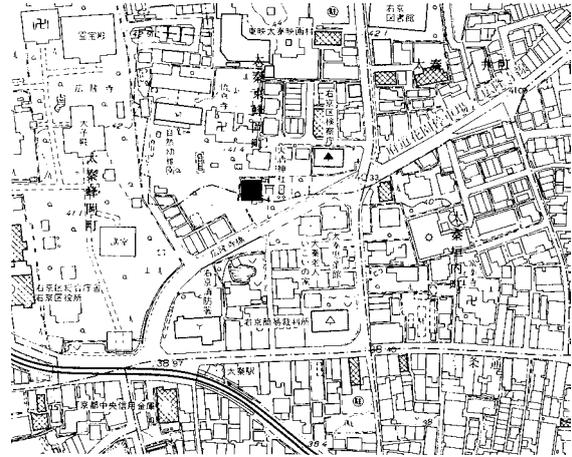


図81 調査位置図 (1:5,000)

遺構 検出した遺構には、飛鳥時代前期、平安時代中期、室町時代前期、桃山時代、江戸時代、近代以降に属するものがある。飛鳥時代前期の遺構は、竪穴住居(SB29)、土壇(SK30)がある。SB29は一辺4.5mを測る隅丸方形を呈し、北西への傾きを有する。北西辺に造り付けの竈をもつが、やや東側に偏った位置にある。これに切られる関係にあるSK30は別の竪穴住居と考えられるが明瞭ではない。

平安時代中期に属した遺構は、2条の東西溝(SD9・19)、柱穴多数がある。SD19は、幅2.0m、深さ0.3mを測り、4~5mの規則的な間隔で深浅を繰り返す。調査区東端で南方向に折れ曲がる。SD9は調査区中央付近、SD19の南側で検出した。幅1.1m、深さ0.2mを測る。柱穴は径40cm前後を測り、SD19南側に集中して検出しているが、建物としてまとまらないため、柵か垣塀などの可能性がある。

室町時代前期に属する溝(SD7・23)は、SD23が幅1.5m、深さ0.5mを測り、調査区中央で鍵形に屈曲する。SD7は幅0.5m、深さ0.5mを測り、SD23の鍵形部分で東方向から同溝に合流する。

桃山時代の溝(SD12)は、調査区南辺で検出した。幅0.5~1.0mを測る。調査区中央で南に蛇行した後やや北東への振れをもって西から東へ向かう。また、蛇行地点の南肩に厚い粘土と礫による護岸を施しており、南へ

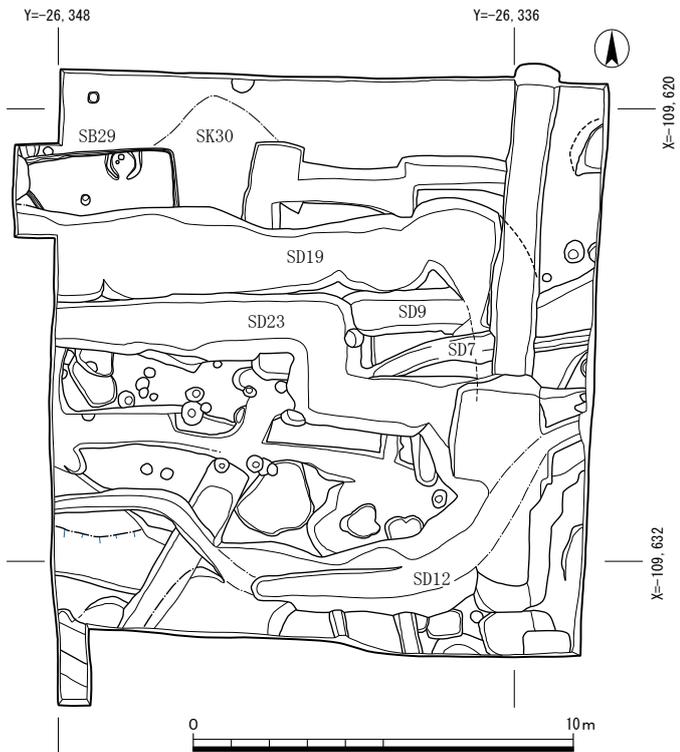


図82 遺構平面図 (1:200)

の氾濫を防いだ工事痕跡が認められる。その他では柱穴、土壙を検出している。江戸時代、近代以降の遺構には土壙、溝などがある。

遺物 出土した遺物は飛鳥時代前期、平安時代中期、室町時代前期、桃山時代、江戸時代、近代以降のものがある。

飛鳥時代前期の遺物には7世紀前半の土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。主として竪穴住居(S B 29)から出土するが、竪穴住居を切って成立する平安時代中期のS D 19の埋土に混入して出土したものもある。

平安時代中期の遺物は、S D 9・19を中心に出土した。土師器皿・釜、須恵器杯・瓶・甕、緑釉陶器椀・壺、灰釉陶器皿・椀、輸入陶磁器(白磁)皿・椀・壺、瓦(軒瓦)などがある。

室町時代前期の遺物は、S D 7・23から出土したが量は少ない。土師器皿、瓦器皿、輸入陶磁器(青磁)椀、陶器甕、鉢、瓦がある。

桃山時代の遺物はS D 12からの出土が多い。土師器皿、陶器椀(天目)、瓦類がある。江戸時代に属する遺物には、陶磁器(染付磁器)、上面を加工した礎石と考えられる石材、掘立柱の柱痕などがある。近代以降の遺物には陶磁器類がある。

小結 7世紀前半に属する竪穴住居が検出された調査地は、昭和55年度右京検察庁調査地^{註1}、平成3年度右京消防署調査地^{註2}の中間地点にあたる。また昭和54年度広隆寺霊宝殿調査地とあわせて今回で4例目の竪穴住居検出となる。広隆寺旧境内が方6坪とすれば、東側と北側の3坪で検出されたことになり、広隆寺創建期と併行する時期の竪穴住居が旧境内地に存在することになる。また周辺一帯の未調査地でも竪穴住居が検出される可能性がある。

平安時代中期、10世紀前半代に埋没したS D 19は東西方向から南北に流路を変えるが、平成3年度の右京区役所の調査^{註3}で検出した東西溝と規模、形態、埋没時期が相似する。また東西方向での傾きは本調査溝が右京区役所に比べやや北偏するものの、両溝を延長した傾きは、葛野郡条里の傾きを大きく逸脱しない範囲に収まっている。また調査地中央付近から二条通の中心まで110mが計測され、葛野郡条里坪割り数値に近い距離数値が得られる。

一方、室町時代前期、桃山時代に属する溝も引き続き近接した位置に設定されており、この地区と東西の延長が南北を区界した地区として踏襲され続けたとみることができる。これを葛野郡五条荒蒔里八～十、十五～十七の南北2坪、東西3坪とされる広隆寺の寺地を南北に分かつ坪境の有力な候補としてよからう。(平田 泰)

註1 『広隆寺跡—右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要—』昭和55年度
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981

註2 平田 泰・小檜山一良「広隆寺旧境内1」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995

註3 平田 泰・小檜山一良「広隆寺旧境内2」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995

27 南春日町遺跡 28次調査 (図版2-3)

経過 調査地は、大原野神社から南東200mあたりに位置する。当地は小字名で「安岡」と称されている。

昭和59年(1984)の大原野地区全域を対象とした試掘調査^註では、当地点で中世の柱穴、土壇、溝などの遺構を検出している。調査にあたっては、遺構を検出した試掘トレンチを中心に、トレンチを設定し、遺構の性格、広がり^註の把握に主眼を置き実施した。

遺構 調査の結果、室町時代から近世の遺構を検出した。室町時代の遺構には柱穴、土壇、溝、井戸がある。近世の遺構は柱穴、土壇、溝である。調査トレンチの遺構面は、西端と中央では1mの比高差があり、きわめて急な傾斜が形成されている。

以下、室町時代の主要な遺構について概述しておく。

建物1 東西2間、南北3間の南北棟である。東西5m、南北6mの規模をもち、東の方向に振れる。

建物2 東西3間、南北2間の東西棟である。規模は東西5m、南北4m。建物1と同様の方向に振れをもつ。

井戸1 円形の素掘り井戸である。規模は径2.0m、深さ0.8m。底部には曲物を据えていた。

井戸2 円形の素掘り井戸である。規模は径1.5m、深さ0.5m。

溝1 L字状に曲がる溝である。幅0.5～1.3mで、深さ0.2～0.5mを測る。

遺物 出土遺物は整理箱で3箱あった。室町時代から近世の遺物が出土した。ほとんどが土器類で土師器、瓦器、陶器、陶磁器がある。土器類以外には瓦と木製品がある。

土器類は、土師器皿が大半を占め、次いで瓦器椀、陶器鉢、陶磁器椀の順である。遺物は溝1から多く出土しており、土師器皿はいわゆる「へそ皿」と称されるもので、中には完形も認められる。

瓦は、丸瓦の完形3個体で、土壇から出土している。

木製品は、井戸1の下層から曲物底板が出土した。

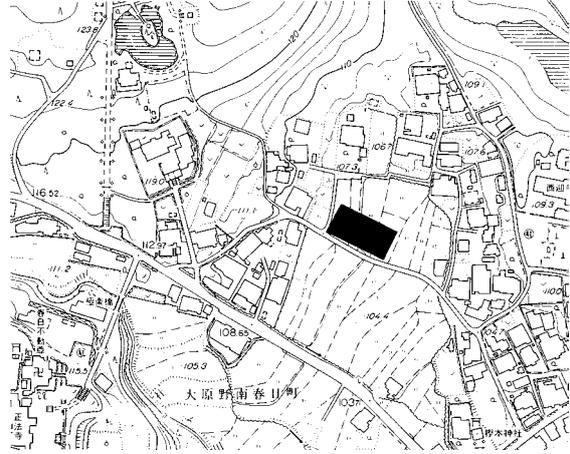


図83 調査位置図(1:5,000)

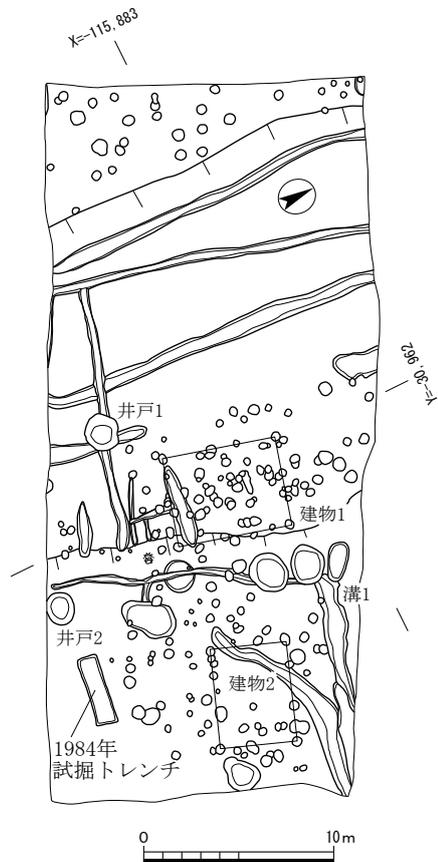


図84 遺構平面図(1:400)

小結 調査地を含む一帯は、小字名で「安岡」と称され、緩やかに傾斜をもつ安定した丘陵で、居住には適した地であったことが考えられる。建物1・2はそのことを示唆する遺構である。2棟の建物は方位、出土遺物から、同時期の建物であることがわかった。また、建物1には井戸1が、建物2に井戸2が伴い、建物2の北と西には区画溝と考えられる溝1があり、それぞれ独立した住居でもある。建物の性格については、今回までの大原野地区の一連の調査から、大原野神社に関連する施設、あるいは社家跡と考えられる。ただ従来の調査では、平安時代から鎌倉時代が主体であったことから、今回の事例は社家の動向を検討する上で興味深い事実である。

(加納敬二・永田宗秀)

註 加納敬二・辻 裕司「大原野南春日町遺跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987



図85 全景(南東から)

28 上久世遺跡 (図版1・41)

経過 調査地は、上久世遺跡および城の内遺跡の範囲内で、上久世遺跡6回目の発掘調査である。既存の調査では、調査地北隣接地（道路建設・昭和50年〈1975〉調査）で弥生時代の竪穴住居、北東側（日光苑マンション・平成3年〈1991〉調査）で弥生時代から古墳時代の竪穴住居・河川、平安時代の建物・土壙墓、東側（京都市立上久世小学校・昭和51年〈1976〉調査、街路・昭和57年〈1982〉調査）で中世屋敷跡（城の内遺跡）などを検出した。調査地では工事に先立ち試掘調査を実施し、竪穴住居・土壙などを確認した。このため発掘調査を実施することとなった。調査目的は弥生時代から古墳時代の集落に関する遺構の確認である。

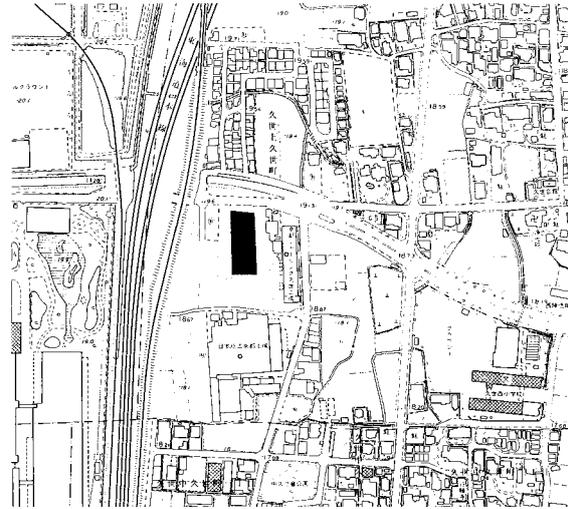


図86 調査位置図 (1:5,000)

を確認した。このため発掘調査を実施することとなった。調査目的は弥生時代から古墳時代の集落に関する遺構の確認である。

遺構 調査地の地形は北から南、西から東へ緩やかに傾斜する。層序は上から、第1層黒灰色土層（耕作土、厚さ15cm）、第2層黄灰色土層（床土、厚さ25cm）、第3層黄灰色砂泥層（無遺物層）である。第3層上面（標高18.2～17.9m）で弥生時代から古墳時代の遺構を検出した。遺構の残存状況から、遺構面は数10cm後世の削平を受けていると想定できる。検出した遺構は、弥生時代（I期）と古墳時代（II期）に分けられる。

I期 この時期の遺構としては、調査区南部で湾曲する溝（SD1）を検出した。SD1は幅約9.0m、深さ0.8mで、断面はV字形である。埋土は4層に分かれ、最下層に土器多数と炭が堆積し、上層は遺物が少ない。溝の南側に顕著な遺構がないこと、溝の方向が地形に直行していることから、集落の南を限る環濠と考えられる。

溝の北側では竪穴住居2棟と土壙を検出した。竪穴住居は、SB26からSB40と変遷する。SB26は円形で溝と同時期である。SB40は五角形で西側を一部拡張する。最も良好に残存した住居で、覆土から多量の土器が出土した。他の遺構としては調査区北部と竪穴住居南東辺で土壙群を検出した。北側のものは規模は小さく不定形のもので、炭などを多量に含むものもある。南側のSK10（径1.5m、深さ1.0m）は円筒形の大型のもので、底部に施設はみられない。

遺構の存続期間は畿内第IV～V様式前半で、SD1はIV様式末には埋没する。SB26はIV様式、SB40はV様式である。土壙は出土遺物が少ないため時期は特定できない。

II期 この時期の遺構としては、全域で竪穴住居・土壙・柱穴を検出した。竪穴住居は6棟検出し、いずれもかなり削平を受け残存状況は悪い。すべて方形で、規模は一辺5m前後が一般的で、一辺3mのものも1棟ある。内部施設は中央に地床炉、南辺中央に貯蔵穴を持つのが特徴である。SB60は南に一度拡張を行い柱と貯蔵穴を南に移す。竪穴住居の主軸方向は、おおむね



図87 遺構実測図 (1:400)

北西-南東方向を示すが、S B 90・55・28 と、S B 115・60・27 は若干異なり、時期が異なるものである。

その他の遺構としては、調査区北部で方形周溝状遺構S X 110を検出した。部分的にしか検出できず、性格は不明である。また、全域で小規模な土壇を検出した。いずれも出土遺物が少なく、時期の特定はできない。

古墳時代以降の遺構は、調査地全域で検出した多くの柱穴がある。柱穴は上部が削平され、建物としてまとまらなかった。柱穴の時期は、出土遺物が少ないため、特定できない。

遺物 遺物は、整理箱で25箱出土した。内容は弥生土器・土師器・須恵器・石製品などがある。

弥生土器には、壺・甕・鉢・高杯がある。溝S D 1・住居S B 40から多量に出土したが、他の遺構からは少ない。時期は畿内第Ⅳ～Ⅴ様式である。石製品には石剣（再加工痕あり）・石鏃・砥石などがある。

古墳時代の遺物には、土師器壺・甕・高杯、須恵器高杯・甕がある。住居・土壇などから出土したが、量は少ない。時期は前期から後期である。

小結 今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代までの集落の居住区域を検出し、従来の調査と合わせて、当遺跡の構造や変遷を明らかにすることができた。

弥生時代中期（Ⅳ様式）では、環濠が廻り、すぐ北側に住居S B 26、空地をおいて住居2棟（焼失竪穴住居、昭和50年〈1975〉調査）がある。この時期の集落規模はそれほど大きくはない。

弥生時代後期（Ⅴ様式）では、環濠は埋まり同様な場所に住居が建てられる。住居地域の北東側には川を隔てて住居（竪穴住居1棟、平成3年〈1991〉調査）がみられ、住居地域が拡大する。

古墳時代前期（庄内式から布留式併行期）では、今回の調査地の他、北東（竪穴住居4棟・掘立柱建物1棟、平成3年〈1991〉調査）、東側（竪穴住居3棟、昭和50年〈1975〉調査）で住居が検出されており、数棟のまとまりを持って、住居地域がみられる。遺跡内には北西から南東方向の流路が数条確認され（昭和59年〈1984〉立会調査）、この自然流路に沿って住居地域が展開した様子が明らかとなった。

遺跡は、桂川右岸の氾濫平野に点在する自然堤防上に立地し、中久世付近で検出している河川の北側に位置する微高地上に集落が営まれたと推定できる。遺跡範囲は東西約0.5km、南北約0.4kmと推定できる。調査地の北西約2kmの下津林遺跡（弥生時代後期から古墳時代前期）、南西約0.5kmの修理職遺跡（弥生時代後期から古墳時代前期）、南に隣接した中久世遺跡（弥生時代前期から古墳時代）などと共に、乙訓地域北部の集落群の1つを形成していたと推定できる。

和直・
勲)



(上村
出口)

図88 S B 40（北西から）

29 六波羅政庁跡 (図版1・42)

経過 京都国立博物館の西門（正門）前に、売改札施設が新設される計画がたてられた。調査対象地は、鎌倉時代の六波羅政庁、桃山時代以降の方広寺跡が推定されることから発掘調査を実施した。調査区は、大和大路通に面して北区と南区の2箇所を設定した。

現況では、調査地と大和大路通では東西に約1mの比高差があり西が低い。南北は両調査区間で約30cmの比高差があり南が低い。

遺構 調査地の堆積状況は、北区は舗装面・博物館設立に伴う整地層を含めて約35cmあり、直下の方広寺の時期の整地層が厚さ約15cmみられ、黒褐色砂泥層の遺構面に達する。南区は、舗装面・博物館設立に伴う整地層は45～70cmみられ南側が厚い。方広寺の時期の整地層は15～40cmあり、北側が厚くなっている。その直下が灰黄褐色泥砂層である。これらが第1遺構面で、標高は北区で約37.6m、南区で約37.0mを測る。

両区とも第1遺構面は方広寺の時期と、鎌倉時代から室町時代の遺構が混在していることが明らかになった。また第2遺構面は地山直上で平安時代後期と考えられる。

第1面（桃山時代から江戸時代） 柵列・建物などの柱穴、築地、溝、土壌などを検出した。

北区では、東側で南北方向の柵列を4間分、柱間約2.6mで検出した。中央では掘立柱建物を南北に長く1間×6間分検出した。柱間は東西3.2～3.3m、南北は1間ごとに1.3mと2.0mにいかわる。調査区の西端、方広寺の築地の南延長線上で築地と側溝を検出した。築地は基底部の一部が残っていたにすぎない。側溝は幅約0.6mで、断面形はU字形を示す。

南区では、径1.7mを越す円形の土壌15と、その北側の土壌250を検出した。土壌250は、2.3×2.1mの方形で播鉢状の断面形をなす。上部に直径10～30cm大の石が多量に詰め込まれていた。

以上の遺構は方位がそろっていることや出土遺物からみても方広寺に関連する何らかの施設であることが推定できる。

第1面（鎌倉時代から室町時代） 溝、土壌、柱穴を検出した。

北区で検出した土壌77・80はいびつな長方形を呈し、大きさは共に約1.6×0.8mである。室町時代に属する完形の土師器皿が出土しており、土壌墓の可能性を考えている。

また南区でも同様の遺構、土壌112を検出した。規模は1.7×1.0mで楕円形をなす、北半部で完形の土師器の皿が4枚出土した。この他南区には鉾澤が10点余り出土した土壌111、井戸の可能性のある土壌105がある。

両区ともに柱穴は掘立柱と礎石を用いるものが混在する。前者は掘形の直径約30～60cmで、直径10～20cmの柱あたりをもつ。後者は浅く掘り下げた掘形の上に、大小の礎石を1個据える。

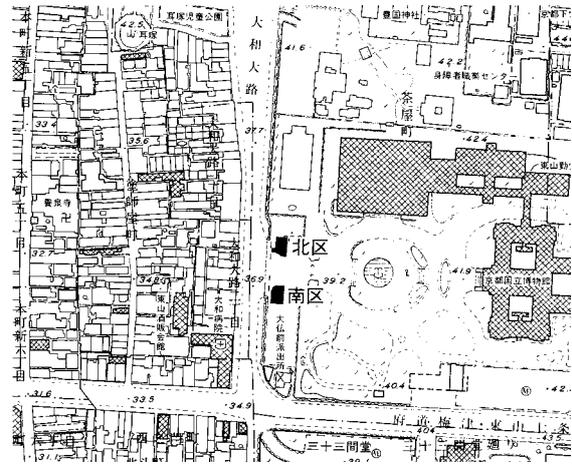


図89 調査位置図 (1:5,000)

礎石の大きさは10～40cmを測る。北区の柱穴83・95のみ2～10cmの礫を詰めていた。柱穴群は南北線より東西の線上に柱穴が集中する傾向がある。

第2面（平安時代後期）溝、井戸、土壇、柱穴を検出した。

北区の北端で井戸150・200を検出した。井戸150が井戸200より新しい。井戸150の掘形は約3.5×4.0mの方形で、その中央やや西寄りに、一辺約1.5mの方形縦板横棧組みの井筒がある。井筒の底には30～40cmの厚さで拳大の石が詰めてあった。井戸200は掘形が一辺約3m、井筒は一辺約1.8mの井戸であったと推定できる。廃棄の際に破壊されたためか、木枠などの施設は残存していない。

第2面でも柱穴は掘立柱と礎石を用いるものの両方がある。前者は掘形の直径約20～50cmで、柱あたりの直径はほとんどが約10～15cmである。後者は30cmを越える大きさの礎石はない。

なお、平安時代後期の整地層中から弥生時代後期から平安時代前期の土器が出土したが、これらの時代の遺構は確認していない。

遺物 整理箱にして74箱が出土した。江戸時代の遺物は瓦が大部分を占める。瓦は軒瓦、丸・平瓦を通じて、いずれも非常に大型で、厚さは3cmに達する。中には「大」字を刻印したのがあり、方広寺の大仏殿に葺かれたものと考えられる。

鎌倉時代から室町時代のものが、遺物の中では最も量が多い。大部分を土師器の皿類が占めるが、全体の形状を復原できるものは少ない。

平安時代後期の遺物は、土師器の皿類が大部分を占める。北区の井戸150の埋土上層には瓦が集中していた。

弥生時代から平安時代前期にかけての遺物は、北区東側の黒褐色砂泥層からままとまって出土した。弥

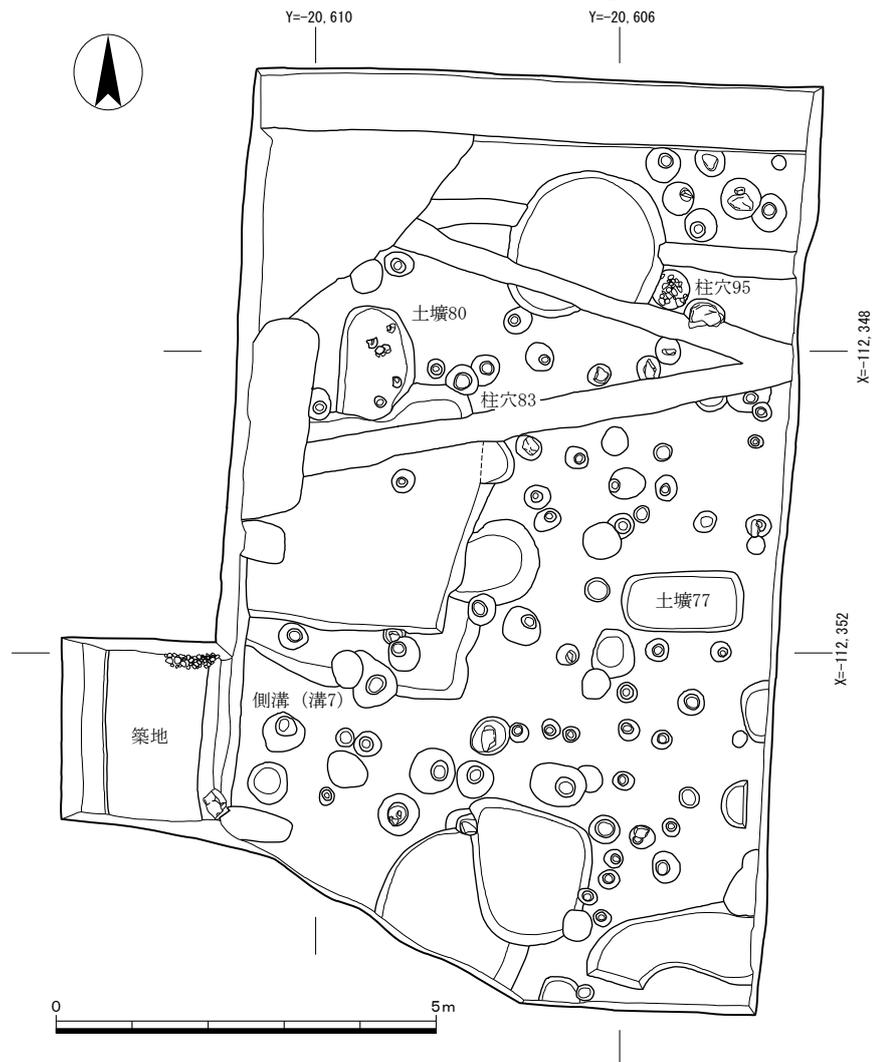


図90 北区第1面遺構平面図 (1:100)

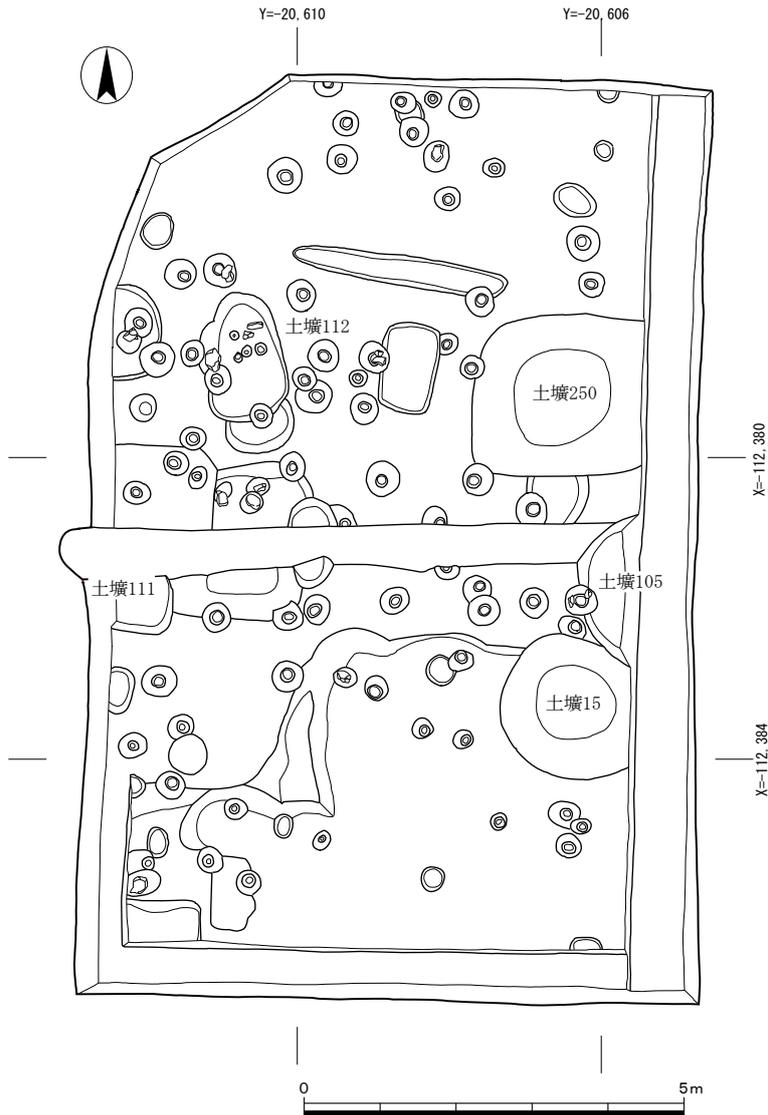


図91 南区第1面遺構平面図(1:100)

生土器や古墳時代の土師器は
いずれも甕の小片で数は少ない。
これに対して奈良時代から
平安時代前期にかけての土
器には、接合すれば完形に近
い状態に復原できる個体が多
い。近隣に当該時期の遺構が
存在していることが推定でき
る。

小結 調査地周辺ではこれ
までに12件の調査が実施さ
れ、その内7件を当研究所が
担当している。今回の調査地
に最も近接した調査は、平成
2年度に実施した大和大路通
を挟んで南西側の大和病院新
築工事に伴う発掘調査である。
この調査では、鎌倉時代から
室町時代にいたる各種の遺構
を検出した。そのうち鎌倉時
代の2条の南北溝、築地、門
が特筆されるものである。こ
れらの遺構群は三十三間堂・

方広寺石垣と類似した方位を持つとされている。今回の調査でも北区第一面の柵列、築地・側溝が類似した方位をもつ。また両区の鎌倉時代から室町時代の柱穴群も類似した方位を得ることは可能である。南北の柱列は、南区の両端で2条、北区で1条が求められる。この軸線に直角に交わる東西の柱列は両区で計8条がある。南北列はほぼ大和大路通に平行しており、三十三間堂・方広寺に関連する区画の一角に含まれると想定できる。ただし、これらの柱穴は、想定線上に整然と並ぶものではなく、柱間にばらつきがあり、掘立柱と礎石が混在している。しかし、東西方向の簡易な長屋状の建物を想定し、それに建て替えがあったとすれば、建物の復原は可能ではないだろうか。

調査地は遺構の遺存状況が良好であった。少なくとも大和大路通に面した博物館の敷地に関しては同様の成果が得られるものとみられ、検出される遺構の密度も高いといえよう。

平安時代後期以降、鴨川以東の地域は新たな政治・文化の面で核となり繁栄を迎える。今回の調査では、その一端を知ることができた。

(鈴木廣司・山本雅和)

30 安祥寺下寺跡1 (図版2-4・43~45)

経過 調査地は、嘉祥元年(848)に建てられた安祥寺下寺の推定地にあたる。地下鉄の敷設に先立ち試掘調査を行った結果、平安時代前期の古墓を検出し本調査を実施することになった。安祥寺に関してはこれまで立会・試掘調査以外に行われたことはなく、今回が初めての本格的な発掘調査になる。調査区は北からA区、B区、C区として調査を進め、平成5年(1993)5月10日から9月11日まで実施した。なお、調査途中で古墓周辺の遺構の再確認と墓室内の遺物の様子を探るため地中レーダー探査を行っている^{註1}。

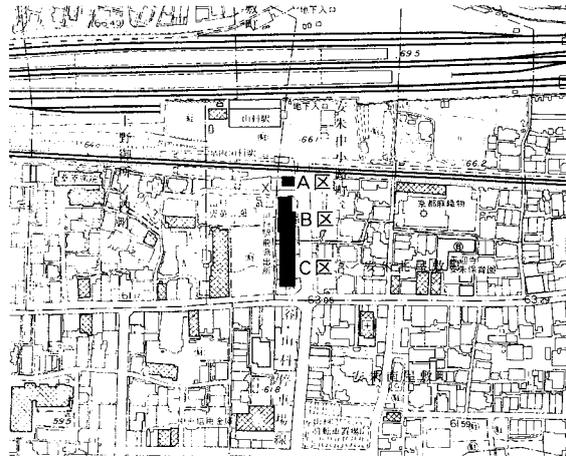


図92 調査位置図(1:5,000)

古墓はこれまで発見例のなかった木炭木槨墓ともいえるべき特異な構造であることが明らかになり、また白銅鏡^{註2}・乾漆製品など重要な遺物が出土した。そのため8月29日には現地説明会を開催し、古墓は移築保存する運びとなった。移築は近畿ウレタン工事株式会社に委託し、遺構ごと取り上げ、保存のための処理を行った。調査後古墓を展示用に仕上げるため、その裏側から土と木炭をけずり込むことが必要になった。遺物が包含されている可能性があるため、同社(奈良市)へ出向き、同年11月1日から15日まで補足調査を実施した。

遺構 A・C区では江戸時代、B区では奈良時代・平安時代を中心とする遺構を検出した。主要な遺構は、奈良時代の掘立柱建物・柵、平安時代の古墓・柵・溝、江戸時代の柵列・井戸・石室・堆肥孔などである。以下、奈良時代・平安時代の遺構について概要を記す。

奈良時代の遺構は建物1棟、柵列1列を検出した。建物1はB区南西側で検出した南北3間、東西1間以上の掘立柱建物で、調査区西側へ広がる。柵1は建物1の北側に位置し、2間分を検出した。これも調査区西側に延びるとされる。主軸方向からみて建物1に伴うと考えられる。

平安時代の遺構は古墓1基、柵1列、溝1条を検出した。

古墓は東西約3.4m、南北約2.0m、深さ約0.4mの長方形の墓壇の底に炭を敷き、その上に木棺と木槨(内槨)を置き、さらに木槨のまわりに木炭をめぐるものである。また木炭の外側にも別の埋土があり、木炭と埋土の間にもう一つの木製施設(外槨^{註3})を想定することが可能であり、被葬者を中心に内側より木棺→内槨→木炭(槨)→外槨という四重の施設を想定できる。

木棺は内槨の北側におかれ、長さ約195cm、幅45~50cmの規模をもつ。木棺の結構は鉄釘による。底板と側板の結構は、小口板側に3本ずつ、長側板側に5本ずつ、計16本を底板側から打ち込み固定している。小口板と長側板の結構は、小口板を長側板で挟み込み、上下に各1本の釘を打ち込んでいるが、南西隅については3本の釘を打ち込んだ可能性がある。また、棺蓋を棺身に止めたと思われる短い釘がその四隅から1点ずつ出土している。

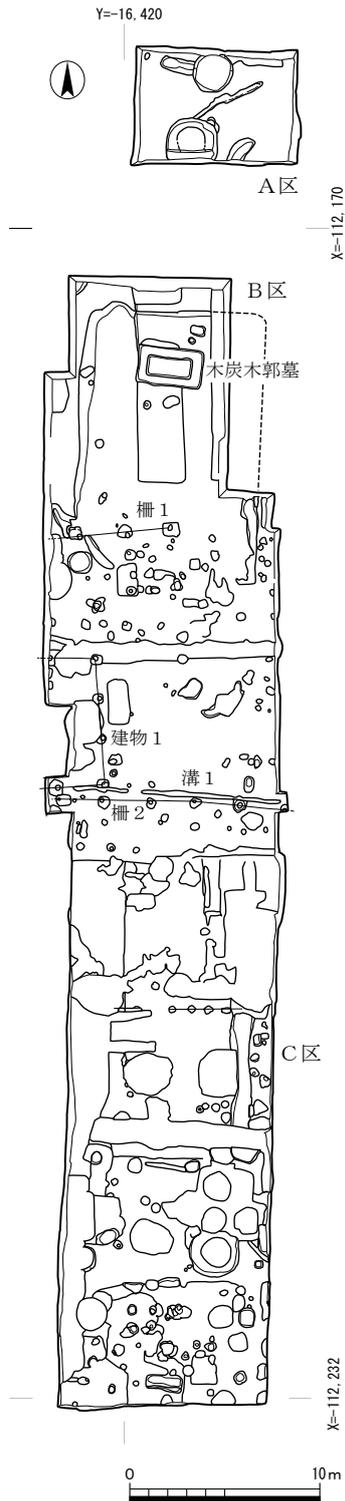


図93 遺構平面図 (1:400)

棺釘の出土状況でみられるように、釘は平面的にはほぼ原位置をたもっていると考えられるが、内槨ならびに外槨の結構についてはわからないところが多い。内槨は東西約235cm、南北約105cm、外槨は東西約265cm、南北約145cmの規模をもつ。釘の出土状況から、その下部には横木がわたされていたと考えられる。槨の底板から横木へ釘が打ち込まれ両者は固定されており、南北方向に2対4本、東西方向に1対2本の横木が想定できる。釘に付着している木質は、すべては鑑定できていないが、棺・槨がヒノキ材であるのに対して横木はクリ材を使用しているようである。横木は内槨に付くのか外槨に付くのかは判断できない。

木炭槨は土が混入しているが、断面観察によれば内外面ともほぼ垂直に立ち上がっており、枠で仕切られた中に、すなわち内槨と外槨の設置後に充填されたと考えられる。

古墓の外部施設としては、木槨内に落ち込んだ土に版築状の土層が観察でき、恐らく小規模な封土があったものと考えられる。また墓壇のまわりは、コの字状に一段高くなっており、古墓と関連させて考えてもよいだろう。

柵2は、B区南側で東西方向に5間分検出し、東西それぞれ調査区外に延びる。主軸方向は古墓とほぼ一致している。溝1は柵2が廃絶し、その上に平安時代包含層が堆積したのちに掘削されている。主軸方向は柵2とほぼ同じである。時期の決め手になる土器は出土していないが、古墓と関連するものとして、平安時代より時期は下がる可能性はあるものの取り上げておきたい。

遺物 奈良時代の遺物は土師器・須恵器などが出土した。平安時代の遺物は古墓から出土したもの以外に土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土している。また室町時代は土師器・輸入陶磁器など、江戸時代は土師器・陶磁器・瓦・銅銭・煙管・簪などが出土している。以下、古墓出土の遺物について概要を記す。

古墓から出土した遺物は、銅鏡片、不明乾漆製品、銅銭、土師器皿・杯・椀、釘、不明鉄器、木炭である。

銅鏡片は復原径28.5cmの円鏡で、大きく龍を描いた蟠龍文鏡である。全体の約5分の1の破片である。本銅鏡は主成分が銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)などからなる高錫青銅(白銅)質である。^{註4} 不明乾漆製品は、その形状は不明であるが、少なくとも2種のものが確認できる。一つは鏡を中心に広がるもので、片面に黒漆、もう一方の面に赤漆を塗るものである。もう一つは内槨の南西隅で出土したもので、木芯に着布して、両面に黒漆を塗った带状製品である。^{註5} 銅銭は皇朝

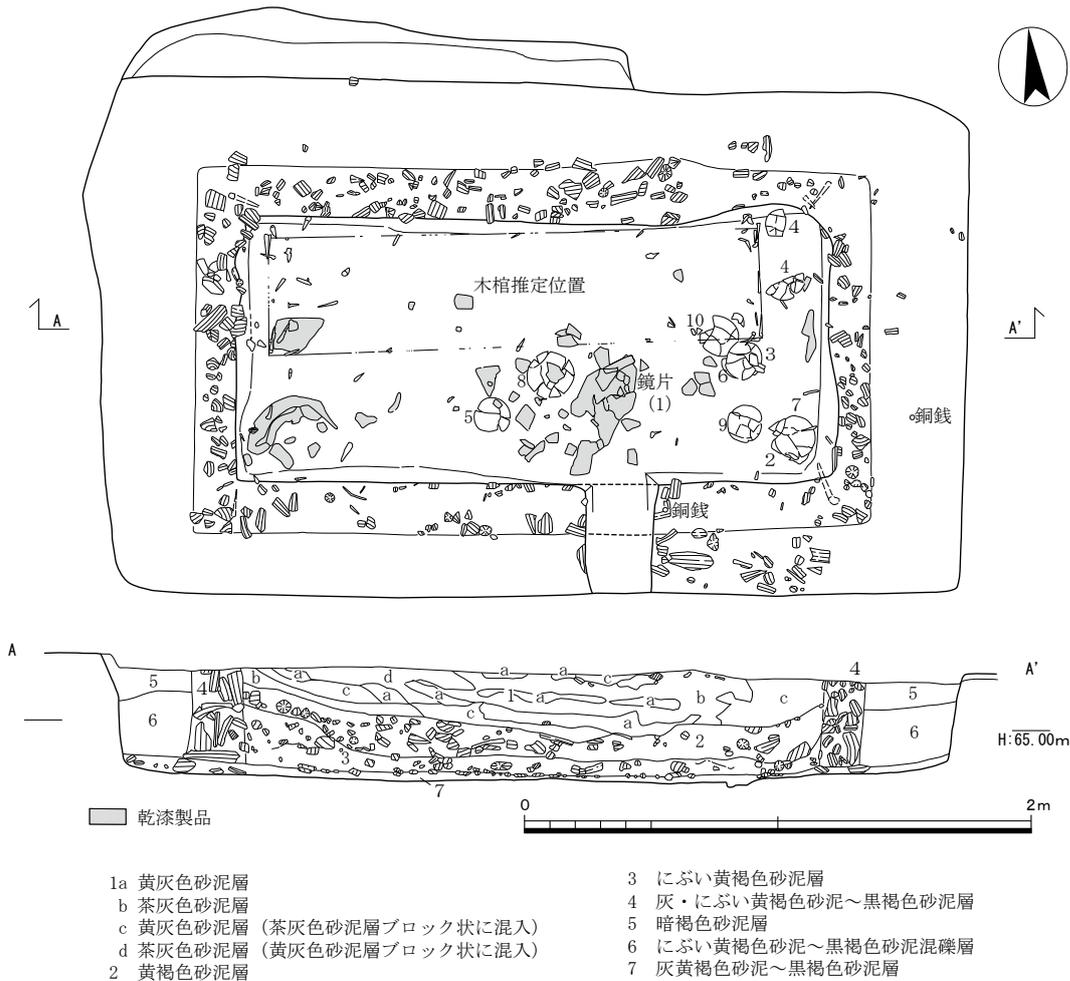


図94 木炭木槨墓実測図（平面図の番号は遺物番号）（1：30）

十二銭の一つである富寿神寶（818年初鑄）で木炭（槨）とその外側の埋め土から、それぞれ1枚ずつ出土した。これは補足調査で出土したものであり、保存した古墓内にまだ数枚埋まっている可能性がある。土師器は碗5点、杯2点、皿2点が出土している。碗は深めであるが、時期としては9世紀後半（平安京Ⅱ期古^{註6}）に該当する。釘は棺・槨の結構に使用されたものと考えられ、81本出土している。ほとんどは内槨の内部やまわりから出土しているが、木炭（槨）内部から出ているものもある。最大のもは17.1cmある。釘は長さや太さによっていくつかのまとまりができ、それぞれ使い分けがあるようである。例えば棺身を結構する釘は8～10cmのものが多く、棺蓋をとめたとみられる釘は4cm内外の小型釘である。一方、槨と横木をとめたとみられる釘は10～15cmの大型のものである。不明鉄器は長さ7.7cm、最大幅3.0cm、最大厚1.5cmの不整長方形を呈するもので、全面に木質が残っている。木炭はすべてを鑑定していないが、針葉樹ではモミ属が、広葉樹ではシイ属が最も多い。

小結 本調査では平安時代前期の古墓を検出したことが特筆できる。本古墓は棺のまわりに槨を配置し、さらにその外側に木炭をめぐらすという構造であり、これまで一般的にいわれてきた木炭槨墓とは構造上の差異点をもつ。この時期の墓としては、①木棺のみを収める木棺墓、②木

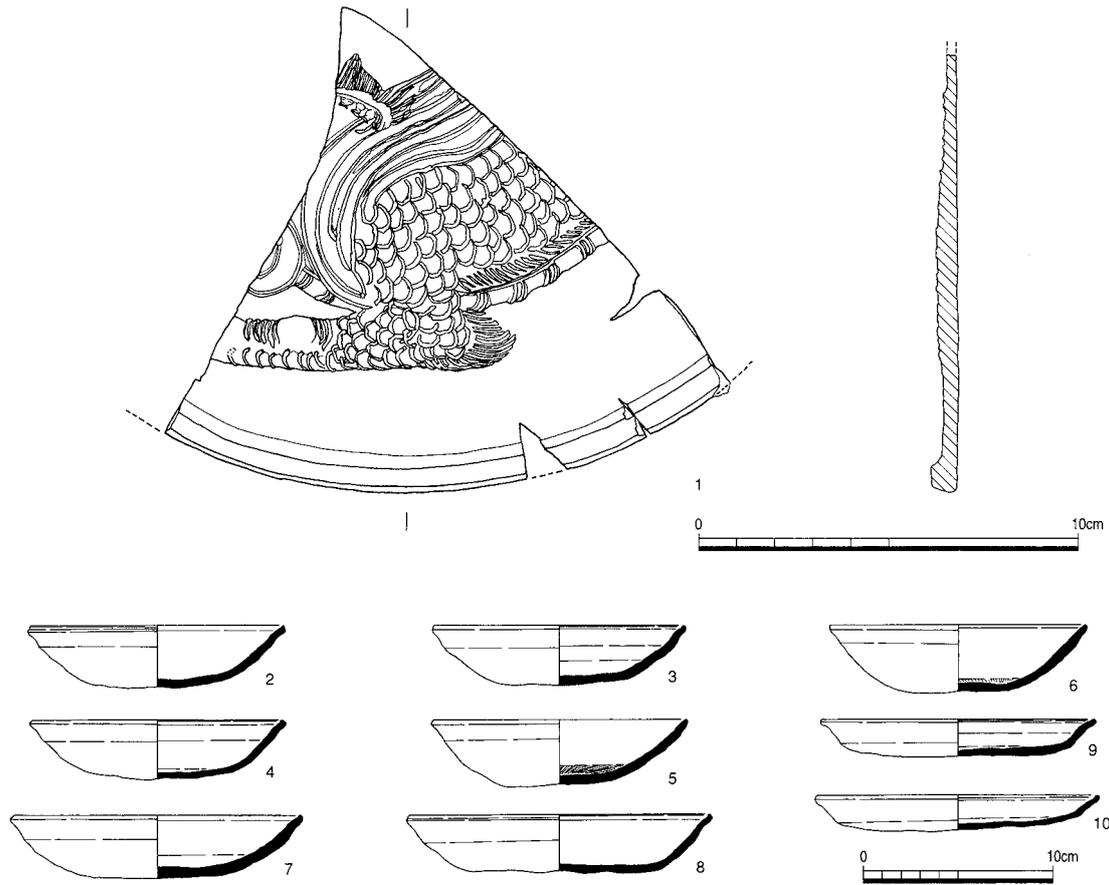


図95 木炭木槨墓出土遺物実測図（1：4）

棺の外側に木棺を保護する木槨をおく木槨墓、③木棺の外側に木炭をめぐらす木炭槨墓が主要なものとして知られてきたが、今回これらに加え、いわば木炭木槨墓とでもよぶべき墓制の存在が確認されたことになる。この時代の墓としてはこれまで事例はないものの、『続日本後紀』承和九年（842）七月十五日条の嵯峨上皇の喪葬に関する遺詔の中に「重以棺槨、繞以松炭」とあり、本例とほぼ合致する記載として注目される。また古墓の外部施設にはコの字状に一段高くなる区画や封土の存在が考えられる。さらに柵2や溝1は墓壙と主軸を同じくしており、墓域の南限を画する施設の可能性があるだろう。『安祥寺伽藍縁起資財帳』には寺地の四至が記録されており、本調査地が安祥寺の寺地内にあったことは明らかである。被葬者は安祥寺にかかわる人物とみて間違いないだろう。一方、奈良時代の建物・柵列の検出は、安祥寺創建以前のこの地域の様相を考える上での資料になる。

（高 正龍・平方幸雄）

- 註1 DEAN GOODMAN、マイアミ大学地質音響研究所中島研究室によるもので、西村康氏に現地を指導を受けた。
- 註2 鏡に関しては樋口隆康氏、成瀬正和氏、久保智康氏よりご助言をいただいた。
- 註3 これは木炭を充填する際の単なる外枠である可能性がある。
- 註4 本概要「第3章4 安祥寺下寺跡出土蟠龍文鏡の蛍光X線分析」参照。
- 註5 乾漆製品、釘付着の木質および木炭の分析と鑑定は当研究所岡田文男が行った。
- 註6 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊
（財）京都市埋蔵文化財研究所 1990

31 安祥寺下寺跡2 (図版2-4・46)

経過 山科駅前の再開発事業に伴い発掘調査を実施した。調査箇所は、JR山科駅の南方約100mで、安祥寺下寺跡の推定地にあたる。先立って実施した地下鉄東西線工事に伴う発掘調査(本概要第1章VI-30)では、平安時代前期の木炭木槨墓や奈良時代の掘立柱建物を検出しており、関連する遺構の広がりや安祥寺下寺跡の確認を目的に調査を実施した。

遺構 基本層序は、上から現代盛土層(厚さ約20~30cm)、旧耕作土層と床土層(厚さ約30

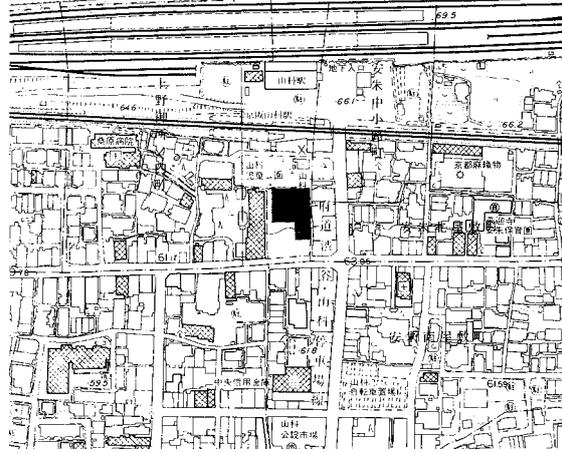


図96 調査位置図(1:5,000)

cm)、黄褐色砂泥層(遺物包含層、厚さ約20cm)があり、地山(暗褐色混礫泥土層)となる。遺構はすべて地山上面で認めた。現地表から地山面までの深さは、北側で0.3m、南側で0.6mある。

検出した遺構は、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物4、柵7、土器溜3、南北溝1、石組2、集石1、小土壙多数と、他に飛鳥時代の墓が1基ある。

掘立柱建物は4棟を復原した。建物1は東西3間×南北2間で、東より1間目に間仕切りの柱穴がある。建物2は東西4間×南北2間で、西1間目に間仕切りの柱穴がある。建物3は南北3間×東西2間で、唯一南北棟に復原できた。建物2と重複するが前後関係は不明である。建物4は桁行は3間まで確認し、東西3間×南北2間と推定する。これら建物の方位は北で東に3°~9°振れる。柱間寸法は2.1m前後を中心に、かなりばらつきがある。

柵は主に東西方向を示し、大半の振れは掘立柱建物と共通し北で東に振れる。柵5は4間あり、建物1の南筋に接する。柵6は6間あり、同じく建物1の南筋に接する。柵5と重複し、柵6が新しい。柵7は6間あり、建物2にほぼ平行する。柱穴内に石を据えたものが1基ある。柵8は7間、柵9は4間あり、同じく1基に石を据える。柵10は3間ある。柵11は6間分あり、建物2と重複する。この柵のみ北で西に約6°振れる。

土器溜は建物1・2の周辺で検出した。土器溜146は南北1.15m、東西0.9mあり、深さは検出面から0.15mある。底部から完形の土師器皿が20枚程重なって出土した。土器溜87は建物2と重複する。土壙中央から陶器甕が割られた状態で出土した。土器溜250も建物2と重複する。陶器甕と土師器皿が割られた状態で出土した。

石組は2基あり東半で南北に並ぶ。石組1は人頭大の礫が30個程あり、西端の四石が壁の位置を保つ。掘形規模は長さ2.7m、幅2.0m、深さは検出面から0.6mある。西壁の石材下より土師器皿が1個出土した。石組106は小型の竪穴式石室に類似した構造をもつ。掘形規模は長さ2.5m、幅1.55mあり、四壁の石材は2段まで遺存する。内法長さ2.0m、幅0.9mあり、底部にも小礫を敷き詰める。四壁は長さ30cm程の石材を横積みする。床面から遺物は出土していない。

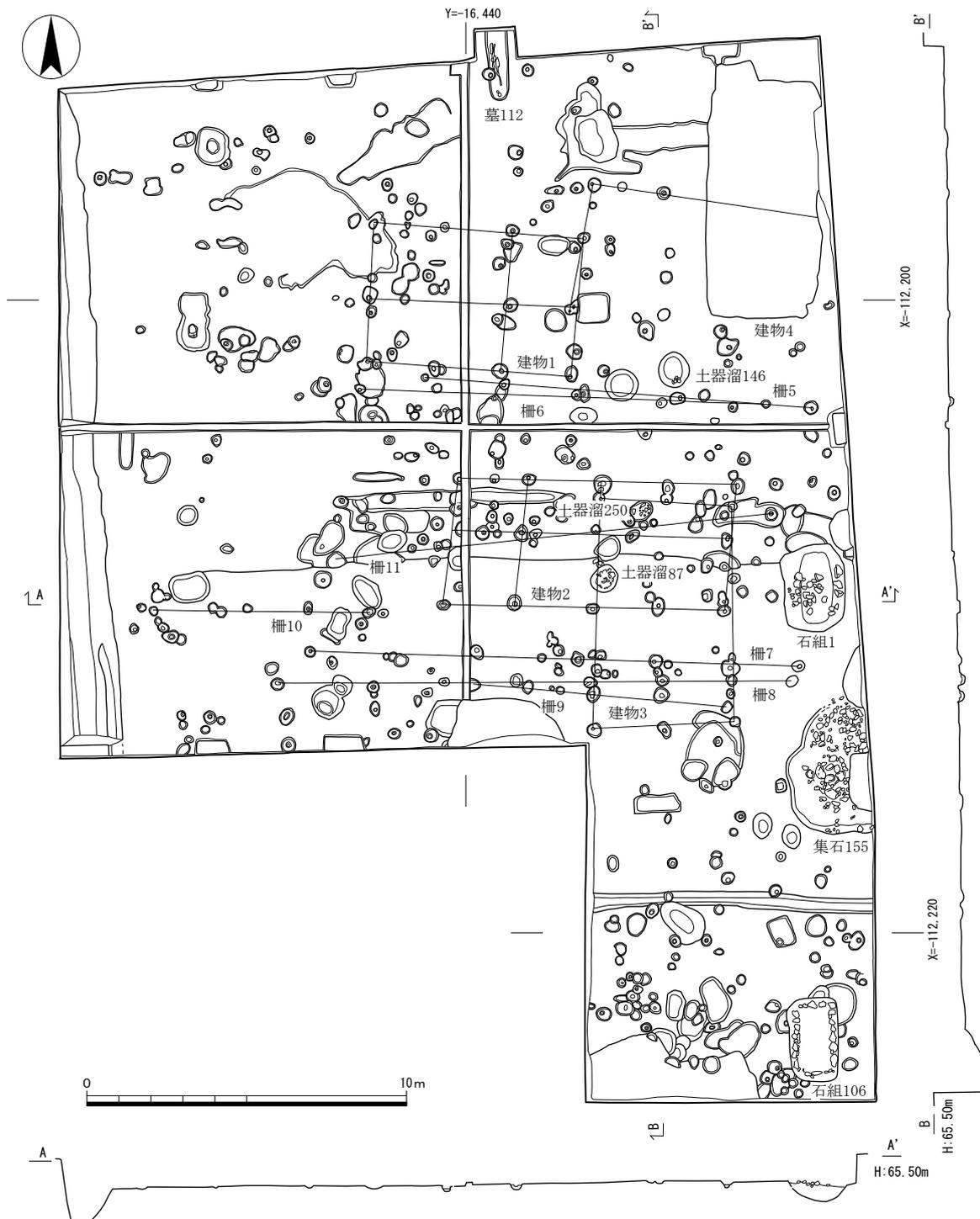


図97 遺構実測図 (1 : 200)

これらの石組は常盤東ノ町古墳群^{註1}の調査例などから墓と考えられる。

集石 155 は乱雑に石材が積まれた状態がみられた。

溝 111 は調査区西壁にかかり検出した。北で西に約 4° 振れ、掘立柱建物や柵の振れとは合致しない。溝幅 1.8 m、深さは 1.1 m、底は南が低い。埋土は、底が粘土層、上部は砂礫と泥土が互層を呈し水流があったことが想定できる。

墓 112 は調査区北壁にかかり検出した。長さ 2.2 m 以上、幅は最大で 0.69 m、深さは検出面

から0.2 mある。飛鳥時代の須恵器短頸壺と土師器杯が南端より出土した。これらは墓への副葬品とみられるが、周囲に玉類や赤色顔料は認められなかった。底部のやや浮いた位置に木炭が敷かれていた。棺内に木炭を敷く例は醍醐15号墳^{註2}にある。

遺物 溝111・土器溜87・146・250などを中心に24箱出土した。

遺物の大半は、平安時代後期（12世紀）に属する。内容は、土師器皿・羽釜、瓦器椀・鍋・羽釜、陶器甕・鉢、輸入陶磁器では青磁・白磁の椀・皿、金属製品では鉄釘・刀子、銭貨として宋銭がある。土師器が圧倒的に多く、輸入陶磁器・瓦器・瓦類は少ない。

この他、平安時代前期・中期に属する、土師器杯・皿・甕、須恵器蓋・壺・甕、黒色土器椀・壺、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿・壺・瓶子と奈良時代の土師器皿が平安時代後期の遺構に混入した状態で出土している。

飛鳥時代の遺物は、墓112から須恵器短頸壺と土師器杯が出土した。

小結 平安時代前期の木槨墓や奈良時代の建物に関連する遺構は検出できなかったが、新たに平安時代後期の掘立柱建物・柵・石組・溝などを確認する成果があった。掘立柱建物は3間×2間の東西棟を基本とする。柵は建物と組み合わせあって建物前面を遮蔽していたと推定できる。溝111は方位を異にするものの敷地境界を示す施設とみられ、さらに西側に遺構の広がりが期待できる。石組は墓と想定した。石組1・106南北に並ぶのは地割によるためであろう。また、飛鳥時代の墓を1基確認したことは、平安時代の木槨墓が築かれる以前にもここが墓地として利用されていたことを示す資料といえる。

(丸川義広・高 正龍)

註1 鈴木廣司他『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I (財)京都市埋蔵文化財研究所 1977

註2 木下保明『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986

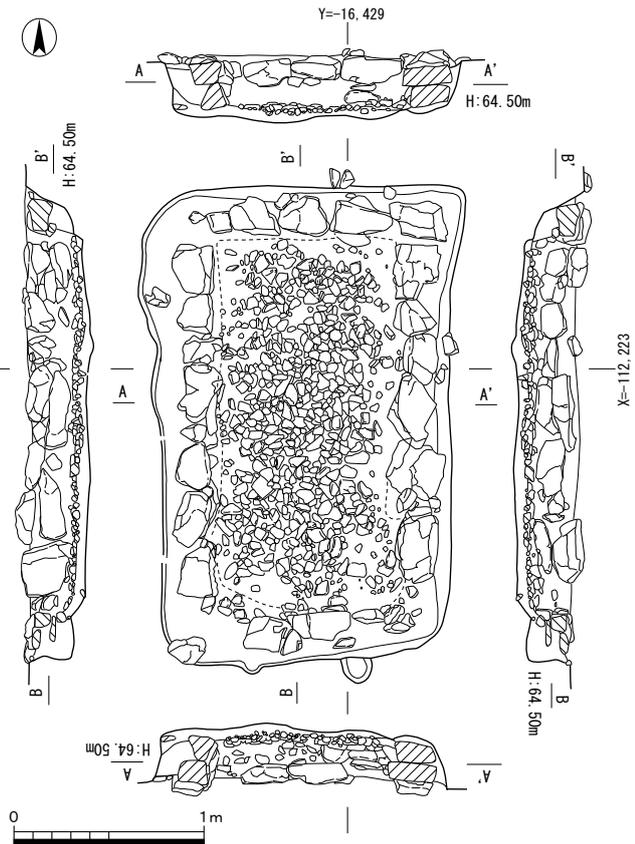


図98 石組106実測図 (1:400)

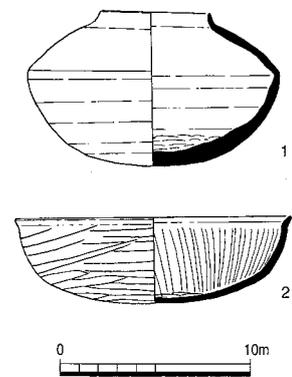


図99 墓112出土土器実測図 (1:4)

32 史跡醍醐寺境内 (図版2-4・47)

経過 本調査は、京都市立醍醐小学校の屋内運動場（平成2年度調査^註）と校舎をつなぐ渡廊下の建設計画がたてられたことを契機とする。調査対象地は、その渡廊下部分である。調査にあたっては、工事掘削が現地表下1mまででとどまるため、その深さまでに検出できる遺構を調査対象とした。

調査地点は、史跡醍醐寺境内に位置する醍醐小学校の旧屋内体操場跡地の一部にかかり、昭和53年度調査地と北接し、平成2年度調査地と西接する位置にある。調査区は、渡廊下の形状にそってL字形に設定した。

遺構 調査地の旧地形は、東から西に向かって傾斜している。そのため、東西方向に設定した調査区では、東半と西半では近世以下に堆積する層序に差異がみられる。東半では近世直下に鎌倉時代の包含層のみが、西半では室町時代の包含層のみが堆積する。ただし、中央付近では室町・鎌倉時代の包含層が上下に堆積する状態がみられ、以下地山となる。南北方向に設定した調査区では、東端付近のみに江戸時代の整地層が残るが、他の大部分は、旧屋内体操場の基礎工事の際にかなり深く掘り下げられており、遺構は検出していない。

遺構は、平安時代末から江戸時代にかけて建物、柱穴、土壙、竈などを検出した。以下に、時代ごとの概略を記す。

平安時代末から鎌倉時代 建物、柱穴、土壙などがある。柱穴には、根石を有する柱穴とそうでない柱穴が二種類ある。これらの柱穴のうち、建物としてのまとまりを調査区内で確認できたのは、建物1のみである。建物1は、南北1間以上×東西2間分を検出し、その柱間の間隔は、南北200cm、東西220cm等間である。この建物1を構成する柱穴から、鎌倉時代後半の土師器などが出土した。なお、建物の大部分は調査区外に延長する。土壙36は、東西方向に設定した調査区の東端で検出した方形土壙で、南北170cm、深さ18cmある。遺物は、土師器と青白磁の合子蓋が1点出土している。

室町時代 柱穴と土壙などがある。柱穴は、5箇所以上で検出したが、いずれも小規模である。これらの柱穴は、東西方向に設定した調査区の中央からやや西側付近に散在した状態で検出したが、建物としてのまとまりは把握できなかった。土壙は、大部分が不定形で、15世紀を中心とした時期の遺物が出土している。

江戸時代 土壙と竈などがある。土壙には、方形土壙と不定形な土壙の二種類がある。方形土壙は2基（土壙5・26）あり、いずれも土壙中に3～5cm大の礫を多量に含む。竈は、底部付近のみを検出した。残存幅65cm、検出面からの深さ7cmある。

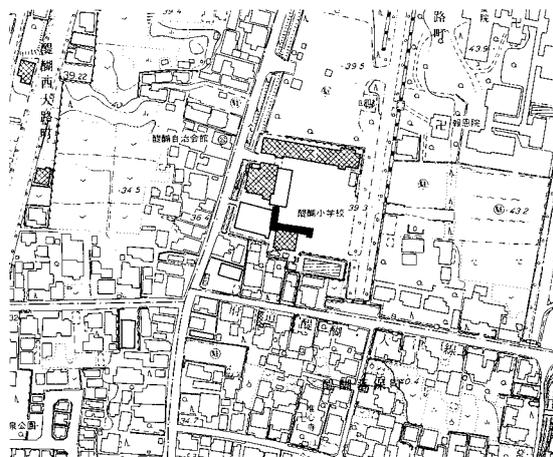


図100 調査位置図 (1:5,000)

遺物 遺構や包含層などから整理箱で15箱出土し、平安時代末から江戸時代までの土器類、瓦、金属製品などがある。平安時代末から鎌倉時代前半にかけての比較的良好な遺物が土壌36から一括して出土しており、土師器、須恵器、青白磁などがある。鎌倉時代から室町時代の遺物は土師器、瓦器、青磁、白磁、焼締め陶器、瓦、滑石製品、鉄製品などがある。このうち、室町時代の遺物は、15世紀頃の土師器などが土壌32などから比較的同時に出土したが、14世紀代あるいは16世紀代の遺物はあまり出土していない。桃山時代の遺物は、江戸時代の整地層にごく少量混入した状態で出土したのみである。江戸時代の遺物はその大半が18世紀以降に属し、土師器、伊万里などの染付陶器、瓦、釘、銭貨などが出土した。

小結 遺構群は、平安時代末から室町時代（中世）と江戸時代後半頃に大別できる。中世の遺構および遺物包含層は、今回の調査では面的な状態で検出した。東接した平成2年度の調査では、今回の調査区に近接した付近で検出し、南接する昭和53年度の調査地点では、掘立柱建物を2棟検出し、遺物包含層も面的に認められた。このような分布状態からみて、中世の遺構および生活面は、当調査区付近から南側にかけて広がっているとみられる。江戸時代の遺構は、調査区全体に分布する。その大半が土壌であったが、調査区の東端で竈の底部を検出した。平成2年度の調査区では江戸時代の遺構を多数検出しており、この竈はこれら遺構群のいずれかに付属すると考えられる。

（平方幸雄・丸川義広・高橋 潔）

註 高 正龍「史跡醍醐寺境内」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』

（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

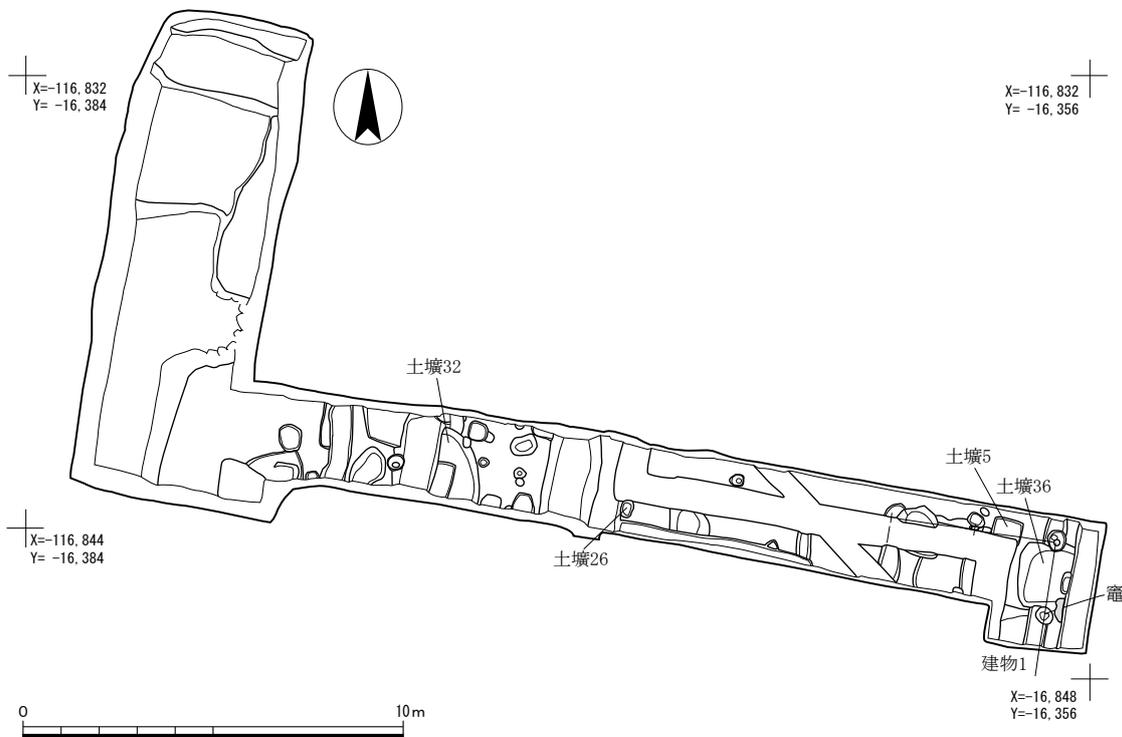


図101 遺構平面図（1：200）

第2章 試掘・立会調査

I 平成5年度の試掘・立会調査概要

平成5年度の原因者負担による試掘・立会調査の件数は、試掘調査が7件、立会調査が17件、計24件である。これらの中には、試掘の結果を含め発掘調査の項で扱ったものや、継続調査のため次年度に報告予定のものがある。また、立会調査では目立った遺構、遺物が検出されないものがあり、これらについては改めて項を立てず、試掘・立会調査一覧表（表5）の記載のみにとどめた。その他、文化庁国庫補助事業として継続している京都市内一円の立会調査（表5-25）が471件ある。これに関しては、『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度および『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度として報告されており、本書では省略している。試掘・立会調査（第2章）で扱った項目数は、試掘調査が4項目、立会調査が6項目、計10項目である。

平安京跡 左京三条四坊の調査（2）では、平安時代以後、各時代の遺構・遺物が検出される左京域特有の層位を示していたが、その他にこの調査域では、全地点で弥生時代から古墳時代の遺物が出土した。平安京左京北辺二坊の立会調査（1）では、近世の陶磁器片や窯道具が出土している。調査地点の西側には「楽家」があり、桃山時代以来、焼き物を家職としてきた楽家との関連が注目される。右京三条一坊を含め周辺の試掘調査（3～5）は、二条駅前の再開発に関係して行われ、二条大路の路面や西坊城小路の東側溝、姉小路南側溝などを検出している。

その他の遺跡 長岡京左京四・五条四坊の試掘調査（6）で、鎌倉時代から室町時代の堀を検出した地点は14世紀以降に存在した古川館が想定される地域にあたり、検出した堀はこの古川館との関連で注目される。北野遺跡・北野廃寺の立会調査（7）では、回廊の版築と考えられる整地層や底に石を敷いた溝、瓦溜などを確認しており、京都大学構内遺跡（8）では、縄文時代後期の土器片を検出している。史跡名勝嵐山の立会調査（10）では、化野地区で火葬骨を埋納した蔵骨器を発見した。この蔵骨器は梵字を記した金銅製の蓋を伴い、中国の南方で造られた褐釉四耳壺が容器として用いられた。嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡の立会調査（9）では、平安時代前期の遺物が、かなりまとまって出土している。嵯峨院の範囲を推定する上で有力な根拠となるだろう。また、この調査で縄文時代中期の土器片を検出しているが、このことは、嵯峨野地域での新たな縄文時代遺跡の発見となった。（永田信一）

II 平安京跡

1 平安京左京北辺二坊（図版1・48）

経過 京都市上京区一条通、東堀川通から西洞院通地内において、京都市水道局による配水管布設替え工事が計画された。総延長約1,500mに及ぶ工事区は、平安京左京北辺二坊二町・五町と一条大路、油小路に推定されるため、立会調査を実施した。平成5年（1993）4月21日から7月20日までの約3箇月間、試験掘り、本管工事、枝管工事に伴って立会調査を行い、調査順にNo.1～25までの地点番号をつけ、写真撮影・断面観察・遺物採集を実施した。

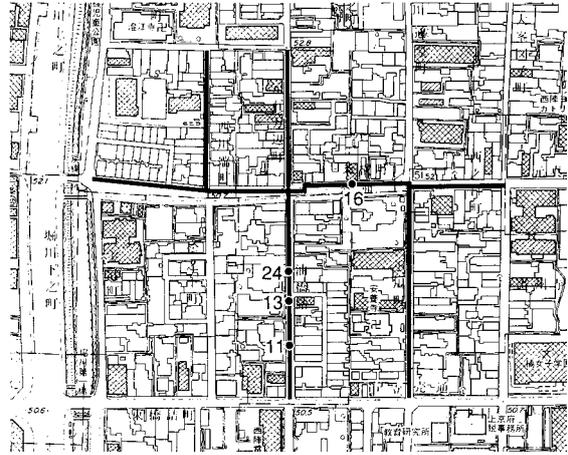


図102 調査位置図（1：5,000）

遺構・遺物 一条通に推定されるNo.16地点では、最大8面の路面を検出したが、その時期は決定できなかった。油小路と推定されるNo.11地点-13層からは平安時代中期の土師器皿・甕、緑釉陶器を、No.11地点-12層、No.13地点-11・12層からは平安時代後期の土師器皿を採集した。これらの包含層は路面の可能性はある。

No.11地点-5層から、桃山時代から江戸時代の土師器皿、炮烙、初期京焼と考えられる軟質陶器を採集した。

No.24地点の土壌から、江戸時代後期の土師器碗・壺、磁器碗・鉢、瓦質火舎、泥メンコなどと共に、茶道具（図103）、伊万里鉢（図104）、窯道具などを採集した。伊万里鉢は直径22cmでほぼ完全な形をしており、漆接ぎの跡が残っていた。佐渡に現存する18世紀の伊万里青磁染付碗とほぼ同一の模様である。茶道具の底部には「楽」の一部とみられる刻印がある。



図103 茶道具

その他の地点では、鎌倉・室町・桃山・江戸時代の路面・包含層を検出し、遺物を採集した。

小結 調査区では部分的に平安時代の遺構面が残っていることが明らかになった。また、No.24地点で採集した土器は、道路の西側に、現在も楽家があることから、出土した伊万里鉢、茶道具、窯道具などは、楽家との関連が考えられる。

（尾藤徳行・竜子正彦）

註 『別冊太陽』No.63 119頁 平凡社 1988



図104 伊万里鉢

2 平安京左京三条四坊（図版1）

経過 御池通第2地下駐車場は、御幸町通と間町通間で、南北幅は御池通の車道幅いっぱい建設される。地下鉄東西線の上部を利用するため、地下鉄工事と並行した工事が予定され、その関連および道路内での工事のためか、南北に2分割して南半部が先行して工事が開始されることとなった。調査は、工事工程内で実施し、覆工板下でのトレンチ調査が主なものであった。他に工事掘削の立会調査を行っている。

調査は、断面調査を主眼とし、面の調査は最終遺構面（地山直上の例が多い）だけとした。断面調査は、分層と記録作業を先行して行い、それらの作業が完了後に、上部から層、遺構別に深さ50cmで掘り進めて遺物採取を行っている。その後に最終遺構面で平面調査を実施し、調査終了するという方法をとった。立会調査は、工事掘削に立会い、掘削壁面や検出面において、遺構と層位の記録をとり、遺物採取を実施している。

覆工板下のトレンチ調査地については、Fの記号を付し、F-No.1などと表示した。この調査は、計7箇所を実施（予定していたが実施不可能となったところも1～2箇所ある）し、西から順にF-No.1～7としている。なお工区西端付近（高倉小路通交差点のすぐ東側）で1箇所、覆工板工事の前段階にトレンチ調査を実施することができた。その調査区についてはT-No.8とした。

調査対象地は、平安京においては、三条坊門小路（御池通の北側歩道がほぼ推定ラインと重なる）の南側に位置する左京三条四坊三町・六町・十一町・十四町の北半部に推定される。各町間に西から高倉小路、万里小路、富小路が南北に走る。平安時代の各小路やその関連遺構および各宅地内の様相を把握すること、平安時代以降の町の変遷を明らかにすることが、調査の主要な課題である。以下では、調査成果の概要を記す。

遺構・遺物 各調査地点で、弥生時代から古墳時代と平安時代以降の各時代の遺構、遺物を検出した。

弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物は、全調査地点で出土している。混入品として出土

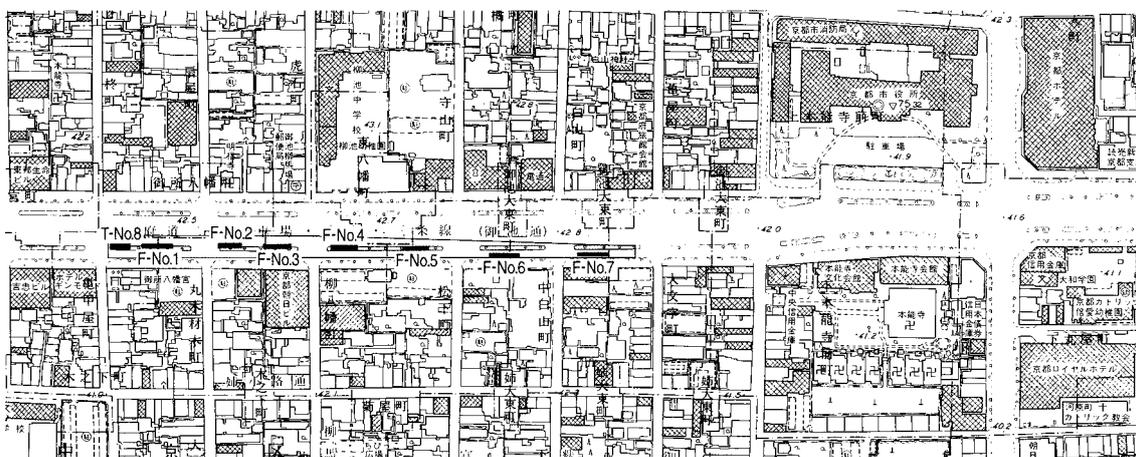


図 105 調査位置図（1：5,000）

したものの少なくないが、T-No.8、F-No.1・2・5の調査区では、堆積層や遺構内堆積土から一定量まとまって出土している。各調査地点とも堆積土層の状況から流路（あるいは溝状の遺構）などの遺構の一部とみられる。北側に隣接する地下鉄東西線建設に伴う調査でも、同時代の遺構、遺物が検出されており、同じ遺跡内の遺構と理解してよいだろう。

F-No.5～7では、7世紀頃に比定できる土師器、須恵器が出土している。層、遺構ともに明確ではないが、先に記した弥生時代後期から古墳時代の遺跡と関連しているとみられるので注意が必要である。平安時代前半期の層、遺構の検出は少数であり、F-No.2・7で遺物包含層を確認したにとどまる。しかし、混入品としての出土例が主であるが、この時代に比定できる遺物はすべて調査区から出土している。出土遺物や土層、遺構の残存状況からは、後代の削平などにより、土層や遺構が消滅、減少したとみられる。この地域は建都以降の早い時期から宅地の利用が開始されているようである。

平安時代後半の11世紀後半以降になると、各調査区において遺構、遺物とも検出数は増加し、空白地はみられなくなる。柱穴とみられるPitなどを検出した調査地も何箇所もある。当地域では、稠密な宅地利用が進展し、過密な都市的様相を呈していたと推測される。文献でも、この時代になると左京の四条以北へ人々の集住が進むことが知られているが、その一端を示す遺跡の様相とみられる。

平安時代後半期に形成された様相は、遺構数としては減少傾向を示すが鎌倉時代前半期頃までは継続している。しかし、鎌倉時代の後半期になると、遺構、遺物ともに減少が進むようである。全体的には室町時代を通してこの傾向が進み、室町時代中葉頃には空間地の多い地域になったと推測される。ただ、F-No.4調査区では室町時代前半代に比定できる遺構、遺物が比較的まとまって検出されているし、各調査地でも遺構、遺物が検出されており、人々の居住が絶えるわけではない。文献史料では、三条坊門小路沿いのこの地域に足利氏関係の邸宅などが存在していたとされている。F-No.4の様相は、この地域の宅地などへの利用が、この時期には拠点的なものへと変化していたことを示しているとも考えられる。

室町時代後半期も中頃以降には、F-No.2・3などでは遺構、遺物の検出数が増加する調査区もみられるようになるが、地域全体として再び稠密化の様相を示すのは、近世へ入った江戸時代初頭頃である。桃山時代末期から江戸時代初頭頃には、各調査区ともに遺構数は急増する。出土遺物も、茶陶類を中心とした各種の国産施釉陶磁器や輸入陶磁器を数多く含み、彩りや華やかさを増し、出土量も膨大なものとなる。立会調査の採取資料にもこの様相変化は明確にあらわれている。この急激な様相変化は、近世に入って直後の中京の急速な発展を端的に示しているものと理解できる。以降の江戸時代から近代の様相は、今回の調査では、上層が機械掘削で削除されているため調査成果は限られたものとなっている。しかし地下鉄東西線関係の既調査成果や文献史料から、中京は江戸時代を通じて発展をとげ、近・現代へいたったことは明白である。

小結 基本が、覆工板下の調査となり、調査面積は全調査区を合わせても狭小なものではあるが、8箇所の調査地において同質の調査を実施することができた。当地域の歴史にアプローチで

きる考古資料が得られたことは成果といえるだろう。

(小森俊寛・上村憲章)



図 106 T-No.8 トレンチ全景 (東から)



図 107 F-No.5 トレンチ全景 (東から)

3 平安京右京三条一坊5（図版1）

経過 調査地は中京区西ノ京梅尾町J R軌道敷内で、平安京右京三条一坊一町・二条大路にあたり、穀倉院の北西地区に比定される地域でもある。調査は、4×10m、約40㎡の調査区を6箇所を設定して実施した。1・2区に関しては当初の調査位置をやや北西に変更した。平成5年（1993）11月10日から開始して平成6年（1994）1月28日の期間に調査を実施した。（図34 調査位置図）

遺構 検出した遺構には平安時代の二条大路路面、室町時代の柱穴、江戸時代の柱穴・土壇・溝、近代以降の建物基礎・建物・溝・土壇がある。

平安時代の二条大路路面は、5区南半、二条大路のやや南寄り部分を検出したもので、堆積土が硬化した面として確認した。室町時代の柱穴は1区で検出したが、単独で検出しており連続しない。3区検出の江戸時代後期の溝は、東西1条、南北2条、柵1列がある。近代以降の建物基礎は6区で煉瓦と漆喰造りによるもの、4区で掘立柱建物形式によるものを検出している。この4区の建物は、柱間約1mで南北7m、東西2m以上に復原できる。

遺物 出土した遺物は平安時代に属する土師器、瓦がある。主として5区で出土した。江戸時代後期の染付磁器は小椀、ぐい呑みなど3区を中心に出土している。近代以降に属した煉瓦は一

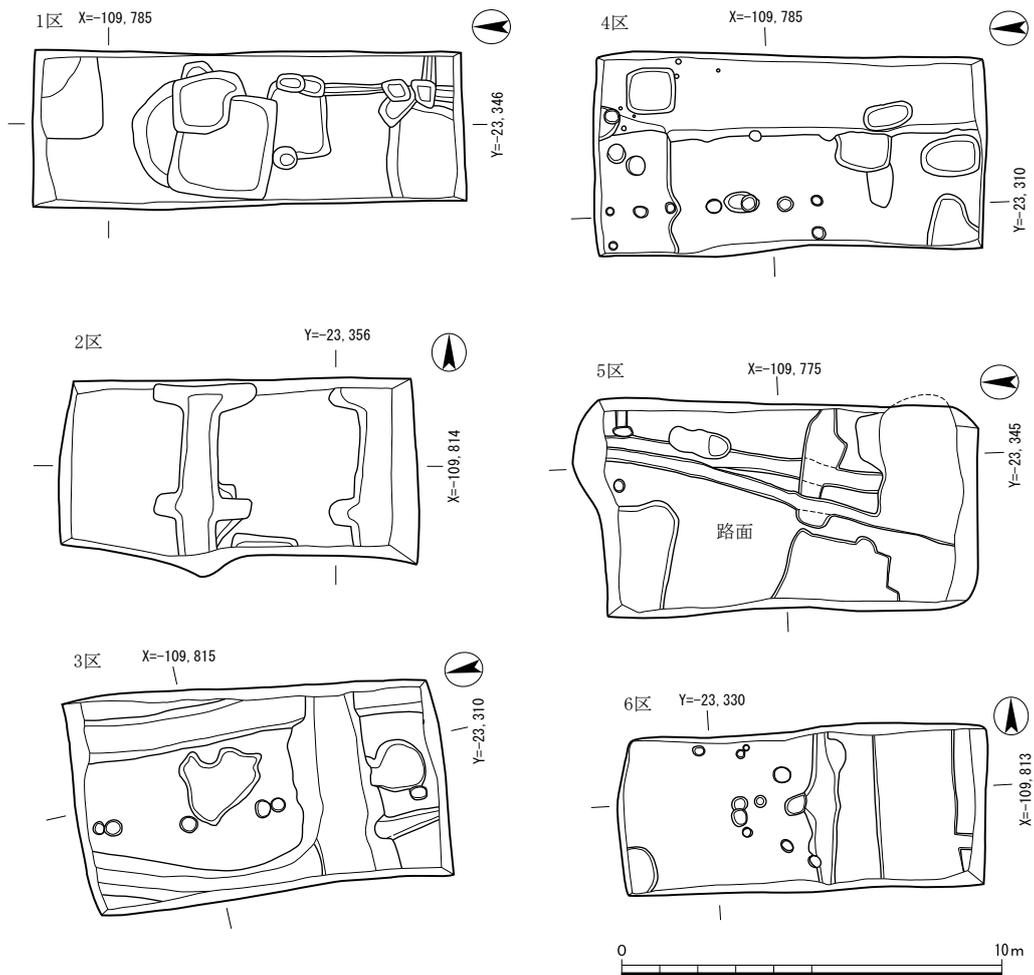


図108 遺構平面図（1：200）

部に京都市章の陰刻判がみられ、市に関係した建物の基礎であったことが考えられる。

小結 調査では3・4・6区は二条駅、および鉄道建設に際して大きく削平を受けており、平安時代の遺構は残存しない。このため遺構の遺存が良好と考えられる5区周辺に1・2区を変更した。この結果5区では二条大路路面を、1・2区では室町時代に属する柱穴を検出し、この地区の遺構遺存度の良好さを裏付ける結果が得られた。 (平田 泰・伊藤 潔)



図109 5区全景(北から)

4 平安京右京三条一坊6 (図版1・49)

経過 調査地は平安京右京三条一坊二町北西地区、西坊城小路、押小路、平安京造営以前の遺跡である壬生遺跡に比定されている。調査は地下鉄二条駅建設工事に先立って遺跡の有無を確認する試掘調査で、1次と2次に分けて実施した。

1次調査は1区36㎡、2区48㎡、3区36㎡の調査を平成5年(1993)7月8日から7月27日にかけて実施した。2次調査は4区14㎡、5区64㎡、6区52㎡で、同年8月4日から10月21日まで実施した。しかし軌道撤去時期の関係から各区の調査日程の間に調査中断期間を設けた。このため実際の調査日数は、2次調査の場合延べ38日であった。(図34 調査位置図)

遺構 1区では近現代の盛土層、江戸時代以降の耕作土層・床土層約1m下に、0.4m前後の深さをもつ土取穴が確認された。平安時代の土器を包含する柱穴は、この土層の下端に浅い痕跡として確認した。

2区では堆積の状況が異なり、盛土層・耕作土層・床土層約1m下で、東側は砂礫層、西側では混礫の粘土層を確認した。このため西側では土取穴が認められ、東側では平安時代の土器片を含む土層、柱穴を検出した。

3区も同じく1m前後の盛土層・耕作土層・床土層が存在するが、西半地区で土取穴が検出され、西坊城小路の東側道路施設は攪乱されていた。

4区では調査区西端で南北方向の溝を検出した。埋土から江戸時代中期の陶器、磁器が出土した。東側では大規模な江戸時代後期に属する土取穴を検出した。

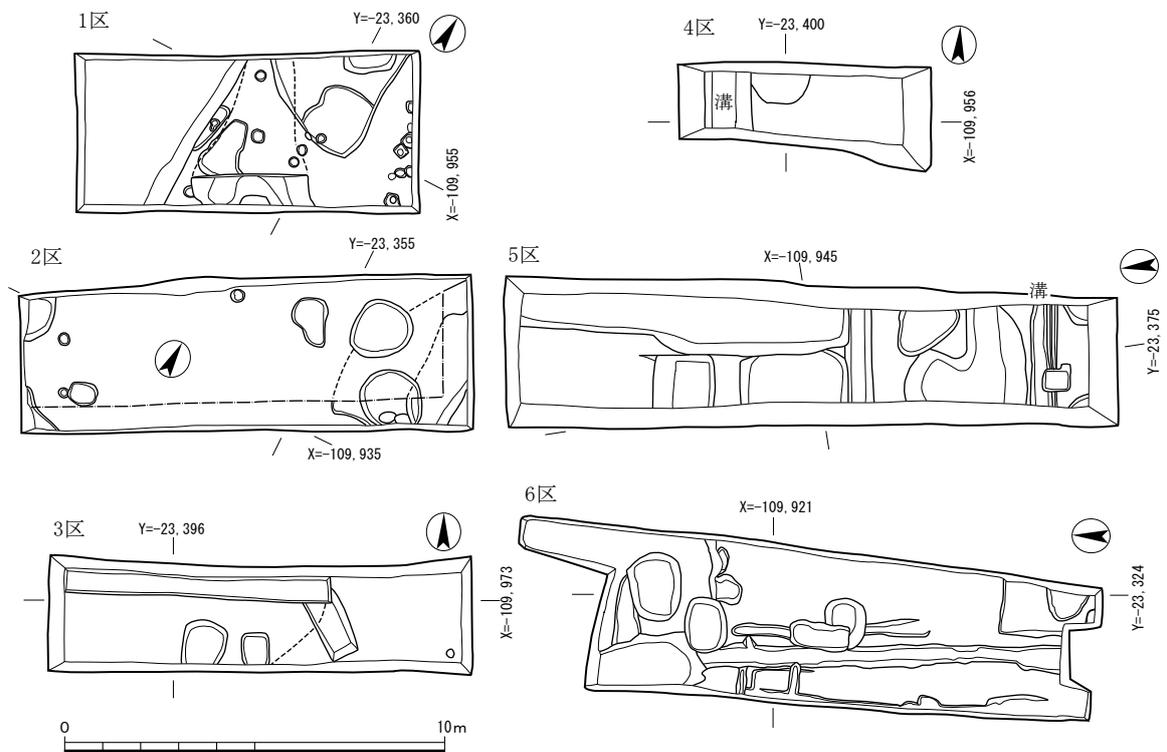


図110 遺構平面図 (1 : 200)

5区は調査区南端に幅0.7m、深さ0.2mの東西溝を検出し、埋土中から平安時代中期に属する遺物が出土した。また同位置で、この溝を切って成立する方形の柱穴1基を検出した。出土遺物での時期差は認められない。その他、江戸時代に属する土取穴5基を検出した。規模には大小がある。

6区の調査では江戸時代の耕作に関係する東西溝と南北溝を検出した。方向はそれぞれ真東西、真南北に近い。土壌は規模が小さく、土取穴とは考えにくい。耕作に伴った不用物投棄か、肥料保管用目的の土壌と考えられる。大半は江戸時代に属している。

遺物 出土遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代前期・中期・後期、桃山時代、江戸時代に属するものが出土した。

縄文時代に属する石器剥片は6区から出土した。弥生時代と古墳時代の土器は3区、4区を除いた各区から少量の出土があった。

平安時代前期の遺物は1区、5区、6区を中心に出土したが、該期の遺構に伴うものではない。土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・緑釉瓦・瓦・軒瓦・凝灰岩片などの種類がある。6区からは「右坊」銘丸瓦片が出土した。平安時代後期に属する土器には土師器・彩釉陶器がある。彩釉陶器は緑彩で「遼三彩」の一種と考えられる。

桃山時代、江戸時代の遺物は土師器・陶器・染付陶磁器・瓦などが出土した。

小結 4区は西坊城小路推定線上に設定したが、江戸時代の溝を検出したにとどまった。「拾芥抄」によれば右京三条一坊七・八町は穀倉院とされ、東隣の二町も「同領」とある。同一の穀倉院敷地とすればこの地区の西坊城小路は設置されなかった可能性がある。このことは押小路推定線に調査区を設定した6区での、押小路南溝の未検出結果と関連しようか。穀倉院は穀物の収納、保管、出入を司っており、これを保障するスペースの確保は第一義的なものであったといえる。このことから一・二町、七・八町は穀倉院および穀倉院領として設定されたものと考えることが可能である

今回の調査地区、右京三条一坊二町の調査では、土取穴が多く平安時代の明瞭な遺構群の検出が困難であったが、豊富な出土遺物と穀倉院の占地・規模の確定に不可欠な押小路、西坊城小路側溝の未検出といった重要な調査成果が得られた。

(平田 泰)

5 平安京右京三条一坊7 (図版1・50)

経過 調査地は平安京右京三条一坊四町にあたり、ここに二条駅地区土地区画整理事業に伴う道路が築造されることになり、試掘調査を実施することになった。

試掘トレンチは、三条大路北側溝、西坊城小路東側溝、姉小路北・南側溝の推定位置付近などに、1～5トレンチを設定して、2回に分けて調査を実施した。初回は10月18日から11月17日にかけて1～3トレンチ、2回目は12月10日から12月29日に4・5トレンチの調査を実施した。(図34 調査位置図)

遺構・遺物 1トレンチは、三条大路北側溝と西坊城小路東側溝の交差点が推定される地点に設定した。トレンチ西端で、幅0.8m、深さ0.2mを測る南北方向の溝(SD9)を4.5m検出し、埋土からは中世の土器類が出土した。トレンチ南端では東西方向の溝(SD2)の肩部を検出したが、排水溝が平行して通っているため、その規模など詳細は不明である。SD9の東側、SD2の北側では平安時代の瓦を多量に含む整地層を検出した。平瓦・丸瓦が大半であるが、軒瓦や平瓦凹面に「右坊」銘を押捺したものも出土した。この整地層の下で、SD9より東へ40cm程の地点で幅1m、深さ0.15m程の平安時代前期から中期の遺物を含む南北方向の溝(SD11)を検出した。

2トレンチは西坊城小路東側溝と1町の南北中心付近に推定される地点に4×10mの調査区を設定した。トレンチ西端で、1トレンチで検出したSD9の延長である南北方向の溝(SD6)を検出し、またSD11の延長と考えられる溝(SD7)の痕跡を確認した。1町の南北中心付近では、杭で護岸した幅0.6m程の東西溝(SD5)を検出し、溝内からは平安時代中期の遺物が出土した。なお、1トレンチで検出した瓦を多量に含む整地層は確認されていない。

3トレンチは、当初、西坊城小路と姉小路の交差点付近に設定する予定であったが、三十一川

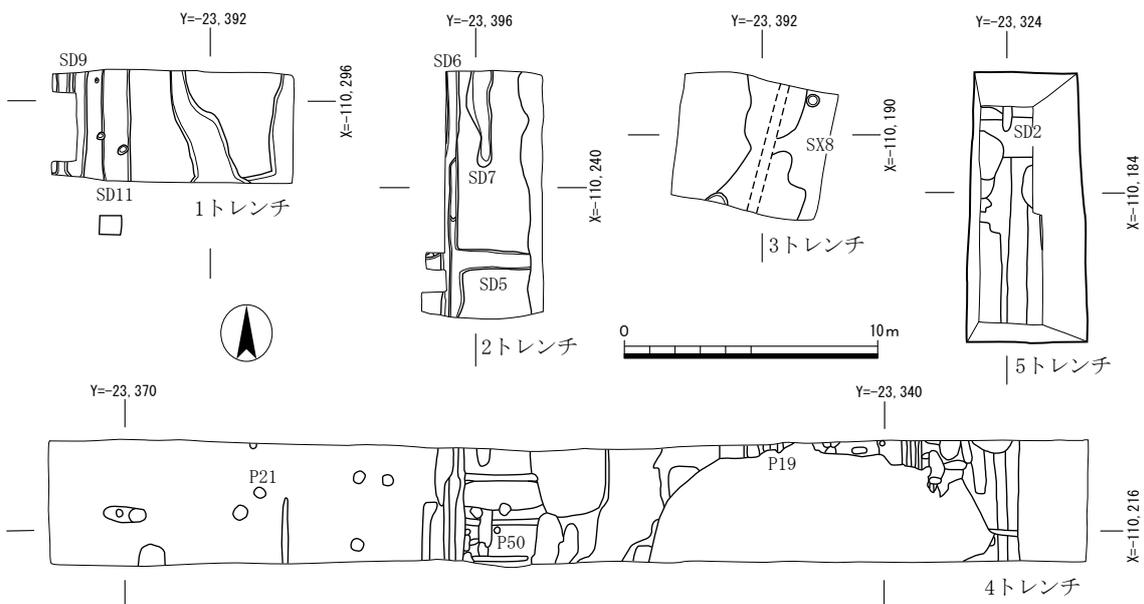


図111 遺構平面図 (1:300)

や下水道管などの障害物がある為、東側にずらして6.5×5.0mのトレンチを設定して調査を開始した。トレンチ東半で、平安時代中期の遺物を含む落込遺構（S X 8）を検出した。

4トレンチは、仮15号街路築造予定地内に5×42mのトレンチを設定した。トレンチ東半は、既存建物の地下構造物により攪乱をうけており、わずかに遺構面が残存していた。検出した遺構は、中世以降のものが大半をしめる。平安時代の遺構としては、トレンチ中央で検出した12世紀末の完形の瓦器椀の入ったピット（P 21）、緑釉軒丸瓦片が出土したピット（P 50）およびトレンチ東側で検出した落込（S X 57）などがある。また、トレンチ南西隅の断面では、9世紀代の遺物を含む、黒褐色泥砂層を確認した。P 19では、柱痕の残欠が出土したが、周辺部は地下構造物による攪乱をうけており、並びなどは不明である。なお、調査地南側の再開発住宅建設地内の発掘調査で検出した池状遺構の延長部分が予想されたが、その痕跡は認められなかった。

5トレンチは、当初、姉小路北側溝・路面・南側溝の推定地に設ける予定であったが、周辺工事との兼ね合いにより南側へずらし、姉小路南側溝および路面の推定地に4×10mの調査区を設定した。トレンチ北端の姉小路南側溝推定位置付近で、幅1.5m程の東西方向の溝を検出した。溝の時期を決定するためサブトレンチを設け、遺物を採取したところ、平安時代後期の溝であることが判明した。またサブトレンチ内で小石を敷き詰めた路面状遺構の一部も確認した。

小結 今回実施した試掘調査は、平安京右京三条一坊四町の町割の西半部分にあたる。1・2トレンチでは平安時代および中世の西坊城小路の東側溝を検出した。5トレンチでは、平安時代後期の姉小路南側溝および路面を検出した。また、その他のトレンチにおいても平安時代の遺構を検出している。

なお、1・2・3トレンチに関しては、試掘調査のみで終了した。1トレンチ付近では、三条大路北側溝と西坊城小路東側溝の交差部が推定されていたが、排水溝が通っていたため調査できなかった。また、瓦を多量に含んだ整地層の範囲は今後の開発工事時に確認したい。今回実施した試掘調査の結果から、四町西半部分の平安時代の遺構の様相をみると、残存状況は良好であるといえる。

（伊藤 潔）

Ⅲ その他の遺跡

6 長岡京左京四・五条四坊（図版1）

経過 調査地は長岡京跡、久我東町遺跡、古川町遺跡に推定されている。当地一帯では現在まで数多くの調査が行われており、調査の結果、弥生時代から中世の遺構、遺物を検出している。調査にあたっては長岡京条坊に関連する遺構の検出を主眼に、また他の遺跡と重なるところはそのことも留意して行った。

遺構・遺物 調査の結果、No.3で鎌倉時代から室町時代の堀を検出した。以下各試掘地点の結果を概述しておく。

No.1・2 いずれもトレンチの規模は30㎡（3×10）。両トレンチでは沼地状の堆積の確認にとどまり、明確な遺構の検出はなかった。

No.3 トレンチの規模は60㎡（4×15）。現地表下2.6mで中世の堀を検出した。堀は南北方向で、規模は幅が9m以上、深さは1.6m。埋土は灰色系の砂泥層で、層内には鎌倉時代から室町時代の遺物と炭化物が認められた。

No.4 トレンチの規模は30㎡（3×10）。沼地状の堆積の確認にとどまった。

No.6・7 いずれもトレンチの規模は35㎡（5×7）。両トレンチとも湿地状の堆積の確認にとどまった。

出土遺物は整理箱1箱であった。鎌倉時代から室町時代の土器類で、すべてNo.3の堀内から出土した。鎌倉時代の土器類には土師器、須恵器、瓦器、白磁が、室町時代は土師器がある。

小結 調査の結果、No.3で鎌倉時代から室町時代の堀を検出した。東側に西羽東師川が南流しており、この堀が区画のためのものであるなら、西側に住居あるいはなんらかの施設の存在が想定される。調査地は平安時代末の荘園・古川荘にあまっているが、鎌倉時代には廃絶している。14世紀以降には当地に古川館の存在が古文獻に認められることから今回検出した堀は当館に関連する遺構の可能性が高い。

以上のことを重視し、研究所と市との協議により、No.3については発掘調査を実施することになった。

（加納敬二・永田宗秀）

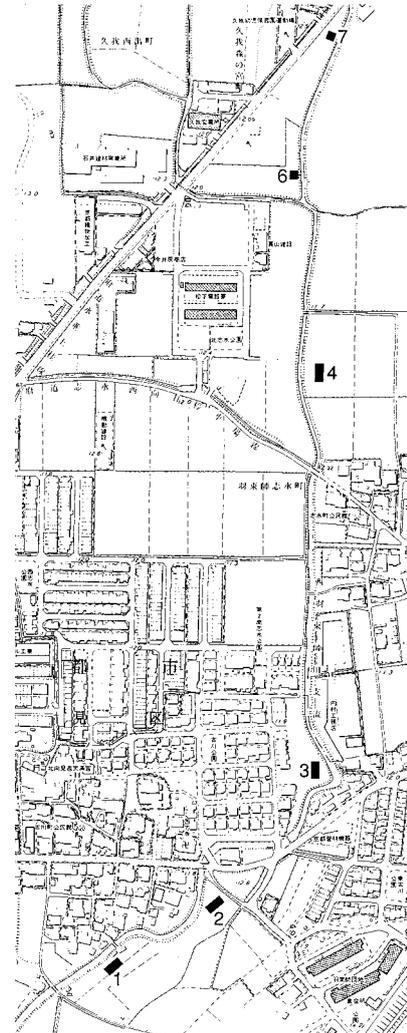


図112 調査位置図（1：7,500）

7 北野遺跡・北野廃寺（図版1）

経過 西大路通の京都市立衣笠小学校前から白梅町交差点までの道路中央部に配水管敷設工事が行われるのに伴い立会調査を行った。今回の調査区は工事区間全域が北野遺跡の範囲にあたり、また工事区中央から南側部分が北野廃寺の範囲にあたる。特に北野廃寺に推定されている部分では、過去の発掘調査の成果に基づき3地点（A・B・E）で掘削工事以前にトレンチを設定し試掘調査を行った。

遺構 遺構は、北野廃寺にあたる範囲で集中的に検出した。E地点において、現地表下0.65mで回廊の版築と考えられる堆積層（上層・厚さ0.2mの**ぶい**黄褐色砂礫層、下層・厚さ約0.1mの**ぶい**黄褐色粘土層）を南北方向に長さ4mに渡って検出した。B地点では、地表下0.84mで幅1.2m以上、深さ0.47mの東西溝（SD4）を検出し、直径5～10cm大の石を多く含む埋土と底部に礫敷きが確認された。埋土からは、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・

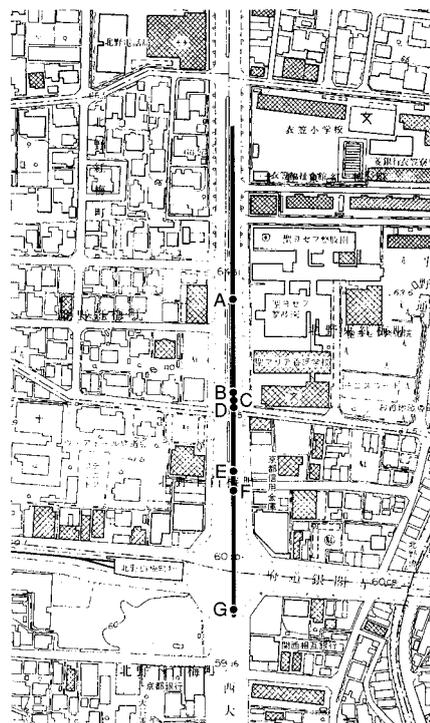


図113 調査位置図（1：5,000）

灰釉陶器・瓦などが出土した。いずれも9世紀代のものと考えられる。A地点では、地表下0.55mで幅1m・深さ0.32mの東西溝（SD1）を検出した。F・G地点では、飛鳥時代の瓦を多量に含んだ瓦溜を検出した。またC・D地点で井戸状遺構を2基確認した。C地点の井戸状遺構からは平安時代の土師器・緑釉陶器・瓦（軒平瓦含）などが出土した。

遺物 出土遺物の中で最も時代のさかのぼるものは、F・G地点の瓦溜から多量に出土した瓦で、飛鳥時代のものである。G地点の瓦溜からは、百済系文様の素弁蓮華文軒丸瓦が出土した。

平安時代の遺物は、北野廃寺推定地内に集中している。9世紀前半から11世紀にかけての土

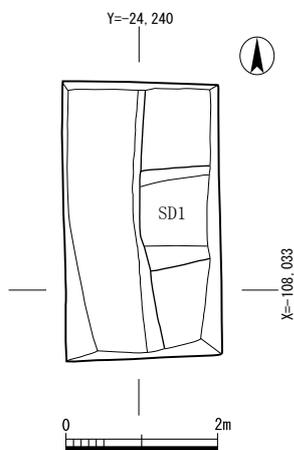


図114 A地点遺構平面図（1：100）

師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦が出土している。主要な遺物は、B地点の礫を敷いた溝（SD4）の底部から須恵器の小壺（瓶）の完形品が出土している。E地点の落込焼土層からは緑釉陶器の小壺が出土している。またB地点の溝（SD3、幅1.5m・深さ0.2m）からは墨書された灰釉陶器皿が出土している。墨書の文字は外面底部に記され、正確には判読できないが縦書きで二文字あり、上の文字は「西」ないし「四」が考えられ、下の文字は「人」、「大」、「天」が考えられる。

小結 E地点において検出した回廊の版築と考えられる堆積層は、同トレンチ西側の北野廃寺2次調査^{註1}で検出した瓦積遺構が北野廃寺の講堂の基壇と考えるならば、同トレンチが東側の回廊の推定地にあた

り、その回廊の版築と考えられる。この堆積層は、同じ西大路通の東側で行われた昭和56年度の下水道工事に伴う立会調査^{註2}でも検出されているので、東側へ続いていることが確認できた。

B地点において検出した底部に石を敷いた東西溝(SD4)は、同地点東側の北野廃寺6次調査^{註3}で検出した北野廃寺の寺域を区画すると推定されている東西溝SD8の続きの溝と考えられるものである。この溝は、同じ西大路通の東側で行われた昭和56年度の下水道工事に伴う立会調査でも検出されているので、溝がさらに西へ続いていることが確認できた。

A地点において検出した東西溝(SD1)は、同地点西側の北野廃寺10次調査^{註4}で検出した溝1(新)と同じ位置にあたる。溝1(新)は、北野廃寺の寺域北限と推定されている東西溝の一部と考えられている。しかし、この溝に関しては、同じ西大路通の東側で行われた昭和56年度の下水道工事に伴う立会調査では検出されておらず、東へ続くことが確認されていない。また、北野廃寺10次調査^{註4}で検出された溝1(新)との位置関係は同じであるが、溝の形状などは違っている。

F地点の瓦溜は、多量の飛鳥時代の瓦片を含んでおり、北野廃寺創建時に近い遺構と考えることもできるが、瓦の廃棄の時期の問題もあり断定はできない。なおこの地点の南側で昭和11年(1936)に京都府が路面電車建設に伴う発掘調査^{註5}で瓦溜を検出しており、関連が考えられるところである。

これらの遺構は、出土遺物から多くが平安時代の遺構と考えられ、F・G地点の瓦溜も遺物だけでは時期を断定できず、明確な古い時期(奈良時代以前)の遺構は今回の調査では検出されなかったことになる。しかし、今回の調査によって、北野廃寺に関係づけられる遺構を検出できたことは、北野廃寺を明確にしていく上で多大な成果となった。北野遺跡に関しては、中世の土壇・柱穴が検出されたにとどまり、明確な遺構は検出できなかった。

(吉本健吾・川村雅章)

註1 昭和52年度発掘調査(財)京都市埋蔵文化財研究所

註2 家崎孝治「北野廃寺、北野遺跡」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(試掘・立会調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983

註3 梅川光隆『北野廃寺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要』1979年度(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980

註4 鈴木久男・吉崎伸「第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報』昭和61年度京都市文化観光局 1987

註5 「北野廃寺趾」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十八冊 京都府 1938

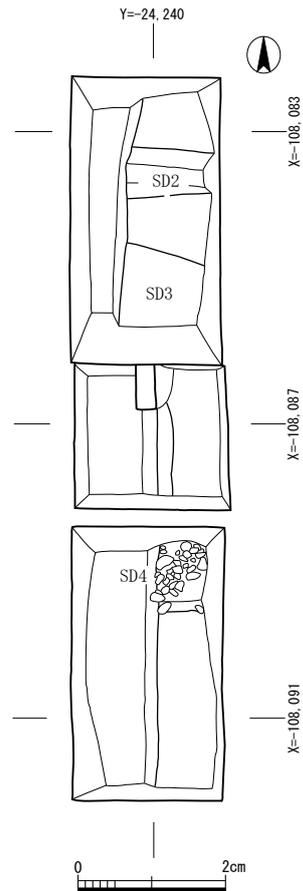


図115 B地点遺構平面図(1:100)

8 京都大学構内遺跡 (図版1・51)

経過 京都市左京区田中門前町から北白川追分町地内(今出川通)において、京都市建設局によって白川(今出川分水路)改修工事が計画された。当地は、発掘調査などで縄文時代から弥生時代、平安時代から中・近世の複合遺跡である京都大学構内遺跡にあたるため、調査が行われることになった。

調査に先立ち平成2年(1990)11月から翌年3月にかけて15箇所のボーリング調査^註を行い、その結果をうけて立会調査を実施した。

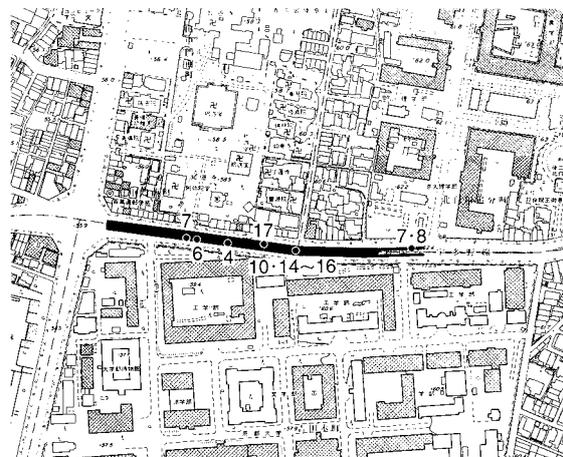


図116 調査位置図(1:5,000)

工事は、百万遍交差点付近から各工区毎に東へ進行し、交差点から東へ250mまでの間を平成5年(1993)1月21日から6月17日までの間で立会調査(93KS-BA2)を行った。続いて、その工区の東隣から京都大学理学部西端のあたりまでの一次掘削を平成6年(1994)1月26日から3月22日までの間で立会調査(93KS-BA3)を行った。工事掘削は、4回に分けて地表下9.5mまで行き、立会調査順に番号をつけ断面観察、遺物採集、写真撮影を行った。その結果、縄文時代の遺構を検出し、遺物包含層も広範囲に確認した。

遺構・遺物 調査区(BA2)では、基本層序は、盛土層下に中世・平安時代遺物包含層があり、以下に砂礫を主体とする流れ堆積が全域でみられた。特に、No.10地点付近では、現地表下2mで土石流を想わせる花崗岩(最大90×160cm)の巨石が多数認められた。縄文時代の包含層は確認した限りでは現地表下2~4mまで続き、遺物は砂層、砂礫層、黒色泥土層が互層となる各層から採集した。特に、現地表下3~4mの間の砂層・砂礫層から多く採集した。

No.14・16地点では、現地表下3.6~3.8mで5基の縄文時代の土壙を検出した。No.14地点で3基、No.16地点は2基である。この付近では、東西10数mにわたって、この深さが縄文時代の遺構面と考えられる。縄文時代の遺物は、調査区全体のNo.4・6・7・10・14~17地点から出土した。また、中・近世の遺構としては、路面・土壙などを数箇所で見出した。

縄文時代後期の土器は、No.4地点で4片、No.6地点で4片、No.7地点で深鉢など3片、No.10地点で鉢1片、No.14地点で1片、No.15地点で深鉢1個体、No.16地点で7片、No.17地点で底部片、深鉢口縁など9片が出土した。土器の時期は、磨消縄文など後期以降のものが主で、北白川上層式に比定される深鉢などもあった。

調査区(BA3)では、No.8地点の砂層(現地表下1.5~2.5m)から縄文土器が出土し、No.7地点で近世の肥溜を検出した。

肥溜は、調査区(BA2)で見られた土石流中の巨石の上面を利用して作られたもので、現地表下1mにて一辺が2.1m以上の巨大な石の上面を底部として、厚さ5cmの漆喰で作られていた。

埋土からは近世の陶器、染付が出土した。

小結 百万遍交差点付近は砂礫層が厚く堆積しており、東約 200 m の No. 14・16 地点付近の遺構面は、上下を砂礫層に挟まれていた。このことから、No. 14・16 地点付近は白川の洪水で埋まったもので、京都大学構内遺跡の西端であると考えられる。

(尾藤徳行・竜子正彦・本 弥八郎・吉村正親)

註 平方幸雄「京都大学構内遺跡」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994



図 117 B A 2 出土縄文土器実測図 (1: No. 15 地点 2・3: No. 4 地点
4: No. 17 地点 5: No. 7 地点 7: No. 10 地点) (1: 3)

9 嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡（図版2-1）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統北嵯峨（その1～3）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は、右京区嵯峨北ノ段町その他で府道大覚寺平岡線を含む。当該地は嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡である。

今回の調査地では、昭和59年（1984）の立会調査^{註1}平安時代前期の遺構と遺物包含層が確認されており、今回は嵯峨院跡に関連する遺構の検出および分布状況の確認を目的とした。

遺構 調査の結果、縄文時代中期から近世までの各時代の遺構を検出した。

北嵯峨（その1）区では調査区南部と東部で平安時代前期から中期の遺物包含層を検出した。中央部では湿地状の堆積を確認した。

北嵯峨（その2）区では調査区中央部に集中した室町時代前期の遺構を検出した。遺構には石組井戸、土壇、整地層とみられる遺物包含層などがある。この付近では、平安時代前期の土壇、室町時代後期の遺物包含層も検出している。北部では平安時代から室町時代後期の遺物包含層が確認されている。

北嵯峨（その3）区では調査区のはほぼ全域で遺構を検出した。地点1では縄文時代中期の土壇（S K 149）を検出した。この土壇は平安時代前期の遺物包含層の下層に位置し幅50cm、深さ35cmの規模で、埋土はにぶい黄褐色砂泥層である。平安時代前期の遺構群は南部の東寄りに集中し土壇（S K 153、184ほか）、溝、遺物包含層などがあり、遺構数も多く、多量の遺物を出土している。平安時代中期から後期にかけての遺構には土壇、遺物包含層などがあるが、前期に比べて遺構数が減少する傾向にある。南部西端では鎌倉時代の土壇を検出した。室町時代の溝は東端で検出し、幅1.2m以上、深さ0.8mの規模の南北方向の溝である。

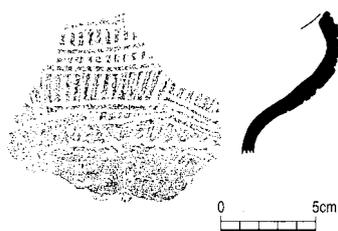


図119 SK 149 出土縄文土器
実測図（1：4）

遺物 今回の調査で遺物は整理箱に12箱出土した。

縄文時代中期 SK 149 から深鉢型土器の口縁部の破片を出土した。この土器は船元・里木第5様式^{註2}に属するもので、キャリパー状の口縁部をもち、口縁部下に頸部無文帯をもつ。地紋は縄巻

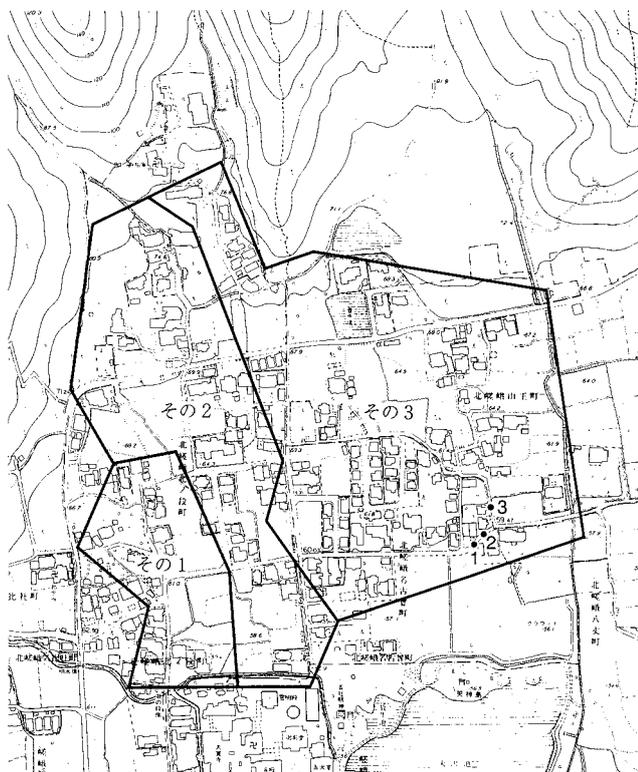


図118 調査位置図（1：7,500）

き縄文で口縁下に半截竹管による連弧文、その下に波状文を施す。胎土は2mm大の砂粒を多く含み、色調は浅黄色(2.5Y7/4)である。

平安時代前期 今回の調査ではこの時期の遺物が最も多く出土した。地点2のS K 153からは9世紀前半代の遺物が一括して出土した。遺物には土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・甕、黒色土器碗・甕、緑釉陶器碗・皿・壺、灰釉陶器碗・皿などがある。中でも杯・皿・高杯などの供膳形態の土器が数多く出土しており、緑釉陶器の碗・皿の出土量が多い。

平安時代中期から後期 遺構数とともに遺物の出土量も減少する傾向にある。土師器の杯・皿、瓦器の碗などが出土した。

鎌倉時代から室町時代後期 この時期の遺物の出土量は少ない。土師器の杯・皿が遺物の大半を占める。焼締陶器の甕、瓦などがそれに次いで出土する。

小結 以前の調査で確認された平安時代前期に属する遺構の分布範囲がさらに北方に広がりを見せることが明らかになった。北嵯峨(その3)区の名古曾滝の北付近には特に平安時代前期の遺構が集中する。検出した遺構には南北方向の溝1条、東西方向の溝3条、土壙8基、遺物包含層などがある。特に地点3のS K 184から一括して出土した9世紀前半代の土器類は供膳形態のものがほとんどを占めており、特に緑釉陶器の碗・皿の出土量が多いことが特徴である。出土遺物の傾向からみてもこれらの遺構は嵯峨院に直接関連するものとして注目される。さらに瓦類の出土量が少ないことも特徴であり、檜皮葺きの屋根をもつ建物が想定される。この付近一帯は遺構の密度も高く、遺跡の遺存状態は良好である。

右京区内において縄文時代の遺跡とされているものは前期に属する蜂ヶ岡中学校内遺跡と嵯峨釣殿町の晩期に属する遺物散布地など数箇所しか知られていない。その遺跡も遺物の地表面採集など確実な層位からの出土によるものは少ないのが現状である。今回の嵯峨野段丘上に位置する嵯峨院下層で土壙内より出土した土器は縄文時代中期に比定することができ、新たな縄文時代の遺跡の発見となった。京都盆地内における縄文時代中期の状況は、比叡山南西麓に位置する北白川遺跡群が前期に続き集落が営まれているほか、上賀茂地区、盆地中央部、山科盆地、桂川右岸盆地南西部でも遺跡が確認され、盆地全体に遺跡が分布するようになる。このような状況のなかに盆地北西部の嵯峨院下層遺跡も位置付けられる。嵯峨院下層では竪穴住居や墓などの集落を構成する主要な施設の検出は未だなく、今後の周辺地での更なる調査が必要である。

(小檜山一良)

註1 家崎孝治「嵯峨院跡・大覚寺御所跡」『昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1987

註2 小林達夫編『縄文土器大鑑』3 中期Ⅱ 小学館 1988

10 史跡名勝嵐山（図版2-1・52）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統嵯峨（その32・33・34）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区嵯峨鳥居本深谷町ほかの地域であり、今回の調査地は化野（あだしの）地区に属する。「あだし野」は二尊院から念仏寺にいたる小倉山北東麓一帯で、平安時代より東の鳥辺野、北の蓮台野とともに、遺骸を放置して風葬にした葬送の地であった。

調査の結果、平安時代末期から江戸時代前期にいたる各時代の多様な形態の墓などの遺構や副葬品、石仏・石塔などの墳墓に関する遺物の出土があった。

遺構 調査では平安時代末期から江戸時代前期の各時期の墓を検出した。

平安時代末期 地点2で小石室をもつ火葬墓（SK9）を検出した。幅1.55m、深さ0.65mの掘形内に、石を組み合わせて墓室を築いたものである。土壌内には炭が10cm程の厚さで敷き詰められており、石材の上層にも厚さ10cm程の炭層が土壌を覆うようにして堆積している。上部の炭層は現地表下45cmに位置する。小石室内から金銅製蓋付きの蔵骨器が出土した。

室町時代 地点3で甕棺墓（SK2）を検出した。幅1.4m、深さ0.95mの掘形内に、備前大甕を据えて甕の上に加工した石蓋をのせる。甕内からは人骨と副葬品が出土した。

室町時代後期 地点5で火葬墓（SK56）を検出した。幅1.1m、深さ0.5mの土壌内から火葬骨が焼土、炭、土師器片とともに出土した。地点4で火葬墓（SK27）を検出した。土壌内からは火葬骨と土師器片が出土した。

江戸時代前期 地点1で土壌墓（SK13）を検出した。幅0.7m、深さ0.8mの土壌内から副葬品とともに人骨が出土した。人骨の出土状況から座った状態で埋葬されたと考えられる。

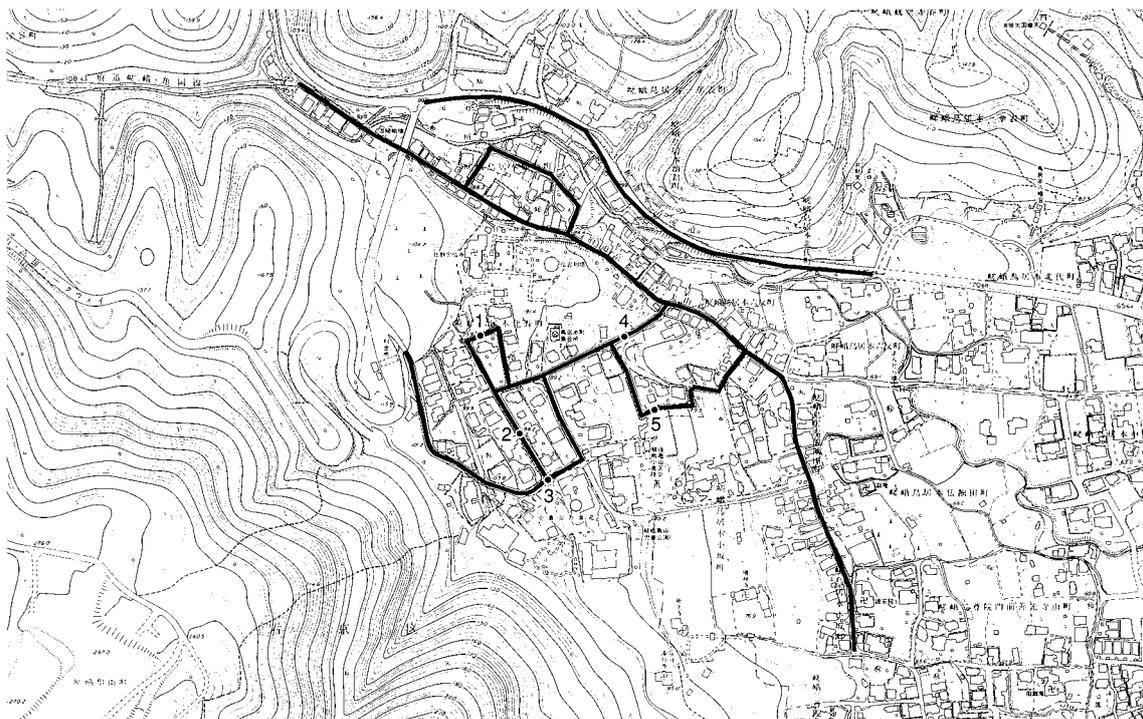


図120 調査位置図（1：7,500）

他に、時期は不明であるが土葬墓、火葬墓、火葬所などと考えられる遺構を多数検出した。

遺物 出土した遺物は整理箱に15箱である。遺物は主に墓壙・整地層・大土壙から出土したものに分けられる。

蓋付きの蔵骨器が火葬墓(S K 9)から出土した。蓋は金銅製である。銅製の蓋上面に、蓮華座上に梵字の「𑖀」を乗せた図案を線彫りして鍍金したものである。蔵骨器は輸入の褐釉陶器四耳壺を転用したもので、中には火葬骨と炭を納めている。平安時代末期に属する。

墓(S K 2)から甕が出土した。甕は棺に転用されたもので器高80cm、口径48cm、胴部最大径75cm、底径50cmの室町時代の備前焼大型甕である。甕の中からは、人骨とともに副葬品として輸入銭貨30枚、刀子、乾漆製品が出土した。

墓(S K 13)からは人骨とともに伊万里焼椀、寛永通寶6枚が副葬品として出土した。江戸時代前期に属するものである。

石造物は、石仏と五輪塔が多数出土した。五輪塔の各部には梵字の刻まれているものがある。一石五輪塔には梵字・戒名・紀年銘が刻まれているものもあり、その中には戒名に金泥を塗り込むものもみられる。紀年銘では「永正十年」(1513)とあり室町時代後期のものである。

小結 化野は周知の遺跡には該当していないが、今回の調査で文献史料などを裏付ける数多くの考古資料を得ることができた。化野念仏寺南方の標高80～97m、ほぼ南北150m、東西170mの範囲内で多数の遺物や古墓などを検出した。検出した墓の種類には土葬墓と火葬墓がある。土葬墓は甕棺土壙墓と土壙墓の2種類がある。火葬墓は火葬所がそのまま墓室となるもの、火葬所との位置が異なるものにと分類できる。ほかに、火葬所の可能性のある遺構には厚い焼土壁をもつ土壙がある。さらに墓の可能性を持つ土壙が多数ある。検出した墓は平安時代末期1基、室町時代1基、戦国時代2基、江戸時代前期1基であり、ほかの3基は遺物が未検出のため時期は特定できない。地表面採集の遺物などを含めてみても葬送地「あだし野」では平安時代末期に火葬墓が確実に営まれていたことが判明した。

調査地は「あだし野」の北限近くに位置するものと思われ、付近の地形などから墓域はさらに調査区外の念仏寺西方の斜面から二尊院にかけて展開するものとみられる。調査対象となった道路部分における遺構の遺存状態は良好であり、今後の周辺地での更なる調査で墓域の広がり確認が必要である。(小檜山一良)

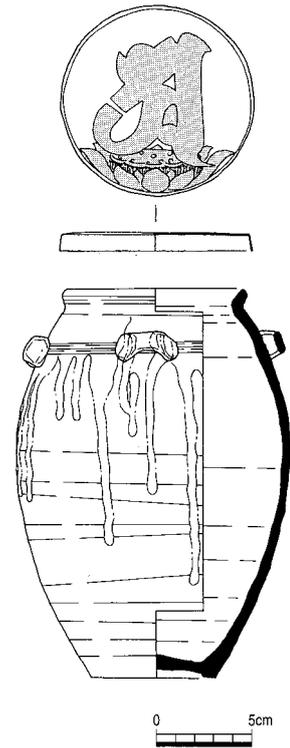


図121 S K 9出土遺物
実測図(1:4)



図122 S K 2出土甕

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、32 調査現場でのべ 63 件の調査基準点測量や地形測量における図根点作成作業、11 調査現場でのべ 26 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。また、外部からの依頼をうけて 6 調査の基準点測量を行っている。調査基準点測量の内訳は発掘調査 61 件、試掘・立会調査 6 件、地形測量 2 件である。

ここ数年、写真測量におけるデジタルデータ化についてふれてきたが、写真測量以外にもトータルステーションを利用した平面図作成システムが登場している。これらも基本的にはコンピュータを介してのもので、デジタルデータから作図される。このように写真測量やトータルステーションを利用することによりデジタルデータが作成されることは、利用者にとり大きなメリットとなっているが、データのやり取りなどを考えれば、統一したデータフォーマットが必要になってくるのではないだろうか。今後、GIS（Geographic Information System = 地理情報システム）などの利用が始まれば、おのずとデータフォーマットの統一が必要となる。本格的なデジタル化を始めるためにも、統一フォーマットを作成すべきである。（辻 純一）

2 コンピュータ

前年度に引き続き、調査概要データ・写真データ・遺物管理データ・保存処理データ・調査図面データなどを作成している。

当研究所では昭和 57 年度より調査データの概要をコンピュータにより管理活用している。一期でのオフィスコンピュータ（オフコン）では文字検索ができないことやネットワーク機能がななどの制約があり、昭和 63 年度に郵政省の補助金を受け、二期としてワークステーションを採用し、システムを構築した。このシステムも、年々向上するコンピュータの性能により、データベースの検索速度の問題などで限界が来ていた。来年度に三期のシステム構築を行う予定している。このシステムの改良点は検索速度の向上、使いやすいネットワークの構築、膨大なデータの一元管理、高品質な画像入出力を目的としている。なお、このシステム構築も郵政省の補助金を受けることで行うことが決まっている。（辻 純一）

3 復原彩色

復原遺物の彩色

本年度復原彩色を行った遺物は、合計241点である。平成5年度の国庫補助による調査概報、京都市埋蔵文化財調査概要、展示貸出用で、詳細は次の通りである。

表2 平成5年度の遺物復原彩色件数一覧表

内容	調査記号	点数	内容	調査記号	点数
国庫補助概報	92BB - TB325	2	展示貸出	83HK - XD	2
	92BB - HL352	7		87HK - YF	20
	93BB - HL228			90NG - MI	24
	92HK - DW	91NG - MI			
調査概要	88NG - PVY4区	51		91HK - MZ	31
	88MK - HO	34		91KS - OG3	4
	89MK - HO			93UZ - SW3	1
	89HK - FU	19		その他	24
	89TB - SW75	5			
	93HK - UW2	1			

人面墨描土器の復原彩色

遺物復原の彩色には、遺物本体部分と石膏復原された部分の境界を目立たなくする塗り方と、境界が識別できるようにする塗り方がある。

はじめに、遺物の明度・色調・質感に合わせてポスターカラーもしくはアクリル絵具を用いて下地塗りを施す。これは写真撮影の際に、石膏復原された白い部分がハレーションをおこすのを防ぐためである。通常は次に加筆して似せていく。しかし、墨書・線刻などで人工的とわかる文字・記号・絵などが残っている場合には、土器の地色を単色で着色するだけで終わる場合が多い。

今回復原彩色を行った長岡京左京七条三坊出土の人面墨描土器は、残存状態が良好で復原を必要とする部分はわずかであった。彩色作業は単色で着色する方法をとり、遺物部分と復原部分が区別できるように仕上げた。このように、目的に応じて効果的な仕上がりになるように、使用する絵の具や塗り方を使い分けて彩色している。(中村享子)



図123 人面墨描土器



図124 人面墨描土器

4 安祥寺下寺跡出土蟠龍文鏡の蛍光X線分析

宮内庁正倉院事務所

成瀬 正和

安祥寺下寺跡より出土した蟠龍文鏡について非破壊法による蛍光X線分析を実施した。蛍光X線分析は試料に含まれる元素の種類と量を調べるための方法である。

鏡は全体の2割ほどが残るにすぎないが、緑青の錆の析出はほとんどみられず、もとの金属色に近い銀白色の部分と、黒色化した部分とからなっている。測定は鏡の表裏あわせて7箇所で行った。図には比較的金属色に近い部分の蛍光X線スペクトル図を示す。

鏡体からは多量の銅 (Cu) とスズ (Sn) および少量の鉛 (Pb)、微量の鉄 (Fe)、ニッケル (Ni) が検出された。高錫青銅 (白銅) 製である。

各元素のみかけの含有量は、測定箇所によってばらつきがあるが、鉛 (Pb) は3%程度である。スズ (Sn) は金属色の部分でも見かけ上、30%を越えており、黒色化している部分ではさらに高い含有量を示す。もっとも実際には青銅の鑄造において、スズ (Sn) の含有量がスズ (Sn) + 銅 (Cu) の含有量の25%を越えると、非常に脆くなり、スズ (Sn) が30%を越えると事実上鑄造困難になる。本鏡は本来の金属部分にスズ (Sn) が多いことは間違いないと考えられるが、多くても25%どまりであろう。

正倉院では、これまで30数面の鏡について非破壊法による蛍光X線分析を済ませている。正倉院の鏡はほとんどが伝世鏡で、錆化がわずかなため、表面の化学組成はほぼ本来の地金の化学組成と等しい。調査を通し、中国すなわち唐で製作されたと考えられる鏡は銅 (Cu) 約70%、スズ (Sn) 約25%、鉛 (Pb) 約5%の化学組成を示すことが明らかとなっている。中国では前漢から盛唐鏡の標準的的化学組成はほとんど変わっていない。これに対し、わが国で製作されたと考えられる鏡は銅 (Cu) 約80%、スズ (Sn) 約20%、ヒ素 (As) 2~3%の化学組成を示す

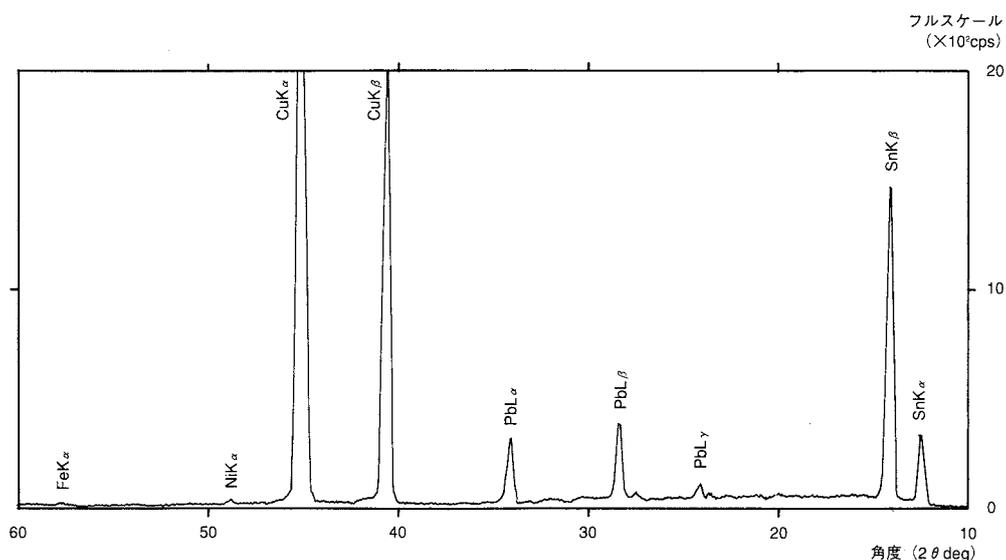


図 125 蟠龍文鏡の蛍光X線スペクトル図

ことが明らかとなっている。また飛鳥～平安時代の国産の銅には通常1～数%程度のヒ素(As)が必ず含まれることが最近明らかになりつつある。^{註2}

安祥寺下寺跡の蟠龍文鏡は、ヒ素(As)が検出されないことから国産品である可能性は低い。錆化の影響を考慮すると、本来の化学組成は唐鏡の化学組成に近いものであったと考えている。

註1 測定は宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製波長分散型蛍光X線分析装置(大型試料用)を用いて実施した。図に示した蛍光X線分析スペクトルの測定条件は以下の通りである。X線管球:クロム対陰極、印加電圧:35kV、印加電流:15mA、測定雰囲気:大気、分光結晶:フッ化リチウム、検出器:シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査速度:8°/分、記録紙速度:8cm/分、ゴニオメーター走査範囲(2θ):10～65°(図には10～60°を示す)、時定数:0.5、フルスケール:2000cps、照射野制限マスク:Ti20φ。

註2 成瀬正和(1995)化学組成よりみた奈良時代の銅製品の特徴—正倉院宝物の分析などから—第5回鑄造研究会資料

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 「文化財講演会」の開催

日 時 平成5年11月14日(日) 午後2時～4時30分
会 場 京都会館会議場 (参加者 約300名)
内 容 報 告「最近の長岡京跡の発掘調査成果」 調査課長 永 田 信 一
講 演「長岡京から平安京へ」 京都女子大学助教授 瀧 浪 貞 子
主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援 N H K 京都放送局・京都新聞社・K B S 京都

(2) 「'93 発掘調査成果写真展」の開催

期 間 平成6年1月18日～28日(10日間)
会 場 京都市考古資料館 3階 (入場者 670名)
主 催 京都市・財団法人京都市埋蔵文化財研究所
後 援 N H K 京都放送局・京都新聞社・K B S 京都

(3) 現地説明会の開催

ア 平成5年5月15日 「松ヶ崎廃寺(妙泉寺)」 (参加者 約100名)
イ 平成5年8月29日 「安祥寺下寺跡」 (参加者 約230名)
ウ 平成5年10月2日 「平安京左京四条四坊」 (参加者 約100名)
エ 平成5年10月9日 「水垂遺跡」 (参加者 約140名)
オ 平成6年3月26日 「平安京右京八条二坊二町」(参加者 約200名)

(4) 「リーフレット京都」(No.51～No.62)の発行

No.51 信仰・祭祀6 「下西代2号墳―二重の石室を持つ古墳―」
No.52 生活・文化5 「庭園発掘―さまざまな園池―」
No.53 土器・瓦10 「焼塩壺と花塩壺」
No.54 仏教・寺院2 「長岡京の川原寺」
No.55 考古アラカルト9 「岡崎グラウンドの『^{ぬえづか}鶴塚』」
No.56 考古アラカルト10 「考古資料館夏期教室」
No.57 考古アラカルト11 「考古資料館周辺散策」
No.58 発掘ニュース12 「古墳時代の大型集落発見―水垂遺跡―」
No.59 発掘ニュース13 「^{あだしの}化野の墳墓―蓋付蔵骨器―」
No.60 発掘ニュース14 「発掘成果をふりかえって 1993」
No.61 信仰・祭祀7 「木炭木槨墓を発見」

No.62 考古アラカルト12 「竪穴住居の型をとる」

(5) 研究会等への派遣

ア 平成5年4月～平成6年3月（毎月開催）

向日市（京都府埋蔵文化財調査研究センター）

「長岡京連絡協議会」
 調査課主任 木下保明
 調査課主任 上村和直
 調査課 吉崎伸

イ 平成5年6月24日 岡山市（岡山県立美術館）

「国立歴史民俗博物館考古学資料の情報集成的研究の研究協力説明会」
 調査課主任 堀内明博

ウ 平成5年8月2日 向日市（向日市民会館）

「長岡京発掘調査1000回記念講演会」 調査課主任 上村和直

エ 平成5年9月11・12日 相楽郡山城町（山城郷土資料館）

「京都府埋蔵文化財研究会」
 調査課長 永田信一
 調査第1係長 本弥八郎
 調査課 高正龍

オ 平成5年9月25・26日 東京都（青山学院大学）

「第14回日本貿易陶磁研究会」 調査課主任 平尾政幸

カ 平成5年10月21日 京都市（ルビノ京都堀川）

「平成5年度研修会」（調査研究部会）
 調査課長補佐 鈴木久男
 調査課 小松武彦

キ 平成5年11月25・26日 千葉県佐倉市（国立歴史民俗博物館）

「国立歴史民俗博物館重要歴史資料分析調査研究による資料情報化研究会」
 資料課 宮原健吾

ク 平成6年2月26・27日 宮城県多賀城市（多賀城市文化センター）

「第20回古代城柵官衙遺跡検討会」
 調査課主任 堀内明博
 調査課 高正龍

ケ 平成6年3月17・18日 東京都（東京国立文化財研究所）

「有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究協議会」
 資料課 宮原健吾

コ 平成6年3月29日 奈良市（奈良国立文化財研究所）

「第13回近畿地方出土木器の集成研究会」 調査第2係長 平方幸雄

(6) 海外技術研修員文化財修復整備技術コース研修の実施

国際協力事業団大阪国際研修センターが実施している海外技術研修員に対する文化財修復整備技術コース研修の一環として、当研究所における研修講義の依頼があり、次

のとおり2回の研修を実施した。

ア 第1回（財団法人京都市国際交流協会から受託）

共通講座

期 間 平成5年5月13日～26日（10日間）
研修員数 6名（国籍：エジプト、インドネシア、マレーシア、パキスタン、ペルー、タイ各1名）
研修内容 発掘調査、測量・コンピュータ、写真撮影、遺物復原および保存処理の各技術の研修

専門講座（埋蔵文化財）

期 間 平成5年7月12日～16日（5日間）および8月2日～26日（17日間）
研修員数 3名（国籍：インドネシア、パキスタン、エジプト各1名）
研修内容 発掘調査（水垂遺跡）、遺物の保存処理・分析（下鳥羽収蔵庫）の実習および福井県一乗谷遺跡などの修景保存状況の見学

イ 第2回（国際協力事業団大阪国際研修センターから受託）

共通講座

期 間 平成6年3月4日～15日（8日間）
研修員数 5名（国籍：カンボジア、中国、パキスタン、ペルー、タイ各1名）
研修内容 発掘調査、測量・コンピュータ、写真撮影、遺物復原および保存処理の各技術の研修

2 京都市考古資料館状況

（1）速報展示の実施

ア 平成5年5月～6月

平安京左京四条一坊（朱雀第一小学校）発掘調査で出土した人面文軒丸瓦、鳥形灰釉陶器など10点を展示

イ 平成5年11月～12月

右京区嵯峨鳥居本化野町の公共下水道工事に伴う立会調査で出土した金鍍金を施した金銅製蓋付蔵骨器を展示

（2）常設展示の展示替

ア 時代別コーナー中「平安時代コーナー」および「桃山時代コーナー」の一部展示替え

イ 平成6年1月の期間、「桃山陶器コーナー」を「お正月の遊びコーナー」として展示替えを実施し、市内出土の羽子板、独楽などお正月に因んだ遺物4点を展示した。

（3）「第14回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成5年8月3日～6日

ア「小学生夏期教室」 8月3日・4日

第1日（児童のみ 参加者 24名）

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習

第2日（親子 参加者 22組）

9：30～11：30 古墳見学（御堂ヶ池1号墳から甲塚古墳の見学および遺跡
や遺物の時代の決め方、古墳の保存等についての学習）

イ「中学生夏期教室」 8月5日・6日

第1日（参加者 40名）

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習

第2日（参加者 41名）

9：30～12：00 高倉小学校発掘調査現場（中京区高倉通六角下る和久屋町）
での発掘調査および遺物の復原の実習

ウ「夏期教室拓本展並びにスナップ写真展」の開催

期 間 平成5年8月18日～9月5日 会 場 考古資料館 1階

（4）文化財講座の開催

文化財講座は、京都市域で実施されている発掘調査の成果をいち早く市民に知らせるとともに市民の埋蔵文化財保護意識を高めるため、昭和61年度から実施し平成4年度まで62回実施してきた。

なお、平成元年度には「京都の瓦」をテーマに8回の連続講座を実施し好評を得たので以降、各年度ごとにテーマを設定し、連続講座を実施している。

平成6年度には平安建都1200年を迎えるが、平安京についての本格的な埋蔵文化財の発掘調査が実施されることになって20年を経過し、平安京を理解するうえで多くの成果を挙げる事ができた。

平成5年度の文化財講座は、これらの成果を基に、平成5年度、平成6年度の2年度にわたって、建都1200年記念「平安京を掘る」をテーマとして下記のとおり16回の連続講座を企画実施することとした。

テーマ 平安建都1200年記念連続講座 「平安京を掘る」

講座1 「平安京埋蔵文化財発掘事始め」（4月）

講座2 「平安京の曙」（5月）

講座3 「平安京の条坊復元」（6月）

講座4 「平安宮内裏・朝堂院・豊楽殿」（7月）

講座5 「平安宮の官衙」（10月）

講座6 「東寺・西寺」（1月）

講座7 「東市・西市」（2月）

講座8 「平安京の環境」（3月）

以下、平成6年度

講座 9 「平安貴族の邸宅」	(4月)
講座 10 「平安京の苑池」	(5月)
講座 11 「平安京の祭祀」	(6月)
講座 12 「平安京の自然災害」	(7月)
講座 13 「平安京の搬入瓦」	(10月)
講座 14 「国際都市平安京」	(1月)
講座 15 「平安京の変質」	(2月)
講座 16 「考古学から見た平安京」	(3月)

なお、発掘調査、出土遺物についての講座および現地講座などについては従来どおりあわせて実施することとする。

平成5年度の実施状況は次のとおりである。

ア 第63回 平成5年4月24日

「平成4年度 京都市域の調査成果」	調査課長	永田 信一
「平安京を掘る」講座1		
—平安京埋蔵文化財発掘事始め—	研究所長	杉山 信三 (受講者 85名)

イ 第64回 平成5年5月22日

「飛鳥時代の炭焼窯を発掘」	調査課	伊藤 潔
「平安京を掘る」講座2		
—平安京の曙—	調査第4係長	長宗 繁一 (受講者 86名)

ウ 第65回 平成5年6月26日

「勸業館跡地の調査」	調査課	網 伸也
「平安京を掘る」講座3		
—平安京の条坊復元—	資料課	辻 純一 (受講者 103名)

エ 第66回 平成5年7月24日

「洛央小学校の調査」	調査課	長戸 満男
「平安京を掘る」講座4		
—平安宮内裏・朝堂院・豊楽殿—	調査課長補佐	鈴木 久男 (受講者 116名)

オ 第67回 平成5年9月25日

「現地講座・平安京左京二条四坊（御所南小学校）の調査」	学芸員	南出 俊彦 (受講者 82名)
-----------------------------	-----	--------------------

- カ 第68回 平成5年10月23日
 「平安京右京六条一坊の調査」 調査課主任 平尾政幸
 「平安京を掘る」講座5
 一平安宮の官衙一 京都市文化財保護課 北田栄造
 (受講者 72名)
- キ 第69回 平成6年1月22日
 「岡崎鶴塚は古墳時代の円墳」 調査課主任 丸川義広
 「平安京を掘る」講座6
 一東寺・西寺一 京都市埋蔵文化財調査センター 長谷川行孝
 (受講者 115名)
- ク 第70回 平成6年2月26日
 「平安京左京三条三坊の調査」 調査課主任 辻裕司
 「平安京を掘る」講座7
 一東市・西市一 調査課主任 百瀬正恒
 (受講者 90名)
- ケ 第71回 平成6年3月26日
 「岩倉栗野瓦窯跡で見つかった二彩陶器の窯跡」 調査第1係長 本弥八郎
 「平安京を掘る」講座8
 一平安京の環境一 資料課 岡田文男
 (受講者 89名)

(5) その他普及啓発

1階「情報コーナー」において「リーフレット京都」の配布をはじめ、パソコン、レーザーディスクおよびビデオによる展示資料・遺跡などの紹介を行なうほか、次の参考資料を整備し利用に供している。

- ア 考古学・日本歴史ほか関係図書
- イ 府下および近県の博物館施設等のパンフレット
- ウ 発掘調査現地説明会資料
- エ 発掘調査関連新聞記事

(6) 考古資料の貸出

継続貸出分 29件 726点 新規貸出分 20件 637点

(7) 博物館学芸員課程実習生などの受入

立命館大学	7名	京都橘女子大学	7名	同志社大学	2名
京都芸術短期大学	5名	京都精華大学	3名	大谷大学	2名
大阪青山短期大学	1名	奈良大学	33名	大阪市立大学	40名
京都府立大学	30名	京都女子大学	1名		

(8) 京都市考古資料館入館者状況

表3 平成5年度月別観覧者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	26	1,302	257	137	41	1,737	66.8
5	26	1,296	292	86	438	2,112	81.2
6	26	1,192	150	163	152	1,657	63.7
7	27	1,134	200	396	20	1,750	64.8
8	26	1,522	516	117	57	2,212	85.1
9	26	1,490	223	82	0	1,795	69.0
10	27	1,220	167	220	0	1,607	59.5
11	25	1,298	125	200	0	1,623	64.9
12	23	1,039	77	130	127	1,373	59.7
1	24	1,118	175	147	38	1,478	61.6
2	24	1,094	84	212	0	1,390	57.9
3	27	1,258	97	146	26	1,527	56.6
計	307日	14,963人	2,353人	2,036人	899人	20,261人	66.0人

(参考 平成4年度入館者数 開館日 307日 20,068人／一日平均 65.4人)

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	松村 哲治	京都市文化観光局長
専務理事	船橋 啓輔	京都市文化観光局文化部参事
理事	池田 佳郎	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	上田 正昭	京都大学名誉教授・大阪女子大学学長
	木村 捷三郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	柴田 昌夫	京都市埋蔵文化財調査センター所長
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田辺 昭三	京都造形芸術大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	檜崎 正孝	京都市文化観光局文化部長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
監事	市田 幸雄	京都市会計室長
	堀 道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	杉山 信三	研究所長(理事)	調査部 調査課	永田 信一	調査課長
	木村捷三郎	嘱託(理事)(3.31退職)		鈴木 久男	課長補佐兼調査第3係長
	田辺 昭三	嘱託(理事)		本 弥八郎	調査第1係長
総務部 総務課	伊藤 哲夫	総務部長(京都市出向)		平方 幸雄	調査第2係長
	青木 春夫	総務課長		長宗 繁一	調査第4係長
	菅田 悦子	主任		磯部 勝	調査第5係長
	上村 京子	〃		吉村 正親	主任
	村木 節也	事務職員		平田 泰	〃
	本田 憲三	〃		木下 保明	〃
	金島 恵一	〃		鈴木 廣司	〃
	夏原美智代	〃	菅田 薫	〃	
	佐藤 正典	〃	堀内 明博	〃	
	上田 栄治	調査補佐員(兼職)	百瀬 正恒	〃	

	氏 名	職 名
調 査 部 調 査 課	久世 康博	主 任
	加納 敬二	〃
	平尾 政幸	〃
	辻 裕司	〃
	上村 和直	〃
	前田 義明	〃
	丸川 義広	〃
	吉崎 伸	研究職員
	網 伸也	〃
	内田 好昭	〃
	高 正龍	〃
	高橋 潔	〃
	山本 雅和	〃
	南 孝雄	〃
	小森 俊寛	〃
	長戸 満男	〃
	上村 憲章	〃
	伊藤 潔	〃
	近藤 知子	〃
	会下 和宏	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝 勉	〃
	能芝 妙子	〃
	法邑真理子	〃
	鎌田 泰知	〃
	小倉万里子	〃
	松尾 武彦	〃
	竜子 正彦	〃
	桜井みどり	〃
	清藤 玲子	〃
	出口 勲	〃
	藤村 敏之	〃
	山口 真	〃
	津々池惣一	〃
	太田 吉男	〃
	堀内 寛昭	〃
大立目 一	〃	
川村 雅章	〃	

	氏 名	職 名	
調 査 部 調 査 課	小檜山一良	調査補佐員	
	近藤 章子	〃	
	西大條 哲	〃	
	布川 豊治	〃	
	永田 宗秀	〃	
	東 洋一	〃	
	宮下 則子	〃	
	吉本 健吾	〃	
	端 美和子	〃	
	藤村 雅美	〃	
	北川 和子	〃	
	北原 四男	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤 德行	〃	
	大立目道代	〃	
	調 査 部 資 料 課	峰 巍	資料係長
		中村 敦	研究職員
		辻 純一	〃
		岡田 文男	〃
		原山 充志	〃
出水みゆき		調査補佐員	
児玉 光世		〃	
角村ひろみ		〃	
田中利津子		〃	
ト田 健司		〃	
宮原 健吾		〃	
角村 幹雄		〃	
村井 伸也		〃	
幸明 綾子		〃	
村上 勉	〃		
多田 清治	〃		
モンパ ^o テイ 恭代	〃		
大槻 明義	〃		
大槻 明義	〃		
考 古 資 料 館	塩崎 英雄	館 長	
	中島 松夫	主 任 (3.31 退職)	
	南出 俊彦	学芸員	

表4 発掘調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安宮	01 H5-056 朝堂院宣政門跡 93HK-DZ	上京区竹屋町通千本東入主税町1202	94.02.01 ～ 94.03.18	63㎡	京都市	長戸	国庫補助	
	※ H4-036・H5-068 左馬寮跡 92HK-LB	中京区西ノ京左馬寮町3-1 (朱雀第二小学校)	92.11.16 ～ 93.03.24	767㎡	京都市	辻裕 近藤	平成4年度 報告済	
	※ H4-063 左馬寮跡 92HK-LB	中京区西ノ京左馬寮町3-1 (朱雀第二小学校)	93.03.25 ～ 93.06.15	520㎡	京都市	辻裕 近藤	平成4年度 報告済	
平安京	02 H5-031 左京一条三坊 93HK-MP002	上京区烏丸通下長者町上る龍前町 6-5 他	93.11.04 ～ 94.03.31	580㎡	私立学校教職員 共済組合	前田、会下		
	03	H4-046・H5-067 左京二条四坊 92HK-GN	中京区柳馬場通竹屋町下る 五丁目242(御所南小学校)	92.12.16 ～ 93.05.21	530㎡	京都市	丸川、堀内 内田	1区 平成4年度 に試掘
		H5-024 左京二条四坊 92HK-GN002	中京区柳馬場通竹屋町下る 五丁目242(御所南小学校)	93.05.24 ～ 94.01.21	2,577㎡	京都市	堀内、内田 丸川、久世 高、平方	2・3区
	04 H5-048 左京三条一坊・ 史跡旧二条離宮 93HK-UO	中京区押小路通堀川西入 二条城町地内	94.02.16 ～ 94.03.29	55㎡	京都市	小森 上村憲		
	05 H5-044 左京三条二坊・ 堀河院跡 93HK-FR007	中京区押堀町地内	93.12.08 ～ 94.02.25	190㎡	京都市交通局	小森 上村憲		
	※ H4-035・H5-066 左京四条一坊 92HK-UH	中京区壬生朱雀町8-2 (朱雀第一小学校)	92.11.09 ～ 93.04.28	887㎡	京都市	南 会下 鈴木久	平成4年度 報告済	
	06 H5-005 左京四条四坊 93HK-TH	中京区高倉通六角下る 和久屋町343(高倉小学校)	93.04.05 ～ 93.11.13	871㎡	京都市	山本 鈴木廣		
	07 H5-030(1) 左京六条一坊 93HK-HK006	下京区中堂寺坊城町	93.08.07 ～ 94.03.24	100㎡	住宅都市整 備公団	平尾		
	08 H5-020 左京八条三坊 93HK-EF001	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町(京都駅構内)	93.06.23 ～ 93.08.20	255㎡	西日本旅客 鉄道(株)	網		
	※ H5-037(1) 左京八条三坊 94HK-EF002	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町(京都駅構内)	93.12.07 ～ 94.03.01	370㎡	西日本旅客 鉄道(株)	菅田、網	平成6年度 報告済	
※ H5-037(2) 左京八条三坊 94HK-EF003	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町(京都駅構内)	94.03.07 ～ 94.06.10	600㎡	西日本旅客 鉄道(株)	菅田、網	平成6年度 報告済		
※ H5-037(3) 左京八条三坊 94HK-EF004	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町(京都駅構内)	94.03.28 ～ 94.07.10	440㎡	西日本旅客 鉄道(株)	百瀬、前田	平成6年度 報告済		

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	※	H5-037 (4) 左京八条三坊 94HK-EF005	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.04.18 ～ 94.07.22	880㎡	西日本旅客鉄道(株)	南、東	平成6年度に報告
	※	H5-037 (5) 左京八条三坊 94HK-EF006	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.07.05 ～ 94.08.04	160㎡	西日本旅客鉄道(株)	網	平成6年度に報告
	※	H5-037 (6) 左京八条三坊 94HK-EF007	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	94.08.25 ～ 95.02.08	1,200㎡	西日本旅客鉄道(株)	網、東	平成6年度に報告
	※	H5-037 (7) 左京八条三坊 94HK-EF008	下京区烏丸通塩小路下る 東塩小路町 (京都駅構内)	95.01.18 ～ 95.03.02	300㎡	西日本旅客鉄道(株)	網、東	平成6年度に報告
	09	H5-018 左京九条二坊 93HK-BH007	南区西九条烏居口町1	93.07.01 ～ 93.11.15	1,381㎡	松下興産(株)	菅田、会下	
	10	H5-058 右京三条一坊 193HK-UL001	中京区西ノ京梅尾町地内	94.01.31 ～ 94.02.21	114㎡	京都市	吉村	
	11	H5-022-02 右京三条一坊 293HK-UK002	中京区西ノ京梅尾町地内	93.08.24 ～ 93.11.19	550㎡	京都市住宅供給公社	伊藤	H5-022-01 試掘
	12	H5-034 右京三条一坊 393HK-UI003	中京区西ノ京星池町地内	93.09.21 ～ 93.11.16	320㎡	京都市	平田	
	13	H5-007 右京三条一坊 493HK-UI002	中京区西ノ京星池町地内	93.05.10 ～ 93.08.20	800㎡	京都市	伊藤、小松	
	14	H5-062 右京五条四坊 93HK-QN	右京区西院月双町3	94.03.01 ～ 94.06.06	414㎡	児島昌子	伊藤、小松	
15	H5-030 (2) 右京六条一坊 93HK-XF008	下京区中堂寺南町	93.08.07 ～ 94.03.24	1,400㎡	住宅都市整備公団	平尾		
16	H5-043・H6-009 右京八条二坊 93HK-YC003	下京区西七条石井町61 (七条小学校)	93.12.16 ～ 94.04.07	510㎡	京都市	辻裕 近藤和		
鳥羽離宮	17	H5-029 鳥羽離宮跡 13993TB-TB139次	伏見区竹田浄菩提院町41-7	93.09.01 ～ 93.09.08	24㎡	京都市	鈴木久 前田	国庫補助
中臣遺跡	18	H5-021 中臣遺跡71次 93RT-NK071	山科区栗栖野打掛町・ 東野舞台町	93.06.21 ～ 93.09.29	1,003㎡	京都市	高橋	
	※	H5-050 中臣遺跡73次 93RT-NK073	山科区栗栖野中臣町・ 打越町地内	94.02.09 ～ 94.04.15	1,304㎡	京都市	平方、内田 高橋、丸川	平成6年度に報告

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考
長岡京	19 H5-026 左京一条三坊・ 東土川遺跡 93NG-SD011	南区久世東土川町 (西羽束師川河川敷)	93.10.21 ～ 93.12.04	400㎡	京都市	加納	
	20 H5-046 左京五条四坊 93NG-SD012	伏見区羽束師古川町 15	94.01.18 ～ 94.03.14	364㎡	京都市	加納 永田宗	
	21 H5-002 左京六条三坊・ 水垂遺跡 93NG-MI004	伏見区淀水垂町	93.04.01 ～ 94.03.31	16,442㎡	京都市	木下 上村和 吉崎	
その他の遺跡	22 H5-012 植物園北遺跡 1 93RH-US	北区上賀茂烏帽子ヶ垣内町 1 (上賀茂小学校)	93.04.26 ～ 93.08.21	798㎡	京都市	久世	平成4年度 報告済
	23 H5-055 植物園北遺跡 2 93RH-AC 93RH-AC	北区上賀茂松本町 94	94.02.14 ～ 94.03.11	94㎡	京都市	高橋、内田	国庫補助
	※ H4-061・H5-065 松ヶ崎廃寺 92RH-MH002	左京区松ヶ崎堀町 40 (松ヶ崎小学校)	93.03.17 ～ 93.07.12	448㎡	京都市	平尾	平成4年度 報告済
	24 H5-025 相国寺旧境内 93RH-KC002	上京区烏丸通上立売上る 相国寺門前町 647-23 (烏丸中学校)	93.07.19 ～ 93.11.09	550㎡	京都市	近藤、磯部	
	25 H5-027 特別史跡特別名勝 慈照寺庭園 93KS-GK003	左京区銀閣寺町 2	93.07.26 ～ 93.12.03 94.02.01 ～ 94.02.09	170㎡ 160m	宗教法人慈照 寺	南、百瀬	発掘・立会
	26 H5-008 広隆寺旧境内 93UZ-US002	右京区太秦蜂岡町 36-4	93.04.17 ～ 93.05.31	210㎡	京都市	平田	
	27 H5-017 南春日町遺跡 28 次 93MK-HO028	右京区大原野南春日町地内	93.07.14 ～ 93.09.03	1,500㎡	京都府宇治地 方振興局	加納	
	28 H5-047 上久世遺跡 93MK-AF001	南区久世上久世町 334	94.01.19 ～ 94.03.18	625㎡	(株)ナショナル エステート	上村和	
	29 H5-059 六波羅政庁跡 93RT-AA	東山区茶屋町 527 (京都国立博物館)	94.02.24 ～ 94.04.29	191㎡	京都国立博物 館	鈴木廣 山本	
30 H5-019 安祥寺下寺跡 193RT-FR002	山科区安朱中小路町～北屋敷町	93.05.10 ～ 93.09.11 93.11.01 ～ 93.11.15	720㎡	京都市交通局	高、平方 高橋	平成4年度 に試掘	
31 H5-049 安祥寺下寺跡 293RT-FS001	山科区安朱棧敷町他地内	94.02.03 ～ 94.06.10	635㎡	京都市	高、丸川 高橋		
32 H5-006 史跡醍醐寺境内 93FD-DG006	伏見区醍醐東大路町 31-1 (醍醐小学校)	93.04.02 ～ 93.04.27	122㎡	京都市	平方、丸川		

表5 試掘・立会調査一覧表

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	01	H5-013 左京北辺二坊 93HK-UW002	上京区一条通、 東堀川通～西洞院通 ほか地内	93.04.21 ～ 93.07.20	立会 1,472m	京都市水道局	竜子、尾藤	2章Ⅱ-1
	02	H5-014 左京一条二坊 93HK-UW004	上京区下長者町通～下立売通、 東堀川通～西洞院通地内	93.05.10 ～ 93.07.12	立会 1,516m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	03	H5-035 左京一条二坊・二条 二・三坊 93HK-UW007	中京区丸太町通北側、 油小路通～烏丸通他地内	93.10.12 ～ 94.02.09	立会 866m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	04	H5-045・H6-010 左京三条四坊 93HK-AK	中京区大文字町ほか地内 (御池通)	93.11.19 ～ 94.06.23	立会 195㎡ 348m	京都市	小森 上村憲	2章Ⅱ-2
	05	H5-054 左京三・四条四坊 93HK-UW011	中京区御池通～四条通、 富小路通～寺町通他地内	94.02.14 ～ 94.08.02	立会 4,638m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	06	H5-016 右京二条二～四坊・ 西ノ京遺跡 93HK-UW005	右京区太秦安井西裏町 ～中京区西ノ京南上合町地内	93.05.24 ～ 94.02.23	立会 1,550m	京都市水道局	川村、吉本	
	07	H5-052 右京二条四坊 93HK-UW005	右京区太秦安井車道町地内	94.02.22 ～ 94.03.10	立会 225m	京都市水道局	吉本、川村	
	08	H5-040 右京三条一坊 5 93HK-UI005	中京区西ノ京梅尾町地内	93.11.10 ～ 94.01.28	試掘 300㎡	京都市	平田、伊藤	2章Ⅱ-3
	09	H5-028 右京三条一坊 6 93HK-UJ001・002	中京区西ノ京梅尾町地内 (東西線二条駅)	93.07.09 ～ 93.10.21	試掘 250㎡	京都市交通局	平田	2章Ⅱ-4
	10	H5-022-01 右京三条一坊 2 93HK-UK	中京区西ノ京梅尾町 1-6	93.07.19 ～ 93.07.30	試掘 81㎡	京都市住宅供給公社	本	発掘へ移行 1章Ⅱ-11
	11	H5-036 右京三条一坊 7 93HK-UI004	中京区西ノ京梅尾町地内	93.10.18 ～ 93.12.29	試掘 364㎡	京都市	伊藤	2章Ⅱ-5
	12	H5-041 右京四条二坊・ 淳和院・壬生遺跡 93HK-UW009	右京区西院東今田町～壬生淵田町 地内	94.01.11 ～ 94.03.07	立会 1,231m	京都市水道局	川村、吉本	
中臣遺跡	13	H5-032 中臣遺跡 72次 93RT-NK072	山科区東野舞台町地内	93.07.26 ～ 93.08.04	試掘 30㎡	京都市	高橋、鎌田	1章Ⅳ-18
長岡京	14	H5-009 左京四・五条四坊 93NG-SD010	伏見区羽束師古川町～久我東町 地内 (西羽束師川支流流域)	93.04.26 ～ 93.05.13	試掘 220㎡	京都市	加納	2章Ⅲ-6 発掘へ移行 1章Ⅴ-20
	15	H5-060左京一条三坊・ 東土川遺跡 93NG-AO試	南区久世東土川町地内	94.01.26 ～ 94.01.27	試掘 80㎡	京都市下水道局	長宗	発掘へ移行 平成6年度

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	調査員	備考	
その 他 の 遺 跡	16	H5-063 北野遺跡・北野廃寺 93RH-UW006	北区平野宮本町～北野白梅町地内	93.06.24 ～ 94.02.02	立会 413m	京都市水道局	川村、吉本	2章Ⅲ-7
	17	H5-053・H7-012 北白川廃寺 93KS-UW012	左京区白川通東側 (茶山通～東今出川通)ほか	94.02.14 ～ 95.04.06	立会 2,921m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	18	H5-023 京都大学構内遺跡 93KS-BA002	左京区田中門前町・北白川追分町 地内(今出川通)	92.01.21～ 93.06.17	立会 270m	京都市	竜子、尾藤	2章Ⅲ-8
	19	H5-051 京都大学構内遺跡 93KS-BA003	左京区北白川追分町他地内 (今出川通)	94.01.26 ～ 94.03.22	立会 93m	京都市	竜子、尾藤	2章Ⅲ-8
	20	H5-003 嵯峨院跡・ 史跡大覚寺御所跡 92UZ-SW014	右京区北嵯峨北ノ段町・ 名古曾町・山王町地内	93.01.22 ～ 94.03.04	立会 3,150m	京都市下水道 局	小檜山	2章Ⅲ-9
	21	H5-015 史跡名勝嵐山 93UZ-SW003	右京区嵯峨鳥居本深谷町・ 一華表町・仙翁町ほか	93.05.06 ～ 94.03.17	立会 3,100m	京都市下水道 局	小檜山	2章Ⅲ-10
	22	H5-042 史跡名勝嵐山 93UZ-UW008	右京区嵯峨鳥居本化野町	93.11.24 ～ 93.12.06	立会 325m	京都市水道局	小檜山	2章Ⅲ-10
	23	H5-004 史跡名勝嵐山 93MK-SW001	西京区嵐山中尾下町・西一川町・ 東一川町ほか	93.04.07 ～ 94.03.31	立会 4,300m	京都市下水道 局	小檜山	
	24	H5-038 六波羅政庁跡 93RT-UW010	東山区大和大路通、 四条通～五条通地内	94.01.24 ～ 94.10.05	立会 2,610m	京都市水道局	竜子、尾藤	
	25	H5-001 京都市内遺跡 93BB-	京都市内一円		立会	京都市	竜子、尾藤 川村、吉本	国庫補助

表6 その他の契約一覧表

契約No.	内 容	遺 跡 名・所 在 地	委 託 者	調 査 員	備 考
1	H5-010 測量	平安京跡 上京区西洞院通下立売上る西大路149-1 他	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	辻純、宮原	
2	H5-011 測量	平安京跡、妙心寺塔頭跡 右京区花園大藪町4-1	花園大学考古学研究室	辻純、宮原	
3	H5-033 研修	JICA	(財)京都市国際交流協会	永田	
4	H5-039 講座	JICA	国際協力事業団大阪国際研修センター	資料課	
5	H5-057 整理	鳥羽離宮跡 93TB-TB139 (H5-029) 伏見区竹田浄菩提院町41-7	京都市	鈴木久	国庫補助
6	H5-061 測量	平安京跡 中京区東洞院通押小路下る舟屋町405	関西文化財調査会	辻純、宮原	
7	H5-064 報告書	平安京跡、京都市内遺跡、鳥羽離宮跡	京都市	高橋、本、 鈴木久	国庫補助
8	H5-069 整理	植物園北遺跡 93RH-AC (H5-055) 北区上賀茂松本町94	京都市	高橋、内田	国庫補助
9	H5-070 整理	平安宮朝堂院跡 93HK-DZ (H5-056) 上京区竹屋町通千本東入主税町1202	京都市	長戸	国庫補助